そうさつ(僧刹)図寺院㊁僧侶の住ゐ居る家のコト、

そうさつ(増刷)図ふやして印刷(サツ)する「コトを云ふ

そうさつ(聰察)図察(サツ)しのよきコト、思ひやりのよきコト、

そうざらひ(総復習)図多人數にて一つの事柄(ガラ)を習(ナラ)ふた、其れを一同してさらえるコト、

そうし(宗子)図一族(ゾク)中での本家の惣領(ソウリ)息子(ムスコ)のコト、

そうし(宗師)図優(ヤサ)れて學問の出來る人のコト、即ち大學者、

そうし(宗支)図本家と別家(ベツケ)と云ふ意味㊁轉じて凡て事物の本と別(ベツ)と云ふコト、

そうじ(層次)図かさなり合ふ、

そうじ(奏事)図出來事(デキゴト)を帝王へ申し上げるコトを云ふ、

そうじ(僧寺)図てらのコト、

ぞうし(増賞)図賞本金(シキン)を増すコトを云ふ、

そうじ(層峙)図重(サカ)なり合つて高くそびゆるコトを云ふ

そうしつ(宗室)図帝王の御一族、

ぞうしつ(憎嫉)図いみ、にくむ、

そうして(而)(接)そして、其れから、

そうじて(總)副のこらず㊁あらかた㊂すべてのコト、

そうじめ(總締)図殘(ノコ)らず寄(モ)て一つとなしたる高のコトを云ふ、

そうしや(奏者)図天子に事を申し上げ奉る人、又は其の役のコト、

そうしや(僧舎)図てらのコト、

そうしや(總社)図昔、國々の大都會(クワイ)に其の國内にゐます諸神を、一とまとめにして祀(マツ)りたる社(ヤシロ)のコトを云ふ語、「コトを

そうしよ(奏書)図天子にたてまつる文書

そうしん(奏申)図奏聞に同じ、

そうしん(總身)図全身(ゼンシン)。身體(カラダ)中のコト、

そうしん(宗親)図本家のコト、

そうしん(崇信)図神佛(カミホトケ)を信仰(シンギヤウ)するコト、

ぞうしん(増進)図ふやしすすむ、

そうしゃう(宗匠)図和歌(カ)俳諧(ハイカイ)茶道(サダウ)生花(イケバナ)などの師匠、

そうじゃう(奏上)図天子に申し上げ奉つるコトを云ふ、「コトを云ふ

そうじゃう(奏狀)図奏上する文書(ブンシヨ)の

そうじゃう(僧正)図僧侶の官位(クワンヰ)の最上なるものにて、分つて三とす、即ち大僧正、僧正、權僧正なり、

そうしゅく(宗祝)図神に事(ツカ)て祭事を行ふ人、即ち神官、かんぬし、

そうしよう(總稱)図多くの物を一つになして呼びなすとなへ、

ぞうしよく(増殖)図同じ種類(ルイ)の物をましふやすコト、「ゾ」のコト、

そうじんいん(總人員)図殘らずの人數(ヒト)

そうしふくわい(總集會)図其の事に關係せる人の、殘らず集りて、會議を開くコトを云ふ、大集會(ダイシフエ)、

そうす(奏)(他)(副)帝王(ハウヰ)に言上し奉る㊁音樂(ガク)をかなづる㊂功(ヒガ)なたてる

そうすう(總數)図殘らずの數(カズ)、總計(ソウケイ)のコト、

そうせい(早世)図わかじにのコト、

そうせい(憲青)図青き色を云ふ、

そうせい(奏請)図天子に言上して、願ひ奉るコト、

そうせい(叢生)図草のむらがり生(ハ)てるコト㊁人民のコトを云ふ、

そうせい(總勢)図殘(ノコ)らずの人數(カズ)㊁全軍の勢力(ヰキヨク)、

そうせい(増稅)図稅額がます、

そうせき(僧籍)図僧侶の名の籍のコト即ち僧の名簿(メイボ)、「ゆくえのコト

そうせき(踪跡)図去りしあとかた、即ち

そうせき(送籍)図戸籍(ヘイキ)をおくるコトを云ふ、

そうせん(奏宣)図天子に申し上げたてまつるコト

そうそ(奏疏)図天子に上奏する其の事柄(ガラ)を認めたるもの、

そうそ(曾祖)図祖父の父、即ちひゐぢぢゐのコトを云ふ、

ぞうそ(増租)図租稅(ヤツ)をまし加えるコト。租稅の高まるコト、

そうそう(層層)副物の重(カサ)なり合つてゐる狀を云ひ表はす語、

そうそう(深深)副水の盛んに音して流れ行く狀を云ふ語、

そうそう(總總)副殘(ノコ)らずひつくるめてと云ふ意を表はす語、

そうぞく(僧俗)図僧侶(ソウリヨ)と、俗人(ゾクジン)とのコト、「コトを云ふ

そうぞく(憎嫉)図にくむコトと、ねたむ

そうぞく(宗族)図一門(ヰモ)のコト、即ち本家分家などを、一つにして云ひ表はす語、

そうそつ(忽卒)図あわてるコト、

そうそふ(曾祖父)図祖父母の父、即ちひいぢゃのコトを云ふ、

そうそば(曾祖母)図祖父母の母、即ちひいばゞのコトを云ふ、

ぞうそん(増損)図ますとへること、

そうそん(曾孫)図ひい孫(マゴ)のコト、

そうたい(總體)図身躰中(カラダ)㊁全躰、のこらずのコト、

そうたい(總代)図殘らずの人の代理、

そうたか(總高)図殘(ノコ)らずの高、㊁一まとめとなしたる其の〆だか、

そうたく(叢澤)図やぶさわ、

そうたち(總立)図殘(ノコ)らずが立ち上(カア)るコト、居合す人が皆立つ、

そうたつ(聰達)図さかしくして、物事に達してゐるコト、

そうたつ(奏達)図天子のお耳へ、入れまゐらするコト、

そうたつ(送達)図おくりとどける、

そうたふ(層塔)図二重(ユヘウ)以上の塔のコトを云ふ、

ぞうたふ(贈答)図おくるコトと、ことふるコト、即ちやりとり、

そうたいしゃう(總大將)図全軍(ゼングン)を指揮する大將のコト、

そうち(聰智)図すぐれて智惠のあるコト

そうち(送致)図おくりいたす、

ぞうちく(増築)図此れまでの建物(タテモノ)に更に増して建てるコト、

そうちゃう(總長)図一つの事務(ムキ)に就きて、其の全部を支配(ハイ)する長官のコトを云ふ、假令ば(檢事總長)などの類、

ぞうちゃう(増長)図つけあがる、㊁のしあがる、㊂のぶとくなるコトを云ふ、

ぞうちゆう(増註)図既(ヤ)に註釋(シヤクエキ)のしてある上に、更に註釋するコト、又は爲したるもの〻稱、

そうづ(僧部)図僧侶に賜はる官名にて、僧正(ソウヰ)の次の官位(クワンヰ)、

そうつり(總釣)図年頃(コロ)の女の髪の結ひ方の一種にて、島田髷の、上へ強く釣り上りし結ひ方の稱、

そうてい(層梯)図はしごのコト、

そうてい(贈呈)図物をおくり與ふるコトを云ふ(進上)、

そうてい(増訂)図書物中に事實(ジツ)を書き加え、且つ前の誤(アヤマ)を訂(タダ)すコト又は斯(カク)く爲したるもの、

そうでん(送傳)図つぎから、つぎへと送(オク)りつたえるコト、

そうでん(送電)図電氣(デンキ)を送る、

そうと(僧徒)図僧侶(ソウリヨ)たちのコト、

そうと(宗徒)図我れのたよりとする人々㊁主(ヌシ)なるもの、

そうとう(總統)圖凡てをすべるコト、すべくくるコト、

そうとく(總督)圖一區域(ヤウイ)の政事(セイジ)軍務(ムム)、其他上下の事を殘らず、支配(イレ)する官府の、最上長官㊁出征軍隊全部を支配する最上長官の官名、

そうとくふ(總督府)圖總督の居る役處(ヤクショ)のコト、

そうどうしゅう(宗洞宗)圖禪宗(ゼンシウ)の一派にして、道元禪師(ダウゲンゼンジ)の創めて開きし宗派(シウハ)、本山は越前の永平寺と能登(ノト)の總持寺、

そうに(僧尼)圖女の僧侶、あま、

そうにん(奏任)圖奏任官(ソウニンクワン)の略語、奏任官を見よ、

そうにんず(總人數)圖殘らずの人數(カヒヅ)「一隊の全人員

そうにんくわん(奏任官)圖官位の名にて三等以下の高等官のコト、卽ち內閣總理大臣か、又は各省の大臣が、其の資格ある人を、內閣へ申し出で、天皇に奏問して、內閣の印(シル)を總理大臣の手を經て捺(サ)れたる辭令書(ジレイ)に依りて、任命されたる官吏のコト、

そうは(增派)圖人員(ヤクイン)をふやして、差し向(ムケ)るコト、

そうはい(崇拜)圖有がたがりて、神佛(シン)ブツを信じ拜(ハイ)するコト、

そうばい(層倍)(接尾)數字(スウジ)の下に附け加えて、其の倍數(バイスウ)なるコトを表はす語にて、假令(ヒト)ば十層倍、百層倍などの如し、

そうばう(僧坊)圖僧侶の住ふ家、

そうばう(匆忙)圖せわしきコト、

そうばか(總墓)圖多くの死者を一と纏めにして、埋(ウ)めたる墓地、

そうはく(湊泊)圖港に舟の多く集まりて泊(ト)ってるコト㊁物事(モノゴト)の多く集まるコトを云ふ、

そうはん(增版)圖版を增し加えるコト㊁書物の冊數を增(ヤ)すコト、

そうはつ(增發)圖ふやし發す、卽ち汽車を增發するなどの類、

そうはつ(總髮)圖ソウガミに同じ、

そうばな(總花)圖故樓(ヘウ)にて、客が其の家の女とも一同に與ふる祝儀のコトを云ふ、

そうび(崇美)圖床(カシ)しく美しき、

そうびん(聰敏)圖さかしくて、はしこきコト。すばつしつこき、

そうびん(贈品)圖贈物(ゾウブツ)に同じ、

そうふ(贈賻)圖死者の家におくる進物(シンモツ)、卽ち香儀(キウ)のコト、

そうふ(送附)圖おくりつける、

そうふく(僧服)圖僧侶(ソウリヨ)の着る衣服、卽ち法衣(ホウエ)のコト、

そうふつ(贈物)圖賊(ゾク)の盜(ヌス)み取りたる品物のコト、

そうへい(送兵)圖兵士をおくり出すコト兵士をさし向けるコト、

ぞうへい(增兵)圖兵士の數をますコト。又はふやしたる兵士、

ぞうへい(增聘)圖人を餘計(ヨケイ)に招(マネ)きやとふコトを云ふ、

そうべう(宗廟)圖帝王の祖先のおたまやのコトを云ふ、

そうべつ(總別)圖殘(コ)らず、全部、

そうべつ(送別)圖旅(タビ)へ行く人を見おくるコトを云ふ、

そうべつくわい(送別會)旅立人の別を送る酒宴(サケヨ)のコト、

ぞうほ(增補)圖ましおぎなふ、其上に尙ほ添(ソ)へ加えるコト、

そうほう(崇奉)圖あがめいただくコト、あがめたつとぶコト、

そうぼう(僧房)圖寺院(ジヰン)、

そうぼう(層峯)圖重(カサ)なり合つてる山の峰(ミネ)のコト、

そうぼう(僧帽)圖僧侶のかぶる大黑(ダイコク)

頭巾(ヅキン)の如きもの、

ぞうほう(增俸)圖俸給(ホウキウ)の增すコト、增し加えたる給料、

そうぼん(途本)圖書籍をおくる、

そうぼんけ(總本家)圖別れたる家筋(スジ)の殘らずの本家(ホンケ)、

そうみ(總身)圖全身、身躰(カラダ)中、

そうむ(總務)圖種々の事務を引き受けて支配するコトを云ふ、

そうめい(聰明)圖かしこきコト㊁智惠の勝(カス)れてるコトを云ふ、

そうめう(總名)圖總稱に同じ、

そうめん(素麵)圖食品の一種、小麥(コムギ)粉に鹽を交(マ)ぜ水にて、煉(ネ)りて之れを胡麻(ゴマ)の油にて引き延し、細く切りて干(ホ)したるもの、

そうめん(層面)圖かさなり合つたる物の其のかさなりたる方の面、

そうめりだい(總名代)圖名代者中の長(カシラ)のコト、

そうもつ(贈物)圖をくり物、

そうもん(奏聞)圖天子のお耳へ物事を聞(キコ)え入れるコト、卽ち言上(ゴンジヤウ)するコト、「ち表門(オモテモン)のコト

そうもん(總門)圖そと構(カマ)の正門、卽ち表門

そうよ(贈與)圖物をおくり與(ヤ)ふるコトを云ふ、

そうより(總容)圖殘らずの人々を指して云ふ語㊁手紙に用ゆる語にて、其家の家族(カゾ)一同を指して云ふに用ゆる語

そうよさん(總豫算)圖出る金、又は入る金の全部の、あらかたの下勘定(ヒカヘ)のコト、「トを云ふ

そうらん(層巒)圖山の重なり合つてるコト

そうらん(總攬)圖別々になつてる事柄(コト)を、一つにまとめよせるコト又はよせたるもの、

そうり(總理)圖凡ての物事をひつくくつて支配(イシハ)するコト、

そうり(膺理)圖皮膚(ハダ)のきめ、

そうりよ(僧侶)圖ぼうずのコトを云ふ、卽ち髮(カミ)を剃(ソ)り、佛門に入り仕(ツカ)ふる人、「云ふ

そうりん(奏稟)圖帝王へ言上するコトを

そうりやう(總領)圖長男又は長女のコト㊁父母の後を襲(カサ)ぐべき子㊂萬事を支配(イレ)するコト、

そうりやうじ(總領事)圖外國の肝要なる港(ミナト)に居留せる領事官中の、第一位に居る領事のコト、

そうりだいじん(總理大臣)圖內閣の各大臣を支配する大臣、我が國官吏の最上長官㊁轉じて萬事萬端の世話(セワ)を爲す人のコトを、だはむれて云ふ俗語(ゾクゴ)、「積み上がつてるコト

そうるる(層累)圖重(カサ)なり合てるコト。

そうれい(層嶺)圖山のみねの重なり合ふて續(ツヅ)くてるコト、

そうれう(僧寮)圖僧侶の部屋、

そうれふ(騌駿)圖馬のたてがみ、

そうろ(贈賂)圖わいろを贈(オク)る、

そうろう(層浪)圖かさなつて打つ浪(ナミ)かさなり合つてる波、

そうろう(層樓)圖三階以上に建(タテ)られた家、たかどの、

そうろん(總論)圖全部をひつくるめて論じたるコト㊁全部に涉(ワタ)りて、其論理(ロジ)の通ずるコト、

(そぞえ)

そえう(楚腰)圖細(ホソ)くしてしなやかなる腰つきのコト、卽ち美人の腰のことを云ふ、

そえう(租徭)圖年貢と賦役(ブヤク)、

そえつ(疏樾)圖まばらなる並木(ナミキ)の下(モト)のコトを云ふ、

そえん(祖宴)圖旅へ行く人を送る爲めの

酒もり。送別の宴、

そえん(疎遠)圖たよりのとぎれてるコト卽ち無沙汰(ブサタ)、

そえん(泝沿)圖水の流にさかのぼり行くことと下り行くコト、

そおんき(蘇音機)圖蓄音機(チクオンキ)、

(そぞか)

そかい(疏解)圖事情を述(ノベ)て云ひ開くコト㊁事情を記して云ひ開くコトを云ふ、

そかい(阼階)圖宮廷のきざはし。御殿(ゴテン)へ上るきざはしのコト、

そかい(疎開)圖木の枝(エダ)を伐りて其の間をすかすコト、

「を云ふ

そがい(阻害)圖さまたげささはりのコト

そかう(素行)圖平常(ヨダン)の行ひのコトを云ふ、

そかう(祖考)圖死せし祖父と父、

そかう(粗豪)圖あらあらしきコト。あらつぽきコトを云ふ、

そかう(粗肴)圖そまつなる肴㊁肴のコトを他人に對してへりくだつて云ふに用ゆる語、

「稅のコト

そかう(租賃)圖みつぎもの。年貢(ネング)。租(ソ)ふコト㊁なかま、たぐゐ㊂判任官のコト、卽ち屬官(ゾクカン)、

そく(族)圖やから、さもがら㊁一家一門㊂同種類(ユイルイ)の物を集めて、一つにして云ふ語、假令ば魚族などの類、㊃矢鋒(ヤサキ)のコト、

そく(蔟)圖物のむらがり集(ツド)まれるコト㊁蠶(カイコ)のねどこ、卽ちまぶし㊂鳥などの巣(ス)のコト、

そく(則)圖おきて。てほん。のり卽ち法則規則㊁てほんとして從ふ、のつとる㊂上下の文書を接(ツ)かすに用ゆ語、すなはち、

「ちやとりのコト

そく(鏃)圖矢の端(シリ)に附いてる金物、卽れる狀を云ふ、

そく(鏃)圖草や水の叢多しく生(オヒ)茂(シゲ)

そく(速)圖早きコト。急ぐコト。すみやかなるコト㊁招き呼ぶ、

そく(塞)圖ふさがつてるコト㊁ふさいで通(ツウ)どゐ㊂城のコト。とりでのコト㊃運勢の弱きコト、

そく(蔌)圖料理せし野菜物卽ち精進物(ショモノ)㊁やつれてみにくき狀を云ふ㊂竹の葉などのザワザワと鳴り響く音を云ふ、

「依賴(イライ)するコト

そく(囑)圖まかす、たのむ㊁云ひつける、

そく(擴)圖つゞきのコト、つゞくコトを云ふ、

そく(賊)圖あしき事を爲す奴㊁ぬすびと㊂不忠不孝の者㊃むごたらしく扱ふ殺すコト、

そく(疎虞)圖斯(カヤウ)なせば斯なりと知りつゝ、其の通りにせずして、異(コト)なりたる結果(ケツクワ)を得たるコトを云ふ卽ち自業自得(ジゴウジトク)、

そくあく(俗惡)圖高尙(コウシヤウ)ならざる容子下品(ゲヒン)なるおもむき、

そくゐ(卽位)圖天子の御位(ミクラヰ)につかせ給ふコトを申す、

そくいゆ(屬邑)圖附屬(フゾク)してある村㊁附屬してある土地、

そくいん(惻憐)圖あはれに思ふ。不憫(フビン)に感ず。同情を寄すコト、

そくえう(俗謠)圖はやり歌、

そくえん(息偃)圖休息して安らかに眠(ネム)るコトを云ふ、

そくえん(俗緣)圖世間のいんえん。世上のゆかりのコト、

そくえい(賊營)圖賊の陣營(ヂンエイ)のコト。賊軍の陣所(ヂンショ)、

そくえん(賊焰)圖賊徒の勢力(セイリキ)。賊軍のいきほひのコト、

そくお(足音)圖あしおと、

そくおん(促音)圖つまりたる音聲(オンセイ)の事にて、假令ば立派(リツパ)のッの音(オン)の類を云ふ、

そくか(足下)圖あしもとのコト、

そくか(足下)㊁人を敬(ウヤマ)ふて云ふ代名詞にて、あなた、御許樣、

そくか(俗歌)圖はやり歌、

そくか(俗家)圖僧侶に對しての稱にて、俗人の家と云ふ意、

そくかい(俗界)圖世間(セケン)。世の中、

そくかい(俗解)圖誰人(タレビト)にも、能くわかるやうに說(トク)き明(アカ)すコト、又は其のもの、

「コトを云ふ

そくがい(賊害)圖人をそこなひいたむる

そくかう(續行)圖つゞけて物事を行ふコト㊁つゞひて歩み行くコトを云ふ、

そくかう(續稿)圖草稿のつゞき、續(ツヅ)き

そくがく(俗學)圖普通(フツウ)の學問、程度(テイド)の低(ヒク)き學問、

そくがく(俗樂)圖いやしき音樂(オンガク)、みだらなる音樂、

そくかく(俗客)圖俗人の客(キヤク)、無風流(ブフウリウ)な客人のコト、

そくがん(俗眼)圖いやしき見識(ケンシキ)㊁風

そかく(阻格)圖仲のあしきコト㊁相入れざるコト㊂なかたがひ、

そかく(疎隔)圖うとくなるコト㊁うとんじへだつるコト、

(そぞき)

そき(粉)圖木を極(ハテ)めて薄くそぎ切りたる板(イタ)のコトにて、屋根などをふく「のコトを云ふに用ゆるもの、

そき(退)圖物のはし㊁物事の末(スエ)の方

そき(疏義)圖文章の意味(イミ)を說き明したるコトを云ふ、

そきふ(遡及)圖以前の事に及ぼす。さかのぼり及ぶコトを云ふ、

そきへ(退邊)圖遠くへ隔(ヘダ)たつてる方のコトを云ふ、「薄くへぎし板

そきいた(殺板)圖そぎて作りたる板(イタ)。

そきたつ(退立)圖遠くへのきたつ。遠方へしりぞき立つ、

そきやう(疎狂)圖物の道理を解する智慧(チエ)の備(ソナ)はりおらざるコトを云ふ、

(そぞく)

そく(束)圖たば㊁凡てたばねたる物を數(カズ)ふるに云ふ語㊁一束となしたる稻(イネ)、十把(ワ)の十倍を一束と云ふ㊃半紙二百枚を一束と云ふ㊄弓及び矢の長さを計るに用ゆ、卽ち指(ユビ)を四本並(ナラ)べたる其の巾(ハバ)を一束と云ふ㊅物の數、百のコトを一束と云ふ、

そく(息)圖呼吸(コキウ)のコト㊁やすむコト㊂むすこ、せがれ、

そく(殺)自動尖(トガ)のとがる㊁けづられ落(オ)いる、はづれてる、

そく(殺)他動ほぶき取る、はぶきけづる㊁物をけづりて、其の先(サキ)をとがらせる㊂幅(ハバ)を薄(ウス)くけづり落(オト)す、

そく(足)(接尾)左右の足(アシ)につくる物の、其の一揃(ヒトトヒ)を數(カズ)ふるに用ゆる語にて、卽ち下駄一足(ヒトアシ)足袋(ヒトツ)一足㊁左右の足を揃(ソロ)えて、活動(カツドウ)するに云ふ、卽ち一足(ヒトアシ)飛(トビ)など、

そく(粟)圖五穀の一、あはのコト㊁あはの如き小さなる粒(ツブ)のコトを云ふ㊂あら皮を去らざる米、卽ちもみごめ、

そく(俗)圖其の時世の有樣㊁僧に對(ムカ)して僧にあらざる人のコト、卽ち俗人(ゾクジン)㊂風雅(フウガ)ならざるコトに云ふ語㊃なみなみ、つれのコトを云ふ、

そく(屬)圖部下(ブカ)手下(テシタ)㊁附き從(シタガ)

そく(族)圖同種類(ユイルイ)の物を集めて、一つにして云ふ語、假令ば魚族などの類、㊃矢鋒(ヤサキ)のコト、

そく(蔟)圖物のむらがり集(ツド)まれるコト㊁蠶(カイコ)のねどこ、卽ちまぶし㊂鳥などの巣(ス)のコト、

そく(則)圖おきて。てほん。のり卽ち法則規則㊁てほんとして從ふ、のつとる㊂上下の文書を接(ツ)かすに用ゆ語、すなはち、

「ちやとりのコト

そく(鏃)圖矢の端(シリ)に附いてる金物、卽れる狀を云ふ、

そく(速)圖早きコト。急ぐコト。すみやかなるコト㊁招き呼ぶ、

そく(塞)圖ふさがつてるコト㊁ふさいで通(ツウ)どゐ㊂城のコト。とりでのコト㊃運勢の弱きコト、

そく(蔌)圖料理せし野菜物卽ち精進物(ショモノ)㊁やつれてみにくき狀を云ふ㊂竹の葉などのザワザワと鳴り響く音を云ふ、

「依賴(イライ)するコト

そく(囑)圖まかす、たのむ㊁云ひつける、

そく(賊)圖あしき事を爲す奴㊁ぬすびと㊂不忠不孝の者㊃むごたらしく扱ふ殺すコト、

そく(疎虞)圖斯(カヤウ)なせば斯なりと知りつゝ、其の通りにせずして、異(コト)なりたる結果(ケツクワ)を得たるコトを云ふ卽ち自業自得(ジゴウジトク)、

そくあく(俗惡)圖高尙(コウシヤウ)ならざる容子下品(ゲヒン)なるおもむき、

そくゐ(卽位)圖天子の御位(ミクラヰ)につかせ給ふコトを申す、

そくいゆ(屬邑)圖附屬(フゾク)してある村㊁附屬してある土地、

そくいん(惻憐)圖あはれに思ふ。不憫(フビン)に感ず。同情を寄すコト、

そくえう(俗謠)圖はやり歌、

そくえん(息偃)圖休息して安らかに眠(ネム)るコトを云ふ、

そくえん(俗緣)圖世間のいんえん。世上のゆかりのコト、

そくえい(賊營)圖賊の陣營(ヂンエイ)のコト。賊軍の陣所(ヂンショ)、

そくえん(賊焰)圖賊徒の勢力(セイリキ)。賊軍のいきほひのコト、

そくお(足音)圖あしおと、

そくおん(促音)圖つまりたる音聲(オンセイ)の事にて、假令ば立派(リツパ)のッの音(オン)の類を云ふ、

そくか(足下)圖あしもとのコト、

そくか(足下)㊁人を敬(ウヤマ)ふて云ふ代名詞にて、あなた、御許樣、

そくか(俗歌)圖はやり歌、

そくか(俗家)圖僧侶に對しての稱にて、俗人の家と云ふ意、

そくかい(俗界)圖世間(セケン)。世の中、

そくかい(俗解)圖誰人(タレビト)にも、能くわかるやうに說(トク)き明(アカ)すコト、又は其のもの、

「コトを云ふ

そくがい(賊害)圖人をそこなひいたむる

そくかう(續行)圖つゞけて物事を行ふコト㊁つゞひて歩み行くコトを云ふ、

そくかう(續稿)圖草稿のつゞき、續(ツヅ)き

そくがく(俗學)圖普通(フツウ)の學問、程度(テイド)の低(ヒク)き學問、

そくがく(俗樂)圖いやしき音樂(オンガク)、みだらなる音樂、

そくかく(俗客)圖俗人の客(キヤク)、無風流(ブフウリウ)な客人のコト、

そくがん(俗眼)圖いやしき見識(ケンシキ)㊁風

流心のなき人の、物を見(ミ)たるコトを云ふ、

そくかん(俗漢)図俗人のコト、僧侶に對しての稱

そくかん(俗間)図民間(カン)世の中、

そくかん(賊經)図賊の軍隊、

そくき(速記)図速(ハヤ)やかに文字を書き記(シル)すコト、

そくき(俗氣)図みやびならざる容子(スガタ)いやしきさま㊁あかぬけのせぬさまのコトを云ふ、

そくきん(卽吟)図卽座(ツヂ)に詩歌を作る

そくきん(卽金)図卽座(ツヂ)に金を出すコト、現金(ゲンキン)のコト、

そくきしや(速記者)図演說講談などを速記法に依りて記す人、

そくきじゆつ(速記術)図速記をなす其の仕方(ヤリカタ)のコト、

そくきはふ(速記法)図速法をする方法(クホウ)のコトを云ふ、

そくきよく(俗曲)図世間にて一般に用ゆる音曲(ヨウキヨク)卽ちいやしき音樂(オンガク)假令ば流行歌(ハヤリウタ)などの類を云ふ、

そくきろく 速記錄)図速記者の速記なしたる書類(ルイヨウ)、

そくくつ(賊窟)図賊徒の住ふ所、賊徒の根據地(ヨリドコロ)のコト、

そくくわ(俗化)図俗風に染(ソ)みゆくコト。いやしくなるコト、

そくぐわ(側臥)図横にれるコト、

そくぐん(賊軍)図賊の軍隊、

そくくわい(俗懷)図俗人の思ひ、卽ち名を擧げ利を得んとする考(カンガ)えのコト

そくくわい(賊魁)図賊徒のかしらのコト

そくくわり(屬官)図人の將に死せんとする時のコトを云ふ、卽ち臨終(リンジウ)に同じ、禮記(ライキ)より出でたる故事(コジ)なり

そくくわん(屬官)図其の官府(カンフ)に屬(ゾク)する下役人(シモヤクニン)と云ふコトにて卽ち判任官のコト、

そくくわさん(總火山)図地理學の語にて火山なれども、今は火山の狀態(ヤウタイ)にあらざる山のコトを云ふ(富士山の如き)

そくけい(賊計)図賊軍の計略、

そくけつ(卽決)図卽座に決定(ケツテイ)するコト㊁裁判(サバキ)して卽座に判決を下すコト、

そくげん(俗諺)図普通に云ひはやすことやびならぬ言語(ゴンゴ)㊁漢語(カンゴ)に對して通俗(ツウゾク)に用ゆるやさしき言葉(ヨウ)

㊂世間の人々の噂(ウワサ)のコトを云ふ、

そくご(俗語)図世の中で用ゆる正しからぬ言葉(ヤウ)㊁文章(ブンセウ)に對して話(ハナシ)のコトを云ふ、

そくこう(卽功)図卽座(ツヂ)に功を奏(ソウ)するコト㊁目前に表はる功能、

そくさく(卽刻)図すぐさま、

そくさく(屬國)図他國に附屬してゐて、其の國(クニ)の支配(シハイ)を受けてゐる國のコト、

そくさつ(俗骨)図いやしき心根(コヽロネ)、一品ならぬコトを云ふ

そくさん(卽今)副今(イマ)。すぐさま、

そくさん(屬懇)図取分(トリワケ)て、懇(コヽロヨ)なる、殊の外に仲のよき、

そくさうしよ(測候所)図天氣の變化を測(ハカ)る役所、

そくざ(卽座)図その場、すぐさま、

そくさい(息災)図災(ワザハヒ)をやすめると云ふ義にて、卽ち變りなく、無事(ブジ)なるコトを云ふ、「のコトを云ふ

そくさい(俗才)図平々凡々なる智惠(チエ)

そくさい(續在)図其物が暫(シバラク)くの間(アヒダ)、つゞひてあるを云ふ、

そくざい(贖罪)図官吏(クワンリ)又は公吏(コウリ)又は議員(ギイン)などが、其の職務(シキム)をげがしたる罪のコト、假令ば官公吏議

員などが、まゐない取るコトなどの罪、

そくさう(促裝)図旅(ビ)の仕度を急ぎうながすコトを云ふ、

そくさう(惻愴)図いたみなげく。うれひかなしむコトを云ふ、

そくさん(測算)図はかり考へるコト㊁むれさんだんのコト、

そくさんとく(粟散國)図粟(ハダ)粒(ツブ)の飛んでるやうな、小さき國々と云ふ意を表はす語、

そくし(足趾)図足あと、

そくし(喞子)図水鐵砲、

そくじ(卽時)図すぐさま、

そくし(卽死)図其の場にて、直ぐに死するコト、

そくじ(息慈)図僧侶の異名、

そくし(俗詩)図趣味(シミ)の少なきからうた。拙(カウ)なき詩、

そくじ(俗辭)図いやしきことば、

そくじ(俗字)図正しく書かれざる漢字(カンジ)のコト、卽ち略したる書(カキ)き方の文字、「出來事のコト

そくじ(俗事)図世の中の細々(コマ〳〵)したる

そくし(賊子)図親に不孝を働(ハタラ)きたる子㊁君主に反く惡徒、

そくし(俗士)図志想(シソウ)のいやしき人㊁みやびならざる人、

そくじ(仄字)図漢字の仄韻の文字のコト

そくしう(束修)図師の元へ入門の印として持ち行く物品、

そくじつ(卽日)図其の日のコト、

そくしつ(側室)図身分ある人の妾(メカケ)のコトを云ふ語、「中のしきたり

そくしふ(俗習)図世間のならはし。世の

そくしや(速寫)図最(イト)と早く寫(ウツ)すコトを云ふ、

そくしや(速射)図彈丸(ダンガン)などを、速(ハヤ)く發射するコトを云ふ、

そくしや(仄斜)図物を傾(カタム)けるコト、物のはすになるコト、

そくしや(屬車)図後(アト)より付き從(シタガ)がふ者㊁と

そくしや(屬者)図附き從(シタガ)がふ者㊁と

そくしゆ(俗趣)図下卑(ゲヒ)たるおもむき。

そくしゆ(賊首)図賊の首(クビ)㊁賊徒のかいやしきさま、

そくじゆ(俗儒)図志想の鄙(ヰヤ)しき漢學者のコトを云ふ、

そくしん(束薪)図たばねたる薪(タキギ)のコト。たばさした薪、

そくしん(束鍼)図鍼(ハリ)を集(ツヒ)めてたばねたるもの、たばねたる鍼(ハリ)のコトを云ふ、

そくしん(足心)図足のうら、「云ふ

そくしん(促進)図うながしすゝむコトを

そくじん(俗塵)図世間の事柄(コトガラ)のいそがはしきこと、塵(チリ)に喩(タト)へて云ふ、

そくしん(賊心)図そむかんとする心㊁害せんとする心㊂れすみをなさんとする心㊃よこしま心、「ト

そくしん(賊臣)図不忠なる家來(ケラ)のコ

そくじん(族人)図其の一族の人々のコトを云ふ、

そくしやう(俗唱)図流行歌の類、

そくじやう(賊情)図賊軍の容子、賊徒の動靜(ウゴキ)のコト、

そくしやう(賊將)図賊軍の大將、賊徒の長(オサ)のコトを云ふ、

そくしゆつ(續出)図つゞけさまに出るコト。次から次へ出る、

そくじよう(俗乘)図世間の云ひ傳へとなつてる歴史などを云ふ、

そくしよう(俗稱)図世間にて一般に云ひ觸(フ)す稱(トナヘ)㊁俗名(ゾクメイ)に同じ、

そくしやはう(速射砲)図續けさまに放(ハナ)たれ得るやうに仕掛たる大砲のコトを云ふ、

そくしんじやうぶつ(卽身成佛)図佛法の

語、佛道を悟(サト)りて其の身が佛の如く爲りしコト、

そくす(屬)自動部類(ブル)又は其の範圍(ハン)中に在ると云ふ意味、假令ば鳥類の部に屬す㊁仲間(マカ)となる咏方(クミカ)となる㊂其の人の指揮(キシ)の下の人となる、卽ち從者(ジウシヤ)となる、假令ば何々に屬す、

そくす(屬)他動むすびつらなる意味㊁まかせる、たのむ㊂文章などを作(ツク)つたり又た纂(ツヅ)つたりする、そゝぐ。むかふ、

そくす(賊)他動そこなふ。害する、

そくせい(速成)圖速かに物事の成就(ジヤウ)するコト、手取早(テドリバヤク)く出來るコト又は出來たるもの、

そくせい(卽世)圖死するコト、

そくせい(卽製)圖卽座に製作するコトを云ふ、

そくせい(促聲)圖そくをんに同じ、

そくせい(俗姓)圖僧侶が俗人でありし時の苗字(ミヤウジ)のコトを云ふ、

そくせい(賊勢)圖賊徒の勢(ホイキ)、

そくせき(卽席)圖其の場席(バセ)㊁其の場にて間(マ)に合ふコト、

そくせき(足跡)圖あしあと、

そくせき(族籍)圖身分(ミブン)卽ち平民とか士族とかの族稱(ゾクセウ)と、其の本籍のコトを云ふ、

そくせき(族戚)圖一家親類、

そくせき(屬籍)圖其の戸籍(コセキ)のある土地のコトを云ふ、

そくせつ(俗說)圖世間(セケン)にて、云ひ囃(ハヤ)すうはさのコトを云ふ、

そくせん(燭剪)圖器具の名、蠟燭(ロウソク)の心切(キリ)のコト、「のコトを云ふ

そくせん(息錢)圖利息の金錢、卽ち利子

そくせん(賊船)圖賊徒の乘つてる船。賊軍の軍艦、

そくせん(惻然)圖いたむさま。いたみうれふる狀(サマ)を云ふ、

そくせきれうり(卽席料理)圖前以て支度をなさず人の好みに應じて直ちに調(トヽノ)へる料理、

そくそ(惻楚)圖なげきいたむ、

そくそう(俗僧)圖其の品行の正しからぬ僧侶のコト、

そくそう(賊巢)圖賊徒の集(ツド)まつてゐる場處のコト、

そくそく(簌簌)副木の葉のガサガサとなる音を云ふ

そくそく(續續)副次(ツヾ)から次へと、絶間(タヘマ)なく續くコトを云ふ、

そくたい(束帶)圖昔の禮服のコトにて、正式の裝束(ソウゾク)のコトを云ふ、卽ち冠(カムリ)や袍(ホウ)や石帶(セキタイ)や下襲(シタガサネ)や劍(ツルギ)や笏(シヤク)等にて、身體(カラダ)をかざりたるを云ふ、

そくたい(俗態)圖下品(ゲヒン)なる容子を爲すコトを云ふ。いやしきさま、

そくだい(囑題)圖詩歌を賴(タノ)みて作らせるコト、

そくたい(俗體)圖俗人と云ふコト、

そくたい(賊隊)圖賊徒の一部隊卽ち賊軍のコトを云ふ、

そくたう(俗套)圖世間のならはし、浮世(ウキヨ)の習(ヒナラ)と云ふコト、

そくたく(測度)圖はかりみるコト、卽ち測量(ソクリヤウ)するコト、

そくたく(囑託)圖物事を賴みまかすコト㊁賴を受けて、其事をなす人のコトを云ふ、「く上達(ダツ)するコト

そくたつ(速達)圖早くとゞけるコト㊁早

そくだつ(惻怛)圖あわれに思ふ、いたましく思ふコト、「云ふ

そくたつ(卽達)圖直(ジカ)に屬けるコトを

そくたう(賊黨)圖賊の仲間、「ふ

そくたふ(卽答)圖すぐ返事するコトを云

そくたん(息男)圖人の倅(セガレ)を、うやま

ひて云ふ語、卽ち子息(クソク)、

そくだん(卽談)圖其の場にて、話を定めたるコト、

そくだん(俗談)圖世間話(ハナシ)、

そくだん(卽斷)圖其の場にて定(キメ)るコト其の場にて判斷するコト、

そくだん(速斷)圖手つとり早く定めるコト。速かに決定さすコト、

そくだくとうし(囑託講師)圖學校より、或る科目に付き、特に屬託されたる教師のコト、

そくち(卽智)圖物に當つて、卽座(ソクザ)に出る智惠(チエ)、きてん、さんち、

そくち(屬地)圖ぞく土に同じ、

そくち(俗地)圖しづかにして、みやびならざる土地(ツチ)、

そくち(賊地)圖賊軍の占領(セウリヤウ)なしたる土地のコトを云ふ㊁賊徒(ゾクト)の住ひ居る土地、

そくちよ(息女)圖他人の娘(ムスメ)を、うやまひて云ふ語

そくちん(賊陣)圖賊徒の、たてこもつてる陣營(ヂヤウ)のコト、

そくちやう(族長)圖一家族の長。一族中の頭(カシラ)のコト、

そくちゆう(族誅)圖一族(ゾク)の人々を殺すコト、一族をねだやしに爲すコトを云ふ、

そくちより(側聽)圖耳をかたむけて聞く㊁ぬすみ聞をする㊂立ち聞のコト、

そくちよう(俗調)圖俗曲に同じ、

そくつう(足痛)圖足のいたみ、

そくてい(測定)圖はかりて、きめるコト、

そくてん(卽點)圖卽座に詩、歌、文章などの點(テン)をつけるコト、

そくと(賊徒)圖盜賊をはたらく奴原(ヤツラ)㊁君主に敵する奴原、

そくど(速度)圖凡て物の進(スヽ)み行く其の早(ハヤ)さのコト、

そくど(測度)圖凡て物の長短及び重量(ヤウ)をはかるコト㊁度數(ドスウ)を測(カ)るコト、

そくど(屬土)圖附屬してる土地、

そくとう(喞筒)圖ポンプのコト、

そくなん(息男)圖男の子、むすこ、

そくはう(卽報)圖直に知らすコト。卽座になす返事(ヘンジ)、「至急の知らせ

そくはう(速報)圖早く知(シ)らせるコト。

そくはう(屬邦)圖屬國(ゾクコク)、

そくはう(屬望)圖人望(ジンボウ)の集(ツド)まり來るコト㊁物事に望(ノゾ)をつけるコトを云ふ、

そくはう(族望)圖家筋(スジカ)、家柄(イヘガラ)、

そくはく(側柏)圖木の名、この、柏の別名なり、「㊁貢(ミツ)ぎ物の絹

そくはく(束帛)圖卷きたたみたる絹(キヌ)、

そくはく(促迫)圖せまるコト、せめるコト、卽ち催促(サイソク)するコト、

そくはく(若干)圖少しばかりのコト、わづかばかりのコト、

そくばく(束縛)圖しばりてたばねるコト㊁身躰の自由(ジユウ)を、きかさぬやふにする㊂轉じて身躰(シンタイ)に制限(セイゲン)を受けるコトを云ふ、

そくはつ(束髮)圖女子の髮(カミ)をたばね結(ユヒ)ぶコト㊁女子の西洋風の髮(カミ)の結ひ方、

そくはつ(續發)圖つづけさまに發生(ハツセイ)し、又は發射し、又は發行するコト、

そくひ(足皮)圖足のかは、

そくひ(續飯)圖飯(メシ)を固くねりて作りたる糊(ノリ)のコト、

そくひつ(俗筆)圖正式書法に適(カナ)せざる文字(モジ)の書き方、卽ち文字のつたなきコトを云ふ、「至急の知らせ

そくふ(屬附)圖つくコト㊁つながるコト㊂まかすコト㊃したがふコトを云ふ、

そくふ(族譜)圖けいづに同じ、

そくふ(惡膚)圖瘡(カサ)のコト、

そくふ(足布)圖足を拭ふ爲めの布(ぬの)のコト、

そくふつ(俗物)圖風流(ふうりう)の心掛なき人㊁美術(びじつ)志想(しそう)に乏(とぼ)しき人㊂上品ならざる人、

そくぶん(俗文)圖一般に解(かい)し得(え)らるゝやさしき文章、卽ち手紙の文の如きを云ふ、

そくふん(俗氣)圖いやしきふるまい㊁あ

そくへい(塞閉)圖ふさぐコト、とづるコト㊁じやまするコト、

そくへい(屬兵)圖部下の兵士、

そくへい(賊兵)圖賊軍(ぞくぐん)の兵士、

そくへき(側壁)圖側(がは)つらのかべ㊁へだてのコトを云ふ、

「を云ふ

そくへん(側邊)圖そば、かたわきのコト

そくへん(續編)圖其の書物のつづきのコト。つゞきの書物、

そくほ(捉捕)圖引つ捕(とら)えるコト、捕り押(おさ)えるコト、

そくぼう(賊堡)圖賊徒(ぞくと)の立ちこもつてるとりでのコト、

「軍の勢ひ

そくぼち(賊鋒)圖賊徒のほこ先(さき)㊁賊

そくみやう(俗名)圖一般に用ゆるとなへ名、卽ち俗稱㊁戒名に對して、生前(せいぜん)の名のコト、

そくむ(俗務)圖世俗(せぞく)のつとめ、世間(せけん)の仕事、

「賊よばはりのコト

そくめい(賊名)圖賊として呼ばれたる名

そくめう(卽妙)圖とんちのコトを云ふ、

そくめつ(熄滅)圖きえて無(な)くなるコト、ほろびてしまふコト、

そくめつ(族滅)圖一家一門の亡(ほろ)びてしまふコト又た亡ぼされたるコトを云ふ、

「(なか)のコト、

そくめん(側面)圖物體のわきつらの面

そくめんくわん(側面觀)圖物事を正面より見ずに、他の方面より觀て察するコト、

そくめんとうげき(側面攻擊)圖敵軍の横合より攻擊するコト、前面攻擊に對しての稱、

「目をそばだてるコト

そくもく(側目)圖しり目にて見るコト㊁

そくもく(屬目)圖目を注(つけ)ぎつくるコト㊁氣(き)をつけて望み見るコトを云ふ、

そくや(卽夜)圖其の夜、

そくよう(俗用)圖世間向(せけんむき)の用事、世帶(したい)向きの用事、

そくり(屬吏)圖屬官(ぞくくわん)卽ちした役人(やくにん)のコトを云ふ、

「トを云ふ

そくり(俗吏)圖俗事を取り扱ふ役人のコト、

そくり(俗流)圖世の中の習(ならひ)。世間のありさまのコト、

そくりき(足力)按摩(あんま)術の一種にて、手と足と同時に、働(はたらか)せて揉(も)むコト、

そくりやう(測量)圖土地山岳(さんがく)河海(かい)等の高低(こうてい)深淺(しんせん)等を、測(はか)るコトを云ふ、

「ち速度のコト

そくりよく(速力)圖進み行く力(ちから)、卽ち歩く力

そくりよく(足力)圖足の力、卽ち歩く力(ちから)のコトを云ふ、

そくりりき(測流器)圖川水(かわみず)の速力、又は潮流(ちやうりう)の容子を、測量するに用ゆる器具、

「子を測量する艦(かん)

そくりやうかん(測量艦)圖海底(かいてい)の容

そくりやうじゆつ(測量術)圖測量する仕方(しかた)の技術、

そくりやうびやう(測量標)圖測量したる土地に立てゝ置くしるしのコト、

そくるる(俗累)圖世間のわづらはしきコト。世の中のわづらひ、

そくるる(族類)圖ともがら、仲間(なかま)たぐゐのコト、

そくるる(賊類)圖わる者の仲間、

そくるる(賊巢)圖賊徒の立てこもつてるとりでのコト、

そくれい(屬隸)圖人の部下につきて、はたらくコト、又は其の人、

そくれう(速了)圖すみやかに・おわると云ふ意にて、早やのみのみ。早や合點(がてん)のコト、

「やしきコト

そくろう(側廊)圖下品(しな)なるコト、い

そくろん(俗論)圖高尙(こうしやう)ならざる議論のコト、卽ち平々凡々(ぼんぼん)の議論のコトを云ふ、

そくわ(租課)圖租稅(そぜい)のコト、

そくわ(粗莱)圖粗末(そまつ)なる菜子㊁味の劣(おと)れる菜子、

そぐわ(疎畫)圖密畫(みつぐわ)に對しての稱にして、あらく描きたる畫、

そくわ(粗貨)圖粗末なる品物㊁直打(ねうち)のなき品物(しなもの)、

そくわ(俗話)圖世間話(せけんばなし)、

そくわい(遡洄)圖みなもとの方へ逆(さか)に、のぼつてゆくコト、

そくわい(素懷)圖常々(つねづね)より、心に思を抱(いだ)き居るコト、

そぐわい(疎外)圖うとんじて、親しふせぬコトを云ふ、

「を云ふ

そくわう(素光)圖月の光(ひかり)の白きコト

そくわつ(蘇活)圖呼吸(いき)をふきかへすコト、よみがえるコト、

そくわつ(疎濶)圖無沙汰(ぶさた)をしていたコト㊁親(しん)しからざるコト㊂うとき

「心願(がんぐわん)のコト

そぐわん(素願)圖日頃(ひごろ)よりの願(ねがひ)ひ、

そぐわん(訴願)圖うつたへて願ひ出るコトを云ふ、

(そぞけ)

そげ(竹木刺)圖竹又は木のそげで切れたる其の端(はし)のコト、

そけい(龜景)圖粗末なる景物(けいぶつ)、

そげき(狙擊)圖ねらひうち、

そげふ(墟業)圖どだいとなるべき事業(じぎやう)のコト、

そげふ(祖業)圖先祖のなしたる事業㊁先祖より傳(つた)はり來たれる事業(じぎやう)のコト、

そけん(素絹)圖白き無地(むじ)の絹織物(おりもの)

そけん(僧侶)(そりよ)の用ゆ白き絹(きぬ)の衣服のコトを云ふ、

そけん(訴權)圖訴訟(そしやう)を裁判所へ提出(ていしつ)する權利(けんり)のコト、

そけん(訴件)圖そしよう事件(じけん)、

そげん(遡源)圖水の源(みなもと)の方へさかのぼり行くコト、物事(ものごと)の起源(きげん)を調(しら)べるコト、

(そぞこ)

そこ(底)圖下の方のしきり㊁凡て下の方のコト㊂器物(きもの)の內部の下の方㊃深く隱(かく)れたる處㊄凡て物事の極度のコトを云ふ、卽ちきわまり、ドンゾコ、

そこ(其處)圖其の處、其の場處、

そこ(其許)圖其なた、そこもと㊁おまへさん、

「ちがふるコトを云ふ

そこ(齟齬)圖物事の、くひちがふコトのま

そこい(底意)圖下心(したごころ)、

そこいぢ(底意地)圖根(こん)に持つてる意地(いぢ)のコト、

そこう(狙公)圖猿(さる)の異名㊁猿(さる)つかひ、猿廻しのコト、

「を云ふ

そこう(粗工)圖そまつなる細工ものコト

そこきみ(底氣味)圖物にぼんやりと感(かん)じたる心持(こころもち)を云ふ、

そこく(祖國)圖先祖以來(いらい)住(すま)つている國のコト㊁其の國民の分(ぶん)れて出でたる本(もと)の國、假令ば外國にゐて內地のことを云ふ、

そこつ(粗忽)圖粗相(そそう)なるコト卽ち注意の足らざるコト㊁凡てからはづみな

るコト㊁失策(シツサク)、

そこつち(底土)図積(ツミ)み重ねられてある一番の下の方の土、

そこづみ(底積)図船の底(ソコ)に積(ツミ)たる荷物(ニモツ)の、下數(シタカズ)に爲つてる荷物のコト、

「つかしき人のコト」

そこつもの(粗忽者)図あわてもの、そそ

そこで(其處)(接)上の句を受けて下の句に續(ツヅ)かせん爲めに用ゆる語、其の時に又は其れ故にの意、

そこどころ(其處所)図其の場所(バショ)㊁其の所の事柄、假令ばそこごころでないなど、

そこなふ(殘)他動損に同じ、

そこなふ(害)他動他人に傷(ヒ)を負(オ)はす㊁他人を困(コマ)らせる、

そこなふ(損)他動仕損(シソン)じる㊁やぶる

こわす㊂きづをつける㊃くるしめる、なやまする、

そこぬけ(底抜)図物の底のなきコトを云ふ㊁底の取れたる物のコトを云ふ㊂轉じて物事にしめくゝりのなきコトを云ふ、

「大散財して遊ぶコト」

そこぬけあそび(底抜遊)図飲めや歌へと

そこぬけやたい(底抜屋臺)図祭禮に出す踊屋臺(オドリダイ)の床(ユカ)のなきもの、中にある人は、地上に立つてるもの、

そこぬけじやうど(底抜上戸)図大酒飲(オホザケノミ)、大酒家(ユカシ)、

そこねる(損)他動そんじる、惡(ワル)き物となる、いたむ、

「にほどかなる、いたむ、」

そこばく(若干)図いくらか、いくつか、な

そこひ(底翳)図又た障眼と書く、眼病の一種、即ち一寸(ヲチビ)見(ミ)ると別(ベツ)に變りなけれど、瞳孔(ヒトミ)に障害(ガイ)あり、視力(シリヨク)の衰(オトロ)ろふる眼の病氣の稱、

そこまめ(底豆)図足のうらに出來(キデ)たるまめ、膿(ウミ)て且つ痛む、

そこもと(其許)(代)其のそこころ、そなた、そなさん、

「たりのコトを云ふ」

そこら(其處等)図其の近邊(キンペン)、其のあ

そこる(底見)自動海の水の干(ヒ)きて底が見てゐる、

「る言葉(ハコ)」

そこん(粗言)図そんざいな言葉、失禮な

（そざ）

そざい(礎材)図素材(イツザイ)に同じ、

そざい(蔬菜)図畑に作(ツク)られる凡ての青物(アオナ)のコトを云ふ、

そざい(素材)図物を製作する其の基礎(イシヅエ)となる材料(ザイリヤウ)、

そさく(粗作)図搆(カマヘ)へられたる物の粗末なるコト㊁文章、詩、歌などの作り方に、念の入らぬコトを云ふ、又は念を入れずに作りしもの、

そざり(粗造)図粗末なる細工(サイク)物㊁そんざいな搆(カマヘ)へ方、即ち一夜造(ヒトヨヅクリ)のコト、

「勇氣沮喪など」

そさり(沮喪)図氣ぬけするコト、假令ば

ささり(粗糙)図其の質のあらくして、ザラつけるコトを云ふ、

そさり(粗相)図念の入らぬコト。注意の足らぬコト㊁からはづみなるコト㊂けが。あやまち、

そざつ(粗雜)図粗末(ツマラ)にして、而(カシ)もそんざいなるコト、

そさん(素餐)図其れだけの力なく、又た其れだけの功(ヒロ)なくして、祿(ハウ)を受け居る人のコトを云ふ、

そざん(鼠竄)図こそこそと、逃て行くコトを云ふ、

（そぞし）

そし(麁紙)図そまつなる紙、下等の紙のコトを云ふ、

そし(祖師)図佛教(ブツキヤウ)の一宗(シウ)を開きたる人を敬ひて云ふ語㊁日蓮上人(シヤウニンニチレン)のコトを云ふ㊂達磨大師(ダルマ)のコト

「志のコト」

そし(素志)図元來の志(ココロザシ)、常々よりの

そし(阻止)図とめさせる、ささえる、ささえとめるコトを云ふ、

そじ(訴事)図うつたへ事のコト、

そしう(楚囚)図めしうど。とりこになしたる人のコト、

そじき(粗食)図粗末(ツマラ)なる食物、

そしき(組織)図くみたてて、一つの物となすコト㊁つくりかた、

そしきがく(組織學)図動植物の組織、即ち其の構造を顯微鏡を用ひて、研(ケン)むる學問を云ふ、

そしつ(素質)図其人本來に具(ソナ)はつてる氣質(キシツ)㊁未來(ミライ)に於て、盛大(イセイ)となる其の基(モトヒ)。

そして(而)(接)上の文句(モンク)と、次の文句とを接(ツナ)ぎ合す爲めに用ゆる語にて、さて又はかくしての意、

そしな(粗品)図粗末なる品物、

そしや(素車)図葬儀の時に用ゆる飾(カザリ)のなき車のコトを云ふ、

そしやう(素商)図秋(アキ)の別名、

そしや(素寫)図鳥獸の白き毛にて作りたる、衣物のコトを云ふ、

そじやう(訴狀)図訴へをなす文書、

そじやう(疏狀)図事實(ジツジツ)を個條書(カジヤウガキ)に爲したる文書、

そしやく(咀嚼)図かみてあじはふコト、即ち食物を齒(ハ)にて碎(クダ)きて、舌(シタ)にて味(アジハ)ふコト㊁轉じて文章の意味(イミ)などを、能く呑(ノ)み込(コ)むコトを云ふ、

そしやく(租借)図一國が、他の一國の領分(レウブン)内の一部分の土地(チ)を、一定の年限(ネンゲン)を定めて、其の年間我が支配内に置きて、政事(セイジ)軍事(グンジ)等の凡ての權利を握(ニギ)りて治(オサ)めるコトを云ふ、假令ば滿洲租借の如し、

そしやくち(租借地)図租借なしたる土地

尙ほ租借の條を見よ、

そじゆ(組綬)図記章(キシヤウ)などを佩(オビ)るに用ゆる組紐(クミヒモ)、

そじゆ(鼠鬚)図筆(フデ)の別名、

そじゆ(詛呪)図のろふコト、のろひ、

そじゆ(組酒)図品の下等なる酒、

そじゆつ(祖述)図其の道を基礎(キソ)として述(ノベ)べ立るコトを云ふ、

そしよう(訴訟)図うつたへるコト、即ち公事(クジ)のコト、

そしよく(疎食)図そしきのコトにて、粗末(ツマラ)なる食事。野菜を食ふコト、

そしよく(蔬食)図野菜のみで料理せし食事㊁粗末なる食事、

そしよりにん(訴訟人)図訴訟を裁判所へなす人のコト、

「も書く」

そしり(謗)図そしるコト、又た誹の字を

そしる(謗)他動惡く云ふ、くさす、けなして云ふ、あざける、

「トも書く」

そしん(素心)図常々(ツネヅネ)より思ふてるコト、

（そぞす）

そす(租)自動身分の高き方の、死亡(シボウ)されたるコトを云ふ、

そす(蘇)自動呼吸(イキ)を吹きかへす、よみがへる、

そする(疏水)図土地(チ)を切り開(ヒラ)きて水の流れ道(ミチ)を作るコト、

そすう(素數)図數學の語にて、一と其の數(スウ)自身(ジシン)さよりの外(ホカ)の數にては、割(ワ)り切れ能(タ)はぬ整數(セイスウ)のコトを云ふ、即ち三五七などの數字のコトを云ふ、

（そせ）

そせい（蘇生）圖呼吸（イキ）を吹き返（カヘ）すコト、よみがへるコトを云ふ、

そせい（素性）圖其人、本來（ライ）の性質（ヒツ）を云ふ

そせい（狙征）圖敵を征伐（セイ）に行くコト

そせい（詛誓）圖神に對して祈願（ガン）をこめつつ誓（チカ）を立るコト、

そせい（素製）圖粗末なる製作品（セイヒン）、

そせい（租稅）圖れんぐのコト、

そせう（蘇少）圖藝妓（ギイ）の別名、

そせき（疎斥）圖うとんずる。うとむ、

そせき（礎石）圖どだい石のコト、

そせつ（鼠窃）圖こそこそどろぼう、

そせん（疎奪）圖まばらに生（ハエ）てる口ひげのコトを云ふ、

そせん（祖餞）圖旅立（ハナミ）する人へのはなむけ、卽ちせんべつ、

そせん（祖先）圖せんぞのコト、

そせん（粗膳）圖粗製の膳具（ダイ）㊁轉じて粗末なる食物（モノ）、

（そぞそ）

そそ（楚楚）圖かざらずして、床（ユカ）しきさまを云ふ語、

そそう（祖宗）圖帝王の御先祖と、中興の先祖のコト㊁帝王の歷代のお方（カタ）を申す、㊂其の家先祖代々、

そそぐ（注）自動水の流れ出てゐる、又は川の水などの海へ流れ入る、

そそぐ（注）他動水などをながしかける㊁藥などをつぎ込む、酒などを盃へ流し入れる㊂心又は目などを一ケ所に集（ツド）め向ける、假令ば心を學問に注ぐなどの如し、「コト

そそく（粗俗）圖そんざいにしていやしき

そそく（蘇息）圖よみがへるコト、

そそく（鼠賊）圖小盜（コスト）、

そそつ（粗率）圖いやしき振舞（フルヒ）のコトを云ふ、

そそのかす（唆）他動人をおだてて、惡（ワル）き事をなさしむ㊁我が云ふ事に、心を移（ウツ）すやふに、仕掛（シカケ）る、

そそふ（搖動）他動ゆさぶつて動（ウゴ）かす、振（フ）てうごかす、

そそり（淫行）圖遊里（イロ）へ通ひ狂（ルフ）ふコト、女狂（ルフ）に憂身（ウキミ）をやつすコトを云ふ、

そそり（滑稽演技）圖芝居道（シバヰ）の語にて、役者が互ひに其の本役を振り替（カヘ）ておどけるコトを云ふ、

そそろに（漫）副坐（ザツ）に同じ、

そそろに（坐）副斯（カク）と云ふ深き原因なくして、何んとなく心の進（スス）み行くさま㊁あてどもなしに、

そそろごと（慢言）圖いたづらごと㊁でまかせ。でたらめのコト、

そそろごころ（慢心）圖何んとなくはきはきといさみ進（スス）む心、

そそん（業飡）圖骨を折（ヲリ）ずに扶秩（ヲヤ）などを戴（ダイ）いてるコト、

（そぞた）

そだ（粗朶）圖樹の枝（ダエ）を伐（キ）り取りたる物の稱、柴（ポル）又は其の他の用を爲すもの、

そだい（措大）圖學問（モンダイ）の出來る人を褒（ホメ）て云ふ語㊁轉じて書生のコトを云ふ、

そだい（粗大）圖粗末なるコト㊁あらくして大なるコト㊂綿密（ミツ）ならぬコト、

そたち（鼠盜）圖こそこそ泥棒（ドロボウ）、

そだち（祖道）圖祖飲に同じ、卽ち餞別（セン

びの酒宴（モヨヲ）のコトを云ふ、

そたち（疎蕩）圖荒々（アラ）しくして綿密（ミツ）ならざるコトを云ふ、

そだち（疏導）圖開きて、みちびくコト。みちびき案内するコト、

そだち（育）圖そだてるコトを云ふ、

そだつ（育）自動大きくなる㊁出來（デキ）て行くゝのびてゆく、

そだつ（育）他動そだてて行く㊁大きくなるやふにする、

そたつ（疏達）圖物事の條目（スジメ）が十分に立つてるコト㊁物事が十分に行き屆ひてるコトを云ふ

そたつ（楚撻）圖うちはたくコト㊁物事をきびしく仕込み教（オシ）える、

そたん（粗炭）圖粗末なる石炭（セキタン）、下等なる石炭のコトを云ふ、

（そぞち）

そち（措置）圖物事の仕方、卽ちさり計ひのコトを云ふ、

そち（其方）四我より下目（シタメ）の者に向つて云ふ語、おまえ、なんぢ、

そち（其方）四そちら、その方角（カタ）、凡て我が身より幾分（イクブン）か、離（ハナ）れたる方を指して云ふ語、

そち（十）圖とうをのコト、

そち（粗茶）圖茶を客に侑（スス）むる時に云ふ語、㊁粗末なる茶と云ふコト、

そちやう（祖帳）圖送別（ソウベツ）の宴會、

そちゆう（疏註）圖本文の事實（ガツ）を說き明（ア）すコト、

そちゆう（蜈蚣）圖うじ虫のコト、

そちん（訴陳）圖うつたへのぶ、

（そぞつ）

そつ（卒）圖兵士㊁足輕（ガルシ）㊂下男。下僕㊃軍隊㊄昔時の軍隊編成の語兵士百人を一卒と云ふ㊅にわかのコト㊆あはてるコト㊇身分ある人の死去のコト、

そつ（帥）圖昔時の大宰府（ダザイフ）の長官の名

そつ（猝）圖あはたゞしきコト。にはかなるコト。あはてるコト、

そつ（率）圖穴（ケツ）の內より、突然（ダシ）に躍（ヤ）り出るコト㊁ザワザワとして、おちつかぬ狀を云ふ、

そつ（率）圖卒（ツ）の本字、

そつり（楚痛）圖物事をなやみいたむコト案じわづらふコト、

そつり（疏通）圖妨（サマタ）なくして通ずるコト㊁きわだちて、意味（イミ）の十分に通じ合ふコトを云ふ、

そつき（卒去）圖五位以上三位以下の位ある方の死去せしコトを云ふ、

そつきよ（卒遽）圖にわか、はやく、

そつぶふ（卒業）圖學校の科業（カギヤウ）を全部學び終るコト、

そつぶふせい（卒業生）圖卒業試驗に及第（ダイ）したる生徒、

そつぶふしけん（卒業試驗）圖其の學校の全部の科程を修めたる最後の試驗のコト、

そつぶふしようしよ（卒業證書）圖卒業したる事を證明すべく與（ア）ふる證書、

そつど（卒伍）圖兵卒の行列（ギヤウレツ）、

そつじ（率爾）圖からはづみなる、突然（ダシ）なる㊁にわかなるさま、

そつじに（卒爾）副だしぬけに、にわかにからはづみに、

そつじよう（卒乘）圖步兵と騎兵、

そつす（卒）自動中等の位に在る人の死去せるコトを云ふ、

そつせん（率先）圖まつさきに立つ㊁人々を引き伴（ツレ）れて先へ立ち進むコト、

そつせん（率然）副からはづみなる擧動（ルフ）を云ふ語、

そつたう(卒倒)圖だしぬけに倒(タフ)れて、氣を失ふコト、

そつち(其方)圖そちら、あのほう、

そつちゆう(卒中)圖病氣の名、臟(ゾウ)に循(ジユン)る血の關係に依りて、突然倒(タフ)れて正氣(ヤウキ)を失ひ、又は其のまゝにて死する病氣、

そつちよく(率直)圖すなほなる曲(カネ)り「氣のなき、正直」

そつと(秘)副こつそり、ひそかに、

そつど(率土)圖天下と云ふ意にて、卽ち地球上のコト、

そつと(慄然)副物事に感じ驚くさま、身ぶるいするさま、

そつば(反齒)圖反(カヘリ)て、はぐきより外(ソト)へ出てる齒のコト、

(そぞて)

そで(袖)圖衣服の左右に一つづゝありて兩腕(リヤウワン)をかくす部分の稱、

そであふぎ(袖扇)圖德川時代に奥女中の用ひたる黑ぬりの扇、

そてち(租調)圖年貢(ネング)とみつぎものゝ、

そでうつし(袖移)圖我が袖(ソデ)から、他人の袖へ、人知れず物を、渡すコトを云ふ

そでがき(袖垣)圖物に沿(ソフ)せて一段低(ヒク)く結(ユ)ひ廻(メグ)らせたる垣根のコトを云ふ、

そでかき(袖書)圖手紙公文書などに、行數(ギヤウスウ)を三つほど下げて書くコト、又は書きたるものゝコト、

そでがさ(袖笠)圖袖(ソデ)を頭に載(ノ)せかざして、笠の代(ダイ)となしたるコトを云ふ、

そでがひ(袖貝)圖あこや貝の別名、又たわすれ貝の別名とも云ふ、

そでがらみ(袖搦)圖昔用ひたる罪人を捕ふる道具の一にて、棒(ボウ)の先に鉄にて又(マタ)を幾個(イクコ)かを作りたる物を付け、之を罪人の袖(ソデ)に引きかけて、倒(タフ)して捕へる、卽ちぐりのコト、

そできやう(袖几帳)圖我が袖にて我が顏(カホ)を覆(オホ)ひ、かくすコトを云ふ語、

そでぐち(袖口)圖衣服の名稱にて、袖の端(ハシ)で、手首(テクビ)の出る部、又た其の部に縫(ヌ)ひ付けたる布(ヌノ)のコトを云ふ、

そでくくり(袖括)圖昔時用ひたる狩衣(カリギヌ)や直垂(ヒタレ)などの袖口に、緒(オ)を通したるものゝ稱、

そでくらべ(袖較)圖品物を求(モト)めんとする人同士が、他人に悟(サト)られぬやふに、袖の中へ互に手を入れ、指(ユビ)を握(ニギ)り合ひて、其の物の直段を知らし合ふコト、

そでこひ(袖乞)圖人家の軒(ノキ)に立ちて、物もらひ乞(コフ)コト、乞食、

そでじるし(袖標)圖昔戰場にて軍人が、味方の目標(メジルシ)になるやうふに鎧(ヨロヒ)の袖に垂れさせ置きたる布(ヌノ)のコト、現今で云ふ胸章(キヨウシヤウ)、「云ふ

そでたと(袖鳳)圖紙鳶(タコ)の小きものを

そでつ(蘇鐵)圖木の名暖地(ダンチ)に好んで成育す、幹(ミキ)は太くして直(スグ)に立ち、其の葉(ハ)は鳥の羽毛(ハネ)の如き形を呈して、梢(コヅエ)の方に密生す、重に觀賞用として賞賛さる、其の實(ミ)は粉として食料に供す、「そ頭巾のコト

そでづきん(袖頭巾)圖女子の用ゆるおこ

そでなし(袖無)圖左右の袖のなき短(ミジカ)かき羽織(ハオリ)の如き衣服、

そでのか(袖香)圖袖にうつりたる香(カホリ)のコト、

そでのした(袖下)圖袖の下より人知れず、物を出して渡すと云ふ意にて、賄賂(ワイロ)の別名、

そでばん(袖判)圖鎌倉、足利時代の公文書に、捺したる印判(インバン)、

そでふる(袖振)自動我が袖を我が手に持ちて打ち振るコト、此れは別(ベツ)を惜(オシ)む意を表(ヒヤウ)はす爲めにするものなり、㊁人を招(マネ)くコトに云ふ語、

そでふりくさ(袖振草)圖すゝきの別名、

そでまくら(袖枕)圖我れの着(キ)ている衣物の袖を折(オリ)て枕として寢(ネ)るコト、

(そぞこ)

そと(外)圖ほか卽ち以外(イイグワイ)㊁かどのさき、卽ち家のそと(門前)、「に

そと(秘)副ひそかに、こつそりと、しづか

そとうみ(外海)圖入海(イリウミ)に對しての稱にて、大海(タイカイ)のコトを云ふ、

そとがわ(外側)圖そとつゝら、

そとがまへ(外構)圖邸宅(テイタク)の外部の構造(コウゾウ)方の有樣を云ふ、

そどく(素讀)圖書物の意義を解(イ)せずして、唯だ文字のみを讀むコトを云ふ、

そとぐに(外國)圖ほかの國、

そとぐるま(外車)圖汽船(キセン)の外(ソト)の方に現はれてる車輪(シヤリン)、「コト

そとぐるわ(外郭)圖城の外部のくるわの

そとせん(外纖)圖樋(トヒ)の外側(ソトガハ)をけづるに用ゆる鉋(カンナ)のコト、

そとで(外出)圖我が家より外へ出るコト他所へ行くコト、

そとう(遲豆)圖支那(シナ)にて儀式にかなひたる祭事(マツリゴト)を營(イトナ)なむ時に、供物を載(ノ)せて、參(マイ)らする臺(ダイ)のコトを云ふ、

そとのり(外法)圖大工(ダイク)などの職人の用ゆる語にて、中の空(カラ)なる物の、外廻(マハリ)の縱巾(タテハバ)と、横(ヨコ)巾のコトを云ふ、

そとふば(卒塔婆)圖略して、さうばと云ふ、卽ち死人の戒名(カイミヤウ)又は經文などを記したる、細長(ホソガ)き板(イタ)、又は四角なる杭(クイ)にして、墓地(ボチ)の上に立つるもの、「方のコトを云ふ

そとべ(外方)圖そとの方、そとへ出たる

そとのへ(外塀)圖家の外側(ソトガハ)を圍(カコ)ひたる塀、

そとぼり(外堀)圖城壁(ジヤウヘキ)の外の周圍(シウイ)に堀(ホリ)られたる堀(ホリ)、

そとまはり(外圍)圖凡て外(ソト)つらの周圍(シウイ)、

そとまはり(外廻)圖そとむきの用事を爲す役(ヤク)、又は其の人卽ち外勤役(ガイキンヤク)のコト、

そとも(外面)圖そとつらそとがはのコトを云ふ、

(そぞな)

そなた(其方)圖自分と同一の身分の人に對して呼ぶ語㊁我れより少しく離(ハナ)れたる處に在る物を指して云ふ語、

そのふ(備)他動不時の入用に欠(カ)ぬやふになす㊁足らざるを滿(ミ)す㊂常々より取り揃(ソロ)え置く㊃神に物を供(クウ)す、

そなへ(備)圖用意をして置く㊁仕度をなし置く㊂敵を防(フセ)ぐ手段(シユダン)を爲し置くコト㊃おそなへ餅(モチ)の略語、

そなへおき(備置)圖そなへつけて置く物又はそなへつけて置きたる物のコトを云ふ、

そなへおく(備置)他動不足の生じないやふにかれてより用意し置く、

そなへつく(備附)他動其の處に設(モウ)けつけて置く㊁不足(フソク)を生じたる時の用意(ヨウイ)を爲し置く、

そなへつけ(備附)圖そなへつけてあるもの、そなへつけたるコト、

そなへもち(備餅)圖神に供(クウ)える、かさ

れ餅(モチ)のコトを云ふ、

そなる(磯馴)(自動)木の枝(エダ)が自然に地面へ垂(タレ)れ下つてる、

そなゑ(磯馴)図そなれたるコト㊁そなれたる木卽ち磯馴木の略、

そなゑまつ(磯馴松)図濱邊(ハマベ)に生(オヒ)ている松のコト、

そにん(訴人)図官へ訴(ウタヘ)え出る人、卽ち告訴(コソ)する人、

そね(硼)図小石の多分に混(マジ)ってゐる、やせ地面のコトを云ふ

そねむ(嫉)(他動)うらやみてうらめしく思ふ。れたみにくむ、

(そぞの)

その(園)図草花果物(ハナモノ)又は野菜(ヤサイ)類を植たる一構(カマヘ)の土地のコト、㊁忌(イミ)み言葉にて穴のコトを云ふ、

その(其)代我が傍に在る物を指して云ふに用ゆる語、「の別名

そのいろつき(園色月)図陰暦(インレキ)の八月

そのうち(其内)図其の物の中(ナカ)、

そのうち(其内)副近々(チカヂカ)遠(オト)からぬ内に、

そのうへ(其上)其の物又は其の事の上にと云ふ意、重(カサ)なる意、

そのうへ(其上)副ある上にもかけてくはえてと云ふ意、「時のコト

そのかみ(當時)図其の事のありたる其の

そのご(其後)図其れより後(ノチ)、其の事があつてから、このかた、

そのすじ(其筋)図其の物事を支配(ツカサドル)する官府(ツカサ)を云ふ㊁其の物事に關(カカ)て十分に出來るコト、

そののち(其後)図其の事のありたる時より後と云ふ意、

そのば(其場)図其の物事の現(ウツ)に在り、又は生じたる處㊁其場所、卽座(ソクザ)のコト、

そのはう(其方)代そなた、おまへ、

そのひ(其日)図その當日(ソノヒ)、

そのひと(其人)図今前に述べたる人のコトを云ふ、彼(カレ)の人、

そのふ(園生)図草木などの多く植(ウヱ)られてある處。庭園(テイエン)、

そのまま(其儘)副其の通り㊁其形(カタチ)をかへぬ㊂ありしまゝ、

そのむき(其向)図其の道筋㊁其の物事(ムキ)になれてゐる方、其のむかつてる方角(カクヒ)のコト、

そのもと(其許)代そなた、おまへ、

そのもの(其物)図今前(イマサキ)に述(ノベ)たる物を指して云ふ語、

(そぞは)

そば(側)図わき、かたはら、あたり、近邊(キンペン)のコトを云ふ、

そば(傍)図側に同じ、

そば(岨)図山の險阻なる處の稱、

そば(粗葉)図俗語にて、粗末なる煙草(タバコ)と云ふ意味、

そば(蕎麥)図草の名にて、莖(クキ)の高さ一二尺ほどあり、秋の初に白き花咲(サキ)て黑き皮を被(カブ)むれる實を結ぶ、實(ミノ)は白し、之を挽(ヒキ)て粉とし食料となす

そばい(風雟)図平々凡々(ヘイヘイボンボン)なるともがらのコト、「なるコトを云ふ

そばう(粗暴)図あらあらしきコト。亂暴

そばう(素望)図平素(ヘイソ)よりの望(ノゾミ)㊁かねてよりのねがひコト、

そはう(粗放)図物事を等閑(ナヲザリ)勝(カチ)にするコト、卽ちやりつぱなし㊁そんざいなコト、あらきコト、

そばかき(蕎麥搔)図蕎麥粉を熱湯(ネユ)にて捏(ネリ)て團子(ダンゴ)の如く爲しダシ汁にて用ゆるもの、

そばかす(雀斑)図顏面(カホ)に生ずる一種の腫物(モノ)、淡黑(クロ)き細(ヒソ)かなる痕(キズ)の如きもの、血液(チエキ)の作用(ハタラキ)で濃(コヒ)くなつたり、淡(ウス)くなつたりする、「出したる其の皮のコト

そばがら(蕎麥殼)図蕎麥の實(ミ)を取り

そばきり(蕎麥切)図蕎麥の實の皮を去りて、粉末(フンマツ)さたしたるものを、水にてねりて細く切りたるもの、

そばす(添)(他動)一所(イシヨ)にさす㊁夫婦(フウフ)にさする、「そびゆる

そばだつ(峙)(自動)きはだつて高く立つ、

そばだつ(欹)(他動)一方の端(ハシ)を高く持ち上る、卽ちかたむける、假令ば耳(ミミ)を欹だてるなど、

そばづえ(傍杖)図思ひもよらぬ災難(サイナン)に逢(アフ)はされるコト、又た逢(アフ)ふコト㊁他人の爭(アラソヒ)の傍(ソバ)にいて、關係(カンケイ)なきに、打(ウタ)かれたり、又は損害(ソンガイ)を受けたりするコト、

そばつかへ(側仕)図そばつとめに同じ次の條を見られよ、

そばづとめ(側勤)図身分(ミブン)ある人の側近くに仕(ツカ)えて、種々の小用(コヨウ)を勤(ツトメ)むるコト、又は其の人、

そばふ(戯)(自動)からかふ、さわぎたはむる、卽ち猫がそばゆなど、

そばまんじう(蕎麥饅頭)図餅菓子(カシ)の一種、蕎麥粉を煉(ネリ)り山の芋(モノ)を卸して入れて、堅くこれたる物に、餡(アン)を包みて、蒸籠(セイロ)にて蒸したるもの、

そばむ(側)(他動)かたらせる㊁かたわきに向はしむる㊂うとんずる、

そばむ(側)(自動)かたよつてる㊁かたわきに向(ムカ)つてる㊂いやがりうらむ、きらふ、

そばめ(妾)図めかけのコト、

そばや(蕎麥屋)図蕎麥粉を製して種々の食品となして賣る家のコト、

そばやく(側役)図大名などのお傍(ソバ)にいて、小用(コヨウ)を勤(ツトメ)める役人のコトを云ふ、

そばゆ(蕎麥湯)図そば粉に砂糖(サトウ)又は煮汁(ニシル)を加えて、熱湯(ネユ)を注(ソソ)ぎて溶(トカ)きたる物、

そばる(添)(自動)一所になる㊁夫婦になる

そはん(粗飯)図粗末なる飯(メシ)卽ち馳走(チソウ)の少なきめし、

(そぞひ)

そふ(添)(自動)其の上へ更に加へる㊁附けかける㊂つき從(シタガ)ふ㊃寄り傳(ツタ)はる㊄連れ立つ㊅夫婦(フウフ)となる卽ち夫(オツト)に添ふ、

そふ(添)(他動)増し加へる、卽ち多くする㊁其れに從はせる、卽ち附屬(フゾク)させる㊂なぞらふ、よそふ、

そふ(粗布)図粗末な布(ヌノ)、

そふ(祖父)図父の父のコト、ぢゝ、ぢゝい

そび(祖鄙)図いやしくしてけびたるコト野鄙(ヤヒ)なコト、

そび(祖妣)図死したる祖母のコトを云ふ

そびく(誘)(他動)たましてさそふ。いざない出す。おびき出す、「トを云ふ

そびね(添寢)図二人共に一つ床に寢るコト

そびふし(添臥)図他人と一所に一つ床(ユカ)にてねるコトを云ふ、

そびふね(添舟)図親舟(オヤブネ)に備(ソナ)へ付けてある、小さき舟、卽ち道ひ舟のコト

そびるの(添物)図附屬してる物㊁つけ物卽ち景物(ケイブツ)、「いる

そびゆ(聳)(自動)高くきはだつて立(タツ)て

そびん(粗品)図粗末なる品、

(そぞふ)

そふ(添)(自動)其の上へ更に加へる㊁附けかける㊂つき從(シタガ)ふ㊃寄り傳(ツタ)はる㊄連れ立つ㊅夫婦(フウフ)となる卽ち夫(オツト)に添ふ、

そふ(添)(他動)増し加へる、卽ち多くする㊁其れに從はせる、卽ち附屬(フゾク)させる㊂なぞらふ、よそふ、

そふ(粗布)図粗末な布(ヌノ)、

そふ(祖父)図父の父のコト、ぢゝ、ぢゝい

そふ(地漏)図水の異名、
そふつ(粗物)図粗末なる品物、
そふく(粗服)図粗末なる衣服、
そふく(素服)図白もくの衣物のコト、即ち喪服、
そふり(素振)図其の容子、其の挙動「(サマヤ)のコト

（そぞへ）

そへ(酸)図又たそひとも云ふ、酒を醸す時に、日を定めて三度もとに加える飯と麹と水との稱、
そへ(添)図附け加へるコト㊁そふるコト㊂すけるコト㊃飯の菜㊄添髪の略、
そへいし(添石)図庭園などの飾に、石を置き、其の石に更に小石を、形容に添えたるコトを云ふ又は其れに用ゆる小石、
そへう(祖廟)図先祖代々のみたまやのコト、
そへうま(添馬)図現在に使用してる馬の疲たる時に乗りかゆる爲めに用ゆる代の馬、
そへうた(諷歌)図あてこすりに詠みたる和歌を云ふ、
そへがき(添書)図本文の終に更に書きかえるコト㊁手紙の終に書き加えるコト即ちおつてかき、なほなほがきのコト、
そへがみ(添髪)図入れ毛即ち女子の髪を結ふ時に、加へ入れる毛のコトを云ふ、
そへかん(添輪)図そへ狀に同じ、
そへき(素壁)図白き色に塗りたるかべのコト、白かべ、
そへぐるま(添車)図我れの供に乗らす時に、日を定めて三度もとに加へる車、
そへごと(添言)図つけくわえて云ふ言葉㊁餘計なる言葉、
そへことば(添詞)図其の人の爲めに傍より言葉を添て、其の人の爲めになるコトを述べる、を云ふ、
そへじゃう(添狀)図物に添へたり、人を遣はすに添たりして、送る手紙のコト、
そへち(添地)図在來の地面に、尚ほ地面を加へるコト、又た加へ添たる地面のコトを云ふ、
そへち(添乳)図子供を抱いてれて乳をのますコト、
そへて(添)副つけくはえての意、
そへてがみ(添手紙)図添狀に同じ、
そへつかひ(副使)図使者に附き添(ソヘ)せてやる人のコトを云ふ、
そへふで(添筆)図本文へ更に文句を書き加えるコトを云ふ、
そへぶみ(添文)図そへ狀そへ手紙のコト、
そへまし(添増)図加へ増す、
そへもの(添物)図或る物に更らに又た或る物を餘計に加えたるコト、㊁景品、
そへやく(添役)図本役の人の事務を助け行ふ役向の人、

（そそほ）

そほ(赭)図種々の物に塗りつける、赤き色の土のコト、
そほ(祖母)図我が母、若くば母の母のコトを云ふ、即ちばばあ、
そほう(素封)図大名の多きコト、大名も同様なりと云ふ意にて、即ち金持富豪のコト、
そほう(粗暴)図物事にあらあらしきコト㊁挙動のあらきコト、
そほうか(素封家)図金満家、
そほく(素朴)図かざり氣なく、親切に而も正直なコト、

そほん(粗笨)図おとつてるコト㊁つたなきコト㊂粗末なコト、
そほん(素本)図訓點のなき書物、

（そぞま）

そま(杣)図山林の木を伐り出す職の人、即ちきこり㊁材木を伐り出す山㊂山より伐出した木材、
そまい(租米)図年貢として差し出す米、即ち年貢米、
そまいた(杣板)図杣山より引き出したる木材を挽し板、
そまき(杣木)図杣山の木、杣山より伐り出したる木材、
そまくだし(杣下)図山より伐り出したる木材を、筏にあみて、川へ流し下すコトを云ふ、
そまつ(粗末)図そんざいなるコト、念を入れぬコト㊁出來榮のよろしからぬコト㊂品のあしきコト㊃あらきコト、
そまとり(杣取)図杣山の木を伐り取るコト、㊁杣山の木を伐り取るを業とせる人、「すコトを業とせる人
そまびと(杣人)図杣山の木を伐り出樹木を植え付けたる山、
そまやま(杣山)図木材を伐り取る爲め、
そまり(染)図物に色のそまつてるコトを云ふ、
そまる(染)他動其の色がしみ込む㊁轉じて我が氣風が他人のやうになる、
そまん(疎慢)図物事をゆるがせにするコト、物事にしまりのなきコトを云ふ、
そみつ(疎密)図あらきと細かきと、
そみつ(疎密)図こんでると、まばらなると、

（そぞむ）

そむ(初)他動はじむに同じ、
そむ(染)自動其の通りの色になる、其の色がうつりなる㊁其人の氣風がしみこむ㊂其の似をなす、
そむ(染)他動或る色をしみこませつける㊁なさんと思ふ色にする、
そむく(背)自動云ふコトを聽ぬ㊁敵對する、抵抗ふ㊂うしろの方へ向く、從がはぬ、

（そぞめ）

そめ(染)図物をそむるコト㊁そめ色のコトを云ふ、
そめいろ(染色)図染め出したる色合㊁染るべき色合のコト、
そめがた(染形)図染めんとする模樣の型を云ふ、
そめかた(染法)図色をそめ付ける、其の方法、仕方のコトを云ふ、
そめがみ(染紙)図種々の色合に染めたる紙、色紙のコト、
そめかは(染革)図色革のコト、革を種々の色に、染めたるもの、
そめがたかみ(染形紙)図種々の模樣を布に染め出す時に用ゆる、模樣の形を切り抜きて表はしたる紙のコトを云ふ、
そめき(染木)図煮き出して染物の材料となす汁を取る木、
そめぐ(騒)図そめくコト、
そめぐ(騒)自動人々が集まりて、騒ぎ浮れる、
そめこ(染粉)図染物に用ゆる粉、
そめしる(染汁)図染物の用に供する繪具を解きたる汁、
そめくさ(染種)図染めべき色の材料即ち染料のコト、

そめつき(染付)図染(ソメ)り工合(ヒアイ)、
そめつく(染付)他動色を染める、
そめぬき(染抜)図そめぬくコト、
そめぬく(染抜)他動其の物の模様(モヨウ)のみを、地色(ヂイロ)に染め出す、㊁此の上もなく十分に色よく染む、
そめば(染羽)図繪具(エノグ)にて、美しく染(ソメ)たる矢の羽根(ハネ)のコト、
そめば(染歯)図おはぐろにて染(ソメ)たる歯(ハ)、
そめはた(染機)図種々の色に染めたる糸(イト)を用ひて、織(オリ)たる物のコトを云ふ、「く染めると云ふ女の神
そめひめ(染姫)図秋に木(コ)の葉を紅(カウ)
そめもの(染物)図そめたるもの、又そめんとする品物、
そめや(染屋)図染物を爲す家、又は其の職人㊁紺屋(コウヤ)のコト、
そめやり(染様)図染め物のしかた、
そめる(染)他動染物をなす、
そめわく(染分)他動一つ物を幾色(イクイロ)にも分けて染(ソ)め上げる、
そめわけ(染分)図そめ分るコト、
そめん(粗面)図物の表面(ウハベ)の粗末なるコト、

(そぞも)

そも(抑)(接)物事の次第を説き出す時に其の初めに用ゆる語にて、此れは此のコトはと云ふ意味、
そもじ(其文字)罠昔時女子が、我より稍や身分のひくき人を呼ぶに用ひたりし語、卽ちそなた、そなさん、
そもそも(抑)(接)そもそも重ねたる語にてそもの意味を強く云ひ表はすコト㊁説す時に用ゆる言葉(コトバ)㊂或(ヒジ)ては、但しは、さなくばと云ふ意を、表(ヒヤウ)す、假令ば行(オコ)んと欲するか、卽ち抑も歸らんと欲するかの如し、
そもん(素門)図まづしき家柄、

(そぞや)

そや(初夜)図しやに同じ、卽ち日の暮れて間のなき時、よひの日㊁僧侶が初夜(ヤ)に爲す、つとめ、
そや(粗野)図云ふコト爲すコトの容子の兎角(トカ)に、あらあらしきコト、卽ち上品(ジヤウヒン)ならざる擧動(ハフルマイ)、

そや(征矢)図昔時の戰爭にて、戰場(ヤツバ)に於て用ひたる矢のコト、
そやう(素養)図かれてより學び置きたるコト。其の事に就きて知れるコト、
そやす(唆)図そそのかす、卽ちすすめてなさしむ、おだてる㊁さまざまに云ふて、ほめたてるコト、「ト
そやつ(其奴)罠他人をみくびつて云ふコ

(そぞよ)

そより(疏鬱)図物事をあきて勤(ツ)めぬコト、卽ちなまける㊁ぶしようもののコト、
そよき(戰)図そよぐコトを云ふ、
そよぐ(戰)自動そよそよと靜かに動く。そよそよと靜かに音(オト)のする例ば風がそよぐなど、
そよみ(素讀)図素讀(スヨミ)に同じ、

(そぞら)

そら(空)図天と地との間(アイ)、卽ち天空(テンクウ)宇宙(ウチウ)㊁其の折(ヲリ)其の時、假令(タトヘ)ば旅の空(ソラ)㊂形のなき事を云ふ、卽ち取り止めもなきコト、㊃あだなる

卽ちあてのなき、假令ばそら頼(ダノ)㊄いつわり、うそ㊅おちついて居らぬ、うはの〳〵してる、卽ち、うはの空(ソラ)など、
そら(空)(接頭)或る名詞に冠(カブ)らせて、いつはりなる、うそなる意味を表(ヒヤウ)はすに用ゆる語、卽ち空頼(ソラタノ)、空いびきなど、
そらあひ(空合)図天の容子、
そらい(疏鬱)図なまけおこたるコト㊁爲すべき事を十分にせぬ、
そらいろ(空色)図天空の色㊁染色の名あるの薄き色のコトを云ふ、
そらうそぶく(空嘯)図天空(ソラ)の方を眺(ナガ)めてうそぶく㊁とぼける、「ト
そらえひ(虚酔)図えつた狀(サマ)をするコト、卽ち其の物に依らずして、其の事を知つてるコト、
そらおそろし(空恐)罠なんとなくおそろしゝいやにこわし、「コト
そらく(殂落)図神去(カサ)ます卽ち崩御の
そらごと(虚言)図れもはもなきコト、卽ちうそ、
そらごころ(空心)図實意(イフヒ)なき心、卽ち不親切なる心㊁心のうかれて定(サダ)まらぬコトを云ふ、

そらさや(虚鞘)図内身(ウチミ)よりも、長き刀(カタナ)の鞘(サヤ)、
そらじに(虚死)図死んだ狀(サマ)をするコト、
そらす(反)他動そらさせる、そりかへるやふになす、
そらす(逸)他動れらひなちがえる㊁のがす㊂他人の心を損じさす、卽ち機嫌(キケン)をそんじる㊃よける假令ば道をそら「ト」をおこさすコト
そらたき(空炷)図香をたきてよき香氣(カホリ)をたゝせる、
そらたのみ(空頼)図あてにしてゐた事があてにならなんだコト、
そらつんぼ(空聾)図聞(キカ)えてゐながら、聞(キカ)えぬ狀(サマ)をする、病氣と云ふてなし、「ト
そらて(空手)図老人の、病氣と云ふてなきに、手や脚(アシ)の痛むコト、
そらどけ(空解)図結(ムス)びたる紐(ヒモ)の、自然にとけるコトを云ふ、
そらとぼけ(空惚)図知つてゐながら、知らざる狀をなすコト、
そらとぼける(空惚)他動知つてゐながら故意(トワザ)に知らぬ狀(サマ)をしてみせる㊁故意にとぼける、
そらね(虚名)図あだなのコト、
そらなき(虚泣)図悲(カナ)しくもなきに、故意(イタ)に泣(ナ)けてみせるコト、

そらに(空似)図兄弟でもなきに、其の容貌(カホカタチ)の能く似(ニ)るコトを云ふ、卽ち他人の空似など、
そらね(空寝)図地面の上へ、樹木(キノヒ)の根の現はれ出たるを云ふ、
そらね(空音)図鳴聲(ナキゴエ)をまねるコト㊁うそを云ふコト、
そらね(空寝)図れたる狀(サマ)をしてるコト、卽ちたぬきね、「コトを云ふ
そらねむり(空眠)図れた振(フリ)をしてる
そらはづかし(空羞)図なんとなく、はづかしゆふてならぬ、
そらぼけ(虚惚)図とぼけるコト、
そらほめ(虚譽)図ほめべき事柄(ヒトガラ)もなく、又たほめべき心もなきに、ついしようにほめるコト、
そらまけ(空負)図負(マケ)ざるに、負てみせるコトを云ふ、
そらまめ(蠶豆)図草の名、卽ち秋に種を下(オロ)し、春の末に成長して、稍(ヤヤ)に實(ミ)を結ぶもの、其の實(ミ)の若きを、はじき豆と云ひ、熟し切つたをソラ豆と云ふ、
そらまめめし(蠶豆飯)図そら豆の熟(ウレ)して若き時、卽ちはじき豆と、米と交(マ)ぜ、鹽を少し入れて炊(カシ)し飯のコ

ト。

「なする㊁聞き損(コツ)なふ

そらみみ(空耳)圖聞きながら、聞かぬ狀

そらみだる(空亂)自動天氣が變(ハ)り來る空(ゾラ)が惡くなる。

そらみだれ(空亂)圖醉(ヨ)もせぬに酒に醉(ヨ)ひたる狀を裝(ヨソホ)ふコト、

そらめ(空眼)圖上目(ウワ)をつかひて物を見るコト㊁みちがえるコト、

そらもやう(空模樣)圖空(ゾラ)の容子(ヨウス)即ち天氣の有樣㊁關係(カンケイ)してる物事のなりゆき。

「うそのはなし

そらものがたり(空物語)圖ありもせぬ話

そらゆく(空行)自動空を飛び行く。

そらよみ(空讀)圖書物の文章を見ずに、そらで讀(ヨ)むコト、

そらわらひ(空笑)圖おかしくもなき事をおかしと云ひて笑ふコト、

そらんず(諳)他動書物の文章をそらで覺(オボ)えて之を讀む。㊁凡て物事を空(ゾラ)にて覺えてゐる。

(そぞり)

そり(橇)圖北國地方にて、積雪(セツセツ)の上を行くに用ゆる、一種の乘物(モノ)のコトを云ふ。

そり(反)圖そるコト、即ち曲(ガ)つてるコト㊁そりかへつてる狀。

そり(剃刀)圖かみそりの略語。

そり(疎籬)圖粗末なる垣(ガキ)、あらく編る竹の垣。

そりかた(反形)圖凡てそり返りたる有樣(サマ)のコトを云ふ。

そりけ(剃毛)圖そり落(オ)したる髮の毛のコトを云ふ。

「云ふ

そりはし(反橋)圖太鼓橋(タイコバシ)のコトを云ふ。

そりみ(反身)圖身體(カラダ)を反り返(カヘ)らすコト、又はそりかへりし身體。

そりやく(粗略)圖粗末になす。

そりん(疎林)圖立ち木の少なき林のコト

(そぞる)

そる(剃)他動剃刀(カミソリ)の類を用ひて、毛髮(ハツ)を削(サ)り取る。

そる(反)自動そり返(カヘ)る、まがり返る、上の方へ向く。

そる(逸)他動それる、㊁れらひたる的(マト)の方へ行(カヨ)すして他の方へ行く、即ち矢がそれる㊂心の他へ移(ウツ)る、㊃のがれ行く。

(そぞれ)

それ(夫)(接)下の言葉(コトバ)を呼(ヨ)び起す意にて、文章の初めに用ゆる語なり、格別(カクベツ)の意なきも、ツラツラと云ふ心(ココロ)。

それ(其)(代)其の物を其の人を其の事をと云ふ代名詞、我れより少しく離(ハナ)れたる事物を指す。

それ(某)(代)それがしに同じ。

それい(粗糲)圖くろ米、玄米のコト、

それがし(某)(代)名の知らぬ物、又は人を呼ぶに用ゆる語、即ちなにがし㊁自分の事を云ふ代名詞。

それしや(其者)圖其の事柄(ガラ)に堪能(タンノウ)せる人のコトを云ふ㊁藝妓(ゲイギ)又は娼妓のコトを云ふ、即ち其者の果(ハテ)など。

「其れも

それぞれ(夫夫)副あれもかれも、此れも

それだま(逸丸)圖流丸(ナガレダマ)のコトにて、目的の傷處へ行かずに、それて他處(ホカ)へ行きたる丸(タマ)。

それや(逸矢)圖それて他(ホカ)の方へ行きたる矢、即ちながれ矢。

それん(素練)圖白色の絹の織物

それん(疎簾)圖編目(アミメ)のあらき、すだれのコト、

(そぞろ)

そろ(疎鹵)圖至つてそまつなる㊁いやしくしてぶざまなるコト、

そろば(揃鬘)圖草の名鬘の一種にて、大鬘(オホ)に同じ。

そろり(疎漏)圖おろかなコト、てぬかりゆだんのコト、

そろばん(算盤)圖勘定(カンヂヤウ)を爲すに用ゆる大切なる計算器(ケイサンキ)にて、和算の算法(サンポウ)を爲すに、無くては叶(ナ)はぬもの、即ち淺き橫長(ナガ)き箱の中に、橫に仕切(シキ)を置き、竪(タテ)に竹の削(ケヅ)りたる、丸串(マルグシ)を挿(サ)し、其の串の橫(ヨコ)仕切より上には、珠(タマ)を一個挿し、下には五個挿(サ)したる物にて、上の球なば、五つの位とし、下の球(タマ)なば、一つ宛(ヅツ)として算法を置く。

そろひ(揃)圖そろひたる物㊁そろふコト㊂二人以上の人が、同じ品(シナ)柄(ガラ)の衣服を用ひてるを云ふ即ち揃ひの衣物の略。

そろふ(揃)他動同じやうにする㊁ひとしかるべくなす㊂調(ヤハラ)え備はする、

そろふ(揃)自動同じ、等(ヒト)し、㊁悉(ハツ)くし、ととのひ備(ソナ)はれるてる、

(そぞん)

そん(村)圖地方の一部落の稱、即ちむら㊁轉じて田舍(カイ)のコト、

そん(邨)圖前條に同じ、

そん(寸)圖又たすんとも讀(ヨ)む、尺度(シヤクド)の名、一尺の十分の一のコト㊁はかる㊂總て物の長さの度合のコトを云ふ即ち寸法(スンポウ)、

そん(忖)圖はかる㊁推(オ)し考ふるコトを云ふ、㊂思案す、

そん(拵)圖漁具の名、柴(シバ)を束(ツカ)ねたるもの、魚を捕ふるに用ゆ㊁構(カマ)へのコト㊂轉じて垣(カキ)のコト、

そん(樽)圖こしらへる。かたどる、

そん(孫)圖子の子まごのコト㊁總て同一の物に生じたる物より、又た生じたるもののコトを云ふ語㊂たかぶらぬ、へりくだるコト、

そん(樽)圖酒を盛る木製の桶(オケ)の如きもの、即ちさかだる㊁たる、

そん(蹲)圖ひざまづく。うづくまるコト

㊁人の大勢、群(ムレ)がるコトを云ふ、

そん(傳)圖尊に通ず、うやまひたつとぶコト㊁つゝしむコト、

そん(尊)圖雜木の繁多しく、生ひ茂(シゲ)つてる狀を云ふ、

そん(存)圖其の場に在る、現在してるコト㊁其のまゝにて變(カハ)らずに在るコト㊂生き永(ナガ)らへてるコト㊃安(ヤスク)らかなるさま。

そん(巽)圖やはらかなるコト㊁すなほなるコト㊂いやしきコト㊃方角の名、東南の方、即ちたつみ㊄易(エキ)の卦(ケ)の名、

「コト㊁のがれなるコト

そん(遜)圖たかぶらぬコト。へりくだる

そん(殞)圖食事のコトを云ふ㊁特に茶漬(チヤヅケ)又は汁かけ飯(メシ)のコト㊂總て煮て味を付けたる食品の稱、

そん(尊)圖たつときコト、たつとき位(クラヰ)㊁うやまひ、つゝしむコト、

そん(蠢)圖草花の名、花あやめ、

そん(損)圖利益(リヤク)にならぬコト㊁財產(ザイサン)をへらすコト㊂そこなふコト㊃いたむコト㊄無すコト、

そん(鱒)圖魚の名ます、

そん(撙)圖押へつけるコト㊁其處に行くおもむく㊂折る、くぢく、

そん(尊)(接頭)或る名詞の上に冠(カブ)らせて、尊敬(ケイ)い意(イ)を表はすに用ゆる語、假令(タトヘ)ば尊君尊宅、

そん(鱒)図樽に通ず、酒だる。たるのコトを云ふ、

そんい(存意)図かんがへてゐるコト㊁心に思つてるコト

そんゐ(尊威)図他人の威光(イクワウ)を貴とびて云ふに用ゆる語、「コトを申す

そんゐ(遜位)図天子の御位をいづり給ふ

そんゐ(尊位)図たかきくらゐ、

そんいり(損友)図我の害となる、惡しき友達のコトを云ふ、

そんえい(尊影)図他人の肖像(ゾウ)などをたつとびて云ふ語、

そんえい(尊榮)図人の榮へるコトを云ふ㊁他人よりせわになりたるを、たつとびて云ふ語、

そんえき(損益)図損失と利益、

そんをう(尊媼)図他人の老母を貴びて云ふ語、「舍(イヘ)の婆さん

そんをう(村媼)図又た村媼とも書く、田

そんをう(村翁)図田舍のぢいさん㊁昔かたぎのぢいさん、

そんか(村歌)図在方(カタ)の歌、即ち田舍で歌ふいやしき歌、

そんか(村家)図村の家即ち田舍(イヘ)の家㊁百姓家のコトを云ふ、

そんか(尊下)図あなた、御前、

そんか(尊家)図他人の住居(スマ)を貴びて云ふ語、「(クラ)とびて云ふ語

そんがい(尊慨)図身分ある方の死骸を貴び申し上る稱(ヘナ)、即ち天皇皇后皇太子等の御稱(セウ)、

そんがい(損害)図利益を人の爲めに害(コウ)なはれるコト㊁自分の得べき利益を得能(ウタ)はざるコトを云ふ、

そんかん(尊翰)図手紙の敬語、

そんがん(尊顔)図手紙などに用ゆる語にて、お顔(カホ)と云ふコト、即ち御前樣と云ふ意㊁おかほ、

そんがいほけん(損害保險)図自然(シゼン)に受けたる損害をおぎのふ保險のコトを云ふ、即ち生命保險、火災保險などのコトを云ふ、

そんがいえらしよう(損害要償)図他人に損害をかけたる時に、其をおぎなひつぐのふコト、

そんき(村氣)図いなかのならはし、

そんきよ(村居)図田舍に住ゐ居るコト。田舍住居のコト、

そんきよ(譚踞)図うづくまる、ひざまづくコト㊁一種の手洗鉢(ハチハツ)の柄、

そんきん(損金)図そんをなしたる金子㊁失(シツ)なひたる金子、

そんきよう(尊恭)図たつとびうやまふコト

そんきよう(遜恭)図たかぶらぬコト㊁愼(シツ)み深きコト、

そんくん(尊君)図あなた、御前、

そんくわい(村會)図村會議員(ヤクイ)が村治(ジチ)を議するコト、

そんくわい(存外)図思ひ掛(ガ)けなく、思ひも寄(ヨ)ぬ、案外(アンガイ)、

そんくわい(損壞)図損(ソン)じ、こわすコトこわれるコトを云ふ、

そんくわいぎゐん(村會議員)図村民より選(エラ)ばれて、村會に於て村政を議する人のコト、

そんけい(村徑)図田舍の小道(コミチ)、

そんけい(尊兄)図他人の兄をたつとびて云ふに用ゆ語㊁あなた、おまへ樣と云ふ敬語(ケイ)、

そんけい(尊敬)図たつとびうやまうコト

そんけん(尊見)図他人の意見を、たつとびて云ふ語、

そんげん(尊嚴)図たつとくして、おごそかなるコトを云ふ、「りゆくコト

そんげん(損減)図へつて少なくなる、へ

そんこう(尊公)図あなた、御前、

そんざい(存在)図そのまゝにて在るコト

そんさう(村莊)図田舍(イヘ)の風(フウ)、

そんさう(村莊)図田舍に在る別莊(ベツサウ)のコト㊁單に別莊のコト、

そんさう(村葬)図其の村の貴用(ウヒ)にて營(イト)なむ葬式、

そんさつ(尊札)図他人の手紙を敬ひたつとびて云ふに用ゆる語、「語

そんし(尊紙)図他人の手紙を貴びて云ふ

そんじ(村寺)図田舍(イヘ)の寺、

そんし(譚鴟)図さと孝(モ)、㊁さつまいものコトを云ふ、「ふ語

そんし(尊師)図師匠(シヤウ)を敬(ウヤマ)ひて云

そんじ(遜辭)図へりくだる言葉、

そんじ(巽二)図風の神㊁單に風、

そんしう(尊酬)図謹で返事を差上げると云ふ意にて、多く手紙に用ゆる語なり

そんしつ(損失)図そんをする、財產(ザイ)を滅(ホロ)すコト、不利益

そんしや(村社)図田舍の神社、

そんしや(村舍)図田舍のいへ、

そんじや(尊者)図たつときもの、めうへの人、㊁大知識の僧侶のコト、

そんしゆ(樽酒)図たるに入れてある酒㊁單に酒のコトを云ふ、

そんしゆ(村酒)図田舍酒(ヰナカザケ)、田舍で賣(ウク)てる酒、

そんじゆ(村儒)図田舍の學者、

そんしよ(損所)図そんじそこれたる個所(カシ)のコトを云ふ、

そんしよ(尊書)図他人の手紙を、たつとびて神佛を信仰

そんしん(尊信)図たつとびて云ふ語、

そんしん(尊信)図他人の手紙をたつとび

そんじや(村醸)図田舍にて、造りたる酒、田舍酒のコト、

そんじや(尊撰)図天子に忠節(チウセツ)を盡し奉りて、夷狄(イテキ)を拂(ハラ)ふコト、即ち尊王攘夷(ジヤウイ)の略語、

そんしや(損傷)図きづつきそんずるコト、そんじきづつける、

そんじや(村嬢)図田舍むすめ、

そんじゆつ(存慮)図かあいさうに思ひて物をめぐむコト、

そんしよう(尊稱)図うやまひて云ふとなへりくだりたる有樣、

そんしよく(遜色)図おとれるありさま㊁思ひ居るコトを云ふ、

そんじより(存寄)図考(カンガ)へ居るコト、

そんす(存)(他動)そのまゝにて在るやうにして置く。其のまゝに在る、

そんず(存)図知つてるコト㊁おぼえてるコトを云ふ、

そんす(存)(自動)其處(ソコ)に在る㊁いつまでも、のこつてる、

そんせい(村稅)図村制に依りて、徵收(チヤウシウ)する村の戶別割(ワリアテ)、

そんせい(尊姓)図他人の苗字(ミヤウジ)をたつとびて云ふ語、

そんせい(村制)図法律語にて、村に敷かれたる自治制(ジチセイ)の規定、

そんぜう(存生)図生き長(ナガ)らへてゐるコトを云ふ、

そんせつ(樽節)図禮儀作法、

そんそ(尊祖)図酒だるとまないたと云ふコト㊁轉じて料理、

そんそう(尊崇)図たつとびうやまふコトあがめうやまふコト、

そんそう(村僧)図田舍の寺の坊さん㊁村寺の住職(ジユシヨク)、

そんそく(尊息)図他人の息子(ムスコ)のコトを敬ふて云ふ語、

そんぞく(村俗)図田舍の風俗、

そんぞく(尊屬)図父母以上の血統(チスジ)の關係ある人のコトを云ふ、即ち祖父母又は配偶者(ハイグウシヤ)の祖父母即ち伯父母のコト、

そんぞく(存續)圖其のまゝにて永(ガナ)くのこりつゞくコト、

そんたい(尊體)圖他人の身躰を貴(ウ)とびて云ふ語㊁轉じておまへ樣、あなたのコト、

そんだい(尊寮)圖自分よりやゝ身分のたかき人を呼ぶに用ゆ語、

そんだい(尊大)圖えらばるコト、たかぶるコト、高慢(カウマン)のコト、

そんだう(尊堂)圖他人の家を、たつとびうやまひて云ふ語、

そんだう(村道)圖村の大道(ドウイ)卽ち里道のコト。田舍道(ミチナカ)、

そんたく(尊宅)圖人の住宅(ジウタク)をたつとびて云ふ語、「測るコトを云ふ

そんたく(付度)圖他人の意中を推(オシ)し

そんたふ(尊答)圖つゝしんでお答(ヘコタヘ)いたすと云ふ意㊁他人に送る返事(ヘンジ)をたつとびて云ふ語、

そんたいじん(尊大人)圖人の父を殊に、たつとびて云ふ語、

そんち(尊地)圖御地(ナタ)貴地、

そんち(存知)圖知つてるコト、

そんちやう(尊長)圖我より目上のの人を敬(ウヤマ)ひて云ふ語、

そんちやう(村長)圖一村の村政をつかさどる長。村のをさ、

そんちより(尊軍)圖たつとびおもんずる大切になすコト、「のコトを云ふ

そんてん(村店)圖田舍のあきうど家(ヤ)

そんどう(村童)圖田舍の子供(モノ)、

そんとく(損得)圖損と得と、

そんねん(存念)圖ぞんじより、思ひ居るコト。志慮(シリヨ)考案、

そんばい(存賠)圖するたるコトと、のこるコト、㊁役に立ると立ぬもの、

そんひ(存否)圖あるコトとなきコトと㊁知ると知らざると、

そんび(尊卑)圖たつときと、いやしきとのコトを云ふ、

そんひ(村費)圖村の入用、

そんぶ(存撫)圖いたはりなぐさむ、

そんぶ(尊父)圖人の父を、たつとびて云ふ語、「㊁田舍人のコトを云ふ

そんぶ(村夫)圖村のおやぢ、田舍のぢゝ

そんぶ(村婦)圖村の女。いなか嬢、

ぞんぶん(存分)圖自分の思ふまゝ、欲するまゝ、心のまゝ、

そんぶうし(村夫子)圖村儒(ジユエキ)のコト、卽ち田舍學者、「ふ語

そんぼ(尊母)圖他人の母をたつとびて云

そんぼう(尊奉)圖たつとびていたゞくコト㊁謹んで承(ウケ)はるコト、

そんぼつ(存殁)圖生きながへてるコトと死するコトと云ふ、

そんぼふ(損亡)圖利益を失ふ㊁そんじて無くなるコト、

そんぼふ(存亡)圖其のまゝにて在ると、ほろびなくなると、

そんみん(村民)圖其の村に住てる人㊁田舍の人

そんめい(村著)圖ばん茶の一名、

そんめい(村名)圖村の名、

ぞんめい(存命)圖いきながらへてるコト生てるコト、

そんめい(尊命)圖目上の人の命令(メイレイ)、又は他人の云ひ來りし事をたつとびて云ふ語、「ト、訪問(ホウモン)

ぞんもん(存問)圖人の家をおとづれるコ

そんよう(尊容)圖他人の容子と云ふコトを敬ひて云ふ語、

そんらい(尊來)圖他人の來るコトを、たつとびて云ふ語、

そんらく(村落)圖むらざと、卽ちいなか、

そんらん(尊覽)圖他人の見るコトを、たつとびて云ふ語、

そんり(村里)圖むらざと、田舍、

そんり(村吏)圖村役場の吏員、

そんりつ(村立)圖村の費用にて、設立(ハツ)

(ヅ)するコト、又は其のもの、

そんりよ(尊慮)圖他人の考を、たつとびて云ふ語、

そんれう(損料)圖衣服又は、器具などを借(カリ)たる其の賃錢、「人

そんれうや(損料屋)圖損料貸を業とせる

そんれうがし(損料貸)圖賃錢を取つて、衣服器具(ウグ)を貸すコト、

そんれうふとん(損料蒲團)圖損料を支拂(シラヒ)て借りたる布團、

そんろ(村路)圖村の道路、卽ち田舍の道、

そんわう(尊王)圖帝王を大切に思ひ爲して、忠節を盡(ツク)すコトを云ふ語、

た　(ただ)

た(吒)圖美しき女子㊁かあいらしき少女㊂女の、顏のうるはしくあるコトを云ふ語。うつくし、

た(蓼)圖父親(チチオヤ)のコト、

た(粢)圖木の枝㊁木の枝の下の方に垂れ下がつてる狀(サマ)を云ひ表はす語㊂そよと動く、

た(墚)圖弓を射る的(マト)を備へつける處、卽ちあづちのコトを云ふ、

た(沱)圖大なる雨㊁涙のポロポロと流れ落る狀を云ひ表す語、

た(嬉)圖顏かたちの美しきコト㊁おこたるゝなまけるコト、

た(鴕)圖鳥の名、だてう、

た(妥)圖安らかなるコト。安きコト㊁おつるゝおさす、「る㊂なまける

た(墮)圖おつる。おとす㊁やぶる。こわれ

た(楕)圖小判の如き形の稱㊂枝の無き樹木のコトを云ふ、

た(繻)圖餅米(モチゴメ)のコト、

た(陀)圖物の斜(ハス)に爲つてる狀(サマ)を云ひ表はす語㊁平(タイラ)かならず。正(ヤウ)しからず、「す、あざむく

た(詫)圖自慢(ジマン)する。たかぶる㊁だま

た(唾)圖口より出る汁(シル)、卽ちつば㊁つばを吐き出すコト、

た(吒)圖ゆるやかに、しかる㊁腹(ハラ)立てゝ舌うちをなすコト、

た(墮)圖一種の遊戲、いんち打(ウチ)のコト「を云ふ

た(陀)圖舟や車などをひくコト、

た(陀)圖詫(タク)に同じ、

た(酡)圖酒に醉ふて顏(カホ)が赤くなる。酒に醉(ヱ)ふコト、

た(駄)圖馬に物を載(ノセ)て送るコト、又は貢(ミツギ)せたる其の荷物、

た(多)圖物の澤山(タクサン)なるコト、多(オホ)くあるコト、「㊁よそ事のコト

た(他)圖ほか、自分(ジブン)と異(ハナ)つてる人

た(田)圖田地(ヤチ)のコト稻(イネ)を植(ウエ)つける土地のコトを云ふ、「た云ふ

た(隋)圖頂(ヤイヤ)の尖(サキ)つてる山のコト

た(拿)圖つかむコト。引つ捕へるコトを云ふ、「ト㊁しなやかなるコト

た(儺)圖闌(ヒロ)の一種、おにやらいのコ

た(娜)圖女などのあだつぽきコト。しなやかなたをやかなる、

た(駄)(接頭)或る言葉(コトバ)の上に附け加えて凡て其の拙(ヤウ)なき事を云ひ現(アラ)はすに用ゆる語、假令(タトヘ)ば駄物(ダモノ)駄馬(ウマ)など、

た(駄)(接尾)荷物の重量を數(カ)ふるに用ゆる語にて、馬が脊(セ)に載(ノセ)て物を運び得る重量(オモ)より出たる語にて一駄は凡そ三十六貫乃至四十貫のコト

た(鮀)圖かちのコト、

た(駝)圖獸の名、らくだのコト尙ほ其の條を見られよ、

（ただあ）

たあい（他愛）圖我れの利益を打ち棄（ステ）て、他人の爲めに利益を圖（ハカ）り與（クミ）ふコトを云ふ、

たあす（打）（接尾）品物を數（カゾ）ふるに用ゆる語一打（ダース）は同じ種類の物十二個のコトを云ふ、

たあん（安安）圖最も安らかなるコト、

（ただい）

たい（奏）圖大なり㊁安らかなり㊂ゆるやかなり㊃ゆたかなり㊄たかぶる、おごる㊅ゆつたりさかまへてる狀を云ひ表はす語、

たい（岱）圖大なる山のコト、

たい（跆）圖ふむコト。歩むコト、

たい（紿）圖だます。いつはる、

たい（苔）圖草の名、こけ、

たい（鮐）圖魚の名、ふぐ、

たい（駘）圖にぶき馬㊁馬のくつわをはづすコト㊂はなす。はづす㊃おろかなる。にぶき㊄春の、のどかなる陽氣のさまを云ふ、

たい（怠）圖おこたる。なまける㊁なほざりにする。あなどる、

たい（逮）圖およぼすコト。及ぶ、

たい（殆）圖危（アヤ）うき㊁害す。やぶる㊂つかれる㊃ほとんど、

たい（黛）圖まゆずみ。墨にてかきたる眉（マユ）㊁青き色合を云ふ、

たい（袋）圖ふくろのコト、

たい（貸）圖かす㊁與（クミ）へる㊂又たかりるの意をも表はす語、

たい（玳）圖たいまい（玳瑁）に同じ、

たい（待）圖まつコト。まつてるコト㊁とりなす。あしらふコト、

たい（退）圖しりぞくコト㊁おとるコト㊂あしくなるコト㊃やさしく、やわらぐ狀を云ひ表す語、「ほげゆくコト」

たい（腿）圖染めたる色の薄くなる、即ち風（フウ）はやて㊄頭（カシラ）のはげたるコトを云ふ、

たい（腿）圖股（モモ）及び脛（ハギ）の稱、

たい（汰）圖あら波。大波（オホナミ）㊁洗（アラ）ふコト。よなぐ、

たい（飲）圖刑具の名、足の自由をきかぬやうにする具、あしかせ、

たい（鉢）圖體の字の俗字、

たい（戴）圖いただく。受ける㊁頭（カシラ）に帽（ボウ）や冠（カムリ）などをのせるコト。のせる。かぶる、

たい（汰）圖たかぶる。おごる。えらばる㊁洗（アラ）ふ㊂水などの流れすぐる狀（サマ）を云ふ語、

たい（帶）圖おび。總て帶（オビ）のやうになせし物の稱㊁まとふ。めぐらす㊂身體（カラダ）につける、おび、

たい（帶）圖草木の根㊁花の下に在る物即ちうてな㊂へたのコト、

たい（滯）圖女子の病氣の名、白ち赤ちのコト㊁一種の臘物の名、

たい（堆）圖小だかくなつてる處の稱㊁つもりあがる。うづだかくなつてるコト。つむ。つもる、「コトを云ふ」

たい（碓）圖足にてふむ臼（ウス）。からうすのコト。

たい（頽）圖おとがひのコト㊁くづれる。すたれる。こわれる㊂おとろえる㊃大風（オホカゼ）はやて㊄頭（カシラ）のはげたるコトを云ふ、

たい（隤）圖攻めて破つて降さす㊁やぶれて降る㊂頽（クヅ）の㊁及び㊂に同じ、

たい（逮）圖及ぶ。及ぼす㊁追ひかけ行くコトを云ふ、

たい（餒）圖食なくして、腹の空（ウ）るコト即ちうゆるコトを云ふ、

たい（魑）圖獸の名、赤き毛色の熊（クマ）のコト、即ちしやぐま、

たい（耐）圖こらへる。がまんする。忍（シノ）ぶコト㊁髯（ヒゲ）を剃（ソリ）り落すコトを云ふ、

たい（慾）圖うらむコト。甚だしく惡（ニク）むコト。「コトを云ふ」

たい（胎）圖婦人の體内の子を、やどすところを云ふ㊁體内に在る兒（コ）、即ちはらごもり㊂轉じて物事のきざし、おこり、はじめのコト、

たい（體）圖からだ（身體）㊁物のありさま物體㊂すがた、即ち其人又は其物のみの、かたち㊃其人又は其物の實質（カタヲ）即ち體質（シツ）、

たい（態）圖物のすがた㊁ありさま、

たい（乃）圖我（ワ）れ㊁そなた㊂かへつて㊃すなはち㊄そこで㊅其だからなどと云ふ意を表はす語、

たい（迺）圖前條に同じ、そこですなはち㊁我れ㊂そなたなど、

たい（内）圖なかゝうち㊁はいる（入）、

たい（對）圖つひ、そろひ㊁こたへ㊂相手㊃つれあひ（夫婦）、

たい（大）圖おほゐなるコト㊁ふさきコト㊂ひろきコト㊃たくましきコト㊄大の月の略、即ち太陽暦にて三十一日ある月のコト㊅刀（カタナ）の長（ナガ）き物を云ふ、（大刀）など、

たい（隊）圖戰入（コミイ）かの兵士を以て組（クミ）み立てられる組（クミ）㊁數多（オホク）くの物を竝（ナラ）べたてたるもの㊂人又は物の集（アツ）まつて、一組となりしもの、稱

たい（題）圖文章詩歌などの主意（イシ）を、一言（コトヒト）にて云ひ表（アラ）はすべく爲めに、初めに示す語、㊁書物の名を示す語（表題）㊂しるし㊃試驗（ヘシケン）すべき事の條目即ち問題、

たい（代）圖物の直打（チウダ）、あたひ㊁世のコト㊂他にかはりて事を辨（ワキ）する人のコト、（代理代人）など、

たい（臺）圖うてな、たかどの㊁物を載せる物の總稱㊂政府（ウセイ）即ち臺閣（ダイカク）㊃城の門㊄小高（コダカ）くして平（タヒラ）に爲つてる土地、

たい（第）（接頭）一二三等の數詞に冠（カブ）らせて、物の順序を示す語にて、即ち第一第二の如し、

たい（朶頤）圖物を食ふとせる狀㊁食ひたく思ふ狀（サマ）を云ふ語、

たい（他意）圖他（ホカ）に思ふコト㊁二心（フタコヽロ）のコトを云ふ、

たいい（大醫）圖醫學及び醫術に堪能（タンノウ）せる醫師のコトを云ふ、

たいい（胎衣）圖胎盤（ハイバン）即ちエナのコト俗に云ふあとさんのコト、

たいゐ（大尉）圖武官の官名、中尉の上にて少佐の下に位する官位、

たいい（大意）圖大たいの意義（イギ）、あらまし意味（イミ）のコト、

たいい（大異）圖大なる相違（サウイ）、

たいいく（體育）圖身體の健康に發育（ハツイク）するコトの仕方（シカタ）、「き石

だいいし（臺石）圖凡て基礎（ドダイ）となるべ

たいいん（退引）圖後（アト）へ引く㊁總て身をしりぞくコトを云ふ、

だいゐん（退院）圖入院してゐた病人が、其の病院を出るコト、

たいいん（退隱）圖勤（ツトメ）を止めて閑（ヒマ）な身體（カラダ）となるコト㊁年老ひて隱居し、餘世を樂（タノシ）に送（オクル）るコトを云ふ、

たいいん（太陰）圖月球（ツキ）のコト、

たいいんれき（太陰暦）圖俗に云ふ舊暦のコトにて、月球が地球を一周する時間を一月（ヒトツキ）を定めたる暦法にて、十二ケ月を一年とす、なれど一年の日數は

凡そ三百十六日と定めたり、故に四年目に一ケ所の閏(ウルウ)を生ず、

たいう(大雨)図おほあめ、

たいう(大宇)図天(テン)のコト、

たいう(大猷)図深く考へたるはかりごとのコトゥ大計(ケイ)、

たいう(大優)図おちついてる㊁心のゆつたりしてゐるコト、

たいうん(頽運)図衰(スイ)ろえ初めたる運氣(ウンキ)のコトを云ふ、

たいうん(泰運)図世の中が安穏(アンオン)に治(オサ)まつてる有様(アリサマ)、

だいうん(大運)図大なる運氣、

だいえい(退嬰)図戦ひ敗(ヤブ)れて後へ退りぞくコト(背進)、

だいえい(題詠)図題(ダイ)を出して歌をよむコト、

たいえい(大瀛)図大海のコト、

たいえう(大要)図あらかた、あらまし、ひつくるめてのコト、

だいえつ(大悅)図大なるよろこび、

たいえん(頽垣)図くづれ出したる垣根(カキネ)。朽(クチ)つてる垣根、

たいえん(大圓)図大なる圓形を云ふ㊁轉じて地球(チキウ)の一名、

たいえん(滯淹)図とゞこうつてるコト。つかえてるコト、

たいおん(大恩)図大なる恩義、

だいおん(大音)図大なる音聲、

たいおん(體温)図人の身躰に在る温度(オンド)のコトを云ふ、

たいおんき(體温器)図身躰の温度を測る器具、卽ち寒暖計、

たいおんせい(大音聲)図はり上げたる大なる聲を云ふ、

たいが(大厦)図大なる家、

たいが(大駕)図天皇の召させ給ふ乘物(ノリモノ)のコトを云ふ、

たいが(餓餓)図腹の空(スカ)てるコト。ひもじきコトを云ふ、

たいか(大河)図大なる河(カワ)、

たいか(大家)図タイケ(大家)に同じ、

だいか(代價)図物のあたひ直段、

たいがい(大海)図そとうみ、

たいがい(大害)図大いなる災害、

たいがい(大概)副あらかた、おほよそ。あらまし。たいてい、

たいかい(意懈)図おこたりなまけるコト、骨をおらぬコト、

たいかう(大孝)図すぐれたる孝行、

たいかう(退耕)図仕官(シカン)してた者が、官を辭(ジ)して、農夫(ノウフ)となれるコトを云ふ語、

たいかう(大行)図大仕掛(オホガカリ)の仕事㊁重大なる事業(ワザ)、㊂天子の崩御ありてまだ御いみなを奉らざる間の稱、卽ち大行天皇、

「すさりするコト

たいかう(退行)図あとへ行く、卽ちあとへ

たいかう(大較)副あらましの。あらかた、卽ち大略(タイリヤク)のコト、

たいかう(大綱)図大なるつな㊁どだいのしめくくり、

たいかう(大港)図大なる港(ミナト)、

たいかう(退校)図退學に同じ、

たいかう(大煩)図大砲の一名、

たいかう(太閤)図關白(カンパク)職に在る子が、前の關白職であつた、其の父(チチ)を呼ぶ語、又た前の關白職を呼ぶに用ゆる語、

「た一般に云ふ語

たいかう(太閤)図豐臣秀吉(トヨトミヒデヨシ)のコト、

たいかう(對抗)図互ひにはり合ふコト。互ひに向ひ合つて相手となる、

たいかう(帶甲)図よろひをつけるコト、又はつけたるコトを云ふ、

だいかう(代香)図其の人の代りに、燒香(シヨウコウ)するコト、

たいがう(對壕)図敵が城に迫(セマ)るを防ぐべく、及び敵の射擊(ウチウチ)を避(サケ)るやうに、築(キズ)かれたる防禦(ボウギヨ)工事、

だいかう(題號)図書物や雜誌(ザツシ)などの表題のコトを云ふ、

「コトを云ふ

たいかく(體格)図身躰のくみ立の容子の

だいかく(題額)図寺院などの門、又は入口の處などに、掲(カカ)げられてある額面の稱、

「ト、學校をさがるコト

たいがく(退學)図其の學校を止(ヤメ)るコト

だいかく(臺閣)図たかどの㊁朝廷のコト㊂内閣のコトを云ふ、

だいがく(大學)図此上なき高尊の學校(ガクカウ)のコト㊁四書の一、書物の名、

だいかつ(大喝)図どなり(怒鳴)つけるコト。叱りつけるコトを云ふ、

だいかん(大喊)図大聲を揚げて叫(サケ)ぶコト㊁多人數が一度に揚げるときの聲のコトを云ふ、

だいかん(大寒)図甚しく寒きコト㊁一月の二十日前後の頃を云ふ、

たいかん(太簡)図甚だしくけんやくするコトを云ふ、

たいかん(大艦)図大なる軍艦、

だいかん(大旱)図甚しきひでり、

だいかん(大奸)図大惡徒心根(コヽロネ)の殊に惡しき者の稱、

たいかん(對顏)図面會に同じ、

たいかん(耐寒)図寒氣にたゆるコト寒さにまけぬコト、

「岸のコトを云ふ

たいがん(對岸)図川を隔(ヘダ)てた向ふの

たいがん(古顏)図御顏(オンカホ)、尊顏(ゾンガン)のコト、卽ち顏の敬語、

だいかぐら(太神樂)図囃(ハヤ)したてて獅子舞(シシマイ)などを演(ヒ)て歩くもの、惡魔を拂ふ爲めなりと云ふ、

たいかりり(大行李)図軍隊の語、軍隊が宿營(シユクエイ)するに必要(ヒツヨウ)なる一切(サイ)の器具及び食品のコト、

「を云ふ

だいがくかう(大學校)図帝國大學のコト

だいがくしや(大學者)図學者中の學者。秀(ヒイ)でたる學者、

だいがくせい(大學生)図帝國大學校の生徒のコトを云ふ、

だいがくりん(大學林)図僧侶(ソウリヨ)の佛教を修業する、最上高等の學校のコトを云ふ、

だいがくゐん(大學院)図大學を卒業したる者が、更に其の修得(シユウトク)する學術の奥(オク)の手を磨(ミガ)くべく爲めに、修業する所にて、帝國大學内に在り、

たいがかうらう(大厦高樓)図大なる家と高き家とのコトを云ふ、卽ち立派(リツパ)なる家と云ふコト、

たいかくげんさ(體格檢査)図身躰のくみたてが、強(ツヨ)さか、弱(ヨワ)さかを檢(シラ)べるコト、

たいかうりんどう(對抗運動)図軍隊演習の一種にて、軍隊を東西又は南北に分ち、實戰的演習をなさしむるコトを云ふ、

たいがくそうちやう(大學總長)図帝國大學の最長官、卽ち大學校の校長、

たいき(大氣)図空氣のコト㊁ほがらかなる精神の氣、

たいき(大逵)図大なる道(ミチ)。大通りのコト

たいき(大器)図大なる器物㊁秀(ヒイ)でたる智能(チノウ)卽ち大した器量(キリヨウ)のコトを云ふ、

たいき(大器)図嫁(ヨメ)の離縁(リエン)されて里方(サト)へ歸るコトを云ふ、

たいき(大逵)図道巾(ハバ)の廣さ道路卽ち本街道のコト、

たいき(大旗)図旗(ハタ)の大なる物、

たいき(大義)図殊に重大なる人道の義理㊁國民が天皇及び國家に對して盡す公(オホヤケ)なる義理、

たいき(大儀)図重大なる儀式(ギシキ)㊁俗語にて骨(ホネ)の折れたるコトを云ふに用ゆる語、

「ゆる旗(ハタ)のコト

たいき(隊旗)図其の隊の印(シルシ)として用

たいき(棺木)図物の棺になるべき木㊁接木(ツギキ)の棺となる木。

だいき(砧木)図臺木の㊁に同じ。

だいぎ(代議)図代議士(ダイギシ)が國會に於て人民を代表して、政事を議するコトを云ふ。

だいぎし(代議士)図帝國議會に出て意見を述ぶる人即ち國會議員のコトを云ふ。

たいきう(耐久)図久しきにたゆ。もちこたゆるコトを云ふ。

だいきう(大急)図おほいそぎ。

だいきよ(大擧)図大軍を起して敵に向ふ㊁多人數一致(イチヂ)して事を企(クワダ)て起すコト㊂大なるしごとのコトを云ふ。

だいきよ(大集)図大なる溝(ミゾ)。

だいきよ(大虚)図大空、あをそら。

たいきよ(退居)図居所(キヨド)を離(ハナ)れて他へ行く㊁隱居(イインキヨ)するコトを云ふ。

たいきよ(退去)図立ち去る、引き拂ふ。

たいきん(大金)図澤山なる金子。

たいきん(大禁)図法律にて嚴重(ゲンヂウ)に禁じあるコト、又は其の事。

だいきん(代金)図賣りたる品物の價(アタヒ)。買ふたる品物の直段(ネダン)。

だいきん(代勤)図其の人に代つて、其の人の勤めをするコト。

たいきゆう(大弓)図通常の弓、揚弓半弓と區別する爲めの稱。

だいきゆう(大往)図大なるとがめ。

たいきやう(滯京)図東京に逗留してゐるコトを云ふ語。

たいきやう(滯鄕)図故鄕(コキヤウ)に逗留して

たいきやく(對客)図來客(ライキヤク)に應接(オウセツ)するコトを云ふ。

たいきやく(退却)図後へさがる㊁敗けて逃(ニ)るコト。

だいきやく(大逆)図此の上もなき重大なる罪惡、即ち君父を弑(シイ)さんとするの「トを申す語

たいきよく(大極)図天子の御位(ミクラヰ)のコト。

たいきよく(大局)図天下の大勢(ヤウイ)と云ふ意味。

たいきよく(對局)図碁盤(ゴバン)に向ひ合ふコト即ち碁を圍(コ)むコト㊁或る事件に對して働(ハタ)らかんとするコトを云ひ表す語。

だいきせいたい(代議政體)図國民に政事の可否を議する權利を與(ア)へて、代議士を選出せしめて、政治を論議さするの政治の仕方。

たいきめいぶん(大義名分)図人の確守すべき節義(セツギ)のコト。

たいきよくでん(大極殿)図天子の政事を聽(キ)かせたまひたる、御殿(ゴテン)の名。

だいきやくぶだう(大逆無道)図道に反(ソム)きたる此の上もなき大惡事のコトを云ふ。

「て叫喚地獄のコト

だいきようくわん(大叫喚)図佛法の名に

だいきんひきかえ(代金引換)図品物と其の代金とを引き換(カヘ)る、即ち現金實買のコト。

たいく(體軀)図からだのコト。

だいく(大工)図家などを建つる職人(シヨクニン)の總稱。

たいくう(大空)図大そら、天。

たいぐう(待遇)図とりなすコトあしらふコトを云ふ。

たいくつ(退屈)図あきるコト、いやになるコト㊁徒然(ツレヅレ)のコト。

たいくわ(耐火)図火に逢へども損ぜぬコト、石煉瓦(レンガ)などの。

たいくわ(滯貨)図返り切れずして、つかえてる荷物㊁賣れ殘(コ)りの品物のコトを云ふ。

たいくわん(大觀)図大きく見る、遍(アマ)く見る。

だいくん(大君)図おほきみ。

だいくん(大勳)図大なるてがら。

たいぐん(大軍)図多くの兵士より成り立

つてる軍隊のコト。

たいくわ(大禍)図大なるわざはひ㊁大なる災難(サイナン)のコト。

たいくわ(大過)図大なるあやまち。

たいくわ(大火)図大火事。

たいくわ(胎禍)図禍(ワザハヒ)を受くる原因をつくるコトを云ふ。

「を引き揚る

たいぐん(退軍)図軍を退(ヒ)くこと、軍隊

たいくん(帶勳)図勳章(クンシヤウ)を胸にかざるコト㊁勳章を授(サヅ)かつてるコト。

たいくわい(台塊)図三公の位のコト。

たいくわい(頹壞)図くづれこわれる。

たいぐわい(對外)図外(ソト)に對すと云ふ意にて、外國に對するコト。

だいくわい(大會)図多數の人が會合する會を云ふ。

だいくわい(大塊)図大なるかたまり㊁大なる土のかたまり㊂大地のコト。

だいぐうじ(大宮司)図宮(グウ)と云ふ稱號のある神社の神主(カンヌシ)の稱、即ちオホミヤツカサのコト、伊勢大神宮、熱田大神宮、宇佐八幡宮の神主(カンヌシ)などのコトを云ふ。

「(ガ)ひゴトのコト

だいぐわん(大願)図大なる願望(グワウ)、願

だいくわん(壽觀)図物を見るだいのもの みだいのコト。

だいくわん(代官)図德川時代の官名にて一小地方の取締(トリシマリ)をする官吏㊁或る官吏の代理を務(ツト)むる役人のコトを云ふ語。

たいくわん(退官)図官途(クワント)より退ぞくコト。官職をやめる(辭職)、

たいくわん(大患)図大病に同じ㊁大なる

「のもの、稱

うれひ事を云ふ。

だいくんる(大勳位)図我國の勳位の最上

だいくわいじ(大悔事)図大ゐにあやしむべき事件のコト。

たいくわんしきん(退官賜金)図規則を以て定められてある年間だけ勤めて、官を辭(ヤ)する時に、官より賜はる一時金のコト。

たいくわうたいひ(太皇太妃)図天子の祖父にあたらせたまふ、天皇の妃(キサキ)の御事を申す。

たいくわうたいとう(太皇太后)図天子の御祖父にあたらせらるる天皇の皇后の御事を申す。

だいくんるきくくわだいじゆしやう(大勳位菊花大綬章)図我が國最上の勳章にて、普通には皇族方に賜はる物なるも、臣民が國家に特別の大偉勳(ダイヰクン)を立てたる時には、其の大功を賞揚すべく、特に賜はることあり。

たいけ(帶下)図女子の產道(サンダウ)より出るこしけのコト。

たいけ(大家)図富豪(フガウ)の住居㊁身分高き人の家のコトを云ふ。

たいけい(大慶)図甚しく芽出度(メデタ)殊に祝ひ喜ぶコト。

たいけい(大計)図大なる計略。

たいけい(苦徑)図苦(クル)の生じてる細き路㊁山中の小みち。

だいけう(大凶)図此の上もなき凶(ワル)き事㊁大なる罪惡(ツミアク)㊂大惡人のコトを云ふ。

たいけつ(對決)図對審に同じ。

たいげふ(大業)図大仕掛(オホシカケ)の仕事、大事業(ダイジギヤウ)。

たいげん(體言)図文法上の語にて、其の言葉(ヒトバ)の終(オワリ)の音(オト)の、變化せざる語を云ふ、即ち名詞及び代名詞の類。

たいけん(大權)図天皇の、國及び臣民を統(スベ)させ給ふ御權利。

たいけん(大劍)図大なるつるぎ。

だいげん(大言)図ほこりて、物を大きく云ふコト。高慢なる言葉。

だいげん(題言)図題辭(ダイジ)。

たいげん(胎源)図其の物事の生じたる最

初(シヨリ)の原因(イヤイン)の稱、

たいけん(怠倦)図おこたりうむ、物事にあきるコトを云ふ、

たいけん(帶劍)図劍(ケン)を下げるコト、又は劍を下げてるコト、

だいけうゐん(大教院)図本願(ガンジン)寺内に在る、布教(ヨウキヨウ)の事務(ムム)を取り扱ふ處のコトを云ふ語、

だいげんすゐ(大元帥)図國家の兵馬の權を、統率(トウソツ)する元首(ゲンシユ)の事を申す、取も直さず、天皇陛下の御事を申し上げる㊁海陸の總軍を統率する總大將㊂天竺(テンヂク)に在る神の名、

だいげんにん(代言人)図他人に代(カハ)りて民刑事(ミンケイジ)に關する訴訟(ソセウ)の事務を取り扱(アツカ)ふを業(ゲヨウ)とする人。

たいこ(太鼓)図樂器の一種、木をえぐり取りて胴(トウ)とし、其の兩面に皮を張りたるもの種類多し、

だいこ(大實)図盛んに取引せる大商人㊁大商家のコトを云ふ、

たいこ(大戸)図金持(カネモチ)の家、

たいこ(大故)図人の死するコトを云ふ㊁大なる出來事(シユツライ)、

たいこ(大呼)図大聲を上げて呼び立てるコトを云ふ㊁「コトを云ふ

たいご(大語)図大聲(ゴエ)を揚げて物語すコトを云ふ、

たいこ(太古)図大むかしのコト、

たいこ(太姑)図夫(オツト)の妹(イモウト)即ちこしゆふとめの敬語、

だいこ(隊後)図一隊のうしろ、

たいこ(對語)図差し向ひになつて話をする、即ち對話(ワイ)、

たいこ(隊伍)図一隊中の組(クミ)、

たいこ(退後)図退歩に同じ、

だいこ(醍醐)図滋養飲料の一種にて、牛乳の成分のみを取りて製したるもの、味甘く殊に美味(ビミ)なるもの、藥用となすもの、

たいこう(大功)図大なるてがら、大なる「いさほし

たいこう(太后)図皇太皇后(コウタイゴウ)又は皇太后(イコウゴウ)の御事を申す、

たいこう(退紅)図染色(イロ)の名にて淡紅色(ハツスモイロ)のコト㊁古來傘(カサ)や沓(クツ)を

だいこう(代講)図講義(コウギ)すべき人に代りて講義をなすコト、

だいこう(乃公)図我の事を重(オモ)く云ふ語、わし、拙者(セツシヤ)、私、

だいこく(大黑)図大黑天の略㊁僧侶(ソリヨ)の妻女(ツマ)のコトを云ふ、

たいこく(大國)図領分(ヲヤ)地の廣き國、大なる國のコト、「のコトを云ふ

だいごく(大獄)図重大なる裁判(ハンイ)事件

だいこん(大婚)図天皇の御結婚

だいこん(大根)図野菜(ヤサイ)の名葉は蕪(カブ)に似たれども、荒(ア)くして硬(カタ)く、其の根は白くして太く長し、根は欠くべからざる滋養物なり、其の種類多し、

たいこせき(太湖石)図支那に產する石、其の狀(サマ)恰も斷崖(ダンガイ)の如き觀(カン)あり、其の大なる物は庭園の飾り石として用ゆ、小なるは床の置物(オキモノ)として貴(タフト)ばれる、

たいこばし(太鼓橋)図太鼓の胴の如く圓く弓形(ユミナリ)に架せられたる橋、即ち反橋(ソリハシ)のコト、

たいこばら(太鼓腹)図膨(フク)れて前へ張り出てる大なる腹、

たいこもち(太鼓持)図酒宴(ムカヒ)の席に侍(ハベ)つて、機嫌(キゲン)を取り、酒興(シユキヨウ)を助くる男の藝人、即ち幇間(ホウカン)のコトを云ふ、「と莖(ヤ)のコト

だいこんね(大根菜)図大根(コン)の若き葉

たいこいしや(幇間醫者)図醫術(ヤツ)は其處(ヤツ)のけで、半分たいこもちのやうなコトせる醫者、

たいこうしゆ(大公主)図天子のおば君に

あたらせたまふお方を申すに用ゆる語

だいこくてん(大黑天)図天竺(チクテン)の神の名にて、七福神の一なる、福を與へ運を開き給ふ神、

たいこびよう(太鼓鋲)図飾(カザ)り釘の一種にて、針の頭に笠(カサ)の如き形をなせる圓き物を附けたるもの、多く眞鍮(シンチウ)にて製せらる、

だいこんづけ(大根漬)図澤庵漬(タクアンヅケ)の「コト

だいこんめし(大根飯)図大根を細かく切り油揚(アブラアゲ)を入れ、味を付て煮(ニ)きて混(マ)たる飯、

だいこんおろし(大根下)図大根をわさび卸(オロ)にて、擂(ス)り下したる物㊁わさびおろしのコト、

だいこくばしら(大黑柱)図家の中央に建てられある、太き柱㊁凡て物事の基礎(キソ)となる人、

たいこてつてい(大悟徹底)図大ゐに悟(サト)りを開きて、心に少しの煩惱(ボンノウ)をも懷(ダイ)かざるコト、即ち大原理を得心せるを云ふ、「むかひに坐す

たいざ(對坐)図向ひ合つて坐(ス)る、さし

だいざ(奉座)図物を飾(カザ)り置く臺、置物(モチモノ)の臺(ダイ)、

たいさ(大佐)図武官の官名、少將の下中佐の上に在る官位、

たいさい(太才)図智慧(チエ)の多きコト、

だいさい(大祭)図おほまつり、本まつりのコトを云ふ、例祭に對しての稱、

たいさい(太歲)図本星の一名㊁陰陽(オンヤウ)家の云ふ八將軍(ハチシヤウ)の一にて天の神の名なりと云ふ、「(ヤウ)のコト

だいだい(大罪)図重き罪、輕からぬ罪科

だいさい(大災)図大なるわざわい、

たいさい(體裁)図其の有樣(アリサマ)其形の樣(サマ)、テイサイ、

たいざい(滯在)図とうりゆうする㊁其處に止(ト)まつてゐる、

たいさう(太相)図殊に多し、すぐれて多し、少きコトを大きく云ふ、

たいさう(退走)図逃け走るコト、

たいさう(大創)図大きな疵(キズ)、

たいさう(體操)図生理學上の規則に適ふ躰育(イクイン)の一科、

だいざう(胎臟)図躰内に子のやどり居るコトを云ふ、佛教の語、

たいさく(大作)図長き文章(ブンシヤウ)㊁力を盡して作り上げたる詩歌文章のコトを云ふ、

たいさく(大策)図大なるはかりごと。大なるけいくわく、

たいさく(對策)図人を召し抱へんとする時に、其の人の學識(ガクシキ)を試(コヽロミ)みんが爲めに、問題を出し其の答を作らすコトを云ふ、

だいさく(題作)図設(カ)けられたる題に依つて、詩歌文章等を作(カ)るコトを云ふ、「コト又は作りし物

だいさく(代作)図人に代つて詩文を作る

だいさん(大山)図大きく高き山、

たいさん(退散)図思ひ思ひに、立ち退(ノ)くコト、「參詣(マイ)するコト

だいさん(代參)図其人の代りに、神佛へ

だいさいし(大才子)図大なる智者、

だいさいじつ(大祭日)図國家が祭日として定められて、其々の式を宮中にて行はせらる日、

だいさちけい(大早計)図此の上もなきかならばづみのコト㊁深く考えずして物事をなすコト、

だいさんせい(大贊成)図非常に贊成する志を合して大に扶(タス)く、

たいし(大旨)図あらかたの意義、

だいし(大師)図德高く學識(ガクシキ)の優(スグ)れてある僧侶へ、朝廷(チヤウテイ)より其の德

行(コウ)と學識とを賞(ショウ)られて贈らる尊號(ソウゴウ)㊁弘法大師(コウボウダイシ)を俗人(ゾクジン)が呼ぶに用ゆる語(お大師樣)。

たいし(太師)圖昔の支那の官名、我が國の太政大臣に相當する。

たいし(大使)圖其の國の君主を代表して外國に赴ぬてゐる外交官の最上級(サイジョウキュウ)、公使の上に位する官名、假令ば英國大使、

たいし(大志)圖大なる志(ココロザシ)㊁大望(タイボウ)

たいし(大史)圖支那の官名、專ら歷史のコトを取り扱ふ役人の名。

たいし(大祀)圖盛(サカン)なる祭禮、

たいし(太子)圖皇太子の御事を申す㊁王子(オウジ)のコトを申す、

たいじ(大字)圖大なる文字、

たいし(內子)圖本妻のコト、

たいし(大指)圖大なる指(ユビ)㊁母指(ナヒヅ)のコトを云ふ、

たいじ(大事)圖大なる事柄(コトガラ)大切なる

たいじ(大慈)圖大なるなさけ㊁人に厚くめぐむコトを云ふ、

たいし(退志)圖退(ソ)ぞかんとする心根㊁我れの勤(ツトム)をやめんとする心のコトを云ふ、

たいじ(大寺)圖其の構(カマヘ)の宏大なる寺院(ジヰン)のコトを云ふ、

たいし(題詩)圖題辭として、記したる詩

たいし(太始)圖どだい。はじめ、

たいじ(題辭)圖書物の初め、卷物(マキモノ)の初め、又た石碑(セキヒ)の文の上などにしるす文句(モンク)のコト、

たいじ(對峙)圖双方にらみ合つてゐるコト、轉じて山の向ひ合つて、聳(ソビ)えてるコトを云ふ、

たいじ(胎兒)圖體內に在る子、

たいしう(大洲)圖陸地の宏大なるもの、即ち大陸(リクタイ)㊁大なる國、

だいにち(大日)圖佛の名、大日如來のコトを云ふ、

だいしつ(大失)圖大なる失策、

たいしつ(體質)圖其の人の身體の出來驗梅(ハイイン)のコト、

たいしや(大社)圖大なる神社(ジンシヤ)㊁特に出雲の大やしろのコト、

たいしや(大敕)圖天下の罪人を敕(ユル)して、其罪を問はぬコト、

たいしや(退社)圖其の社を退(ハラ)ぞく、社員の資格を止める㊁歌(ウタ)や生花(イケバナ)などの社中に入れるを止める、其の社中を去るコト、

たいしや(頽舍)圖こはれかかりたる家、あばら家のコトを云ふ、

たいしや(臺樹)圖高き見晴(ミハラシ)よき高樓(タカドノ)、うてなのコト、

だいしや(乃者)圖近頃(ハツカロ)此頃、

だいしや(代赭)圖繪具(エノグ)に用ゆる物、色の赤く黑き土の如き物。

たいしや(代謝)圖古くなりて用立(ヨウタ)ぬ物を棄(ス)て、代(カヘ)の物を入れ用ゆるコトを云ふ、

「の御事を申す語

たいしゆ(太主)圖天子の御姬君、內親王

たいしゆ(太守)圖其の一ケ國を支配(イハ)してる人の稱、即ち知事大名(ダイミヤウ)藩主(ハンシユ)のコトを云ふ、

たいじゆ(大儒)圖學問に秀(イ)でてる人大學者のコト、

「云ふ

たいしゆ(大酒)圖多量に酒を飲むコトを

たいしゆ(對手)圖あいて方(カタ)、

たいしゆ(退守)圖退りぞひて守(モリ)るコトを云ふ、

たいじゆ(大樹)圖大なる立木。

たいしよ(大暑)圖甚だしき暑さ㊁七月二十日前後のころを云ふ、

たいしよ(太初)圖天地の初めて開けたるとき㊁大もと、だいはじめ、

だいしよ(代書)圖人に代つて文書を作り書くコトを云ふ、

たいしよ(代署)圖他人に代(カワ)りて、其人の名を書するコト。

たいしよ(耐暑)圖暑氣にたゆるコト、暑さにまけぬコト、

たいじり(臺尻)圖鐵砲の元(モト)の方にて、木にて作られてある所、

たいにん(大人)圖おとな一人前の人㊁人望(ボウ)のある人のコト、

たいしん(大使)圖大きなんどし、

だいじん(大臣)圖最高の官名、各省の大臣、總理大臣の次に位す、

たいしん(大身)圖身分(ミブン)の高き人、位の貴(トウト)き人、

たいじん(太甚)圖非常に多き㊁殊に大なるコト。甚だしきコト、

たいじん(大盡)圖金滿家のコト㊁色町にて金錢を多く使ふ客(キヤク)、

たいしん(退身)圖官吏(クワン)が其の職を辭(ジ)するコト、

たいしん(退進)圖後(ウシロ)へ進む、即ち離に脊(セナカ)を見せて逃げ行く、

だいしん(代診)圖醫師の家に居て、主人の醫師に代りて、病人を診察する醫師のコト、

「トを云ふ

たいしん(對尉)圖さし向ひて酒をのむコ

たいしん(對審)圖裁判所にて、原告(ゲンコク)と被告(ヒコク)とを、向ひ合せにして、取り調べるコト、

だいしさま(大師樣)圖弘法(コウボウ)大師を、たつとびて呼ぶ俗稱(ゾクショウ)、

たいしやく(大詔)圖天子の詔(ミコト)のコトを申す、

たいしやく(待詔)圖天皇の詔(ミコト)を、下したまへるを待つコト、

たいしやく(大將)圖陸海軍武官の官名にて、即ち最上位の武官㊁一隊の軍兵を率(ヒキ)ゐる人のコト、即ち其の軍隊の主將(シヨウ)㊂仲間(マナカ)の中の頭を呼ぶに用ゆ語、

「(オ)るコトを云ふ

たいじやく(帶仗)圖刀又は劍を腰に帶

たいじやく(退謫)圖へりくだるコト。たかぶらぬ。いづるコト、

たいじやく(大乘)圖佛法の語、佛が人を善道に導(ミチビ)く、宏大(コウダイ)なる教(オシヘ)のコトを云ふ、

たいしやく(對照)圖物と物とを照(テ)し合して見(ミ)る㊁甲の物と乙の物とを見較(クラベ)ぶコト、

だいしやく(代償)圖他人の果(ハタ)すべき義務(ツトメ)を代つて果(ハ)す、

たいじやく(怠狀)圖自己(オノレ)の怠(オコタ)りたるコトを謝する文書㊁恐れ入るコト

たいしやく(帝釋)圖佛語の語、天竺(テンジク)の神の名三十三天尊(ソン)、

たいしやく(對酌)圖差し向(ムカ)ひに爲つて酒を飲(ノ)むコト、

「ちかりかし

たいしやく(貸借)圖かすとかりると、即

だいしやう(大衆)圖非常に多くの人々。大ぜいの人のコト、

「まる

たいしやく(退縮)圖恐れ入つて、ちぢか

たいしやつ(退出)圖立ち去る、まかり去るコト、

たいしよう(對稱)圖其の物に對して稱(ホ)ふるコト㊁つりあつてるコトを云ふ語、

たいしよく(大食)圖おほぐらひ、

たいしよく(退色)圖色のさめるコト、褪色(ヨウシキ)とも書く、

「るコト

たいしよく(帶食)圖向ひ合ふて食事をす

たいしよく(退職)圖職務をやめるコト即ち辭職のコト、

だいじうのう(臺十能)圖座敷(ザシキ)へ火を持ち運(ハコ)ぶ爲めの上品(ジヤウヒン)なる十能にて、銅又は眞鍮(シンチウ)にて、小判形(コバンガタ)に製せられて、木の臺(ダイ)の附き在るもの、

詫(ワビ)まるコト㊁轉じて詫(ワビ)り證文のコト、

たいしやく(帝釋)圖佛語の語、天竺(テンジク)の神の名三十三天尊(ソン)、

たいしやく(對酌)圖差し向(ムカ)ひに爲つて酒を飲(ノ)むコト、

「ちかりかし

たいしやく(貸借)圖かすとかりると、即

だいしやう(大衆)圖非常に多くの人々。大ぜいの人のコト、

「まる

たいしやく(退縮)圖恐れ入つて、ちぢか

たいしやつ(退出)圖立ち去る、まかり去るコト、

たいしよう(對稱)圖其の物に對して稱(ホ)ふるコト㊁つりあつてるコトを云ふ語、

たいしよく(大食)圖おほぐらひ、

たいしよく(退色)圖色のさめるコト、褪色(ヨウシキ)とも書く、

「るコト

たいしよく(帶食)圖向ひ合ふて食事をす

たいしよく(退職)圖職務をやめるコト即ち辭職のコト、

だいじうのう(臺十能)圖座敷(ザシキ)へ火を持ち運(ハコ)ぶ爲めの上品(ジヤウヒン)なる十能にて、銅又は眞鍮(シンチウ)にて、小判形(コバンガタ)に製せられて、木の臺(ダイ)の附き在るもの、

だいじだいひ(大慈大悲)圖佛法の語にて觀世音菩薩(カンゼオン)の此の上もなき、おじびふかきコトを云ひたる語、

だいじやうぶ(大丈夫)圖堂々たる男子、ますらをのコト、

だいじやうぶ(大丈夫)圖最も安全(アンゼン)なるコト㊁此の上もなき確(タシカ)なるコト㊂身躰の殊に健康なるコトを云ふ、

だいしゆわん(大手腕)圖大なる手と腕(ウデ)と云ふコトにて、轉じて奮發(フンパツ)して力を盡(ツク)すと云ふ意味に爲る、卽ち(大手腕を振ふ)、

だいしよにん(代書人)圖他人に代(カハ)つて諸種の文書を、代作(ダイサク)し、又は認(ミト)たむる人、

だいじんぶつ(大人物)圖人格(ジンカク)のすぐれて高き人㊁萬事に堪能(カンノウ)せる大偉人、

だいしんゐん(大審院)圖最高の裁判所の「名にて、東京に置(オ)かるコト

だいしやうぐん(大將軍)圖將軍中の將軍卽ち總大將、全軍の將、

たいしやくてん(帝釋天)圖帝釋(タイシヤク)の コトを云ふ、

たいじんたんぽ(對人擔保)圖法律上の語にて、負債(フサイ)の擔保に人を以てするコトを云ふ、卽ち金錢貸借の保證人のコトを、法律上の語にて云ふコト、

だいじんばしら(大臣柱)圖芝居道の語にて、舞臺(ブタイ)の正面左右に在る太き柱のコト、

だいしやくわい(大審會)圖天皇御卽位の後に於て、始めて行(オコナ)はせらるる新嘗祭(ニイナメサイ)のコトを申す、

だいじんくわんばう(大臣官房)圖國務大臣の官邸、

だいす(塞子)圖茶の湯用の器具の名にて四本の柱にて支(ササ)えられてある棚(タナ)此の棚(タナ)の上下に、茶器と風爐(ロ)とを飾る、「體に物を卷く

だいす(帶)(他動)劍(ケン)などを、おぶる㊁身しるす、

だいす(題)(他動)表題(ヒヨウダイ)をつける、かき「の相手(アイテ)となる

だいす(對)(自動)向ひ合ふにらみ合ふ㊁其

たいすう(大數)圖おほよその數㊂あらましの數㊃大なる數、

たいする(大醉)圖甚しく醉(エ)ふ、

たいする(滯水)圖溜(タマ)つて、流れ行ざる水のコトを云ふ、

たいする(耐水)圖水に浸(ツ)るとも損ぜぬコト、又た水の浸(シ)み入らぬコトを云ふ、

だいすう(代數)圖數學上の語にて或る數(スウ)を數字にて表はさずに、ABなどの文字を以て、表しつつ行(オコナ)ふ數學の仕方、「るコト

たいせい(大成)圖美事(ハレゴト)に成功(ナルコトヲ)せ

たいせい(大政)圖天下の政治(セイチ)、

たいせい(大勢)圖勢の大なるコト㊁一般のありさま(天下の大勢)、

たいせい(大聲)圖おほ聲(ゴエ)、

たいせい(大聖)圖萬人に秀(イ)でたる德高く行ひ正しき聖人、

たいせい(頽勢)圖勢(ホイセイ)のおとろえたる㊁まけ色の見えるコト、

たいせい(泰西)圖西洋のコト、

たいせい(胎生)圖卵生(ランセイ)に對する語にて、人獸(ハナモ)の如く、體内にて已に其の形を爲して、生れ出る子のコトを云ふ、

たいせう(大笑)圖大ゐに笑ふ、

だいせう(大小)圖大なると小なると㊁大小兩刀のコトを云ふ、㊂月の大小、

たいせき(堆積)圖物を小高く積(ツ)み上るコト㊁川下(カハシモ)又は海岸(カイガン)へ、水が自然に土砂(ドシヤ)を押し寄せ來たりて其れが積み上げられし物のコトを云ふ

たいせき(堆石)圖地理學上の語にて、氷の河へ、石の如くになりて押されて來たものを云ふ、

たいせき(大石)圖形の大なる石、

たいせき(苦石)圖苦の生ぜる石、

たいせつ(大切)圖大事にするコト㊁氣を付けて丁寧(テイネイ)にする、

たいせつ(大節)圖すぐれたる操(ミサオ)㊂職(シヨク)にゐて其の職務(ツトメ)の躰面(ハイメン)をはづかしめぬ心根(ココロ)、

たいせつ(大雪)圖大ゆき、

たいせつ(頽雪)圖積(モ)りし雪(ユキ)のとけ初(ソ)めたるコト、

たいせん(大川)圖大なる川、

たいせん(大船)圖大なる船(フネ)、

たいせん(大戰)圖最もはげしき戰(タタカヒ)のコトを云ふ、

たいせん(苦戰)圖苦のコト、

たいせん(對戰)圖對陣して戰ふ、

たいぜん(泰然)圖ゆつたりとしてる、大ようにかまえてる、おちついてゐるさま、「に云ふ

たいぜん(退然)圖如何にも弱(ヨワ)き有樣

たいぜん(頽然)圖酒(サケ)に醉(エ)たるさま㊁衰(オトロ)えくづるるさま、

たいぜん(怡然)圖よろこぶさま。安らかなるさまを云ふ、「づれたるさま

たいぜん(頽然)圖酒に醉(エ)て精神のく

たいぜん(大漸)圖病氣の甚だしく重りゆくコトを云ふ、

だいせいだう(大成堂)圖孔子(コウシ)を祭りたる御堂(ミダウ)の稱、

たいせいやう(大西洋)圖地球上に在る五大洋の一つの名にて、西半球に在る太洋の稱、

たいぜんしよく(大膳職)圖宮内省に在る一つの掛(カカリ)にて、皇室(コウシツ)の膳部(ゼンブ)を取扱ふ役(ヤク)、

だいぜんのたゆう(大膳大夫)圖宮内省内にある、大膳職の長官、

たいせきはんけつ(對席判決)圖法廷(ホウテイ)へ、原被(ヒガイ)兩人を呼び出し双方の云ふ所を聞き取りて、判決(ハンケツ)されるコトを云ふ、

たいそ(大祖)圖君主の御先祖、

たいそう(大層)圖甚しく多きコト、甚だしきコトを云ひ表(ヒヤウ)はすに用ゆ語、

たいそう(太宗)圖天子の御先祖の中にて其の御國に盡されたる功績(クワイセキ)が、太祖(タイソ)に同じきほど、高かりし御方の稱(トナ)、

だいそう(代奏)圖人に代りて、天皇に申「し上げたてまつるコト

だいそう(大藁)圖藁(ワラ)の乾(カ)かして固(カタ)くなせる物、藥に用ゆ、

たいそく(大息)圖大なるためいき、

たいそく(大則)圖大なる手本、大なる規則(キソク)のコトを云ふ、

たいそく(大賊)圖大なる惡徒、

たいぞく(頽俗)圖世の中の、おとろへたるコトを云ふ、「損失(ソンシツ)のコト

だいそん(大損)圖大なる損、少なからぬ

たいそん(大孫)圖目上の人の孫(マゴ)を呼(ヨ)に用ゆる敬語(ケイゴ)、

だいそうじやう(大僧正)圖最上の僧侶の位(クラヰ)の名、

たいだ(大儺)圖鬼矢來(ヤライ)のコトを云ふ尙ほおにやらひの條を見よ、

たいだ(怠惰)圖なまけるコト勤(ツト)めぬコトおこたるコト、

だいたい(大體)副あらまし。おほよそ、

だいたい(大隊)圖多くの人が集(ツド)つて一團(ダン)となりたるコト㊁陸軍の編制の稱にて、二個乃至(シライ)四個中隊を合したるを一大隊と云ふ、

たいたい(大悪)圖大惡無道の人、

だいだい(橙)圖木の名にて、蜜柑(ミカン)の種類に屬す、其の實は酸(ス)く、實の皮は苦(ニガ)し、實の汁(シル)は食用と爲り、其の皮は藥用となる、

だいだい(代々)圖よよ、世々、

たいたい(對々)圖五分と五分、

たいたい(大義)圖天皇が他へ赴かせ給ふ時に建(タテ)させ給ふ御旗(ミハタ)㊁陣中(ジンチウ)にて天皇の建(タテ)させ給ふ大御旗、

たいたい(大刀)圖大なる刀(カタナ)、

たいたい(帶刀)圖刀を差(サ)すコト、

たいたい(對當)圖つりあふコト㊁向ひ合ふコト㊂あたり合ふ、

たいたい(駘蕩)圖春の景氣の得も云はれぬ心地よきを云ふ、

たいたい(頽倒)圖たをれる、くづれこけるコトを云ふ、

「ふに用ゆる語

たいだい(廻堂)圖人の母を敬(ウヤマ)ふて云

たいだい(大道)圖人の守るべき正しき道(ミチ)㊁大通り、

たいたん(對談)圖差し向ひにて談判するこむかひでのはなし、

たいたん(大膽)圖度胸(ドキモ)の確(タシ)かなるコト㊁膽玉(キモタマ)の大なる、

たいたすう(大多數)圖物の數の非常に多きコト、

「骨の名

たいたいこつ(大腿骨)圖股(モモ)の太(フト)き

たいだいす(橙酢)圖料理に用ゆる掛酢(カケズ)の一種にて、卽ち橙の汁を絞(シボ)り少量の醬油と味淋(ミリン)とを加へ雜(ザ)と煮きしもの、

たいたんもの(大膽者)圖膽(キモ)の太くして、物事に容易に、怖(オ)れぬ質(タチ)の人を云ふ、

「物事の終りのコト

たいたんゑん(大團圓)圖おほさり、卽ち

たいたいかぐら(太太神樂)圖伊勢の大廟にて奏せらるる神樂(カグラ)、

たいち(大智)圖すぐれたる智恵、

たいち(大地)圖地面(ジメン)往來(ワウライ)、

たいち(大耻)圖大なるはぢ、

たいち(退治)圖敵或は害をなす者を、討ちたをすコトを云ふ、

たいちる(退治)他動敵(カタキ)又は妖怪(ヨウカイ)を討(ウ)ち平(ヒラ)らぐ、

だいちや(大蛇)圖大なるへび、

だいちよ(大著)圖大部なる著作物、

たいちん(退陣)圖陣所(ジンショ)を引き拂(ハラ)ふコト。軍をしりそぐコト、

たいちん(對陣)圖兩軍が、向ひ合ひて陣地を敷たるコト、

「去るコト

たいちやう(退場)圖其の場所より、立ち

たいちやう(隊長)圖一隊の長、一隊の頭、

㊁仲間の中のえらき人を云ふ俗語、

だいちやう(奩帳)圖商家で用ゆる元帳(モトチヤウ)のコト、卽ち大福帳㊁演劇(ヱンゲキ)の脚本(キヤクホン)のコト㊂一般に肝要(カンエウ)なる事實(ジツ)を記載する基礎(キソ)の帳簿(チヤウボ)のコトを云ふ、

たいちゆう(大忠)圖宏大なる忠義、

たいちゆう(胎中)圖子供(コドモ)の腹(フク)の中に在るコト、卽ちはらごもり、

たいちよう(大腸)圖醫學上の語、腸(ハラワタ)の一部分の稱、小腸(コワタ)の下に在る、太き腸、其の長さ凡そ五尺あり、

たいちよう(台聽)圖貴人(キジン)の物事を聽(キ)せ給ふコトを、敬(ウヤマ)ふて云ふ語、

たいちよう(退廳)圖官署より下(オ)るコト、(退廳の時か來る)など、

たいづ(大豆)圖草の名、豆の一種、夏の初めに種を下し、秋に至りて實(ミ)を取る、其の實は醬油味噌などの必用品の食料と爲り、又は豆腐(トウフ)の原料ともなる滋養品、

たいてい(太弟)圖天皇の御弟君、

たいてい(退廷)圖朝廷より下るコト㊁裁判廷より下るコト、

たいてい(台鼎)圖三公の位の稱、

たいてい(大抵)圖あらかた、あらまし、

たいてう(退潮)圖干(ヒ)き潮(シホ)㊁潮(シホ)の干くコト、

たいてう(退朝)圖朝廷より引き下るコト

たいてき(大敵)人數の多き敵㊁殊に强き敵のコトを云ふ、

たいてき(對敵)圖相手、かたき、

たいてん(大典)圖重大なる儀式、

たいてん(退轉)圖うつりて他へ行くコト㊁身代(シンダイ)限(カギ)をして、他へ立ち去るコト、

たいてきかうどう(對敵行動)圖敵に對して行ふ所作(シサ)にて軍事上(グンジジヤウ)の行動をなすコト、

だいど(大度)圖おちついてる㊁こせつかぬ㊂度量(ドリヤウ)の大なる、

だいと(大都)圖天子のゐらせたもふ都(ミヤコ)のコト、

たいと(泰斗)圖世の人々より、尊(トタフ)びうやまはれる人のコト、

たいど(態度)圖ありさま、やうす、すがたしかた、そぶりのコト、

だいとう(大統)圖天子の御血統(ケツトウ)の御事を申す語、

だいどう(大同)圖多くの物が一つになるコト㊁あらかた㊂略ぼ同じきコトを云ふ

たいとう(對頭)圖相手方、

たいとう(擡頭)圖垂てゐた頭を持ち上げるコト㊁文章中にて、敬(ウヤマ)ふ意を述(ノ)る時に、行(ギヤウ)を改めて書き起(オコ)すコトを云ふ、

たいとう(對等)圖双方とも同じコト㊁甲乙の間に優劣勝敗なきコト、卽ちごぶごふのコト、

たいとく(體得)圖十分に會得(ヱトク)せるコト

たいどく(大毒)圖甚だしき毒、强き毒のコトを云ふ、

たいどく(胎毒)圖子供が母の體内より受けて來たる毒のコト、

だいとく(大德)圖學識(ガクシキ)德行(トクカウ)共に秀(ヒイ)たる名僧(メイソウ)を貴んで云ふ語㊁轉じて一般に僧侶(ソリヨ)をうやもふて云ふに用ゆ、

だいどころ(臺所)圖一家の食品を料理する所、卽ち勝手(カツテ)のコト、

たいとくわい(大都會)圖非常に繁榮(ハンエイ)を極(キハ)めつつある土地、

たいどくくだし(胎毒下)圖子供の胎毒を藥の力にて下すコト、又は其の下し藥のコト、

「さんすけのコト

たいどころをとと(臺所男)圖下男しもべ

だいどころをんな(臺所女)圖勝手元の用を爲す女中㊁飯炊(メシタキ)女、

だいどうせうる(大同小異)圖似たり寄(ヨ)たり、卽ち大した相違(ソウヰ)はないと云ふコト、

だいとうりやう(大統領)圖共和(キヤウワ)國の政治の、大權を握(ニギ)れる最上高位の官名にて、多くは國民の選擧に依りて、此の職に就(ツ)く人を定む、

「トを云ふ

たいとうでうやく(對等條約)圖甲の國と乙の國とが、其國交の關係に於て、双方とも其の權利(ケンリ)及び義務(ギム)に、何等の等差(トウサ)なき條約を結びたるコト又は其のもの、

「てるコトを云ふ

たいない(胎内)圖子が腹の内に、やどつ

だいない(大難)圖甚だしき災難(サイナン)、

たいないくぐり(胎内潛)圖岩石に人のくぐりぬけられるほどの穴(アナ)の穿(ウガ)てある物のコト、

だいなごんあづき(大納言小豆)圖小豆の一種にて、其の粒(ツブ)非常に大きく、色亦た紅くして、味の別して良き最上の小豆、

たいにち(大日)圖佛法の語にて大日如來(ダイニチニヨライ)のコト、卽ちびるしやな。日輪(ニチリン)のコト、

たいにん(大人)圖子が父のコトを尊(タフト)ふて云ふ語㊁おとなのコト、

たいにん(大任)圖大なる役目㊁責任(セキニン)重き任務(ニンム)のコト、

たいにん(退任)圖仰(オホ)つかつてた役目を止めるコトを云ふ、

だいにん(代人)圖かはりの人、

たいにん(耐忍)圖我慢(ガマン)する、辛抱す

るコトを云ふ、

たいにん(體認)圖其の事實(コトザネ)を十分に呑み込むコトを云ふ、

たいねつ(大熱)圖病氣の爲めに熱度(ドヲク)の甚しく高まるコト、

たいのう(滯納)圖稅金(ゼイキン)を其の期日に納めぬコトを云ふ、

たいのう(大腦)圖頭の左右に跨(カタ)がつてある、大なる腦髓(ガイヅイ)、

たいは(大破)圖いたく破れる、大いにこわれるコトを云ふ、

たいは(大波)圖大なる波(ナミ)荒波、

たいは(頽破)圖すたれやぶれる、物の用にたたなくなるコト、

だいば(臺場)圖砲臺(ダイハウ)のコト㊁轉じて風呂屋の見張場(リババ)㊂火鉢(ヒバチ)の緣(フチ)に設けたる、巾(ハバ)の廣きわくのコトを云ふ、

だいはい(大盃)圖大なる盃(ウサカ)、

だいはい(大敗)圖大いに破れる、大いにまける、

だいはい(大旆)圖天子の御旗、

たいはい(退廢)圖勢力(ヰキヲク)の衰(ヲトロ)へすたる㊁物の用ひられなくなる、

たいはい(台背)圖老人のコトを云ふ、

たいはい(頽敗)圖メチヤメチヤに破れる

㊁戰(サイ)にまける、

だいはい(代拜)圖其の人の代りに、拜(ヲガ)む(コト)

たいはい(頽廢)圖あれすたる、くづれてあればてる、

たいはく(體貌)圖其の人の身體つきと、「其のかほかたち」

たいはら(體貌)圖其の人の身體つきと、

たいはら(大砲)圖おほづつ、

だいはら(大方)圖四方八方を云ふコト㊁轉じて世の中、世間(セケン)、

たいはく(太白)圖大なる盃(ウサカ)㊁堅(カタ)く作(ツク)られた白き飴(アメ)㊂上等の白砂糖(シラサタウ)㊃太き白の絹糸(イトス)㊄太白星のコト、

だいはく(大舶)圖大なる船、

たいはく(滯泊)圖とうりゆうしてゐる船

だいはく(港に著)圖港についてゐる船、

だいばつ(題跋)圖書物の初めに記したる文字と、終りに記したる文字とのコトを云ふ、

たいはふ(大法)圖國家の法律、

たいはん(大半)圖あらかた、おほかた、

たいはん(大藩)圖大名中での、大なる大「トにて、卽ちエナ

たいはん(胎盤)圖俗に云ふ、アト產のコ

だいばん(胎盤)圖俗に云ふ、アト產のコ

だいばかり(臺衡)圖重き目方(メカタ)の物を量(ハカ)るに用ゆる、臺(ダイ)のある秤(ハカリ)のコトを云ふ、

「むコト

たいはうたい(大砲隊)圖大砲をはなつ軍隊、砲兵隊のコト、

たいはくせい(太白星)圖金星(キンセイ)、

たいはんにや(大盤若)圖佛法の經文の名

だいはちぐるま(大八車)圖大形の荷車(ニウビ)のコトを云ふ、

だいばんじやく(大盤石)圖宏大なる岩石㊁轉じて案じるに及ばず、大丈夫と云ふコトを表(アラハ)はす語、

たいひ(大悲)圖人の雖義(ヰナミ)を助ける情(ナサケ)、厚き功德(クトク)、

たいび(大尾)圖しまひ、をわり、

たいび(對比)圖くらべ合はすコト㊁くらべるコト、「與(クミ)へるコト

たいひ(貸費)圖其れだけの入用を、かし

たいひ(頽圮)圖總て物の破(ヤブ)れこわれるコトを云ふ、

たいひ(退避)圖我より退(ノキ)びて避(サケ)るコト、さけのがれるコト、

だいひつ(代筆)圖人の代りに文字を書くコト、又はかきたるもの、「人

たいひやう(大兵)圖身體の大きく肥へし

たいびゆう(大謬)圖大なるあやまり、非常(ヒジヤウ)なる間違(マチガヒ)、

たいびやう(大病)圖重き病氣、

たいびより(大廟)圖伊勢の大神宮のコト

を申す、

たいひせい(貸費生)圖官(クワン)より學費(ガクヒ)を借(カ)し與(タ)へられてる生徒(セイト)のコトを云ふ、

たいひせん(待避線)圖單線の鐵道などにて、列車が來るのを、他の列車が避(サケ)べく爲めに、拵(コシラ)へてある線路(セン)のコトを云ふ、

だいひようし(大拍子)圖おほ拍子のコトにて、芝居にて、大太鼓(オホダコ)を入れて囃(ハヤ)をなすを云ふ、

たいふ(大輔)圖昔時の官名現今の各省の次官の如き役、

たいふ(大夫)圖大名の家老職(カロク)のコト。大名の第一の家來、

たいふ(太父)圖祖父(ヰヂ)のコト卽ち我が父の父のコト、「の名

たいふ(大傅)圖御年若き天皇のお守り役

だいぶ(大分)副あらまし、おほよそ、

だいぶ(大部)圖册數(カツズ)の多き書物のコト、

だいふ(乃父)圖此の父と云ふ意にて父が子に對して、俺(ワレ)がと云ふ時に用ゆる語、「すさましき風

たいふう(大風)圖大なる風、強き風(カゼ)、

たいふう(泰風)圖おだやかなる風㊁兩風の別名、

たいふう(頽風)圖風俗(フウゾク)の亂(メダ)れ出

だいふく(大福)圖大なる幸福(フクセツ)㊁大福餅の略、

だいぶつ(大佛)圖大きな佛の像(ゾウ)㊁あ

たいぶん(台聞)圖貴顯方のお耳へ入るコト、お聞になるコト、

だいぶん(大分)副おほかた、あらまし、あらかたのコト、

たいふじん(大夫人)圖身分の高き人の母のコトを云ふ敬語、

だいてき(大不敵)圖天皇皇族方に對して、禮を失したるを云ふ、

だいふとく(大福德)圖大いに富み、さかえて福あるコト、

だいふくもち(大福餅)圖菓子の名、餅にて餡(アン)を包みたるもの、

だいふくちやう(大福帳)圖商家にて用ゆる元帳(モトチヤウ)のコト、

だいふくみかん(大福蜜柑)圖蜜柑の一種にて、粒(ツブ)大きく汁(シル)の別して甘(アマ)き上等の物、「大富豪のコト

だいふくちやうじや(大福帳者)圖大金持

だいへい(大平)圖世の中のおだやかに治(オサ)ってゐるコト、

たいへい(大兵)圖澤山(タクサン)なる兵士、多「したるコトを云ふ

たいへい(泰平)圖太平に同じ、

たいへい(退兵)圖陣地(ヂンチ)を張(ハ)せてゐた兵を退りぞかせる、

だいへう(代表)圖或る事實(コトジツ)の責任(セキニン)を負(オヒ)て外(ソト)に向つて表はすコト卽ち會社を代表するなど。代つて事を執(ト)り行ふコト、

たいべつ(大別)圖大きくわかつ㊁あらまし分(ワカ)るコト、

たいべん(大便)圖くそ、ふん、

だいべん(代辨)圖人の代理となりて、其の人に關する事件を、取り扱(アツカ)ふコト、又は其の人、「ならぬ事件

たいへん(大變)圖大なる變事㊁容易(ヨウイ)

たいへん(大變)圖大層(タイソウ)に同じ、

たいへいやう(太平洋)圖地球上にある五大洋中の一つの名にて、東半球に在る太洋、

だいべんじや(代辨者)圖次に同じ、

だいべんにん(代辨人)圖他人に代(カ)りて、其の人に關する事柄を取扱ふを業務(ヰトナミ)となせる人、

たいへいらく(大平樂)圖雅樂の曲名の一にて、破陣樂(ハヂンガク)のコトを云ふ㊁勝手(テカツ)なる暢氣(ノンキ)なるコトを云ふ(太敬の兵員のコト、

平樂を吐く)、

たいぼ(大母)図祖母(ソボ)のコト、卽ち我が父の母のコト

たいぼ(大輔)図昔時の官名各省の次官(ジクワン)のコトを云ふ、

たいぼ(大輔)図天子より臣民へ一般に酒食を賜はるコトを云ふ、

たいぼ(太母)図祖母のコト、

たいほ(逮捕)図惡者(モノ)を捕(トラ)えるコト

たいほ(退歩)図あとすさりするコト㊁學問(モンガク)其他物事の後へさがりゆくコトを云ふ、

たいぼう(題榜)図路傍(バウバウ)に建(タテ)られてある建札(ツダテ)のコト、

たいぼく(大木)図大たる立木

たいぼん(大本)図一番のもと㊁型(カタ)の大なる書物(シモツ)のコト、

たいぼうれい(大寶令)図文武天皇(モンブテン)の大寶年間に、天下の政治を大改正して、新たに定められたる法律規則を云ふ、

たいぼんえい(大本營)図大元帥陛下の軍事をみそなはす軍營(ムエイ)、

たいぼかんきん(逮捕監禁)図自分勝手に人を捕らへて、身體の自由を束縛(ソクバク)するコトを云ふ、

たいま(太麻)図おほぬさのコトにて御幣(ゴヘイ)を尊(タフ)びて云ふ語㊁あさ麻(アサ)のコト、

たいま(對馬)図將棋(シヤウギ)の語、双方共にごぶ〳〵にて勝負なきコト、

たいまい(大枚)図大なる金子。多くの金子のコトを云ふ、

たいまい(玳瑁)図熱帶地方の海中に産する一種の海龜(クワイ)にて、十三個の甲(コウ)が、恰も魚の鱗(ウロコ)の如くに重なり合ひ、其の色黄色(キイロ)にして、中に黑き斑(ホシ)あり、此の甲を煮(ニ)て軟(ヤワ)らかくなして、櫛(クシ)や笄(ガイ)を製す、之をべッコウと云ふ、

たいまつ(松明)図暗路(アンロ)を照(テラ)す道具にて、松のニヤの多き部を裂(サ)て、束(ハウ)れて、火を點(ツケ)たる物、又は青竹(アヲタケ)を裂きて、其れに油をしみ込せて、火を點(ツケ)たるもの、夜山路(ヤマヂ)などを歩く時に用ゆ、

たいまん(怠慢)図なまけ勝ち、なほざり

たいみゃく(代脈)図代診(タイシン)に同じ、

たいみんちく(大明竹)図女竹の一種にて其の質しなやかなるに依り、細工物を爲すに用ひらる、

たいむ(隊務)図軍隊に關する事務、卽ち

たいむ(代務)図他人に成り代(カハ)つて其の人の事務(ムム)を勤(ツト)むるコトを云ふ

たいむにん(代務人)図其の會社又は其の主人に代り、全責任を帶(オビ)て、商業の取引を爲す代理人、

たいめい(題名)図表題の名、

たいめい(臺目)図茶道(チヤダウ)の語、茶筅(チヤセン)に設けられたる板の間のコト、此の上に風爐(フロ)を据(ス)ゑる、

たいめい(台命)図皇族方(コウゾク)や、將軍の命令(メイレイ)のコト、

たいめい(待命)図命令を待つ、仰(オホセ)の下るのを待てるコト、

たいめい(大名)図其の人の名の世間に知られてるコト㊁大なるほまれのコト、

たいめう(大名)図一粟石以上の諸侯(シヨコウ)を云ふ、

たいめん(對面)図面會する。顏を合す、

たいめん(體面)図物事の面目(メンモク)、卽ち其の有樣のコトを云ふ、

たいめいし(代名詞)図文法上の語にて、名詞の代用をなす言葉(コトバ)を云ふ、假令(タトヘ)ば私(ワタシ)貴君(アナタ)彼處(アソコ)何處(ドコ)などを云ふ、

たいめうじま(大名縞)図織物の縞柄(シマガラ)の名にて、細かき堅縞(タテジマ)、

たいめうにち(大明日)図暦の語にて、何

事をなすにも、さしさはりのなき大吉日のコト、

たいめうおうと(大明萬青年)図おもさの一種にて、葉(ハ)に模樣(モヨウ)のあるもの

たいもう(大望)図大なるのぞみ、

たいもく(題目)図表題(ダイダイ)のコト㊁日蓮宗にて南無妙法蓮華經(ナムミヤウホウレンゲキヤウ)のコトを云ふ、卽ちお題目を唱(ハヤ)ふ、

たいもん(大門)図大なる門題(モダイ)、

たいもん(大紋)図昔時の禮服、直垂(ヒタレ)に我が家の紋を大きく染めつけたる禮服のコトを云ふ、

たいもん(大門)図大なる門、本門、表門の一コトを云ふ

たいもくおどり(題目踊)図法華宗(ホケシウ)にて、法華のお題目(ダイダイ)を唱へながら踊(オド)るコト、

たいや(逮夜)図佛(ホトケ)の命日(メイニチ)の前の夜に營(イトナ)む佛事(ブツジ)、

たいやう(太陽)図日(ヒ)、日輪(ニチリン)、

たいやう(大樣)図あらましおほかた、おほよその意、

たいやう(大洋)図はてしなき大海のコト

たいやう(對揚)図つりあひを取るコト。つりあはすコトを云ふ、

たいやう(頽陽)図弱(ヨワ)くなりし太陽の光(ヒカリ)と云ふ意より來りて、夕陽(セキヨウ)のコトを云ふ、

たいやく(大役)図重き役目㊁骨の折れる役向のコトを云ふ、

たいやく(大約)図あらまし、おほよそ、あらかた、たいりやく、

たいやく(退役)図役向(ヤクム)を止めるコト、職務を辭するコト、

たいやうけい(太陽系)図太陽を中央に置きて、其の周圍(ハウイ)を運行してゐる、凡ての天躰(テンタイ)のコト、卽ち地球、火星などのコトを云ふ、

たいやうれき(太陽暦)図地球が太陽の周圍を一廻(ヒトマワ)りする時間を、一年と定めたる暦法(レキホウ)のコト、凡そ三百六十五日を、一年とす、俗に云ふ新暦(シンレキ)、

たいようがくとう(代用學校)図私立(シリツ)の小學校にて、公立の小學校同樣(ヒトヨウ)の、資格(シカク)のある學校のコトを云ふ、

たいゆう(大勇)図些少(ワヅカ)なる事は見向もせず、大事に當て、奮(フル)ひ起る勇氣のコト、

たいよ(貸與)図かしあたえる、かすコトを云ふ、

たいよう(大用)図大便に同じ、

たいより(體用)図心理學上の語にて、其の本體と應用とのコトを云ふ、卽ち基礎(キソ)と、しかたのコト、

たいより(役用)図凡て其の物事の代りとして用ゆるコト、

たいようひん(代用品)図甲の物の代(カハ)りとして、間(マ)に合ふべき品、

たいらう(大老)図德川幕府の第一の重役(ヤクヤク)、老中の上に在る役、

たいらう(退老)図官を止めて、隱居(イイン)するコトを云ふ、

たいらん(大亂)図國家の大ゐに亂(ミダ)るコトを云ふ㊁大戰爭、

たいらん(台覽)図貴顯(キケン)方の物を御覽(ゴラン)じ給ふコト、

たいり(大利)図大なる利益(リエキ)、

たいり(内裏)図宮中にて天皇のゐらせ給ふ御殿(ゴテン)の稱、㊁宮中、

たいり(代理)図人の代(カハ)りとなつて物事を取り扱(アツカ)かふコト、

たいりう(滯留)図物のつかえ止(トド)まつてるコト㊁逗留(トウリウ)してゐるコトを云ふ、

たいりき(大力)図力の優(スグ)れて強きコト㊁力量(リキリヤウ)の大なるコト、

たいりく(大陸)図地球上の大なる陸地の稱、假令ば亞細亞大陸(アジアタイリク)アメリカ大陸など、

たいりよ(大呂)図陰暦の十二月の異稱、
だいりん(大輪)図太(ブト)き輪、
たいりん(台臨)図貴顯方の其の場席へ臨(ノゾ)ませ給ふコトを云ふ。
だいりけん(代理權)図代理としての權利(ケンリ)のコトを云ふ、
だいりさま(内裏樣)図三月の節句(セック)に飾(カザ)るだいり雛(ビナ)のコト。
だいりせき(大理石)図石の名、寒水石(カンスイセキ)に似たる最も滑(ナメ)らかにして、最も美(ウツ)くしき石、彫刻(チョウコク)用建築(ケンチク)用として貴(タフト)ぶ、
だいりてん(代理店)図代理となつて他店の業務を取り扱ふ店、「人
だいりにん(代理人)図代理を勤(ツト)むる
たいりやく(大略)図あらまし、おうよそ、あらかたのコト。
たいりやう(大量)図度量(ドリヤウ)の廣く且つ大なるコト㊁酒を飲(ノ)む量(ハカリ)の多きコトを云ふ、
たいりやう(大量)図身躰(カラダ)の重量(ヒトモ)
だいりんくしよ(大林區署)図役所の名、山林の取締に關する事務を執る所、
だいりきむさう(大力無双)図取り分けて力の強きコト、「くなつてるコト
たいるる(堆累)図物の重(オモ)なり合て高

たいるる(對壘)図敵に向ひたるとりで㊁向ひ合つてゐるとりで、
たいるる(苦類)図種物學上の語にて、陰地(シヨク)に生ずる草(クサ)の如きもの、即ち苦(ニガ)の一種、ゼニゴケのコト、
たいれい(大禮)図大切なる禮式㊁重き儀式のコト、
たいれい(頼鄰)図老年になりたるコト。「年のゆきたること
たいれう(大漁)図魚類の夥多(ヤタラ)しく捕れたるコトを云ふ、
たいれう(大獵)図狩獵(ショウリヨウ)に出で多くの獲物(エモノ)ありしを云ふ、
だいれう(代料)図代價に同じ、
だいれいふく(大禮服)図重大なる晴れの儀式の時に用ゆる衣服、一定の法式に依りて成れる物、
たいろ(大路)図大なる道、街道(カイダウ)、本道(ホンドウ)のコトを云ふ、
たいろう(大牢)図支那にて、天子が先祖代々の祭をいとなまるゝ時に、用ひらるる牛、豚(ブタ)、羊(ヒツジ)等の供物(モツナ)を「云ふ
たいろく(大祿)図祿高(ダカ)の多きコトを云ふ、
たいろん(對論)図向ひ合ふて議論する。直接に云ひ合ふコト、
たいわ(對話)図對談に同じ、

だいわう(大黄)図草の名、夏(ナツ)の初めに莖(クキ)を生じ、綠色(ミドリイロ)の花を咲かせ、葉は大きくして、一種の光澤(ツヤ)あり、其根は下劑(ゲザイ)として用ひらる、味は殊に苦(ニガ)し、
たいわん(大灣)図大なる入海、
だいわりぜり(大往生)図いとど安らかに死するコトを云ふ、
たいわんぼうず(臺灣坊主)図病氣の名、頭の毛の拔(ヌケ)て、禿(ハゲ)となる傳染病(デンセンビヤウ)、
だいわうしやりべつ(大黄舍利別)図藥の名にて、大黄の煎(セン)じ汁の中へ、砂糖(サトウ)を入れて煮(ニ)たるもの、
たいん(多飲)図大酒を飲む、酒を多く飲むコト、
たいん(多淫)図色情に深かきコト、

(ただう)

たう(島)図水中に在る陸地(リクチ)即ちしま㊁海の邊(ホトリ)濱邊(ヘバタ)、
たう(湯)図沸(ワカ)したる水、即ちゆ㊁ゆを そゝぎかけるコト㊂かつて、きまゝ、ほしいまゝ、
たう(蕩)図ほしいまゝなるコト㊁平(タイ)

らぐコト。はらふコト㊂ゆるやかなるコト。ゆるきコト㊃廣(ヒロ)くあり。大いなり㊄水の盛んに流るゝ狀(サマ)を云ふ、
たう(塲)図我れ。己(ワレ)れ。自身、
たう(搗)図臼(ウス)にて物をつく㊁打(タ)くうつ、
たう(篁)図太(ブト)き竹のコト㊁節(フシ)と節との間(アイダ)の長く隔(ヘダ)たつてる竹(タケ)のコトを云ふ、
たう(盪)図ほしいまゝ。かつてきまゝのコト㊁動かすコト。動くコト㊂洗(アラ)ひ去るコト、
だう(堂)図立派(ハデヤカ)なる建物(タテモノ)、大なる家㊁佛像の祀(マツ)られある處、即ち本堂(ホンダウ)㊂官吏が事務を執(ト)る處㊃多數の人々が集まる處、假令ば公會堂など㊄住宅。家のコト例ば弊堂(ヘイダウ)など㊅立派なる狀、盛んなる狀、正しき狀などを云ひ表はす語、
たう(蟷)図虫の名、螳(カマキリ)の一種にて、なつせみのコトを云ふ、
たう(磄)図美しき模樣(モヨウ)の、自然に表はれてる石のコトを云ふ、
たう(瞠)図一心に見る、みつむるコト㊁見張つてるコト、
たう(棠)図山野に自生せる梨やりんごなどの木を云ふ㊁車の左右に在る横木(ヨコ)ギ)のコト、「て發する聲のコト
たう(闘)図盛大なる有樣㊁鼓(ツヅミ)を打き
たう(唐)図昔時の支那の國名㊁轉じて支那のコトを云ふ通語即ちから㊂庭園(ナイテイ)内に在る細き道(ミチ)のコト㊃無くなる。失ふ㊄大いなり。廣くあり㊅池の畔(ホトリ)などに在るつゝみのコト、
たう(糖)図砂糖(サトウ)のコト㊁一種の食品あめのコトを云ふ、
たう(饋)図一種の食品、あめ、
たう(鐘)図前條に同じ、
たう(悼)図いたむコトかなしむ、
たう(踔)図早く馳(カケ)るコト㊁飛び越(コエ)るコト㊂ぬきんでるコト、
たう(踢)図けつまづく㊁倒(タフ)れる、
たう(棹)図舟を進むる具、さを、
たう(櫂)図舟を行(ヤ)る具、即ちかい。さほ。かぢのコト、
たう(螳)図虫の名かまきりのコト、
たう(濤)図大なる波(ナミ)のコト㊁波(ナミ)の盛んに起るさまを云ふ、
たう(檮)図木の切りたるかぶ即ち切り株㊁愚(オロカ)なるコト、
たう(蔣)図神佛に祈(イノ)るコト、
たう(擣)図搗(ツク)に同じ、

たう(淳)図水中におちいる、即ち溺(オボレ)る㊁甚だしくぬれる。つかる㊂權和(ヤワラ)なる狀を云ふ、
たう(當)図あたる。ぶつかる㊁抵當(チテイ)、即ち質(シチ)に入れる㊂總て物の底(ソコ)のコトを云ふ、
たう(襠)図女子の上に、はをりて着る衣物、即ちうちかけ㊁下おび。ゆまきのコトを云ふ、
たう(璫)図耳へつけたるかざりのコト㊁玉(タマ)の鳴る聲を云ふ、
たう(蟷)図虫の名、かまきり、「云ふ
たう(暗)図みつむるコト。みはるコトを
たう(鐘)図鐘や太鼓などの鳴る聲のコト「のコトを云ふ、
たう(塘)図池の周圍(マワリ)に在る、つゝみ
たう(討)図うつコト㊁攻(セメ)て殺すコト㊂平(タイ)らぐコト。鎭(シズ)むコト。治(オサ)むるコト㊃たづね、もとむるコト㊄物事の道理などを十分に研(ミガ)き究(キワ)むるコト、
たう(稻)図草の名、いね、
たう(盜)図ぬすび取るコト㊁ぬす人のコトを云ふ、
たう(慆)図嬉(ウレシ)がるコト㊁かくし、なほす㊂勝手氣儘(カツテマヽ)、

たう(酒)図水の盛んに流れ行くさまを云ふ㊁行く。動く㊂物の集ひまるコト、又たあつむコト㊃廣々として大なるさま、

たう(桃)図木の名、もも、

たう(韜)図へつらふコト㊁うたごふコト

たう(鞜)図六韜の韜にて、兵學の極意のコト㊁武器を入れて置く袋のコト㊂包(つつ)むコト。かくすコト。しまひなほすコト、

「トを云ふ

たう(蹈)図足が其處に及ぶ、即ちふむコト

たう(稻)図草の名、とうもろこし、

たう(黨)図組合(クミアヒ)。仲間(ナカマ)㊁村里(ムラ)のコトを云ふ㊂仲間と云ふ意より轉じて、親戚(シンセキ)のコト㊃交(マジ)はる。仲たよくす。親(シタシ)しむ㊄一方にかたよるコト㊅互ひに仲間となりて惡事を爲すコトひよつとしたら、若(モシ)もと云ふ意を表はすに用ゆる語、

たう(儻)図秀(ヒイ)でゝる。こゆる㊁物事の判然せぬ狀を云ふ㊂若(モシ)も殊に依れば、と云ふ意を表はす語㊃にはかに。たちまち、

「云ふ、又は其の目

たう(矚)図目のハツキリと見へぬコトを

たう(讜)図直言。忠言、即ち正しくして爲になることばを云ふ、

たう(撐)図柱(ハシラ)㊁うつぱり㊂棹(サオ)さして舟をやるコト、

たう(撞)図撃(ウツ)つコト㊁鐘(カネ)などを突(ツ)きならすコト、

たう(淘)図流れゆく。流すコト㊁水をかけて清くなす㊂米を洗ふて糠(ヌカ)を去るコト、かしぐ、

たう(綢)図繩(ナハ)をあむ。なふ㊁轉じて繩(ナハ)のコトを云ふ、

たう(幢)図旗(ハタ)㊁鉾(ホコ)につけてある旗㊂垂(ハ)れ下げてある幕(マク)とばりのコト㊃車のほろ㊄轉じておほひかくれてある狀を云ふに用ゆ語、

たう(道)図みち㊁おさめる。治(オサ)む㊂案内する。みちびく㊃反(ソム)かぬ、從ふ㊄手本として用ゆ、

たう(導)図みちびく。教(オシ)ゆる。案内するコト㊁女の髪を結ふに用ゆ一種の櫛(クシ)、即ちけすじ棒(ボウ)のコトを云ふ、

たう(陶)図土を燒きて製せし物、やきものゝすへもの㊁こしらへるコトのかはるコト、即ち變化、㊂うれしがる。よろこぶ。たのしむ㊃又たうれふる意をも表す、

たう(套)図總て物の重(カサ)なり合つてるコトを云ふ㊁かさなるコト㊂長くして大なる狀(サマ)を云ふ、

たう(倒)図横(ヨコ)にするコト、即ちたをすこかす㊁さかさま。さかさまにする㊂從(ツ)きならすコト、

たう(刀)図かたな。きれもの、

たう(舫)図小形(コガタ)の舟のコト、

たう(叨)図みだりなる。みだりに㊁慾ふかく望むコト、即ちむさぼる㊂慾心を果(カ)す爲めに、人を害するコトを云ふ㊃斬る。そこなふ、

「くコト。いたる

たう(到)図達するコト。行きつくコト。屆

たう(逃)図にげるコト。のがるるコト㊁立ち去るコト㊂たすかるコト㊃よけるコト、

「魚とり籠(カゴ)のコト

たう(罩)図竹にて拵へた魚を捕ふる具、

たう(蠶)図陣中にて用ゆる最高最大の旗のコト㊁ばた。ほこ、

たう(戇)図愚(オロカ)にして正直(シヤウジキ)なるコト、即ち馬鹿正直のコト、

たう(撓)図まがる。まくる。屈(カガ)するコト㊁ゆる。動(ウゴ)く。動(ウゴ)かす㊂亂(ミダ)れる㊃引かく、

たう(譏)図大聲を發して呼ぶ、即ち叫(サケ)ぶ。うなる㊁やかましくしやべり立つる㊂遠く云ふ、のゝしる㊃獸などが大聲で鳴くコト、

たう(橈)図弱(ヨワ)きコト。まわらすコト㊁木などを曲(マ)る。たはめる㊂なゑ。くだく㊃入り亂(ミダ)れる。無茶苦茶(ムチヤクチヤ)になる㊄飛び散(チラ)かす。ちる、

たう(鐃)図大きな鐘(カネ)㊁どらのコト㊂かまびすしきコト。やかましきコト。さはがしきコト、

たう(優)図獸類(ケダモノ)の、ふざけたはむるコト㊁犬の佈(ヒロ)れ鬚くさま、

たうあみ　唐網　図打ちあみのコト水面へ廣(ヒロ)げて打つ網、又た投網(トウミ)とも書く、

たうい(擣衣)図きぬにて、衣物をはたくコトを云ふ、又はたきし衣物、

たういつ(滔汨)図谷川などの水の盛(サカ)んに流れ行く狀を云ふ、

たうゐん(堂院)図寺のコト寺院、

たういそくめう(當意即妙)図其の場にて直ちに出る頓智(トンチ)、

たうえい(倒影)図さかさまにうつる影(カゲ)のコトを云ふ、

たうえう(桃夭)図故事にして、よめいりどきのコトを云ふ、

「云ふ

たうえう(盪搖)図うごき、ゆるぐコトを云ふ、

たうえう(陶窯)図陶器(スヱモノ)類を燒くかまどのコトを云ふ、

たうえん(桃園)図桃の多く植えてある處もも畑(ハタケ)のコト、

「コトを云ふ

たうおく(堂屋)図寺の屋根㊁大なる家の

たうおん(唐音)図支那の字音、

たうか(刀架)図かたな掛(カケ)、

たうか(堂下)図堂の下㊁武家の一名、

たうか(道歌)図さとりの歌、おしえの歌のコトを云ふ、

「トを云ふ

たうか(道家)図心學の話をする先生のコト

たうかい(道開)図みちびき、ひらく㊁道路を新たにこしらへるコト、

たうがい(堂該)図或る事柄又は役向の掛り㊁其の事柄(コトガラ)、

たうがう(道號)図入道してつけたる名即ち法名のコトを云ふ、

たうがう(堂號)図堂のとなえ名、家號のコトを云ふ、

「問、道家の學問

たうがく(道學)図悟(サトリ)の道を修むる學

たうかん(盪汗)図れあせのコト、

たうがらし(唐辛)図草の名、四月頃に種を撒き、七八月頃に實の生ずる味の頗る辛(カラ)きもの、

たうき(當季)図このごろ、このせつ、

たうき(當期)図其の時、このごろ、

たうき(黨規)図政黨組合の規則、

たう(討議)図議論するコト、

たうぎ(道義)図道德上のわけがら㊁人の正しくふむべき行ひ、

たうき(當歸)図草の名せり、

たうきう(討究)図十分にきはめるコト。研究(ケンキウ)するコト、

「きびのコト

たうきび(唐黍)図とうもろこし、なんば

たうきよ(逃去)図のがれ去る、

たうきよ(刀鋸)図刀とのこぎりのコトを云ふ、

たうきん(當金)図即金(ソクキン)現金、

たうきよく(當局)図其の物事にあたるコト、即ち當路(トウロ)のコト尙ほ當路(トウロ)の條を見よ、

たうきしやう(陶器商)図陶器を賣買する商人、せともやのコト、

たうぐ(道具)図其の道道(ミチミチ)に使ふ器物(ウツワ)の總稱、

「職人のコトを云ふ

たうぐし(道具師)図種種の道具を拵へる

たうぐや(道具屋)図種種の道具を賣り買ひする商人、

たうくわ(倒戈)図戈(ホコ)をさかさにすると云ふ意より轉じて、裏切(ウラギリ)する、味方に反きて敵に付く、

たうぐわ(陶瓦)図燒きて(くすり)をかけたる瓦のコト、

たうくわ（唐畵）図支那人の描た畵のコト
たうくわい（韜晦）図才智のあるに無きやうにみせかけてるコト。わざとに愚（ヲロ）なる狀をよそふてるコトを云ふ、
たうくわせん（導火線）図みち火のコト㊀轉じて手引原因となりたるコトを云ふ
たうけ（當家）図この家、
たうけ（道化）図滑稽（コツケイ）なる姿（スガタ）㊁おどけて人を笑はす、
たうけ（峠）図又た峠とも書く阪路をのぼりつめたる處の稱㊁山のコト㊂いただきのコト、「じて醫士の稱となる
たうけい（刀圭）図藥を調合する匙（ヒサジ）轉
たうけい（倒景）図夕日（ユフヒ）かげ、夕陽のコトを云ふ、「の教え
たうけう（道教）図支那にて行はれる一種
たうげつ（當月）図其の月、
たうける（道化）自動おどけた仕方をする「（ヲドケ）のコトを云ふ
おどける、
たうげん（讒言）図正しき言葉卽ち直言（ヲタ
たうけん（唐犬）図西洋種の犬、
たうけん（刀劍）図かたなとつるぎ、
たうげん（桃源）図故事にて別天地樂園と云ふコト、「（ヲ）をする役者のコト
たうけがた（道化形）図おどけた狂言（ヲロ
たうご（奎語）図珍（ウヅ）らしからぬ言葉。古くさき話（ハナシ）、「工のコトを云ふ
たうこう（陶工）図陶器を造る人、陶器職
たうこう（刀工）図刀かぢのコト、
たうこく（當國）図其の國、此の國、
たうごん（刀痕）図刀の傷（キズ）あと、
たうざ（堂座）図此の席㊁當分の内㊂此の芝居小屋のコト、
たうさう（逃走）図にげ走る、
たうさん（當山）図此の寺、其の寺、
たうさん（倒産）図破産身代限り、
たうさん（唐棧）図縞（マヲ）織物の名、
たうざちやう（當座帳）図日々の商品の取引金錢の出納等を記し置く商家の帳面の稱、
たうし（唐紙）図支那製の紙、
たうし（島司）図一島地を治めてる最上の役人のコトを云ふ、
たうし（唐詩）図からうた、
たうし（蕩子）図放蕩息子㊁どうらく者のコトを云ふ、
たうし（綯糸）図より糸（イト）のコト、
たうし（倒死）図ゆきだたれ、
たうし（盜視）図見ぬ振（ヲリ）をしてみるコト。ぬすみ見のコト、
たうじ（盜見）図ぬす人　物を取る惡者のコトを云ふ、盜賊（ヲロ）、
たうし（導師）図佛教を說きて、善道にみちびく僧侶㊁葬儀の時の主なる僧侶のコトを云ふ、
たうし（瞳視）図目を見張ってるコト。見張って物を見るコト、
たうし（道士）図道家に同じ、
たうじ（當寺）図此の寺、
たうじ（當時）図今のとき㊁その時、
たうじき（陶磁器）図陶器と磁器、
たうじつ（當日）図その日、今日、
たうしふ（蹈襲）図ふみつぐコト㊁人の行をまねるコト、
たうしや（道者）図打ち伴れ立って神社佛閣を遍歷して歩く人㊁佛門に入り悟を開きつつある人、
たうしや（導者）図案内する人、
たうしや（堂舍）図大なる家と小なる家のコトを云ふ、㊁寺のコト、
たうしゆ（當主）図當代の主人、
たうしゆ（島守）図しまもり㊁島の長官。「トを云ふ
たうしゆ（盜取）図他人の物を盜み取るコ
たうしよ（當初）図さいしよ、こくはじめ、其の物事の生せし時、
たうしよ（島嶼）図しまのコト、
たうしよ（當處）図其の土地、此の土地の

コトを云ふ、
たうしん（刀身）図かたなの身（ミ）、
たうじん（刀刃）図やえば、
たうじん（盜人）図ぬすびと、
たうしん（盜心）図ぬすみごころ、
たうじん（蕩盡）図つかひはたすコト、財產を遊び事に無すコト、
たうじん（唐人）図支那の國の人㊁轉じて諸外國人のコト、「たる人
たうしん（道心）図千供の僧侶㊁佛門に入
たうじん（道人）図佛門に入りて悟を開きし人㊁世を棄て、山間に引き籠りし人、
たうじしや（當事者）図法律語にて、直接（ヲ）に一つの事柄に關係（クワンケイ）してゐる人のコトを云ふ、
たうじやう（堂上）図寺の屋根の上㊁昔時の公家（ケ）のコトを云ふ、
たうしやう（黨庠）図田舍の學校、
たうじやく（瞠若）図驚き呆れて目をみはつてるコトを云ふ、
たうしよく（當職）図總て其の任務（ニンム）にあたれるコトを云ふ、
たうじんまげ（唐人髻）図少女の髮の結（ユ）方にて、結びたる髮の兩端（リヤウタン）を半圓形に爲し、其の半圓形を繫（ツナ）ぎたる横の髮へ、美しき掛物をかける、
たうじんまめ（唐人豆）図なんきん豆のコ「物のコト
たうせい（陶製）図やきものにて造りたるトを云ふ、
たうせい（蹈青）図春の野邊にて摘草（ツミ
なするコト、
たうせい（當世）図現今の世の中、
たうせき（悼惜）図いたみおしみ。かなしみつゝおしがるコト、「を云ふ
たうせき（蹈藉）図足にてふみつけるコト
たうせん（當籤）図くじにあたるコト、くじあたりのコト、
たうせん（當千）図一つ事が千になるコト卽ち勢のするごいコトを云ふ語、一騎當千など、「より出されるコト
たうせん（當選）図えらび出されるコト、
たうせん（當然）図正しかるべき道理、あたりまへのコトを云ふ、
たうせん（陶然）図心持よく酒に醉ふたと云ふ有樣、ほろ醉きげん、
たうぜん（瞠然）図おどろひて目を見張りたるかたち、「の選に當つたる人
たうせんにん（當選人）図選擧されて、其すコトを云ふ、
たうそく（黨則）図政黨の規定、
たうそく（道俗）図僧侶と俗人、
たうぞく（盜賊）図ぬすびと、
たうそしん（道祖神）図道路を守らせらるゝ神、さへのかみ、
たうた（淘汰）図ふるひおとす、
たうだい（當代）図當世のコト㊁轉じて現今の主人、
たうたい（導體）図物理學の語にて、熱或は電氣を、容易に導き傳ふ物質の總稱、
たうたう（陶陶）図驕嬉しきさま。樂（ラク）しき狀のコトを云ふ、
たうたう（堂堂）図堂々しつばなコト、物事の盛な狀（ヤウ）を云ふ、
たうたう（滔滔）図水の盛に流れる容子㊁辯舌のさはやかなるコトを云ひ表はす語、
たうたつ（利達）図いたりたつす、卽ち勢のするごいコトを云ふ語、
たうたつ（逃脫）図ぬけてにげる、
たうたふ（韓鼓）図海の波の盛んに立つ音のコト㊁鐘の鳴る聲のコトを云ふ、
たうたどり（田歌鳥）図ほとゝぎすの一名
たうち（當地）図この土地、
たうち（倒置）図さかさまに置く、
たうち（島地）図嶋國のコト、
たうち（湯治）図温泉に入りて、病氣を癒すコトを云ふ、
たうちう（道中）図旅（ヲ）のコト、
たうちは（湯治場）図温泉の湧き出でゐる處のコトを云ふ、

たうちうき(道中記)図旅日記(クヒヒ)紀行文(ブンシヤウ)のコト。

たうちやう(道場)図寺のコト㊁武術の稽古(ケイコ)のコト。

たうちやく(到着)図人又は物の屆き着(ツク)コトを云ふ、

「を云ふ、

たうちよく(當直)図とのゐ、當番のコト

たうちりめん(唐縮緬)図縮緬に似たる唐糸(イトヒ)織物の名、

たうちうづゑ(道中圖繪)図旅行案内の地理と名所の詞を書きたるものゝコトを云ふ、

たうちうすどろく(道中双語六)図東海道五十三次を描きたる双語六の遊戯(ユウギ)のコト、

たうてい(到底)副どどのつまりは㊁所詮(セン)と云ふ意を表はす語、

たうてい(道程)図道の里(リ)、

たうてん(當店)図この店、手前どもの店のコトを云ふ、

「り

たうてん(唐天)図トウビロードの略語な

たうど(陶土)図陶器を作る上等の粘土(ネンド)のコトを云ふ、

「を云ふ

たうとう(刀豆)図豆の一種ナタ豆のコト

たうとう(到頭)副つまり、つまるところ。おちつくところ、

たうとく(逸匿)図のがれかくる、

たうとく(道徳)図人たるの道、卽ち完全せる正しき行のコト、

「云ふ

たうとつ(唐突)図だしぬけ、

たうなす(唐茄)図かぼちや、なんきんのコトを云ふ、

たうなん(盜難)図盜賊の難に遭ふコト。

たうにん(桃仁)図桃の核(カク)より製したる藥の名㊁ものされ、

たうによびやう(糖尿病)図小便の中へ身躰中の砂糖分が交(マジ)つてゐる病氣の名、

「を云ふ

たうねつ(闇熱)図極めて賬(ネツ)ほふコト

たうねん(當年)図其の年、

たうのいも(唐芋)図紫芋とも書く、あか芋、やつ頭のコト、

たうは(黨派)図くみ、なかまのコト、

たうは(蹈破)図ふみやぶる、

たうは(湯婆)図湯タンポ、

たうは(刀鋒)図刀のつか、

たうは(道破)図云ふてのける、云ひやぶるコトを云ふ、

たうはい(刀背)図刀のみね、

たうばつ(跋閥)図黨派の者が力を合して他の黨派に向ふコト、

たうばつ(討伐)図敵をうちころすコト㊁

攻めたてるコト、

たうばつ(盜伐)図悪者を征伐するコトを

たうはん(刀瘢)図刀傷のあと、

たうばん(當番)図勤に當るコト、

「ふ

たうばさみ(唐鋏)図木ばさみのコトを云

たうび(當否)図あたる、あたらぬ㊁何れともつかぬ、

たうび(繻絹)図家のかまち、

たうひ(逃避)図にげまける、

たうひつ(唐筆)図支那で製したる筆のコトを云ふ、

「のコト

たうびん(湯瓶)図湯を沸(ワカ)す物、やかん、

たうびろうど(唐天鵞絨)図織物の名、外國產羊毛にて、本天の如く織りし物、

たうふ(蹈舞)図足の調子(チヤウシ)を揃へて踊(オド)るコト、

たうふく(當腹)図本妻の生し子、

たうぶつ(唐物)図諸外國の輸入せる雜貨及び吳服類の稱、

たうぶん(當分)図暫らくの間、

たうへんぼく(唐瓊木)図馬鹿よ、間抜(マヌケ)と人を嘲(ワラ)ける俗語、

たうぼう(刀鋩)図刀のきつさき、

たうぼう(逃亡)図にげかくれる

たうぼく(唐墨)図支那で製したる墨のコトを云ふ、

たうほん(逸奔)図にげはしる、

たうほん(唐本)図支那より渡り來たつた書物㊁支那製の書物、

たうまる(唐雞)図雞の種類にて其の形大きく尾の極めて短かきもの、

たうみ(唐箕)図農具の一種にて、米と糟(カス)とを分る道具、

たうめ(專女)図老人の女子を云ふ、

たうめん(當面)図眼の前に現はれる事柄差しあたりたる事柄、

たうめうじ(道明寺)図食物(クモツ)の名にてほしゐ(糒)のコト、

たうめうじみそ(道明寺味噌)図味噌の一種にて、上等の赤味噌一杯半を、裏越(ウラゴシ)にし、道明寺ほしゐ一杯と、砂糖一杯を加へ、團子(ダンゴ)に作り蒸(ム)たるもの

たうゐく(瞳目)図みつむる。目を張る、

たうや(陶冶)図人を教えて善き人物となすコトを云ふ、

「のコトを云ふ

たうゐり(堂守)図堂を守る人。寺の番人

たうゐめん(唐木綿)図キャラコ木綿のコトを云ふ、

たうや(當夜)図其の夜(ヨル)、

たうよ(黨與)図くみあい、なかま、

たうよう(盜用)図人の物を盜んで使用するコトを云ふ、

たうらい(到來)図いたりきたる㊁物なもらふたコトを云ふ、

たうらい(當來)図來るべき時節、

たうらう(蠟蛆)図虫の名、カマキリ虫のコトを云ふ、

たうらく(道樂)図或る事に心を奪れ耽(ホウ)るコト㊁戀しき遊事に耽るコトを云ふ、

たうらん(濤瀾)図大なる波(ナミ)、

たうり(桃李)図ももさすももものコト㊁轉じて何れ劣(オトラ)ぬ才子と云ふコト、

たうり(棠梨)図りんごの木のコト、

たうり(當理)図理の當然、

たうり(道理)図正しきわけがら、正しきすじみちのコトを云ふ、

たうりう(當流)図我れの方の流儀、

たうりん(桃林)図桃の林、

たうろ(當路)図そのみち㊁大切なる道にあたる卽ち官邊(クワンヘン)のコト、

たうろ(道路)図かい道、おうらい、

たうろん(討論)図意見を述べ合ふて其長否を論議するコト、

たうろしや(當路者)図天下を治むる大事な役向にゐる人、

「コトを云ふ

たうわ(道話)図おしえの話㊁心學の話の

たうわ(陶泓)図硯(スズリ)のコトを云ふ漢名、

「思案のつかぬコト

たうわく(當惑)図とほうに暮れるコト。

たうわん(陶碗)図茶わんのコトを云ふ漢名、

「云ふ語

たうん(朶雲)図人の手紙を敬(ウヤマ)まいて

(ただえ)

たえき(唾液)図口中(コウチウ)より出る汁(シル)卽ちつばのコトを云ふ、

たえず(不絶)図とぎれぬコト、つづくコト、平常(ヒラツネ)のコト、

たえす(絶)自動たえつくす、

たえて(絶)副殊更(ホコラ)に、少しも、

たえま(絶間)図とだえてる間、

たえん(楕圓)図圓くして長き形(カタチ)、卽ち正(マメ)しき卵形(タマゴガタ)、

たえだえ(絶絶)形絶えなんとして絶えすあるさまを云ふ、

たえはつ(絶果)自動絶え切つたる、㊁轉じて死す、㊂無くなる、

(ただおを)

たをさ(田長)図田地を取り締(シメ)つてるつかさのコトを云ふ、

たおひ(駄賃)図馬(マ)の尻(シリ)に掛(カケ)る賃(ヂン)ひ物のコトを云ふ、

たをる(手折)図手にて物を折(ヲル)、

だおろし(駄卸)図駄(ダ)にて卸賣をするコト㊁大おろしのコトを云ふ、

たをやめ(手弱女)図女のコト㊁やさしくしなやなる女子のコト、

(ただか)

たか(鷹)図鳥の名、猛禽科に屬する勢ひの殊に鋭(スル)どき鳥、

たか(高)図物の一纏(マトヒ)さなしたる(かさ)のコトを云ふ、

たか(高)(接續)或る名詞(メイ)の頭に冠(カブ)らせて、其の事柄(ガラ)のたかきコトを云ひ表(アラ)はすに用ゆる語、假令ば(高下駄)など、

たが(箍)図輪のコト、卽ち竹を裂(サ)て綰(カラ)れて輪となしたるもの、凡て圓き器(ウツワ)の崩(クヅ)れぬ爲めに、箍(ハヅ)るもの(桶のたが)、

たが(誰)㊁だれが、どの人か、

たかあし(高足)図子供の乘るなる竹馬(ウマ)の一名、「下駄(ゲタ)のコト

たかあしだ(高足駄)図高き齒のついてるコト

たかい(他界)図他の世界と云ふ意にて、此の世を離(ハナ)れる、卽ち死するコトを云ふ、「トを云ふ

たかいびき(高鼾)図いびきの聲の高きコト

だがら(惰傲)図おごりに耽(ホケ)りて、はたらかぬコトを云ふ、

たかえみ(高笑)図大聲(ゴエ)にて笑ひ興(ケウ)する。大笑ひのコト、

たかかけ(籠掛)図桶(オケ)へたがを箍(ハヅ)るコトを云ふ、

たかがり(鷹狩)図鷹(タカ)を使(ツカ)ひて狩(カリ)をするコトの稱、

たかき(高城)図丈のたかき垣、

たがく(多額)㊁分量の多きコト㊁物の澤山(タクサン)に在るコト㊂かさの多きコトを云ふ、「の略

たかく(多角)図角(カド)の多きコト多角形

たかくさ(高草)図刈りた草の高く積み上られたるを云ふ、

たかくなりぜいしゃ(多額納稅者)図多額納稅議員となるべき資格の欠(カク)さず備はつてる人㊁多くの國稅を納める人

たかくなりぜいぎいん(多額納稅議員)図多額納稅者が互ひに投票(トウヒ)して、選出し而して勅選(チヨクセン)せられたる貴族院議員のコトを云ふ、

たかげた(高下駄)図あしだに同じ其の條の見よ、「聲のコトを云ふ

たかごえ(高聲)図大聲・調子(チヨウシ)の高き

たがさ(田笠)図田植(エタ)の時にかぶる笠のコトを云ふ、

たかさご(高砂)図謠曲の名・めでたき席にて唄(ウタ)ふ小唄の名、

たかさじき(高棧敷)図相撲(スマウ)場などにて高く造(ツク)られたる棧敷のコトを云ふ、

たかし(高)㊁上の方へ延(ノビ)てる㊁立つてる物の長さ㊂位(クラヰ)のすぐれる㊃其の人の氣前(キマヘ)のたつとき㊄直段(ネダン)の安くなき㊅調子の强き事㊆功(ヰガ)などの知れる、「らす役向の人

たかし(鷹師)図鷹狩に用ゆる鷹を飼ひな

たかしほ(高潮)図滿潮(ミチシホ)の常よりも甚しきコト㊁海嘯(ウナ)のコトを云ふ、

たかしまだ(高島田)図女子の髮の結(ユ)ひ方の一種、高く結ひたる島田髷(マゲ)のコトを云ふ、「を飼(カ)ふ役の名

たかじゃう(鷹匠)図鷹狩(カリ)に用ゆる鷹

たかしまいし(高島石)図多くは上等の硯(スズリ)に製せらるゝ、色黑くして光澤(ツヤ)あり、且つ其の質の極めて細かく硬(カタ)き石、近江(オウミ)の國高島郡地方より、多

く産出するに依りて此の名あり、

たがすねと(高砂)図海岸などに砂(スナ)が波(ナミ)に寄せられて自然に積(ツモ)上りしもの、「略

たかせ(高瀨)図川の淺瀨(アサセ)㊁高瀨船の

たかせぶね(高瀨船)図和船の一種にて、底(ソコ)の平にして、淺き平(ヒラ)つたき船を云ふ、

たがそで(誰袖)図昔時用いしにほひ袋の一種、細にて二つを連ねてたもとおとしとなせるもの、

たかだい(高臺)図土地の高き處、

たかだか(高高)副十分に物の積み重ねられてあるさまに云ふ、

たかだんし(高檀紙)図紙の名、檀紙の表面に小雜(コヅル)を表(アラハ)したるものにて和紙の上等のもの、

たかたかゆび(高高指)図中指(ユビ)卽ちたかゆびのコト、五本の中にて一番に高きより此の名あり、

たかつき(高坏)図足のついてある丈(タケ)の高き菓子盆(ボンブン)、

たかつくえ(高机)図丈(タケ)の高き机のコト。テーブル、

たかてとて(高手小手)図人を殊に嚴(ヒヒ)しく縛(シバ)りたるコト、

たかどの(高殿)図二階又は三階建(タテ)の家屋のコトを云ふ、

たかとび(高飛)図鳥などの空中に舞(マヒ)を云ふ㊁惡者が其の筋の捕總(ホソウ)を逃れん爲めに遠力へ逃(ニゲ)げ行くコトを云ふ、

たかどま(高土間)図芝居小屋の桟敷(サジキ)の下の場處を云ふ、京阪地方にては出

たかなみ(高涙)図高き涙、荒き涙(ナミダ)のコ

たかなわ(高縄)図小鳥(コトリ)を捕ふるに用ゆる縄(ナハ)にて、細き縄にトリモチを塗り附けて、高く張つて置くもの、稱、

たがぬ(綰)(他動)つかぬ。たばれる、

たがね(鏨)図はがねのみにて造(ツク)りたる鑿(ミ)のコトを云ふ、「トを云ふ

たかね(高直)図高き代價㊁直段の高きコ

たかね(高音)図高きおと、强き調子(チヨウシ)のコトを云ふ、

たかね(高根)図又た高嶺(タカネ)とも書く高き山の峰(ミネ)のコト、

たかの(鷹野)図鷹(タカ)を使ひて狩する場處のコトを云ふ、

たかのつめ(鷹爪)図上等の抹茶(マツチヤ)の稱

たかば(鷹場)図鷹野(タカノ)に同じ、

たかばた(高機)図織物をなす機(ハタ)の一種にて、高さ一丈五六尺あり、上に縱横(タテヨコ)の木を渡せある物、重(モ)に綾錦(レンキン)を織るに用ゆ、

たかはら(竹原)図竹の多く生じてる處、竹林。たかむら、

たかはり(高張)図高張提灯(チヨウチン)、

たかはりき(竹篞)図土間(ヒマ)などを搗(ツ)くに用ゆる篞にて、竹の細き枝を束(タバ)ねて造りたる篞、「るコトを云ふ

たかばなし(高話)図高き聲にて物語をす

たかはりちようちん(高張提灯)図竿(サオ)の尖(サキ)に提灯を高くつけたるもの、稱、

たがひ(互)図双方(ホウハウ)㊁一所(シヨ)に事を爲すコト㊂代(カハ)り合つて仕事をするコトを云ふ、「てるコトを云ふ

たがひ(違)図異(ハ)なる、そむく、まちが

たかひく(高低)図高き處と低(ヒク)き處、デコボコのコトを云ふ、

たがひに(互)副かはるがはる㊁共々に㊂かたみにの意、「がひたる所の稱

たがひめ(違目)図異(ハ)なりたる部分ち

たがひせん(互先)図圍碁の語にて代り番に先手(チセン)を打つコト、

たがひちがひ(交互)副双方よりたがひに

入りちがひになつてるさまを云ふ、

たがふ(違)圖ちがつてるコト、ことなつてるコトを云ふ、

「す、そむく

たがふ(違)自動其の道りにせぬ、ちがはせぬ、ちがはに

たがふ(違)他動ちがふやうにする㊁其れに從(シタ)がはぬやうにする、そむかす、

たかふる(高)自動白慢(ジマン)する、ほこる

㊁えらばる、

たかふだ(高札)圖入札(ニフサツ)中での一番に價(アタヒ)の高き札㊁丈(タケ)の高き建札(ケンサツ)のコト、

たかべい(高塀)圖丈の高き塀(ヘイ)のコト、

たかぼり(高帽)圖山高(ヤマタカ)帽子、

たかほこ(鷹矛)圖狩(カリ)に用ゆる鷹を止(ヤ)らせ置く擅木(モラヒ)の如き棒のコトを云ふ、

「トを云ふ

たかぼうし(高帽子)圖山の高き帽子のコト

たかまる(高)自動たかくなつてゆく、あがりゆく、

たかまくら(高枕)圖安らかに能く眠(ネム)るコト、㊁丈のたかき枕、

たかまきえ(高蒔繪)圖木地より高く盛り上りたるやうに施(ホドコ)したるまきえ、

たかまがはら(高天原)圖諸々(モロ)の神のゐらせたまひし所、又たゐらせる處の稱、

たかみ(高處)圖高き場所(バショ)のコトを云ふ、

「卽ち玉座のコト

たかみくら(高御座)圖天皇の御座所(ゴザ)

たかむ(高)他動たかくする㊁強くする㊂すぐれてる、

たかむら(篁)圖竹藪(ヤブ)のコト、

たかむしろ(竹蓆)圖竹を細く削(ケズ)りて、叩(タタ)きて軟(ヤワカ)くして編(ア)みし蓆(ムシロ)の稱、

「き山阪路のコトを云ふ

たかもり(高盛)圖飯碗に飯を山高(ヤマタカ)に盛るコト、又盛りしめし、

たかや(鷹屋)圖鷹狩(カリ)に用ゆる鷹を飼ひ置く小屋(ヤ)のコト、

たがやし(耕)圖たがやすコト、

たかやす(耕)自動田地や畑を堀り返して作り物をする、

「ふ

たかやま(高山)圖高くして大なる山を云ふ、

たがやさん(鐵刀木)圖熱帶地方に產する木、其の木質(モクシツ)は石の如く堅(カタ)く色は黑色(コクシヨク)にして、光澤(ツヤ)ありて、種々の器具を製す、

「たかくかける

たかゆく(高行)他動空中を高く飛びゆく

たから(寶)圖殊に大切なる物、總稱㊁種類の少なき物㊂子供を家の寶(ハウタカ)として云ふ語(子寶)、

たからかひ(寶貝)圖滑(ナメ)らかなる細長き貝にて縱(タテ)に長き一條の孔(アナ)あり孔の兩側に齒の如きギザギザありて、一面に種々の色取(イロドリ)を爲したる紋形(モンケイ)ありて美しきもの、

たからふね(寶船)圖寶と七福神とを載(ノ)せたる船㊁此の船の狀(カタチ)を畫きしもの一月の元日に之を枕の下に敷きて幸福を祈る、

たからづくし(寶盡)圖模樣の名にて、丁子(チヤウジ)や珠(タマ)や、打出槌(ウチデノヅチ)などの、寶物を多く取り合せて染めたる模樣(モヨウ)、

たからのやま(寶山)圖寶物が澤山に在(ア)る山と云ふ喩(タトヘ)の語㊁轉じて利益を澤山に得られる時と云ふ意味、

たからのくらゐ(寶位)圖天子の御位(ゴイ)の事を申す、

たからのもちぐされ(寶持腐)圖直打(ヒタウ)ある物、利益の多く生ずる物を持ちながら、其れを利用して利益を生ぜしめ、又は直打を出さすコトを知らざる、又はなさざるコトを云ふ語、

「る

たかる(集)自動あつまる。多く寄(ヨ)て來

たかる(抱)自動いだきかかえられる、身躰(カラダ)をまかせる、

たかわらひ(高笑)圖聲たからかに笑ふコト、

「云ふ

たがん(紀顏)圖酒に醉つてる顏のコトを

たかんしやく(多汗症)圖病氣の名、常に胸(ムネ)腹(ハラ)寓(シツタイ)腹(モト)の邊より、臭氣(クサ)を帶びたる汗(セ)の出る病氣のコトを云ふ、

(ただき)

たき(瀧)圖高き處より、急に水の流れ落るもの㊁水瀨(ミセ)の急なる川のコト、卽ち荒き谷川(ヤガハ)、

たき(多技)圖樂々(ラクラク)の技藝(ギゲイ)に達してるコト、又は其の人、

たき(多岐)圖澤山(タクサン)に分れてる道(ミチ)のコト。多くのえだみち、

だき(情氣)圖なまける氣㊁怠(ナマケ)る心、

たきあかし(焚明)圖たいまつ、

だきあひ(抱合)他動互ひにかかえ合ふ。双方よりかゝへる、

だきう(打球)圖だきふを見よ、

たきおとし(焚落)圖木の燃(モ)つくして、火となりし物、

だきおもたか(抱澤潟)圖紋所の名、おもたかの葉を左右より抱き合せし形に、

たきが(瀧)圖高き處より、急に水の流れ落るもの㊁水瀨(ミセ)の早き川のコト㊂谷川のコト、

たきがら(焚空)圖木を焚きて燃(モ)え盡したるかす、もえがら、

だきかかえ(抱抱)圖だきかかふ、

だきかかふ(抱抱)他動かかえ持つ、

だきかしは(抱柏)圖紋處の名にて、柏の葉が左右より抱(ダ)き合ふてる狀(サマ)を描(エガ)きし紋を云ふ、

たきぎ(薪)圖物を煮(ニ)る爲めに、焚(タキ)す木㊁わりき、まき、

「るを云ふ

たきぎつく(薪盡)自動佛法の語人の死す

たきぐち(瀧口)圖昔時藏人所(クラウド)に屬して御所を守れる勇士の稱、

たきくゆらす(焚薰)他動香をたきて其の香氣(カウキ)をかぐ、

だきこむ(抱込)他動かかへこむ㊁仲間へ引き入れる㊂咏方(ウタカ)につける。自分に從はせる、

たきだし(焚出)圖水火の災害(サイガイ)ありし時に、其の災民を救ふべく爲めに、多くの飯米を炊(タ)きて、與ふるコトを云ふ又は其の飯(ハン)、

たきだし(炊出)圖焚出(タキダ)に同じ、

だきしむる(抱緊)他動かたくだきつく。

だきつく(抱付)圖いだきつくコト、

たきつく(焚付)他動火をもやしつける㊁轉じておだてる、そそのかす例合ば焚付て怒(オコ)らすなど、

たきつけ(焚付)圖火を薪(タキギ)に燃(モ)え移さすべく爲に用ゆる燃え易(ヤス)き材料のコトを云ふ、

たきつぼ(瀧壺)圖瀧の落つる、其の下の處の深き場處の稱、

たきどの(瀧殿)圖廣き庭園に設けたる瀧の畔(ホトリ)に建てられたる家、

たきとむ(抱留)他動いだきかかえてとむ

たきとめる(抱止)他動かかえてとめる、

だきぬ(抱疑)圖かかえて臥(フ)る㊁男女のそびぶしのコトを云ふ、

たきのいと(瀧絲)圖瀧の落る狀を白糸にみたてゝ云ふ語、

「トを云ふ

たきび(焚火)圖もやす火㊁かがり火のコ

たきふほう(多級法)圖單級法に對しての語、學力に應じて級(クミ)を分ちて、教(オシ)ゆる仕方(ヤルカ)を云ふ、

たきふ(打球)圖一種の遊戲、數人が馬に乘り、竹の端(ハシ)に網(ア)の付けられたる物を持ちて、地上に轉(ヨ)げてる紅白の球(タマ)をすくひ取りて、一定の場處に

設(クモ)けある、穴(ナ)へ投げ入れて勝敗を爭そふ遊び、「コト

たきふ(打球)圖櫓圓形を爲してゐる球の

たきまくら(瀧枕)圖瀧の落ちてゐる畔の宿(ヤド)に泊るコト、

たきみよりが(抱若荷)圖紋處の名にて、若荷の子を左右より、抱き合したる形に描きし紋、「トを云ふ

たきもの(焚物)圖薪(ハキヽ)及び柴(ハシ)のコ

たきもの(薫物)圖總て火にくすべて香氣を發さす香の物の稱、

だきもり(抱守)圖子供を抱きて、守(モリ)をするコト、又た其の人、

たきやう(他行)圖我家より他へ出掛(ヤカ)て行くコトを云ふ、

たきやう(他鄕)圖異(ヒト)なりたる土地、卽ち他國のコト、

たきらかす(滾)他動にたたせる、

たきる(滾)自動煮(ニ)きたる物の煮(ニ)だつ㊁心がいらたつ、

(ただく)

たく(濯)圖洗ふコト。ゆすぐコト㊁つやあるコト㊂光りかゞやくコト㊃樂(タノ)しくあるコト、

たく(託)圖まかすコト依賴(イラ)するコト㊁よす。よる。たよる㊂かこつける㊃かゝりてゐる卽ち寄留(キリ)する㊄其れとなく知らせるコトを云ふ、

たく(拆)圖引きさくコト。切り開(ヒラ)くコトを云ふ、

たく(綽)圖疾足(ハヤア)にて走るコト、

たく(拓)圖土地などをひらく㊁智惠(チエ)を ひらく㊂廣きコト、

たく(擇)圖よる。えらぶコト、

たく(柝)圖ひやうし木のコト㊁ひやうしぎを打(ウ)くコト、

たく(喙)圖食ふコト。ついばむコト㊁くちばしのコト、「に精を出すコト

たく(琢)圖玉をみがく㊁轉じて學問など

たく(櫜)圖小さき袋(フクロ)㊁藁(ワラ)にて作りたる袋卽ちふご㊂ふいがうのコトを云ふ、

たく(鐸)圖竹の皮のコト、

たく(鑃)圖風鈴(フウリン)の如く製せられたる柄(エ)の付いてる鐘(カネ)、振つて鳴らすもの、

たく(澤)圖さは㊁つやのあるコト㊂めぐみにうるほふコト㊃ゆたかなるコト、

たく(卓)圖つくえ㊁凡て四本足の付いてゐる臺(ダイ)㊂高きコト㊃ぬきん出てるコト、

たく(踔)圖馬術の語にて、馬の足並(アナミ)が急(イソ)になりたるコトを云ふ、

たく(宅)圖人の住(ス)む家、やしき(邸宅)㊁つか。あな㊂きまる、さだむ、

たく(磔)圖身躰(カラダ)を引き裂く刑罰(ケイバツ)卽ちはりつけ㊁さく、

たく(謫)圖其の罪を糺(タダ)して島流(シマナガシ)にするコト㊁とがむるコト、

たく(濁)圖にごつてるコト㊁轉じて正し からぬコトを云ふ、「るコト

たく(諾)圖承知(ハウチ)するコト、引き受け

たぐ(綰)圖髮をかき上るコト㊁手綱(ハツナ)をあやつりて馬を進む、

たく(抱)(他動)だきかかへる㊁いだきつく㊂引き入れる、仲間にする、

たく(煮)(他動)物をにる、

たく(焚)(他動)火をつけて物をもやす㊁硬(カタ)き物を火にかけて軟(ヤワラ)かにする、

たくあし(踔足)圖馬術の語、馬の足並(アナミ)の早くなりたるコト、

たくあん(澤庵)圖たくあん漬の略語㊁香の物次の條を見よ、

たくあんづけ(澤庵漬)圖大根の葉を取り去りて、七八日間(カン)干(ホ)して軟(ヤワ)らかくなしたる物を、鹽と糠(ヌカ)にて漬

(ウ)し物を云ふ、

たくいつ(卓逸)圖極めてすぐれてるコト 秀(ヒイ)でゝるコト、

たくえつ(卓越)圖まさつてる、

たくおん(濁音)圖ガバなどの如きにごる音のコトを云ふ、

たくかう(卓行)圖他人にまさりたる行(コウヒ)のコトを云ふ、

たくきよ(擢擧)圖ぬきんでてあげ用ゆる 引きぬきて用ゆるコト、

たくきよ(謫居)圖罪(ツミ)せられて遠鄙な 土地に住ゐ居るコト㊁島流(シマナガシ)にされるコトを云ふ、

たくだ(橐駝)圖らくだのコト、

たくけい(磔刑)圖刑罰の名はりつけの刑 のコトを云ふ、

たくけん(卓見)圖すぐれたる見識(ケンシキ)の「コト

たくけん(謫譴)圖重き位に在る人が罪(ツミ)せられるコト㊁罪せられて島流に あはされるコトを云ふ、「言葉(ハヨウ)

たくげん(託言)ことづけかこつけて云ふ

たくげん(諾言)圖受け合ひたコト承知せし言葉を云ふ、

たくご(卓午)圖晝(ヒル)の十二時卽ち正午(ゴヒル)のコトを云ふ、

たくこう(卓効)圖ぬきん出たるてがら。

たくこう(卓効)圖いちぢるしき効能(コウノウ)のコトを云ふ、

たくこう(濁醪)圖濁酒に同じ、

たくこん(濁混)圖にごつてどろ〳〵になつてるコトを云ふ、

たぐさ(手草)圖竹のコトを云ふ、

たぐさ(田草)圖田の中に生じて稻を害(ソコナ)ふ草のコト、「罪狀のコトを云ふ

たくざい(磔罪)圖はりつけの刑にあたる

たくさつ(磔殺)圖はりつけにして殺すコトを云ふ、

たくさん(澤山)圖物の多き狀に云ふ語、

たくさつき(多草月)圖陰曆の五月の別名

たくし(托子)圖茶たく茶だい、

たくし(卓子)圖つくえ(机)、

たくじ(卓爾)圖凡て物事にすぐれてゐる さまに云ふ語、

たくしき(卓識)圖すぐれたる智識(チシキ)、

たくしや(宅舍)圖すみ家、家(イヘ)、

たくしや(澤瀉)圖草花の名、オモダカに 同じ、

たくしゆ(濁酒)圖にごり酒どぶろく、

たくしゆつ(擇出)圖えり出す、えらび出 すコトを云ふ、「られたる所

たくしよ(謫所)圖流罪に依りて、追ひや

たくしよく(澤色)圖つやのコト、色つや のコトを云ふ、

たくしよく(拓殖)圖荒地(アレチ)を開くコト と、人民を移して開墾(カイコン)さするコト を云ふ、「す、鳥などへ

たくす(謫)(他動)とがめる、つみする、なが

たくす(託)(他動)まかせる、かこつける、たのむ、ことづける、

たくす(諾)(他動)承知する、うけがふ、

たくする(濁)(自動)にごりたる水、

たくせい(柝聲)圖ひやうしぎを叩(タタ)く 音(オト)のコトを云ふ、

たくせい(濁聲)圖にごりたる聲、

たくせい(濁世)圖世の中のにごれるコト ㊁浮世のコト、「ぐれたる考(カンガヘ)

たくせつ(卓說)圖ぬきんでたる意見、す

たくぜつ(卓絕)圖殊にすぐれてるコト。 秀(ヒイ)てあるコト、

たくせん(託宣)圖神のおつげ、おしらせ のコトを云ふ、

たくせん(謫遷)圖朝廷の重き役人が止(ヤメ)られて、遠鄙(ヒナ)な土地へ、追(オ)ひ 遣れるコトを云ふ(左遷)、

たくぜん(卓然)圖すぐれて高き狀(サマ)を 云ふ語。秀(ヒイ)でゝる狀(サマ)、

たくせん(謫仙)圖すぐれて詩を善く作る

人を云ふ、

たくそう(託送)圖たくし送ることづけ送るコト。單に送るコト、

だくだく(濯濯)圖牛馬犬豚などの家畜(カチク)が善く飼(カヒ)れて、肥(コヤ)え太りて其の毛色(ロイ)の、つやつやしきさまを云ふ語、

だくだく(諾諾)圖是非(ゼヒ)善惡(ヨシアシ)の區別なく、人の云ふ通りに從つて、我が意見を述(ノ)ぬコトを云ふ、

たくだし(櫟駄師)圖庭(ニハ)をつくる職人、卽ち植木屋(ウヱキヤ)のコト、

たくち(宅地)圖田畑に對しての稱、住宅を建(カン)べく用ゆる地面、

たくち(拓地)圖荒地(アレチ)を開きて、田畑となすコト、

たくなり(櫟囊)圖小さな袋、

たくぬつ(車拔)圖すぐれぬきんでる、

たくぬつ(擢拔)圖ぬきんでるコト㊁秀(ヒイ)るコト、

たくはつ(托鉢)圖尼坊主(アマボウズ)の鐵鉢(ハツ)を持ち、人家に就きて、米又は錢を乞ふコトを云ふ、

たくはん(澤畔)圖澤(サハ)のほとり、

たくばん(宅番)圖家の番人、

たぐひ(類)圖同じ種類の物㊁なかま、くみのコトを云ふ、

たくひ(掉尾)圖最後に勢を大ゐに振ふこと。「とを云ふ

たくひ(擇皮)圖竹の皮のコト、「トの毛色(ロイ)の、つやつやしきさまを云ふ語、

たくひ(諸否)圖承知するか、せぬかのコト、

たぐふ(類)自動そふ、によふ、ならふ、

たぐふ(類)他動同じやふにする、似(ニ)らせる、まれる、まれす、

たくぼく(啄木)圖鳥(トリ)の名、きつつき、

たくぼくてう(啄木鳥)圖鳥の名、きつつき、

たくま(琢磨)圖玉をみがきて光を出すコト㊁轉じて學問を勉強して智能(チノウ)をつくるコト、

たくまし(逞)圖勢(イキホヒ)を強く振ふありさま。強くあり。りりし、

たくみ(工匠)圖凡て相當(ソウタウ)の器械を用ひて物品を製造する職人の總稱㊁木材を用ひて、家其他の物を製する職人のコト、卽ち木工(モクコウ)大工(ダイク)など、

たくみ(工)圖又た巧の字をも書く、かんがへ工夫(クフウ)するコト㊁物事をくわだてる㊂仕事する、こしらへるコト㊃物事をいとなむに其の仕方(シカタ)の殊に上手(ジヤウズ)なるコト、「のコトを云ふ

たくみどり(巧婦)圖鳥の名、みそさざい

たくみのかみ(內匠頭)圖內匠寮の長官のコトを云ふ、

たくむ(工)他動又は企とも書く、工夫(クフウ)をこらす㊁一心に考(カンガ)える㊂いとなむ。こしらへる、

たくやく(藥籠)圖ふゐごのコト、

たくやく(諾約)圖承知したちかふコト

たくらう(濁醪)圖確(カク)とひき受るコト、

たくらく(卓拳)圖取分(トリワケ)て秀(ヒイ)づるコトを云ふ、

たくらく(拓落)圖おちぶれはてる㊁ふしあはせのコトを云ふ、

たくらふ(較)他動くらべ合す、

たくらみ(計畫)圖たくみ、くわだてるコトを云ふ、「わだつる

たくらむ(計畫)他動たくみいとなむ㊁く

たくらん(濁亂)圖にごりみだれる㊁物事の無茶苦茶(ムチヤクチヤ)になりしを云ふ、

たぐり(嘔吐)圖へどのコト、

たくりつ(卓立)圖ぬきんでて立つ、

たぐりとむ(手繰込)他動系などをたぐる「引き出す

たぐりて卷く、

たぐりだす(手繰出)他動たぐつて出す、

たぐる(手繰)圖系などを、手にてくりて引き寄せるコト、

たくれつ(拵裂)圖さけわれる、

たぐろ(田畔)圖田と田の間(アヒ)に在るあぜ道のコト、

たくろち(濁涙)圖洪水(コウズイ)の時に濁(ニゴ)りたる水にうつ涙(ナミダ)のコト、

たくろん(卓論)圖すぐれたる議論、

たくわ(多寡)圖多きと少なきと、

たくわい(打壞)圖うちこわすコト、

たくわく(拿獲)圖敵の物を取りおさえる分捕(ブンドリ)、卽ち捕拿(ホダ)、

たぐわし(駄菓子)圖やす菓子、粗末なる菓子のコトを云ふ、

たくわへ(貯)圖金錢物品などをためるコト、又はためたるもの、

たくわん(兌換)圖紙幣を金銀貨にかゆるコトを云ふ、

たくわんきん(兌換金)圖紙幣と引きかへべき金貨(クワクワ)のコト、

たくわんぎん(兌換銀)圖紙幣(シヘイ)と引きかへべき銀貨のコト、

たくわんけん(兌換券)圖金銀貨と何時にても引き換(カ)らるべき手形(テガタ)のコト、(兌換紙幣)

たくわんしへい(兌換紙幣)圖何時にても其の所持人(ショジニン)が、其れを振り出したる銀行へ持參(ジサ)せば、卽時(ソクジ)に其の券面相當(ソウタウ)の金銀貨と、引き換らるる紙幣、

(ただけ)

たけ(竹)圖蘆(ロ)に似て長く大きく、且つ頑丈(ガンジヤウ)なる植物なり、幹(ミキ)は圓くして、節(フシ)あり、中は空(カラ)にして節より枝及び葉を生ず、其質(シツ)强硬なるを以て、種々の細工物の材料に供せらる種類多し、

たけ(嶽)圖高く大なる山、

たけ(茸)圖松茸(マツタケ)、しめぢ茸などの總稱、きのこ類のコト、

たけ(丈)圖長さのコト㊁立ちたる高さのコト㊂れこそぎありぎりのコトを云ふ

たけ(他家)圖他人の住家(スミヤ)、

たけい(他計)圖ほかのはかりごと、

たげい(多藝)圖樣々(サマザマ)の藝能(ゲイノウ)に達してるコト、

たけうま(竹馬)圖子供(コドモ)の翫具(ヤモチ)の名、竹の尖(サキ)に紙又は木にて作(ツク)られし馬の頭の形をせる物を附けて、其の竹を股(マタ)にて狹(ハサ)みて、馬に乘つたる躰をなして、遊ぶ物㊁竹を二本用意し、其に木を結(ユハ)び付けて、足掛(アシカケ)とし、其上に兩足を載(ノ)せ、竹を兩手に持ちて步み行く遊び、

たけがき(竹垣)圖竹を編(ア)て造りたる垣のコト、「ご

たけかご(竹籠)圖竹を編(ア)て、作り、か

たけがり(茸狩)圖松竹(ショウチク)狩、

たげき(打擊)圖うちはたくコト㊁轟じて損害を受くるに云ふ、卽ち打擊を受く、

たけくぎ(竹釘)圖竹を一寸ほどの長さに削(ケズ)り、其の尖(サキ)を、とがらせたるもの、釘の代用とす、

たけさいく(竹細工)圖竹を用ひて、種々の器具を製するコト、又た其の製したるもの、「まに云ふ

たけく(猛)圖つよくあり㊁いさましきさ

たけす(竹簀)圖割竹(ワリタケ)にて、編(ア)たるすのこのコト、

たけすだれ(竹簾)圖竹を細くささて、編みたるすだれのコト、

たけすのこ(竹簀)圖竹を裂きて造りたる簀(スノコ)のコト、

たけたば(竹束)圖竹を多く集(ツカ)めて、一束(ヒトタバ)となしたる物㊁竹を束(ツカ)ねたる物を、幾個(イクツ)となく繫き合したる物、鐵砲の丸(タマ)などを防ぐ楯(タテ)となす、

たけたげし(猛毒)圖さもつよし㊁しぶとくあるなり、

たけだびし(武田菱)圖紋所の名にて、菱の形をなせる輪廓(クワク)の中に、斜(ス)に十文字の線(セン)を引しもの、

たけつえ(竹杖)圖竹にて作りたる杖、

たけつ(多血)圖生れつき、血の多き性質(シツ)の人のコトを云ふ、

たけづつ(竹筒)圖太(フト)き竹を輪切(ワキリ)にして、筒(ツツ)となしたるもの、

たけつかん(多血漢)圖物事に感じて、精神(セイ)を動(ウゴ)かし易(ヤス)き質の男子㊁情(ナサ)ふかき心に富(フ)でる男子のコトを云ふ、

「のたち

たけつしつ(多血質)圖血の多き身躰(カラダ)

たけつせい(多血性)圖多血質(タケツシツ)に同じ、

たけなが(丈長)圖紙の一種にて、厚くして糊氣(ノリケ)のなき奉書(ホウシ)紙の如きものにて長き紙㊁丈長紙を細長(ホソナガ)く切りたる物、女の髪の飾(カザリ)に用ひられる、

たけなは(酣)圖まつさい中、

たけなは(竹縄)圖竹の皮を去り、肉(ニク)を細く裂(サ)きて、十分に打(ウ)きて、軟(ヤワ)かにして編(ア)たる縄(ツナ)、多く火縄の材料とす、

たけのこ(竹子)圖竹の新芽(シン)のコト、煮(ニ)て食料となす、

たけのかは(竹皮)圖物を包(ツツ)むに用ゆる物にて、竹の子の稍や成育したる物の皮、

たけのまる(竹丸)圖紋處の名にて、葉のつきたる竹を、丸く輪(ワ)になしたる形を描(エガ)きし紋のコト、

たけのそのふ(竹園生)圖支那の故事にて皇室(シツ)の御事を申す語、

たけのこがさ(笠子笠)圖竹の皮にて編(ア)たる被(カブ)り笠、

たけのとつゆ(竹子梅雨)圖五六月頃に吹く、東南の風のコトを云ふ、伊豆伊勢地方の方言、

たけのこめし(竹子飯)圖竹子を細かく刻(キザ)みて、味をつけて、煮(ニ)し物を交ぜたる飯、

たけのといしや(竹子醫者)圖其の術の殊に下手なる醫者を、あざけつて云ふ語(ゴト)、

たけのかはぞうり(竹皮草履)圖竹の皮(カワ)を編(ア)て作りし上草履、

たけばしら(竹柱)圖竹を磨(ガ)き柱(ハシラ)となしたる物、

たけばうき(竹箒)圖竹の細き枝を束(ツカ)ねて作りし箒(ホウキ)、

たけばしご(竹梯子)圖左右の柱(ハシラ)に太き竹を用ひたる梯子(ハシゴ)、

たけばやし(竹林)圖竹のしげり集(アツ)まつてる處、(やぶ)、

たけひくし(丈低)圖身躰の丈の低(ヒク)きを云ふ㊁總て丈(タケ)の長からざるもの、稱、

「ふたるコト

たけふ(妥協)圖談判が滿足(マンゾク)にとゝの

たけべら(竹篦)圖竹にて作(ツク)りたるへら、

「ツ)となしたる物、

たけぼう(竹棒)圖竹を切りて、棒の代(カワリ)

たけみつ(竹光)圖竹を刀(カタナ)の形に製したる物㊁なまくら刀のコト、

たけやぶ(竹藪)圖竹の群(ムレ)がつて生(エ)てる畑のコト、

たけやり(竹槍)圖竹の尖(サキ)を、とがらせて槍(ヤリ)の代とせる物、

たけやらじ(竹楊枝)圖竹にて作られたる楊枝(ヨウジ)、

「來垣(ケガキ)、

たけやらい(竹矢來)圖竹にてあみたる矢

たける(哮)自動猛獣(モウジウ)のほえる、

たける(猛)自動あらくなる、たけくなる、あばれる、つよくなる、

たける(梟師)圖上古(オホムカシ)にあつた蕃民(バンミン)の一群(ムレ)の長のコトを云ふ、卽ち蕃民のつかさの稱、卽ち熊襲(クマソ)梟

師など云ふが如し、

たけん(他縣)圖ほかの縣(ケン)、

たけん(他見)圖他の人の見る、

たげん(多言)圖口數(クチカズ)を多く聞く、おしやべりのコト、

「ト

たげん(他言)圖他の人々に告げ知らすコ

たげん(詫言)圖うそのことば物事をほこりて云ふコト、

(ただこ)

たこ(鳳)圖凡は紙鳶とも書く、子供の翫具(ガング)にして、卽ちいか、

たこ(蛸)圖又章魚とも書く、魚の名、頭(カシラ)圓く目大きく、疣(イボ)のある八本の足を有(モ)てる骨のなき魚、

たご(擔桶)圖たんごのコト、水などを入れて擔(ナ)ひ行く桶(オケ)、

たこ(多故)圖事件の多きコト、

たこ(田子)圖田畠を耕す人、

だこ(唾壺)圖痰(タン)又はつばきを吐く壺(ツボ)、卽ちたんばきのコト、

たこ(胼胝)圖又た跖(ユビ)とも書く、或る故障(ツカヘ)に依りて、手又は足の皮の一部が、硬(カタ)く爲りたるもの、

たご(手輿)圖かつがずに、手にて引き下け運ぶ輿のコト、

たこく(他國)圖よその國、外國、

たこん(多恨)圖恨(ウラミ)の重なるコト㊁過ぎ去り來りし我が身の事をかこつ心(ココロ)のコト、

たごん(他言)圖他言(ヒトゴト)に同じ、

たこつぼ(蛸壺)圖蛸を捕ふる道具なり、素燒(スヤキ)の壺(ツボ)にて、之(コレ)に桐の浮(ウキ)をつけたるもの、其の壺の內へ餌(エサ)を入れて、海中に沈(シズ)め、蛸(タコ)の內へ入りし時に、擧(アゲ)て捕ふ、

たこにふだう(蛸入道)圖蛸のコトをおどけて云ふ語㊁轉じて坊主頭(ボウズアタマ)の人をあざけつて云ふ、

(たださ)

たさい(多才)圖才智(サイチ)の多きコト、智嘉(カシコ)のすぐれてあるコト、

たさい(多妻)圖一人の男子が、二人以上の妻(ツマ)を持つコトを云ふ、

ださい(打碎)圖打ちくだく、めちやめやにこわすコト、

たさく(他策)圖今思ふてるはかりごと以外のはかりごとのコト、

ださく(駄作)圖下手(ヘタ)な作りもの㊁拙(ツタナ)く作られたる詩歌文章、

たさつ(他殺)圖自殺に對しての稱にて、他人に殺(コロ)されたるコト、

たさん(打算)圖勘定(カンジヤウ)するコト、物事のおもわくを立つるコト、

だざいふ(太宰府)圖昔時九州全躰を守護する爲めに築紫(ツクシ)に置かれたる一つの府の名、

(ただし)

たし(足)圖不足(フソク)をおぎなふ、

だし(煮汁)圖だすコト㊁食物の味(アジ)をつける爲めに用ゆる煮汁(ニシル)㊂我が目的を達せん爲めに、人又は物を道具(ウグ)に使ふコトを云ふ、卽ちだしに使(カワ)ふ、

だし(山車)圖祭禮(マツリ)の餘興(ヨキヨウ)として挽き出す、人形(ニンギヤウ)などを飾りたる車のコトを云ふ、

たし(多士)圖澤山(タクサン)の人々、

たじ(多事)圖用事の多きコト㊁轉じてせわしきコト㊂又た轉じて國に變事(ヘンジ)の多くして、おだやかならぬコトと云ふ、

「たるコト

たじ(多時)圖時間(ジカン)の暫(シバラク)し經(タ)

たじ(多辭)圖無駄(ムダ)な事を、多く饒舌(ジョウゼツ)するコトを云ふ、「即ちよそ事

たじ(他事)圖其事に關係なき、他(ホカ)の事

たし(他志)圖二心(フタゴヽロ)、即ち其事のみに心を注(ツ)がぬコト、

だしあひ(出合)圖出(デ)し合ふ、

だしあふ(出合)他動互ひに金錢又は物品を出し合ふ、「コト

だしいれ(出入)圖出たり、入れたりするコト

たしか(確)圖かたくして動かぬコト二しつかりと定(サダ)まりたるコト三間違のなきコト四だまされぬコト、あざむかぬコト五安心なるコト六危險(キケン)ならざる、

だしかぜ(出風)圖北國地方にて船員の云ふ語にて、東西の間より吹き來る風のコト、此の風が吹けば、船が出すに宜しと云ふ、

たしかに(慥)副しつかりと二間違(マチガヒ)の「なき。かたく

たしき(多識)圖廣く學問を修(オサ)めて物事に達してるコト、

たしつ(他室)圖ほかのへや、

たじつ(他日)圖今日より先(サキ)の或る日、未來(ミライ)の或る日、

たしなみ(嗜)圖たしなむコト、

たしなみ(窘)圖困難(コンナン)するコト、難儀(ナンギ)するコト、

たしなむ(嗜)他動すきこのむ二我れの殊に欲する三我を慎(ツヽ)しむ、

たしなむ(窘)他動くるしむ、困(コマ)る、なんじゆうする、

だしぬく(出抜)他動他人の氣附(キヅ)ざる中に先じて事を爲す二敵陣へ不意(イフイ)に攻め掛る、

たしぶ(田渋)圖田水の腐(クサ)りて、垢(カワ)

たしまへ(足前)圖足らざるを補(オギナ)ふ、助けのコトを云ふ、「云ふ

たしみ(嗜)圖我の殊にすきこのむコトを

たしむ(嗜)他動常々に好む、すく、たしなむ、

たしや(多謝)圖お禮を述べるコト、

たじや(多情)圖情慾心(ジヤウヨクシン)の多きコト二情(ナサケ)深きコト三移(ウツ)り氣の多き即ち浮氣なる質、

たしやり(打傷)圖打ちきづ、うちみ、

たしやく(他借)圖他人より、金錢物品をかりるコト、「まけもののコト

たじやく(懦弱)圖意氣地(イクヂ)のなき、な

たしやれ(駄洒落)圖下手(ヘタ)なしやれ、直打(チヨク)なき洒落、

たじやうくわう(太上皇)圖天子の御位(オクライ)を讓(ユズ)りたまひたる後に、申し奉る尊稱語、

たじやうたん(多情多恨)圖多情にして而(シカ)も多恨なるコト、即ち物事に感動(カンドウ)し易き性(セイ)にして、うらみの多くあるコトを云ふ、

たしゆ(多趣)圖おもむきの多き、

たしゆ(舵手)圖船の舵(カジ)をあやつる人、かぢとりのコト、

たしゆ(他手)圖他人の手、

たしゆ(唾手)圖物事を爲すに當て、自から勢力を添(ツ)えべく、手に唾(ツバ)をつけるコト二轉じて勇氣を出し物事に奮發(フンパツ)するコト、

たしゆう(多衆)圖大勢(オヽゼイ)の人々、

たしゆう(他宗)圖他の宗旨(シウシ)、

たしゆつ(他出)圖そとへ出る、他所へ行くコトを云ふ、

たしよ(他所)圖我が家の外(ホカ)の場所、よそのコトを云ふ、

たしよ(他書)圖ほかの書物、

だしよく(吐食)圖舌(シタ)つゝみを打ちて物を食ふコトを云ふ、「と云ふ意

たじるし(田印)圖俗語にて、田舍人(イナカビト)

たじろぐ(辟易)自動へこたれる二しりごみする、

たし(他心)圖心が外(ホカ)のコトに移(ウツ)るを云ふ、

たしん(打診)圖醫士が病氣の容子を知るべく、胸などを指で打(ウ)きみるコトを云ふ、「るに用ゆる器具(ウツ)

たしんき(打診器)圖醫士が病人を打診す

(ただす)

たす(足)他動補(オギナ)ひ加(カ)へる二滿(ミ)ざるを充(ミ)すコト、

たすう(多數)圖數の多きコト、

たすうけつ(多數決)圖多くの人の意見通りに決定(ケツテイ)するコト、

たすき(襷)圖荒働(アラバタラ)をなす時に、衣物の兩袖を肩(カタ)にからげ置く爲めに用ゆる紐(ヒモ)二襷(タスキ)の名にて、斜(ナヽメ)に線(スジ)を交(カヒ)えて引きし物、

たすきがけ(襷掛)圖襷を掛けているコトを云ふ、

たすく(助)他動人の爲めに力を添え與ふる二災難(サイナン)にかゝらんとするを逃(ノガ)れしむる三他人の事業に力を添えて、其の成功を易(ヤス)からしむる四貧(ヒン)に苦(クル)しめる者をなぐさめ與ふる五凡て其人の力(チカラ)のみにて爲し能はぬコトを爲し能(ヨク)ふやふに力を加(クワ)え與ふる、

たすけ(助)圖たすくるコト、

たすけぶね(助船)圖難船せし人々を助くる爲めに出す船、

(ただせ)

たせい(多勢)圖人數(ニンズウ)の多きコト、

たせい(他姓)圖他人の苗字(ミヤウジ)、

たせい(惰性)圖自然に生じて來る勢(イキホヒ)二此れまでのしきたり、

たせう(多少)圖多きと少なき、

たせう(他生)圖生れかはる、即ち未來(ミライ)に生れ出ると云ふコト、

たせうのえん(他生緣)圖今世(ゼケン)では他人で見ず知らずの仲なれど、前の世にては懇意にし合ふた仲と云ふ意味(イミ)、即ち一樹の下に憩ふも他生緣など、

たせき(他席)圖ほかの席二別の座敷(ザシキ)のコトを云ふ、

たせり(田芹)圖田の畔(アゼ)に、自然に生じたる芹(セリ)

だせん(兌錢)圖かへる錢(ゼニ)二かへたる錢、

たせん(他船)圖ほかの船、

(ただそ)

たそがれ(黄昏)圖夕ぐれ二日の將(マサ)に暮(クレ)なんとする時、「た云ふ

たそがれぐさ(黄昏草)圖夕顔(ユウガホ)のコト

たそがれどき(黄昏時)圖日の將(マサ)に暮れんとする時、ゆうぐれ、「の名

たそがれどり(黄昏鳥)圖ほとゝぎすの別

だそく(蛇足)圖餘計(ヨケイ)な世話をやくコト二なさいでもよきコト三無駄なコトを爲すコト、

たそく(多足)圖足の數(カズ)の多きコト二足らざるを充(ミ)すコトを云ふ、

たそやあんど(誰哉行燈)圖行燈の一種にて、ボンボリの如き形をせるもの、

たそん(他村)圖わきのむら、

(ただた)

ただ(只)副其れたけの報酬を出さずに、すむと云ふ意を表はす語、

ただ(徒)副ぼんやりと、譯(ワケ)もなく、むなしく、いたづらに、

ただ(唯)副此ればつかり此だけ二少しばかり(唯だ五錢など)三熱心に、ひたす

らと云ふ意味(ミ)、

たた(直)副今、ぢきに、すぐに、

たた(多多)副多(オホ)ければ多きほど、多ければ其だけに㊁俗語にて、子供の物にすれて無理を云ふコト、

だだ(粲粲)圖枝の多く集まつてるコトを云ふ、

たたい(多大)圖殊に大なるコト、

だたい(墮胎)圖月の滿(ミ)ざる胎兒を、殊更に躰外(カイグ)へ出(ダ)さしむるコトを云ふ、

「ぢきに」

たたいま(只今)副早速(サクジ)、いますぐに

だたら(妥當)圖たしかにあたるコト、おだやかにかなふ、

たたかひ(戰)圖たたかふコト、

たたかふ(戰)(自動軍(ヰクサ))をする㊁勝負を爭(アラ)そふ、

たたき(叩)圖又た敲の字を書く、鞭(チム)などにてたたくコト㊁石灰(ハイジン)と粘土(ハイ)(ツチ)とを合して、しつくひを搔(カコ)ベるコト㊂表(オモ)に細(ウロ)かき皺(シワ)を寄せたる漆塗(ウルシヌリ)の細工(サイク)㊃石の表面に細かきブツブツを刻(キザ)み搔へるコト㊄料理の仕方にて、鳥肉魚肉を庖丁(ハウチ)で細かく碎(クダ)きて、團子(ダンゴ)の形になしたるもの㊅德川時代の輕き刑罰の名、罪人を竹にてはたく刑(ケイ)、

たたきがね(敲鉦)圖ふせ鉦のコト、伏(フセ)て置いて撞木(シモク)で、敲く鉦、佛具の一種、

たたきたす(敲出)(他動)又た叩出とも書く鑛や太鼓をたたきはじめる㊁追ひ出す

たたきつち(敲土)圖たたき卽ちしつくひに用ゆる土のコト、石灰に赤土と砂利(ジリ)とを混ぜた物、

たたきとろす(打殺)(他動)打きて人を死に致らしむる、

たたきはらひ(敲拂)圖はたきてそのまゝに爲し置くコト㊁人を仕事に使ひ置きながら、僅(ワヅ)かの賃錢を渡して、後を構(カマ)ひつけぬコトを云ふ、

たたきたいく(敲大工)圖仕事の下手(ヘタ)な大工のコトを云ふ、

たたく(叩)(他動)人又は物をはたく㊁鐘(カネ)や太鼓をはたき音(オト)を出させる卽ち鳴(ナラ)す㊂おとづれる、たづれる。「のまゝの話ふ(門)を叩く」

たたびと(徒人)圖平々凡々(ボンボンボン)の人、

たたふ(湛)(自動)水などの滿(ミ)てる、あつ、まつてる、「其處に溜(タマ)らせ置くのコト、

たたし(但)(接)上文の意をひるがへして改めて斯樣(カウ)と云ふ意を表す時に用ゆる語にて、しかしながら、だけれども又はなどの意、

たたし(正)圖正直(シヤウヂキ)なり、よこしまならぬ、曲つていぬ、

たたし(糺)圖物事を問ひたづれるコト、

たたしがき(但書)圖本文に書き加へて、更に其の意を述(ノ)るコト、

たたす(質)(他動)理解(リカイ)し能ふやふに訊(ウ)れるコトを云ふ、

たたす(糺)(他動)問ひたづれて、是非善惡(ヨシアシ)を明かにする、「を直す」

たたす(正)(他動)たゞしくする、曲(マガ)れる

たたちに(直)副すぐに、時を移さず、

たたねか(正中)圖まんなか、

たたに(直)副だゞちに、すぐに、

たたに(徒)副譯(ワケ)もなく㊁むなしく㊂むだにと云ふ意、

たたに(啻)副ひとり㊁これのみではなく斯樣(カウ)だと云ふ意を表(ヒヤウ)はす時に用ゆる語、「たゞの人、普通人

たたびと(徒人)圖平々凡々(ボンボンボン)の人、

たたふ(湛)(自動)水などの滿(ミ)てる、あつ、まつてる、「其處に溜(タマ)らせ置く

たたふ(湛)(他動)水などの流を塞(ヘ)ざて、

たたふ(稱)(他動)ほめそやする、

たたまり(疊)圖物の集(アツ)つて重なり合

つてるコト、

たたまる(疊)(自動)かさなり合ふ、あつまる

たたみ(疊)圖室内の敷物(シキモノ)、卽ち藁(ワラ)を束(ツカ)ねて編て床(ユカ)とし、其の上に閾(イキ)にて編みたる表(オモテ)を縫ひつけしもの㊁下駄(ゲタ)の上に打ちつけたる表㊂物を折(ヲリ)たたむコトを云ふ、

たたみや(疊屋)圖疊を搔へる人㊁疊を賣(ウ)る家のコト、

たたみがみ(疊紙)圖おりたゝみたる紙㊁はながみのコト、

たたみいす(疊椅子)圖折りたゝみて、持ち歩きの出來(キル)る仕掛の椅子、

たたみいと(疊糸)圖疊を刺すに用ゆる糸

たたみかけ(疊掛)(他動)續けさまに物事をする、假令は(たゝみかけて云ふ)など、

たたみとむ(疊込)(他動)たゝみて中へ入れる、「へるコト、又た其の職人

たたみさし(疊刺)圖疊を刺(サ)して搾ら

たたみばり(疊針)圖疊を刺すに用ゆる針

たたみいわし(疊鰯)圖いさざと云ふ小さき魚を煮(ニ)て、海苔(ノリ)の如くに漉(スキ)たる物、燒きて食す、

たたみおもて(疊表)圖疊の表面となる者にて、圃の草の莖(クキ)にて織りたる上等のむしろ、

たたみじやく(疊尺)圖携帶に便なる爲めに、短かく折り疊(タタ)まれる樣に爲つて

たたみはしご(疊梯子)圖折(オリ)たたみて、持ち運(ハコ)びに便利なるやふに出來てるはしご、

たたむ(疊)(他動)取りかたづける㊁物を積み重ねる㊂衣物を折つて小さくする、

たたむき(腕)圖うでのコト、

たたよふ(漂)(自動)水に浮(カク)びて、ブラブラしてる、㊁何處(ドコ)とも云ふ目的もなくさまよふてる、

たたら(蹈鞴)圖フイゴの大なるもの、火をおこすべく空氣を送るに、手以てせず、足にてふみて送るやふに、作(カク)られたるもの、「やうにする

たたらす(爛)(他動)ただれかす、ただれる

たたり(祟)圖たゝるコト、

たたる(祟)(自動)神佛又は亡靈(ボウレイ)が怒つて其人に不幸(フカウ)を與(クワ)える、㊁災難(サイナン)に遇ひたること嘲(ソシ)けつて云ふ、

たたれ(襤)(自動)皮が破(ヤブ)れて肉(ニク)の見ゆるやふになる、「眼

たたれめ(爛眼)圖腫(ハレ)て赤くなつてる

たたん(多端)圖いそがしきコト、

たたま(疊)(自動)たゞ合ふコト、

たたみ(疊)(他動)たゝみて、持ち歩きの出來る仕掛の椅子、

たたみいと(疊糸)圖疊を刺すに用ゆる糸

たたみかけ(疊掛)(他動)續けさまに物事をする、假令は(たゝみかけて云ふ)など、

たたみとむ(疊込)(他動)たゝみて中へ入れる、「へるコト、又た其の職人

たたみさし(疊刺)圖疊を刺(サ)して搾ら

たたみばり(疊針)圖疊を刺すに用ゆる針

たたみいわし(疊鰯)圖いさざと云ふ小さき魚を煮(ニ)て、海苔(ノリ)の如くに漉(スキ)たる物、燒きて食す、

たたみおもて(疊表)圖疊の表面となる者にて、圃の草の莖(クキ)にて織りたる上等のむしろ、

たたみじやく(疊尺)圖携帶に便なる爲めに、短かく折り疊(タタ)まれる樣に爲つて

たたみはしご(疊梯子)圖折(オリ)たたみて、持ち運(ハコ)びに便利なるやふに出來てるはしご、

たたむ(疊)(他動)取りかたづける㊁物を積み重ねる㊂衣物を折つて小さくする、

たたむき(腕)圖うでのコト、

たたよふ(漂)(自動)水に浮(カク)びて、ブラブラしてる、㊁何處(ドコ)とも云ふ目的もなくさまよふてる、

たたら(蹈鞴)圖フイゴの大なるもの、火をおこすべく空氣を送るに、手以てせず、足にてふみて送るやふに、作(カク)られたるもの、「やうにする

たたらす(爛)(他動)ただれかす、ただれる

たたり(祟)圖たゝるコト、

たたる(祟)(自動)神佛又は亡靈(ボウレイ)が怒つて其人に不幸(フカウ)を與(クワ)える、㊁災難(サイナン)に遇ひたること嘲(ソシ)けつて云ふ、

たたれ(襤)(自動)皮が破(ヤブ)れて肉(ニク)の見ゆるやふになる、「眼

たたれめ(爛眼)圖腫(ハレ)て赤くなつてる

たたん(多端)圖いそがしきコト、

(ただち)

たち(館)圖いへ、やかた㊁假の住居㊂宿屋(ヤドヤ)㊃身分(ミブン)ある人の邸宅、

たち(質)圖しようぶん、うまれつき、氣質(キシツ)のコトを云ふ、

たち(立)(接尾)或る名詞の下に附け加へて、其の事柄(コトガラ)の容子を現(ヤ)はすに用ゆる語、假令(ヘト)ば(二頭立の馬車)とか(六頭立の砲車)、

たち(立)(接頭)或る動詞の頭に附け加へて、其の意味(イミ)を高むるに用ゆる語、假令ば(立ち登る)など、

たち(達)(接尾)大勢(オホゼイ)の人を、一纏(ヒトマ)にして云ふに用ゆる語、假令ば(女達)(若者達)など、「多きコト

たち(多智)圖智惠のふかきコト、智力の

たち(太刀)圖物をたち切ると云ふより出たる語にて、刀(カタナ)の大きく長きもの、多くは戰陣にて人を斬(キ)るに用ゆるもの、

たちあひ(立合)圖たち合ふコト、

たちあふ(立合)(自動)其の場へ互ひに出會(デアフ)て、物事を調(ヒラ)べる㊁相手と共にたゝかふ、

たちあかし(炬火)圖たいまつ、

たちあがる(立上)自動坐(ヲス)つてたのが起きあがる㊁すぐれる、まされる、ぬきんでる、

たちあふひ(立葵)圖葵の一種、枝(エダ)を生ぜざる草(クサ)、葉(ハ)には細かき皺(シワ)あり、花は紅(ベニ)白(シロ)紫(ムラサキ)等の色を呈し、頗る美し、

たちあひがき(立會垣)圖竹垣(タケガキ)の作り方の一種、丸竹(マルダケ)を五六本づゝ集(アツ)めて、其の間を明けて、作(ツク)りたる垣のコトを云ふ、

たちあひにん(立會人)圖其の場へ證人として、立ちさわる人、

たちあひくわんり(立會官吏)圖或る事件の爲めに、公然(オホヤケ)たる證人となるべく爲めに、其場へ立會ふ官吏のコト、

たちあひさいばん(立會裁判)圖裁判所にて、特に定めたる人を、立ちあはせ開く裁判のコト、

たちゐ(起居)圖起(オキ)と坐(ヲス)ると㊁日常の有樣卽ち容子假令ば起居を伺(ウカガ)ふなど、「我が家より出で行く

たちいづ(立出)自動他處へ出掛け行く。

たちいる(立入)圖其の家へ懇(ネンゴロ)にして出入するコト㊁入(イ)つて行くコト㊂たづさはるコト、

たちいり(立入)自動入(イ)つて行く㊁其の事に關係(クワンケイ)する卽ちたづさはる、

たちうち(立打)圖立つてゐて打ち、又は斬(キ)りつけるコトを云ふ、

たちうち(立射)圖立つてゐて鐵砲(ポウ)又は弓(ユミ)を放つコト、

たちうち(太刀打)圖太刀(タチ)を振り廻して切り合ふコト、

たちうり(立賣)圖大道に立つて廣告(コウコク)しながら品物(シナモノ)を賣る、

たちえ(立枝)圖上を向きて立ちのびてる枝(エダ)のコトを云ふ、

たちおくる(立後)自動立つコトのおそなる㊁物事をなすべき機(キ)を失(シツ)なひたる㊂おそがけに物事(モノゴト)をなす㊃おとつてゐる、「を云ふ

たちおくれ(立後)圖たち後(オク)るるコト

たちおよぎ(立泳)圖水泳術の一種にて立ながら泳ぐコト、「(ナガ)づるコト

たちがく(立樂)圖立つて、音樂(オンガク)を奏

たちかぜ(太刀風)圖太刀を烈(レツ)しく振り廻(マワ)すコトを云ふ、

たちから(田力)圖田地の穫(エ)れ高(ダカ)に依りて課せられる租稅、

たちから(手力)圖手の力腕力、

たちがれ(立枯)圖樹木(ジユモク)の生(オ)たるまゝにて枯(カレ)たるコト、

たちかかり(裁掛)圖裁物(タチモノ)を半(ハンブン)なしたる時のコトを云ふ、

たちかかり(立掛)圖立ち上らんとしかゝつてるコト、

たちかつぎ(太刀擔)圖左の肩(カタ)の中ほどの部分(ブブン)のコト、

たちかはり(立代)圖入りかはる、交代(コウタイ)するコトを云ふ、

たちかへり(立返)圖たちかへるコト戻(モド)つて來るコト、

たちかはる(立代)自動其の人と入りかはる。交代する、「來る

たちかへる(立返)自動戻(モド)り來る、返り

たちがらみ(太刀絡)圖鎧(ヨロヒ)に太刀をからみつける紐のコト、

たちき(立木)圖地面より立ち上(ガ)つて生じてる樹木(ジユモク)、

たちきき(立聞)圖他人の物語を陰(カゲ)で秘(ヒソ)かに聞き取るコト、

たちきく(立聞)他動立ち聞きする。他人の話をひそかに聞く、

たちきへ(立消)圖半分(ハンブン)ほどいこりたる炭火(スミビ)の自然(シゼン)に消(キ)るコト㊁着手(チヤクシユ)したる事業(ジゲフ)を中途(チユウト)

たちきる(斷切)圖切り離(ハナ)すコト㊁切つて二つにするコト、

たちくぐ(立潛)自動立ちつゝくゞる。立ちながらくゞりゆく、「ト

たちぐひ(立食)圖立(タツ)てゝ物を食ふコ

たちくらみ(立暈)圖立ち上つた途端(トタン)に、めまゐのするコト、

たちくだる(立下)圖つたなき、をとる、おとつてあるコトを云ふ、

たちこむ(立籠)自動或る場處へ人馬の入り込み行くコト、

たちとる(立鴨)圖飛び立つ鴨(カモ)、

たちこゆ(立越)自動すぐれる立ち優(マサ)つてゐる、「他處(ソコ)へ行く、

たちさる(立去)自動其の場を離(ハナ)れて

たちさわぐ(立騷)自動大騷(オホサワ)をなす甚だしく騷ぐ、「邪魔(ジマ)になる

たちさわる(立障)自動目ざわりになる、

たちしのみち(阡)圖南北に通つてる道路(ミチ)のコトを云ふ、

たちすくみ(立竦)圖たちすくむ、

たちすくむ(立縮)自動立ちつゝ身躰をすくめる、

たちせうべん(立小便)圖往來(オウライ)などへ立ちたるまゝで小便する、

たちつけ(裁着)圖旅へ出る時に着るばかま卽ち道中袴又たの名を伊賀袴と云ふ

たちつかひ(太刀遣)圖長き太刀を巧(タク)みに振り廻す放れ業(ワザ)、

たちとり(太刀取)圖太刀持(モ)に同じ其の條を見られよ、

たちとまる(立止)自動立つて進(スス)まずにゐる、とゞまつてゐる、

たちなむ(立並)自動立つて並(ナラ)んでる、立ちならんでる、

たちなやむ(立惱)自動立ち上り難(カネ)き㊁立ち上らんとしてあがられぬ、

たちぬひ(裁縫)圖布(ヌノ)を縫(ヌ)て衣服に仕立てるコト、卽ち針仕事(ハリシゴト)のコトを云ふ、「へ行く

たちのく(立退)自動其處を去つて、他處

たちのりを(太刀魚)圖魚の名中(ハウ)のせまき頗る長き薄(スク)き魚にて、全躰に鱗なく、色は蒼白くして光澤(ツヤ)ありり、其の狀(ヤウ)太刀に似(ニ)るより此の名あ

たちのきば(立退場)圖災害(サイガイ)故障(ハウサワ)などの爲めに、一時住宅(ジユウタク)を他へ移すコト、又た移せし場處、

たちのぼる(立登)自動煙(ケムリ)などの上ゝ高くあがり行く、

たちば(立葉)圖草木の葉の一本づゝ立ちて生じてるもの、

たちば(立場)圖我の居る場處㊁立つてる處㊂我れの保(モ)つてる位置(ヰチ)卽ち(我が立場)、「コト

たちば(起端)圖立ち上るべき機會(キクワイ)の

たちばな(橘)圖木の名、蜜柑に似たる木なれども、其の實は蜜柑(ミカン)より小さくして酸(スス)し、

たちばら(立腹)圖立ながら腹(ハラ)を切る㊁怒(イカ)りたるコトを云ふ、

たちはなる(立離)自動遠(トホ)くへ別れて行く。隔(ヘダ)たり行く、

たちはたらく(立働)圖立ちて仕事に精を出す。㊁一心に仕事する、

たちばなづき(橘月)圖陰曆の五月の別名

たちばなやき(立花燒)圖料理の名にて、魚肉を擂りつぶし、此れに小麥粉を交(マゼ)て團子とし、湯煮(ユデ)て串(クシ)に刺(サ)したて、味噌をぬりつけし物、

たちふくろ(太刀鞘)圖太刀(タチ)を入れる袋(フクロ)のコト、

たちまち(忽)副また〻く中、すぐに、

たちまへ(立前)圖働人(ハタラキビト)が働いた其の賃錢(チンセン)のコトを云ふ、

たちまぎる(立勝)自動すぐれてる、

たちまじる(立交)自動其の仲間(ナカマ)へ入る㊁入りまじる、

たちまわる(立廻)図互(タガ)ひに喧嘩(ケンカ)をするコトつかみあひ㊁芝居道の語にて入り亂(ミダ)れて搭鬪(カトウ)する演技(ワザ)のコトを云ふ、

たちまわる(立廻)自動彼處(アナタ)此處(コナタ)を歩(アル)き廻(マワ)る、

たちまちのつき(立待月)図陰暦十七日の夜の月のコトを云ふ、

たちみ(立見)図立ちながら見物する、立ちながら芝居を見物する、

たちみ(立身)図立ち上らんとする身構(ミガマ)のコトを云ふ、

たちむかふ(立向)自動相手に手向(テムカ)つてゆく、

たちめぐる(立廻)自動諸處(シヨシヨ)を歩きまはる、

たちもち(太刀持)図昔大名の太刀(タチ)を持ちて、其の傍(ソバ)に侍(ハベ)べつてゐる者(モノ)即ち太刀取、

たちもの(建物)図地上に建てられてある凡ての物、家、小屋(ヤ)、

たちもの(截物)図布(ヌノ)又は紙を切りたつるコトを云ふ、

たちもの(斷物)図我の好んで食ふ物を、神佛へ顧(クワン)を掛けて食ぬやうにするコト、

たちものいた(裁物板)図截物を載(セ)て裁ち切る臺(ダイ)、多くは厚板にて作らる

たちものばりちやう(裁物庖丁)図裁物を爲すに用ゆる庖丁、

たちやく(立役)図芝居道の語、役者(ヤクシヤ)が男形(ダカタ)に扮裝(ヨウイ)たるを云ふ、

たちゆく(立行)図たちゆく、

たちゆく(立行)自動通つて行く㊁生計(クラシ)の樂(タノシ)になる、

たちよる(立寄)図通りかゝりておとづれる㊁傍(ソバ)へ寄りそふ㊂たよりに思ひて、たづれ行く、

たちわかる(立別)自動わかれ行く、わかれ、

たちわかれ(立別)図互ひに別れ行くコト

たちわたる(立渡)自動廣(ヒロ)がつてる㊁ゆきわたつてる、

たちわりぜり(立往生)図立ちたるまゝにて動(ウゴ)き能はざるを云ふ、汽車の立往生㊁立ちたるまゝに死ぬるコト、

だちん(駄賃)図駄馬に荷物を積(ツミ)て運(コ)ばせたる賃錢㊁轉じて荷物を運ばせたる賃錢、

だちんもち(駄賃持)図賃錢を得て荷物(ニモツ)を持ち運(コ)ぶコト、

たつ(龍)図大蛇(オロチ)の一層(ソウ)怖(オソ)ろしき物なりと云ふ想像上(ソウゾウジヤウ)の動物にして、此れが一度(ヒトビ)怒(イカ)れば、雨を降(フ)し、風を起す、神變不思議(シンペンフシギ)の術(ワザ)を有(モ)てる物なりと云ふ、即ちりゅう、

たつ(辰)図十二支(エト)の第五番目の名㊁方角(ホウカク)の名東南の方、

たつ(達)図物事に能く行き渡(ワタ)つてる㊁學問技藝などの心得が十分にある㊂とゞこらぬコト、拂取(ハラ)るコト㊃先(マヅ)に立つて人を導(ミチビ)くコト、先達(センダツ)、

たつ(立)自動上に向く㊁眞直(マスグ)に延びてる㊂横(ヨコ)に爲つてた物がおきる㊃物の用になる㊄旅へ出る㊅笑きさざる㊆互(タガ)ひに程よく組み合せて出來上る㊇知れ渡(ワタ)る著(イチジル)しく爲る㊈身を起す㊉世の中へ出て活動(クワツドウ)する㊋其の場を去る、其の席を離(ハナ)れる㊌時分(ジブン)が來る㊍物が定(サダ)る㊎生(ウマ)れる、

(ただつ)

たつ(龍)図大蛇(オロチ)の一層(ソウ)怖(オソ)ろしき物なりと云ふ想像上(ソウゾウジヤウ)の動物にして、此れが一度(ヒトビ)怒(イカ)れば、雨を降(フ)し、風を起す、神變不思議(シンペンフシギ)の術(ワザ)を有(モ)てる物なりと云ふ、即ちりゅう、

たつ(辰)図十二支(エト)の第五番目の名㊁方角(ホウカク)の名東南の方、

たつ(達)図物事に能く行き渡(ワタ)つてる㊁學問技藝などの心得が十分にある㊂とゞこらぬコト、拂取(ハラ)るコト㊃先(マヅ)に立つて人を導(ミチビ)くコト、先達(センダツ)、

たつ(立)自動上に向く㊁眞直(マスグ)に延びてる㊂横(ヨコ)に爲つてた物がおきる㊃物の用になる㊄旅へ出る㊅笑きさざる㊆互(タガ)ひに程よく組み合せて出來上る㊇知れ渡(ワタ)る著(イチジル)しく爲る㊈身を起す㊉世の中へ出て活動(クワツドウ)する㊋其の場を去る、其の席を離(ハナ)れる㊌時分(ジブン)が來る㊍物が定(サダ)る㊎生(ウマ)れる、

たつ(立)他動横になつてる物を眞直(マスグ)にす㊁下向(ムカイ)てる物を上向(ムカ)ける㊂物の尖(サキ)をとがらせる、假令ば鋸(ノコギリ)の目を立つ㊃組合(クミ)せて一つの物を爲す、假令(タトヘ)ば家をたてる㊄勢(イキホヒ)をつける、盛(サカ)にする㊅あらはす、示めす、知らす假令ば旗(ハタ)をたてる、提灯(チヤウチン)を立てる㊆位(イタ)にお即(カ)せ申す、假令ば皇太子に立て奉る㊇しめる、ふさぐ假令ば戸を立てる㊈刺(サ)す突(ツ)き貫(ヌ)く、さゝる、假令ば骨が咽喉に立つ㊉操(ミサオ)を守(モ)る志(ココロザシ)を確(シカ)かにす、假令ば(立志)など㊋其の場を去(サ)らす、其の席を離さす、假令ば追ひ立る㊌旅へ赴(ムオモ)く門出(カドデ)させる㊍物の登(ノボ)るコト、假令ば塵(ホコリ)が立つのごとし、

たつ(絶)他動物を二つに切り分ける㊁やめる、ことはる㊂ふさぐ、じやまする㊃失ふ、なくす㊄禁(ユル)ず、

たつ(粗)図なめし皮のコト、

たつ(鯱)図獣の名、かはをそ、

たつ(怛)図こはがるコト。おどろくコト㊁いたむコト。かなしむコト㊂つかれるコト、

たつ(擲)図早きコト速かなるコト㊁馬にむちを加へる、むちうつ、

たつ(闘)図門の内のコト㊁門のくわんぬき木のコト㊂宮中のコト、

だつ(奪)図うばひ取るコト。㊁取り上るコト㊂亂(ミダ)れるコト、

だつ(脱)図ぬぐコト。ぬけるコト。はなれるコト。まぬがれる。のがれるコト。はづれるコト、

たづ(田鶴)図鶴に同じ、

たつい(達意)図我が思ふ事を他人に十分に知らせるコト㊁我れの思ふ通りに事柄を成就(ジヤウジユ)させるコトを云ふ、

だつえい(脱營)図軍人が兵營より逃げ出すコト、

たづか(手柄)図弓を握(ニギ)り持つ部(ヒロコ)、即ち弓の中央(ナカバ)の布片(ヌノ)の卷(マイ)てある處のコトを云ふ、

だつかう(脱稿)図原稿(ゲンコウ)の出來上りたるコト、

たづかね(鶴音)図つるのコト、

だつかん(脱簡)図書物の紙數(カミ)が不足してゐるコト、(落丁)

たつがん(達眼)図達見(タツケン)に同じ、

だつかん(脱繰)図海軍々人が、軍艦よりぬけて出るコト、

だつかん(脱監)図だつごくに同じ、

たつかゆみ(手束弓)図手にて握り持つ小さき弓の稱、

たつき(脊)図及(ヒ)の廣き斧(オノ)、「ト、

だつき(脱歸)図人知れず逃(ニ)げて歸るコト

だつきゆう(脱臼)図身躰(カラダ)の骨の關節(カンセツ)がはづれるコト、

だつきよ(脱去)図のがれ去る、逃げ去る、

だつきやく(脱却)図ぬけてにげる、のがれる㊁すつる㊂きはなし去る㊃ぬぎすてる、

たつく(脱句)図文章中のもれたる文句(モン)のコト、

たづくり(田作)図魚の名ゴマメ、

だつくわい(脱會)図會より退ぞく、會員を止める、

たつくわん(達觀)図公平(コウヘイ)に物を觀察す㊁遍(マヤ)れく觀て考へるコト、

たつくわん(達官)図位の高き官職のコトを云ふ、

たつけん(達見)図すぐれたる意見㊁目の附け所が正しくして、優(スグ)れてゐるコト、

だつこ(脱誤)図文章中の文字のぬけたると、文字の誤(アヤマ)りたること、

だつこう(脱肛)図病氣の名、肛門内の筋肉が、外(ソト)へ出る病氣、痔疾の一種、

たつこく(脱獄)図罪人が獄屋(ヤゼウ)より逃げ出すコト、

たつさう(脱走)図ぬけ出す㊁逃げ走るコト、「ト、

たづさえ(携)図たづそふるコト、

たづさふ(携)図他動手にて物を持つ㊁人を伴(レツ)て行く㊂其の事柄に關係(カンケイ)する、

たづさわる(携)自動手を引きて行く㊁物事に關係する、

たつさちりめん(脱走縮緬)図縮緬の一種、品質の下等なもの、

たつし(脱屣)図孟子より出でたる語にて君主の惜氣(オシミ)なく、位を他へ譲(ユズ)りたまふコトを云ふ語、

たつじ(脱字)図もたれ字、ぬけ字、

たつし(達)図官衙(カンガ)より人民へ知らせる命令(レイ)のコト、

たつし(脱履)図下駄をぬぐコト、

たつしや(達者)図身躰の健康(コウケン)なるコト㊁學術又は武藝に達してるコト㊂能く歩くコト㊃物事を滑(カツ)なく爲し行くコト、

たつじん(達人)図學術又は武藝などに秀(ヒイ)でる人、

たつしが き(達書)図官署より一般に差し出す公文書、卽ちふれのかきつけ、

たつしゆつ(脱出)図ぬけ出る、

たつす(達)自動すぐれる、十分に知る、

たつす(達)他動さゝげる㊁目的遂りになる㊂成功する㊃知らせ告げる、

たつす(脱)自動もれる、ぬけて出る、逃げて行く、

たつぜい(脱税)図納(ナツ)むべき税金を納(ナツ)めぬコト㊁納税の義務(ムギ)を免がれるコト、

たつせき(脱籍)図戸籍面(コセキ)に、其の人の姓名のおちてあるコト、

たつせん(脱線)図汽車や電車が線路よりはづれるコトを云ふ、㊁人の考の狂るふコトを云ふ、

たつせん(脱船)図船よりぬけて出るコト

たつそ(脱疽)図手及足の先(サキ)へ血の循(ジユン)が不足して來て、腐(クサ)れ爛(ただ)れる病氣、

たつそく(脱俗)図世の中の事に關せぬ㊁世間並(ナミ)より優(スグ)れてる、

たつそん(達尊)図たれかれなしに貴(タフト)ぶべきもの、

たつたち(脱黨)図仲間をぬける、仲間(ナカマ)より逃げて出る、

たつたち(達道)図道(ミチ)に達(タツ)してゐるコトを云ふ、

たつたら(脱刀)図差してゐた刀(カタナ)をぬき放つコト、

たつたぐさ(龍田草)図もみぢの別名のコトを云ふ、

たつたひこ(龍田彦)図風の神のコトを云ふ、「ふ、

たつたひめ(立田姫)図秋の女神(メガミ)のコトを云ふ㊁秋の異名、

たつて(強)副むりやりに、しゐて、押し切て、「つて、

たつてい(脱鄙)図鄙(ヒナビ)をぬけて出るコトを云ふ、脱走(ダソウ)に同じ、

たつと(脱兎)図逃(ノガ)れ行く兎(ウサギ)㊁轉じて勢の猛(ハゲシ)に烈しく強(ツヨ)きさまを云ふ語、卽ち出る脱兎の如し、

たつとし(貴)図たつとばし㊁位高し、偉(エラ)たかし㊂大切なり、

たつとぶ(貴)他動大切にする㊁うやもうに、敬(ウヤマ)ひ結(ムス)び付てある紐(ヒモ)のコト、

たづな(手綱)図馬を指揮(サシ)すべく爲めに、

たづぬ(訊)他動問ひたゞす㊁事實(ホントウ)の説明を求(モト)める、

たづぬ(尋)他動他人の家へ行く、卽ちおとづれる㊁聞きたゞす、とふ、

たづねいる(尋入)図たづねさがしつゝ深入(フカイリ)するコト、

たづねだす(尋出)他動さがしだす、

たづねびと(尋人)図其の人の在處(カクレガ)をさがしたづねるコト㊁在處をさがしたづねらるる人、

たづねゆく(尋行)自動他人の家をおとなふ㊁たづねつゝ歩み行く、

たづねもの(尋物)図たずねさがす物㊁其の行衛をさがされてる人、

たつのくち(龍口)図龍の頭の形に作りて其の口より水を吐き出さしたる物を云ふ㊁眞鍮(シンチウ)の管(クダ)を曲(マガ)て、其れに捻(ネジ)をつけて、其の口より捻の廻轉(クワイテン)に依りて、水を出さしむる物、卽ち水道の栓口(セン)の如き仕掛(シカケ)になれるもの、

たつはち(脱邦)図自國より他國へ逃(ノガ)れ行くコト、

たつばん(脱藩)図昔時武士が仕(ツカ)てた藩主の許(モト)をぬけ出で浪人するコト、

たつびつ(達筆)図文字を達者に書く㊁文章を達者に書く、

たつぶく(脱服)図衣服(イフク)をぬぐ、

たつぶん(達文)図文章を作るコトの上手(ジヤウズ)なコト、

たつぶん(脱文)図文句のぬけ落ちてる文章のコト、

たつぶん(脱糞)図大便をするコト、

たつべん(達辯)図辯舌(ベンゼツ)のさはやかなる㊁達者に話をする、

たつぼふ(脱帽)図かぶりたる帽子をぬぐコト、

たつま(達磨)図數球(ダウ)に在る一番に大なる玉のコトを云ふ、

たつまき(龍卷)図海上に旋風(センプウ)の起りて、海水の高く、へ、巻き上げられたるもの、稱、

たつみ(辰巳)図方角の名にて、東と南の間(アヒダ)のコトを云ふ(巽)、

たつらく(脱落)図ぬけて落(オチ)る、(髪などの)、

たつり(達理)図道理(ダウリ)を明らかにするコト。理屈をきはめる、

たつり(脱離)図ぬけはなれる、

たつりやく(奪略)図うばひ取るかすめ取る、

たつれん(達練)図物事に精通してゐるコトを云ふ、

たつろ(脱路)図逃げ道(ミチ)ぬけ道のコトを云ふ、「て知れる、

たつろう(脱漏)図もれ出る㊁秘密がもれ

たつろう(脱牢)図牢破り、

(ただて)

だて(立)図田(タ)に棒を二ケ處へ立て竹を横(ヨコ)に渡し其れに刈りたる稻(イネ)を掛けるものを云ふ㊁藁(ワラ)の蓆(ムシロ)にて作りたる俵(タワラ)の如きもの、茶の葉や綿(ワタ)などを入れ置くもの、

たて(立)(接尾)或る語(ゴイ)の下につけて其物の出來上りたるばかりを云ふ意味を知らすに用ゆる語、假令ば(炊立て)或る語(ゴイ)に付け加えて、其の物の容子(ヨウス)を云ひ表(アラハ)はすに用ゆる語、假令ば義理立、

たて(竪)図又た縦(タテ)とも書く、上下の長さのコトを云ふ㊁織物のたて糸の略語

たて(楯)図昔(ムカシ)戰場にて敵の放(ウ)てる矢を防ぐに用ひたる物㊁轉じて物事をなすに、頼(タヨ)となる物のコトを云ふ、卽ち(循に取りて)、

たて(楯)図草の名、水邊を好んで生ずる二尺あまりのものにて、莖(クキ)及び枝に節あり、節より小枝を生じて、葉を出す葉は味辛(カラ)くして料理に用ひ、食料とし用ひらる、秋の頃に白き小さき花を咲す、

たてあし(建足)圖本家(ケホン)より添(エン)て建てられてある家、出家(ヤシ)、

たてあみ(立網)圖地引(ヂヒキ)あみ、

たてあかし(立明)圖たいまつ、

たていし(建石)圖道傍(ミチバタ)に里程表又は道案内(ミチアイ)として建(タテ)られてある標(シルベ)の石㊁庭園に飾(カザ)りとして立てある石、

たていと(縱絲)圖織物の縱(タテ)に通(トオ)つてゐる糸のコト、

たていへ(建家)圖建築されたる家、

たてう(鴕鳥)圖アメリカ地方に棲(スム)る鳥にて、其形鶴(ツル)に似て大きく、丈(ケク)高く、力の強くして、よく走る鳥、大なる七八尺の高さありと云ふ、

たてをやま(立小山)圖芝居道の語にて、女形(オカメ)をつとむる役者の中での、腕のすぐれたるもの、

たてかく(立掛)他動立てかける、ませかける、もたせかける、

たてがさ(立傘)圖僧侶(ソウリヨ)などに後より さしかける袋に入れてある柄の長き傘のコト、

たてかふ(建替)圖現在の家をくづして新たに建て直(ナオ)す、

たてかふ(立替)他動人の出すべき金錢を我が代(カワ)りに出し置く、

たてかへ(立替)圖取りかえて置くコト(金錢などを)、

たておすり(伊達絣)圖織物の一種、福島縣(フクシマケン)の物産にて、薄く織りし絹織物(ヤウモノ)、

たてがはら(竪瓦)圖瓦の一種にて平らなる物、壁(カベ)の裾(スソ)なしを飾るに用ゆ、

たてがき(伊達着)圖はなやかなる衣物。表面(ハウメン)を飾(カザ)りたる衣服、

たてきり(立切)圖たてぎるコト、

たてきり(閉切)他動建具をしめ切つて明(ア)けぬ、

たてきる(立切)他動思ひし事を押し通す㊁全くしめるコト、即ち閉(シ)め切る、

たてぐ(建具)圖家具の一にて、障子(シヤウジ)唐紙(カラカミ)戸(ト)などを總稱して云ふ語、

たてぐや(建具屋)圖戸障子などを製造する家、

たてくき(伊達釘)圖室内(シツナイ)の飾(カザリ)に打ちつけ置く美しき釘、

たてとむ(閉込)圖戸障子をしめ切つて置くコト、

たてとむ(立込)自動こみ合つてる、

たてとる(立籠)圖城内にとじこもつて敵を防ぎ守るコト、

たてじま(竪縞)圖たてに織りたる縞物、

たてしや(伊達者)圖身の廻(マワ)りをかざる人、

たてしゆう(伊達衆)圖見(ミ)を張りたがる人㊁俠客(ヤクザ)、

たてす(醋酢)圖料理に用ゆる掛酢(カケズ)の一種にて、醋(ス)の葉を搗(ツ)て酢に交(マ)ぜしもの、

たてずな(立砂)圖位(クラヰ)高き人を我が家へ迎(ムカ)ふる時に、門内に砂(スナ)を小高く盛(モリ)上げて置く儀式、

たてつけ(立付)圖戸や障子などの閉(シ)りあんばいを云ふ、即ち立付がよきとかあしきとか、

たてつぼ(建坪)圖建てある家の坪かず、

たてどひ(竪樋)圖屋根(ヤネ)より直線(ヤウ)に、溝(ミゾ)へ下(オ)しある雨樋(ユトヒ)のコト

たてとほす(立通)他動絶ず立つてる、立ちづめにしてる㊁意地(イヂ)を張り通す、押し切つて物事をする、

たてぬき(經緯)圖機(ハタ)の糸のたてと、よこのコトを云ふ、

たてば(立場)圖道中の宿場(シクバ)にて、人足(ニンソク)又は旅人(タビビト)が休息する處㊁古物商人が集(アツ)まつて買ひ來りし品を賣る處、即ち屑屋(クヅヤ)の問屋、

たてばな(立花)圖佛の前へ供(ソナ)へる色花(イロバナ)のコト、

たてばちやや(立場茶屋)圖道中の立場に在る飲食店のコト、

たてばにんそく(立場人足)圖道中の立場に居て、旅人の求(モト)めに依り荷物を運ぶ人足、

たてひき(立引)圖意地(イヂ)を張る㊁負ぬ氣を出すコト、

たてひく(立引)他動意地張つて他人の爲めに金錢を出し又はやかいでもよき世話(セワ)をやく、

たてひざ(立膝)圖坐りつゝ、片膝を立つるを云ふ、

たてふ(妥帖)圖おだやかに安きコト、

たてふ(蓼斑)圖青色(アヲイロ)を呈してる鷹(タカ)の羽根(ハネ)、

たてふえ(竪笛)圖横笛(ヨコブエ)に對しての稱にて、竪に持ちて吹く笛のコト、即ち尺八などの類を云ふ、

たてふだ(立札)圖夫々に知せべき事柄(コトガラ)を書きて、路傍(ハウバウ)に建て置く木の札、

たてふみ(立文)圖ひねりぶみのコトにて鳥の子紙や、杉原紙などの卷紙に、認めたる手紙の稱、

たてぼし(立乾)圖魚を捕る方法の一種にて、即ち海岸の遠淺(アサ)の處に簀(スノコ)を立て置き、潮(シホ)が殘らず干(ヒ)てから云ふ、

たてまい(建米)圖米穀組合(ベイコクアヒ)事務所にて米の價格(カカク)を定むるコト、又た定めたる直段、

たてまし(建增)圖建つてある家へ更に建て足すコト、

たてまへ(建前)圖家の基礎(イシヅエ)となるべき柱(ハシラ)や、梁(ハリ)を組みたつるコトを云ふ、

たてまへ(立前)圖又た點前とも書く、茶の湯の語にて、茶のたて方の作法(サホウ)、

たてまつる(奉)他動獻上(ケンジヤウ)する、さし上げまゐらす㊁衣服などを着(キ)せまゐらする、凡て貴人に對する動作(サドウ)の敬語なり、

たてまつる(奉)(接尾)我のなすべきコトを云ひ表はす言葉に添(エン)て云ふ敬語、假令ば(申し上げ奉る)、

たてむし(蓼蟲)圖、こがれ虫に似たる虫にて、形小さく、全體(ゼンタイ)黑色なるもの、

たてもの(竪物)圖竪に表裝(ヒヤウソウ)を爲したる軸物(ヂクモノ)を云ふ、

たてもの(建物)圖地上に建られてある家屋、土藏、小屋の類を總稱して云ふ、

たてもの(立物)圖大勢(オホゼイ)の人々の中で一番にすぐれる人、又は頭(カシラ)とあがめられてる人。芝居で其の一座中の、技量(ワザ)のすぐれてる役者、

たてや(建家)圖建(タテ)てある家、

たてやま(立山)圖狩獵(レウリヤウ)の語にて獵(カリ)をするコトを、禁じられてある山のコト、

たてよと(縱横)圖たてとよこ、

たてん(他店)圖外(ホカ)の店(ミセ)、

(ただこ)

たとひ(縱)副假(カリ)に、もしも、よしや、

たとひ(假令)副前條に同じ、

たとふ(譬)他動たとへて云ふ、

たとふ(疊紙)圖厚紙(アツガミ)を長方形に切り兩方(リヤウホウ)より折り合せ、更に其の兩端(ハシ)を外へ折りたる物、女の髮結(カミユヒ)道具、又は小切(コギレ)などを入れ置くもの、

たとへ(譬)圖或る物事の意味を、他の物事を引き來つて、解き明かするコト又は其物を云ふ、

たどり(迪)圖たどるコト、たどりゆくコト、

たどる(迫)他動たづねさがして行く㊁事柄(ガラ)の順序(ジユン)を追(オ)ひて進み行く、

たどん(崩團)圖炭の粉に、土を混(マ)ぜフノリの汁(シル)にて練(ネ)りて、丸く固め乾(ホ)かしたる一種の炭、

たどうし(他動詞)圖物事を仕末(シマ)する働(ハタラキ)を起す言葉(コトバ)、即ち(動(ハタラ)す)とか、(行く)とかの如し、

たどころ(田所)圖田地のみある所、田地の多くある所、

たとへば(例)副手本を示せば、例を引ひて云へば、

(ただな)

たな(店)圖みせ㊁商人屋(アキナヒ)、

たな(棚)圖物を載(ノセ)る爲めに板(イタ)を張りたるものを云ふ、

たなうけ(店請)圖借家人の保證人、家主(ヤヌシ)に對しての語、

たなおろし(店卸)圖半年の決算の時に、店に在る商品の數(カズ)、又は其の價格(ネダン)を調(シラ)ぶるコト㊁他人の失策(シクジ)欠點(ケツテン)を、一一數(カゾ)へ上げるコトを云ふ、

たなか(田中)圖田圃(ハタケ)の中(ナカ)㊁轟じて田舍のコトを云ふ、

たなかへ(店替)圖家を借り代(カ)るコト㊁轉してやどがへのコト、

たなかり(店借)圖家か借るコトを云ふ㊁みせをかりるコト、

たなくも(棚雲)圖たなびゐてゐる雲、長くのび廣がれる雲、

たなぐもり(棚曇)圖雲がたなびきてくもつてゐるコトを云ふ、

たなげり(棚經)圖盆(ボン)に經飯棚(ケンバンダナ)の前にて、僧侶が經文(キヤウモン)を讀み上るコトを云ふ、

たなこ(店子)圖家主(ヤヌシ)に對して云ふ、借家人(シヤクヤニン)のコト、

たなご(鱮魚)圖魚の名、川に産する一二寸ほどの魚、

たなごころ(掌)圖手のひら、

たなさき(店前)圖店(ミセ)のはな、

たなざらし(店晒)圖長らく賣れずにある商品、みせざらしの品、

たなだて(店立)圖家主より、追ひ出されるコト、

たなちん(店賃)圖家の借り賃、即ち家賃(ヤチン)のコトを云ふ、

たなつもの(田之物)圖田及び畠に作られたる物㊁特に稻、

たなぬし(店主)圖家主即ち其の借家の所有主(ヤヌシ)のコト、

たなは(手綱)圖馬のたづな㊁鵜の鳥に結びつけるなはのコト、

たなばし(棚橋)圖雛をつりたる如くに、板(イタ)をかけ渡したる假(カリ)橋のコトを云ふ、

たなばた(棚機)圖はたのコト㊁機(ハタ)を織(オ)る女㊂たなばた祭の略語、たなばたまつりを見よ、

たなばたつき(棚機月)圖陰曆の七月のコトを云ふ、

たなばたをどり(棚機踊)圖棚機祭の夜に少女等が色紙(ガミ)にて、作りし短冊(シヤクサク)を結び附けし小笹(ササ)を持ちて、踊るコトを云ふ、

たなばたまつり(棚機祭)圖陰曆の七月七日の夜に行ふ星(ホシ)祭、

たなびき(棚引)圖雲や烟(ケムリ)などの横さまに靡く延び引てる狀(ザマ)、

たなふるまひ(店振舞)圖店(ミセ)開きの時に、人を呼びてする馳走(チソウ)、

たなもの(店者)圖商家(アキナヒ)の番頭及び手代(テダイ)などのコトを云ふ、

たならし(田均)圖種付(タネツケ)をなすべく爲に田をならすコト、

たなん(多難)圖難儀(ナンギ)の多きコト。災難の重(オモ)なるコト、

(ただに)

たに(谷)圖山と山との間の、へこみたる處のコトを云ふ、

たに(蜻)圖小虫の名、躰(カラダ)に黑白(クロシロ)の斑點(マダラ)ありて、大きさ豌豆(エンドウ)ほどあり、足八つを有する虫にて、人又は犬(イヌ)の皮膚(ヒフ)に、深く咬(カ)入りて血液を吸ふもの、

たにし(田螺)圖貝類の一種にて、多く水田の中に生ず、其の肉(ニク)は煮(ニ)て食料とするも消化(ショウカ)惡し、

たに(駄荷)圖駄馬に負(オ)はせる荷物の駄馬の負ふた荷物、

たにま(谷間)圖谷と谷との間、

たにあひ(谷間)圖谷と谷との間、

たにかぜ(谷風)圖谷間より、吹き上げて來る風のコト、

たにがは(谷川)圖谷間(ヤカン)を流れ行く小川(オガワ)のコトを云ふ、

たにく(多肉)圖肉附(ニクヅキ)の多きコト㊁動物(ドウブツ)のこえ太(フト)ってるコト、

たにぐく(谷蟇)圖ひきがへるの古名、

たにそこ(谷底)圖谷のそこ、

たにそば(谷畔)圖谷の左右の崖(ガケ)のコトを云ふ、

たにのと(谷戸)圖谷間へ入る入口、

たにのとぼそ(谷扉)圖谷間(ヤカン)に在る小さき假小屋(ゴヤ)の稱、

たにべ(谷邊)圖谷のそば、

たにん(他人)圖他聲(ハイ)に同じ㊁我の關係(クワンケイ)せる事に關係せぬ人㊂身内にあらざる人、

たにんず(多人數)圖人數(ニンズ)の多きコト

たにみづ(谷水)圖谷川(タニガワ)の水、

たにくくわ(多肉果)圖其の實(ミ)の殊に澤山に在る果實(クワジツ)のコトを云ふ、即ち桃(モモ)柿(カキ)梨(ナシ)等の類、

たにわたり(谷渡)圖草の名、萩(ハギ)に似たる二三尺ほどの野生のものにて、山野(ヤヤ)に生ず、七八月のころ紅色(ベニイロ)の小さき花を咲す、

たにふところ(谷懷)圖四方山にてかこまれてる谷間(タニマ)のコト、

たにんぎやうぎ(他人行儀)圖あらたまらないでもよきに、特別に改(アラタ)まつてゐるコトを云ふ、

たぬき(狸)圖獸(ケモノ)の名、狐(キツネ)に似て小く、口が尖(トガ)りて、顏稍(ヤヤ)圓し、毛は濃(コイ)き灰色(ハイイロ)を呈す㊁欺(アザム)く獸(ケモノ)と云ふより、轉じてだますコトに云ふ、

たぬきじる(狸汁)圖惣菜料理の一種、味噌汁の中へ、蒟蒻(コンニヤク)小豆(アヅキ)豆腐(トウフ)魚肉(ギヨニク)などを入れて、煮(ニ)しごつた汁、

たぬきばば(狸婆)圖意地(イジ)のわるき老婆を、ののしつて云ふ語、

たぬきねいり(狸寢入)圖れむりたる狀(ヤウ)を粧(ヨソ)ふてるコト、即ちそらねいりのコトを云ふ、

(ただね)

たね(種)圖草木の芽(メ)を出す原(モト)となるもの㊁果物(クワブツ)類の核(サネ)㊂物事の起る其の基礎(キソ)㊃出來たる物事の因て生じたる根原(モト)㊄凡て物(モノ)の作(ツク)り爲(ナ)れる其の本(モト)となるもの㊅我れの利益(リエキ)又は幸福(コウフク)に他日なるべき其の本(モト)を、かれてなし置きたるコトを云ふ㊆子となるべき、其の基礎(キソ)、即ち父の血脈(ケツミヤク)、

たねあぶら(種油)図菜種(ナタネ)より絞(シボ)り取りたる油、とぼし油、

たねいた(種板)図寫眞に其の物を寫(ウツ)し取りたる硝子板、

たねうし(種牛)図種を取る爲めの牛卽ち子を仕込(マシコ)せる牛、

たねうま(種馬)図其の種類の馬をふやすべく爲めに、飼(カ)ひ置く上等のなんた馬を云ふ、

たねおろし(種下)図種をまきつけるコト　㊁手品(テジナ)の仕方を知らすコト、

たねがみ(種紙)図蠶が卵子(コダネ)を產(ウ)み付けし紙、卽ち蠶卵紙(サンラン)、

たねがはり(胤變)図母は同一なれども、父の異なりたる兄弟姉妹(ダイキヨウイ)のコトを云ふ語、

たねせん(種錢)図錢(ゼニ)を造るべき其の鑄型(イガタ)のコトを云ふ、

たねちがひ(胤違)図たねがはり、

たねとり(種取)図其の種類の子を、ふやさすべく爲めに、飼(カ)ひ養ひ置くもの　㊁新聞紙に記載(ノセ)すべき材料を探(サグ)り出すコト、

たねはん(種板)図たねいたに同じ、

たねほん(種本)図著作に用ひし引用書(インヨウショ)　㊁繪畫(カイガ)に用ひし參考(サンコウ)畫のコト、

たねまき(種蒔)図凡て其の物の種をまくコトを云ふ、

たねもの(種物)図草木などの種子のコト　㊁種種(イロイロ)のかやくを入れたる蕎麥(ソバ)うどんの總稱(ソウショウ)、

たねものや(種物屋)図植物の種子(ハモト)を販賣する店、

たねん(多年)図多くの年月、長き間(アヒダ)、

たねん(他念)図ほかの思わく、ほかの心異なりたる考へ、

たねんさう(多年草)図植物學の語にて、多くの年月を經て成長する草を云ふ、

たねんせい(多年生)図植物學の語、成長するに多くの年月を要する物、卽ち松杜松、柏などの類を云ふ、

(ただの)

ただの(多能)図物事の心得の多きコト　㊁器用(キヨウ)なるコト、㊂種種の藝術に達してゐるコト、

ただのくさ(田草)図田に生ずる雜草(ザツソウ)、

ただのし(樂)図たのしきこと、こころよき、うれしき　㊁愉快(ユカイ)を強く感ずるコトを云ふ、

ただのしみ(樂)図たのしきコト、

ただのしむ(樂)自動好(コノ)ましいと思ふ　㊁嬉(ウレ)しく感ずる、

ただのみ(頼)図力にするコト　㊁たよりにするコト　㊂たのむコト、

ただのみ(田實)図稻の成熟(ジヨクジユク)したる實(ミ)のコト、

ただのむ(頼)他動たよる力にする　㊁まかす　㊂力をかりて事をなさんとする、

ただのみいる(賴入)他動れんごろにねがふ　㊁切にたのむ、

ただのみとむ(賴込)他動依賴(イライ)する、ひとにたのみ入れる、

ただのみせつ(田實節)図八朔(ハツサク)の別名、

ただのみのいはひ(田實祝)図八朔(ハツサク)の日に、新穀(シンコク)を神に供(ク)して、祭るコトを云ふ、

ただのむ(賴)図他家へおとづれて、案内(アンナイ)を請(コ)はんとする聲、

ただのも(田面)図田のおもて、田の表面のコトを云ふ、

ただのもし(賴)図たのもしきさま　㊁たよりとするさま、

ただのもし(賴母子)賴母子講の略語、東京地方で云ふムジン、

ただのもの(田物)図鷹狩にて用ゆる語、鴨

(モ)や雁(ガン)のコトを云ふ、

たのもしとう(賴母子講)図數人一組(クミ)となりて、毎月一回又は二回と定めて、一定の金額を差出し、其の組合の各人より、幾許(イクバク)引(ヒキ)と云ふ、入札をして、高札の者が其の總金額を受取る仕掛になれるものにて、融通(ユウズウ)をはかる仕組のもの、

(ただは)

ただば(束)図集めて一さくくりとなしたる物の稱、

ただば(駄馬)図專(モツパラ)ら荷(ニ)を運ぶコトにのみ用ひらるる馬　㊁下等の馬の稱(ナド)、

ただは(打破)図物を打ちこわす　㊁轉じて他人の議論を云ひ負(カ)す、

ただい(他輩)図我れより他(ホカ)のともがら。他の人々のコトを云ふ、

ただば(唾罵)図唾(ツバ)をはきかけてのゝしるコト　㊁轉じて甚だしくのゝしりはづかしむるコト、

ただはう(他邦)図他の國。外國、

ただはう(他方)図さまざまな仕事。多くのコトがらのコト、

ただばう(多望)図見込の多くあるコト　㊁望の多きコトを云ふ、

ただばう(多忙)図いそがはしきコト。せはしきコトを云ふ、

ただはうめん(多方面)図種々雜多のむきゝ諸々のむきむき、

ただはく(戯)自動たはむる、ふざける、

ただはけ(戯)図ふざけるコト、おどけるコト、からかふコトを云ふ、

ただはけ(白痴)図おろか、馬鹿(バカ)、

ただばと(烟草)図草の名、春先(サキ)に種を下し、夏に至つて移植(ウエカヘ)し、秋に至つて其の葉を取る、葉は刻(キザ)みてタバコとし、紙(カミ)にて卷き、又は烟管(キセル)に塡(ツ)めて喫(スヒ)ふ、

ただごと(戯言)図面白(シヤレ)きコトを云ふ　㊁おどけたコトを云ふ、

ただごと(戯事)図たはむれたる仕業(シワザ)　㊁おどけたるコトをするコト、

ただとや(烟草屋)図たばこを賣る店、

ただといれ(烟草入)図刻(キザ)みたる烟草を入れて、持(モ)ち歩く小さき袋、

ただばこぼん(烟草盆)図種々(シユシユ)の木材(モクザイ)にて造(ツク)られたる、種々の形(カタチ)をなせる箱(ハコ)の中へ、火入(ヒイレ)と灰吹(ハイフキ)とを入れて、煙草(タバコ)を喫(ノ)む用に供(ク)するもの、

ただばこばうちやう(煙草庖丁)図煙草の葉を刻(キザ)むべく用ゆる、大形(オオガタ)の及の薄き庖丁(ホウチヨウ)、

ただばさむ(手挾)他動物を手にて挾み持つ又た抱(カカ)える、

ただし(把藁)図藁物を洗(アラ)ふに用ゆる具(グ)にて、カルカヤ又は、シユロなどを三四寸ほどの長さに切り、束(タバ)れて針金にて結(ユハ)びし物、

ただしる(手走)自動水などの飛(トバ)で出る　㊁ほとばしり出づる、

ただた(田畠)図田地と畑(ハタケ)、

ただね(束)他動物を集(ツド)めて、一纒(ヒトタバ)めにする、まとめて結ぶ、

ただむる(戯)他動くるひあそぶ　㊁ふざけあそぶ　㊂からかふ　㊃どうける　㊄わるくさはぐ、わるふざけ、

ただむれ(戯)図ふざけるコト　㊁あそぶコト　㊂おどけるコト　㊃からかふコト　㊄面白くあそぶコト、

ただむれぐち(戯口)図おどけたコトを云ふコト、卽ち笑談(ジヨウダン)、

ただむれごと(戯言)図おどけたはなし、卽ち笑談(ジヨウダン)のコト、

ただむれごと(戯事)図ふざけた事をする

おどけた事をするコト、

たはら(俵)図穀物を入るべく爲めに藁(ワラ)にて造りたる袋(ロウ)、

たはれを(蕩子)図酒色に耽(フケ)れる人のコト、放蕩男、

たはれめ(遊女)図娼妓、女郎、

たはれうた(戯歌)図狂歌(カウ)のコトを云ふ、

(ただひ)

たひ(鯛)図海(ウミ)に産する魚の名、其形鮒(フナ)に似て大きく、凡百の魚類中の、其の肉の味最も美なるもの、種類甚だ多くあり、

「の意義。

たび(度)題其の折折(ヨリヨリ)、又た其の時時

たび(旅)図我が住ゐ居る土地を離れて、他の土地に居るコト、

たび(茶毘)図佛語、燒(ヤ)と云ふ義、即ち死者を燒くコト火葬(クワソウ)、

たび(足袋)図木綿にて製したる足に穿(ハ)く袋(ブクロ)の如きもの、

たびあきうど(旅商人)図旅から旅へ品物を賣って歩く人、即ち行商人(ゲウシヤウニン)のコトを云ふ、

たびあきなひ(旅商)図旅へ出て商賣するコトを云ふ、

たびうど(旅人)図旅客(カクキヤク)旅の人、

たびかせぎ(旅稼)図他國へ出掛(デカ)て、はたらくコト、又は其の人、

たびげいしや(旅藝者)図旅へ出て働く藝妓(ギイ)のコトを云ふ、

たびげいにん(旅藝人)図旅へ出て稼(カセ)ぐ遊藝人のコト、

たびころも(旅衣)図道中にて、着る衣物

㊁旅裝束(ウシヒシヨウ)のコト、

たびとうぎやう(旅興行)図旅から旅へ芝居などを打(ウチ)て行くコト㊁旅藝人の興行もの、

たびしやうぞく(旅裝束)図旅のすがた、旅の仕度(シタク)のコト、

たびしよ(旅所)図神社の祭禮の時に神輿(ミコシ)が渡御(トギヨ)して、暫らく休み居る處の稱、

たびじたく(旅仕度)図旅裝束(ウシヒシヨウ)のコト㊁旅へ出る身廻りの仕度、

たびしばゐ(旅芝居)図地方を興行(コウ)して歩く役者の一團(シン)、

たびずみ(旅住)図旅へ出て住ゐ居るコト、即ち寄留(キリウ)のコト、

たびすがた(旅姿)図旅へ出るみなり。たびしやうぞくのコト、

たびずまゐ(旅住居)図他國へ行きて住ゐ居るコト、

たびすまふ(旅相撲)図旅へ出てうち歩く相撲のコトを云ふ、

たひせんべい(鯛煎餅)図鯛の肉を擂(ス)りつぶして、少量の小麥粉を加えて、煎餅の如くに、蒸(シ)て干し乾(ホ)かしたる物、

たびそう(旅僧)図旅をして歩く坊主(ボウ)

雲水(ウンスイ)の僧のコト、

たびたち(旅立)図たびへ出るコト、

たびだつ(旅立)他動出立する、旅へ赴く旅へ出る、

たびたび(度度)図なんべんも、なんども、しばしばのコト、

たびぢ(旅路)図旅の道、即ち道中、

たびつかれ(旅疲)図道中(ドウチウ)のつかれのコトを云ふ、

たびと(田人)図百姓のコト、

たびにもつ(旅荷物)図旅へ持ち行く荷物のコトを云ふ、

たびね(旅寢)図宿屋に泊(ハク)るコト、

たひばり(田雲雀)図鳥の名、ひばりの一種にて、普通の者より小さく、全體の毛色(ケイロ)は淡黒色を呈す、

たびやう(多病)図病ひ氣の多き身躰(カラダ)病身のコトを云ふ、

たびぶくろ(旅袋)図旅をするに必用なる品物を入れて持ち歩く袋㊁馬の鞍(クラ)の左右にブラ下げて置く革(カワ)製の袋のコト、

たびまくら(旅枕)図旅路(タビヂ)にて泊(トマ)ってるコトを云ふ、

たひみそ(鯛味噌)図鯛の肉(ニク)を擂りつぶして、焚(タ)きつめたる赤味噌のコトを云ふ、

たひめし(鯛飯)図鯛の肉を擂(ス)りつぶし、味(アジ)を付けて、交(マ)たる飯(メシ)の稱、

たひめん(鯛麺)図小鯛(コダイ)を料理して、素麺(ソウメン)を卷きつけて、煮(ニ)きたるもの、稱、

たびや(足袋屋)図足袋(タビ)を商ふ人又は其の店(ミセ)のコト、

たびやかた(旅箱)図はたごや、

たびやどり(旅宿)図道中にて泊(トマ)るコトを云ふ、

たびやつれ(旅窶)図旅行の疲(ヒロウ)に依りて、身躰のやつれたるコト、

たびやくしや(旅役者)図旅へ出て芝居をする役者のコト、

たびよ(旅夜)図旅路に泊(トマ)りたる其の夜(ヨ)のコトを云ふ、

たひら(平)図凸凹(トツオウ)のなきなめらかなるコト㊁山と山との間(アヒダ)の平地のコトを云ふ語、

たひらか(平)図おだやか㊁高低(タカヒク)なき㊂正しき㊃不同のなき、即ちひとしき㊄不足なき、不平なき即ち滿足(マンソク)せるコト㊅心のおちつきゐてやすらかなるコト、

たひらぐ(平)自動おだやかになる㊁しづまる㊂わぼく(和睦)する、仲がよくなる、怨(ウラミ)がとけろ、

たひらぐ(平)他動敵を打ちて世をしづめる㊁惡しき者を退治(タイヂ)する㊂食物を殘らず喰ひ盡す、

たひらに(平)副高低(タカヒク)のなき㊁おだやかなるさまを云ふ、

たびろかす(反掌)自動手をかへす。手のひらをかへす、

(ただふ)

たふ(答)図こたへる。返事する㊁むくゆる㊂おうずるコト、

たふ(搭)図かける。かゝる㊁附屬(フゾク)する。つくコト㊂すつて寫(ウツ)す。すりものをなす、

たふ(荅)図豆の名、あづきのコト㊁答に通ず其の條を見よ、

たふ(塔)図寺院内に建てられてある二層(ニソウ)以上の高き建物の稱㊁總て其の建物の如き形を爲してゐるもの、稱㊂そとうばのコト、

たふ(鎗)図兵器。武器のコト、

たふ(劄)図記すコト又は記したる物㊁鍼(ハリ)にて突き刺(ツ)す、

たふ(賚)図物の重(オモ)なるコト㊁むさぼるコト㊂水の盛んに流れ行く狀(ヤウ)を云ひ表はす語、

たふ(踏)図足にてふみ行く㊁歩(アユ)む。進み行くコト、

「コトを云ふ、

たふ(鐙)図皮(カワ)にて作られたるくつの

たふ(欄)図細長く作られたる腰かけのコト即ち床几(シヤウギ)、

たふ(搨)図或る物を引き寫(ウツ)にして其の形を取る又は引き寫しとなしたるもの、稱㊁石すりなどのコトを云ふ、

たふ(踴)図ふみにぢるコト㊁けり飛(ト)ぶコトを云ふ、

たふ(鰨)図魚の名、さんせう魚のコトを云ふ一說に比良目(ヒラメ)のコトを云ふとあり、

たふ(綱)図繩(ナワ)や紐(ヒモ)などを輪(ワ)に

して投りつけてからめ捕るコトを云ふ又は其れに用ゆ繩、

たふ(納)図嫁(ムカ)を迎(カム)へるコト。めとるコト㊁あつむ、あつめる、

たふ(衲)図僧侶の着る衣物即ちころものコト㊁轉じて僧のコト、

たふ(闥)図樓門へ上る入り口のコト㊁高殿(タカ)の屋根、

たふ(活)図舌にて物を取りて食ふコト㊁慾のふかきコト。むさぼるコト。

たふ(堪)他動其の事にたへあさふ㊁忍(シノ)んでる、辛抱(シンボウ)する、「ふ、

たふ(食)他動のみくひする㊁たべるくら

たふ(太布)図楮(カウゾ)の皮、又はしなのきを細く裂(サ)いて、よこ糸となして、織りたる織物を云ふ、

たふ(墮婦)図墮落(ダラク)せる女、即ちいたづらの女のコト、

たふ(懦夫)図臆病(オクビヤウ)もの㊁氣力(キリヨク)なき男子(ダンシ)のコト、

たふ(打歩)図うちぶのコト、

たふく(多福)図しやわせの多きコト。幸ひの多くあるコト、

たふさ(髻)図もとどりのコト、

たふさ(踏査)図實地(ジツチ)をしらべる。實地について調(シラ)べるコト、

たふさい(搭載)図船又は車に貨物を積みのせるコト、

たふしふ(蹈襲)図人の爲したる事を引きつぎてなすコトを云ふ、

たふしよ(答書)図返事の手紙㊁總てこたふる文書のコト、「を云ふ、

たふじやう(搭乘)図車又は船に乘るコト

たふしん(答信)図手紙の返事、

たふす(倒)他動立てる物を横(ヨコ)にする㊁敵を殺す㊂借(カリ)たる物を返(カエ)さずして、先方に損失を蒙(カウ)むらす㊃はたいてころがす、

たふせ(田廬)図田圃の中にある小さき小屋のコトを云ふ、

たふつ(駄物)図下等の品物㊁轉じて智慧(チエ)のなき人の稱、

たふね(田舟)図小舟(コブネ)の別名、

たふのや(答矢)図敵に對して射(イ)かへす矢のコトを云ふ、「を云ふ、

たふば(塔婆)図墓に立てるそとばのコト

たふほん(搨本)図石すりなどに爲したる書物のコトを云ふ、

たふらかす(誑)他動だましまどはする。あざむく、

たふる(斃)自動倒(タフ)の㊁に同じ、

たふる(倒)自動こける横になる㊁死する㊂木などがおれてこける、

たふれ(倒)図立つてるもの の横(ヨコ)になるコト㊁損失を受くるコト㊂貸したる金の返らずして損失に歸するコト、

たふん(打扮)図化粧(ケシヤウ)して身躰(カラダ)をやつすコトを云ふ、

たふん(他聞)図他人が聞きて知るコト。他人に知らすコト、

たふん(多聞)図物事を能く聞きて知つてるコト、物知(モノシ)、

たふん(多分)図物の數の多き、

たふん(多分)副おそらくは、たいていはと云ふ意を表はす語、

(ただへ)

たへがたし(難堪)図辛抱(シンボウ)しがたし、こらえきれぬ、つらし、

たへしのぶ(堪忍)自動我慢(ガマン)する、辛抱(シンボウ)する、こらえてる、

たべすぎ(食過)図食物を餘計にたべたるコトを云ふ、

たへに(妙)副すぐれてある㊁奇(キ)くめでたくある、

たべもの(食物)図食料品のコト、

たべやり(食槍)図物を食(ク)ふる有樣、物の食べ振(フリ)のコト、

たへる(堪)自動物事にたゆる㊁辛抱(シンボウ)つよき、我慢する、

たべん(多辯)図多くしやべる㊁口數(クチカズ)を餘計(ヨケイ)にきく、

たへんけい(多邊形)図多くの角の在るもの、即ち八角十六角(カク)、などのものを云ふ、

(ただぼ)

たぼ(髢)図女の結(ユ)ひ上げたる髮(カミ)の後の方に張り出てゐる部分(ブブン)の稱、

たぼ(拿捕)図さらへつかまへるコトを云ふ、

たぼく(打撲)図はたくコト、なぐるコト、うちつけるコト、

たぼら(駄法螺)図俗語にて、無暗(ムヤミ)と大きな事を云ふコト、

たぼとめ(髢止)図髢(ヅタ)の毛の散亂(バラバラ)ぬやふに挾み置く金具、

たぼくしやう(打撲傷)図うちきづ、うちみ、うちごもりのコト、

たぼくさうしやう(打撲創傷)図打たれ又は打ちつけて身躰に、切り傷(ヅタ)又は裂き傷の生じたるを云ふ醫學上の語、

(ただま)

たま(玉)図美(ウツ)くしくして貴(トウト)き寶石(ホウセキ)を丸(マル)くなしたる物の總稱㊁凡て圓(マル)き形の物を云ふ㊂卵子(ランシ)の略、㊃或る目的(モクテキ)の事を成就(ジヤウジユ)さすべく爲めに使はれたる人、又は物を云ふ、即ち玉に使ふ㊄或る目的の爲めに大切にせる物のコトを云ふ、

たま(丸)図まるき形を爲せる物を云ふ㊁大砲小銃(ヒウヒウ)のたま、

たま(魂)図たましい、靈魂(レイコン)、精神(セイシン)のコトを云ふ、

たまあられ(玉霰)図あられの大粒(オホツブ)の物㊁菓子の名にて、砂糖(サタウ)をかためて圓くなしたるもの、

たまおしろい(玉白粉)図白粉を小さく丸くし固(カタ)まらせた物、

たまがき(玉垣)図神社に設(モウ)けられてある石の垣のコト、

たまかす(騙)他動だます、うそをつく、ごまかす、あざむく、

たまかづら(玉桂)図月の別名、

たまかづら(玉蔓)図くづのコト㊁草の名忍冬(ニンドウ)の種類、

たまかづら(玉鬘)図紐に細かき玉を通(カヨ)して、頭(アタマ)に掛て飾(カザ)りとなしたるもの、昔の頭飾(カザリ)、

たまき(環)図飾物の一種、輪(ワ)の形をなる珠(タマ)のコト、玉環(ギヨクワン)、

たまき(手纏)図大昔に、手へ珠(タマ)などを卷きて、飾(カザ)りとなせるを云ふ、今の所謂(イハユ)る腕環(ウデワ)のコト、

たまきぬ(環衣)図美しき絹(キヌ)の衣物のコトを云ふ、

たまきる(魂消)図驚(オドロ)くコトを云ふ、魂(タマシヒ)きゆるの義、

たまきりう(玉置流)図書法(シヨホウ)の一、お家流(オイエリウ)に似たるもの、玉置(タマオキ)と云ふ人が書き初めたるより此の名ありと云ふ、

たまぐし(玉串)図紙にて裁ちたる御幣(ゴヘイ)を榊(サカキ)に付け、神前に供(ク)ふる物㊁轉じて榊、

たまくら(手枕)図手を枕となして寢(ネ)るコトを云ふ、

たまくしげ(玉櫛笥)図櫛などの頭の飾り物を入れて置く、美しき立派なる箱のコトを云ふ、

たまげる(魂消)自動魂(タマシヒ)が消(キエ)たると云ふ意より轉じて、吃驚仰天(ビツクリテンタウ)す

る。甚だしく驚く、

たまご(玉子)圖鳥(ハヒ)魚(ウヲ)虫(ムシ)などの未だかへらざる時の物、即ち殼(カラ)の内に在りて、其鳥となるべく魚となるべき精(セイ)を有(ウ)てるものにて、其の形は大小不同なれども、悉く楕圓形(ダエン)をなせるもの㊁鷄(ニワトリ)の玉子の名㊂物事の初め基礎(キソ)のコトを云ふ語、

たまごと(玉琴)圖琴のコトを丁寧(テイネイ)に云ふ語、

たまごや(玉子屋)圖鷄卵を賣る家、

たまごゆ(玉子湯)圖鷄卵(ケイラン)をときて、砂糖(サトウ)を加へ、熱湯(ネユ)を注(ツ)ぎ泡だてつゝ溶(ト)したものゝ稱、

たまごいろ(玉子色)圖鷄卵(ケイラン)の皮の如き色合即ち薄茶(ウスチヤ)色、

たまござけ(玉子酒)圖玉子を酒にてゆるく溶き、砂糖(サトウ)を少し加(クハ)え火に載せ煮沸(ニフツ)せし物、

たまごとじ(玉子綴)圖料理の一種、すまし汁を拵らへ、其の内へ玉子の溶(ト)きたる物を入れて、かたまらせたる物、三つ葉(ミツバ)などを添て用ゆ、

たまごなり(玉子形)圖玉子に似たる形を爲せるもの、

たまごまき(玉子卷)圖料理の一種にて、薄き玉子燒を製し、之にて魚肉(ニクヒ)などを卷きし物の稱、

たまごめし(玉子飯)圖玉子に味淋(ミリン)をつけて軟(ヤワ)らかく煮き、炊(カシ)きたての飯(メシ)に掛しもの、

たまごやき(玉子燒)圖玉子に味淋(ミリン)を少し交ぜて溶(ト)き、玉子燒鍋にて煮(ニ)さかためたる物、

たまごせんべい(玉子煎餅)圖菓子の一種小麥粉を玉子にて練りて、燒(ヤ)たる煎餅の稱、

たまごとうふ(玉子豆腐)圖玉子(タマゴ)に葛(クズ)を加へてゆるく溶(ト)き、味(アジ)をつけて蒸(ムシ)したるもの、

たまざさ(玉笹)圖笹(ササ)の コトを丁寧(テイネイ)に云ふ語、

たまざん(玉算)圖和算(ワサン)のコト卽ち算盤(バンバン)にて行ふ算法、

たまさいく(玉細工)圖玉をみがきて、種々の細工(サイク)をなすコトを云ふ、又は細工(サイク)せしもの、

たまし(魂)圖精神(セイシン)のコト、

だまし うち(騙討)圖欺(アザム)むきて敵を誘(サソ)ひ出して討つ㊁やみうちのコト。不意討のコト、

だましとむ(騙込)他動人を上手(ジヤウズ)にあざむく、

たましどり(騙取)他動欺(アザム)むきて他人の財物(ザイブツ)を取る、

たます(騙)他動嘗(ナメ)を眞(マコト)として、信じさせる、あざむく、

たますり(玉磨)圖玉を磨(ミガ)りみがき種々の細工物をなす職工、

たますだれ(珠簾)圖珠(タマ)を編(ア)みて作りしすだれ㊁上等の簾(スダレ)、

たまたま(偶)副思はず過(ア)ふ㊁まれに㊂期(キ)せずして會する、

たまたま(適)副偶に同じ、

たまだれ(玉垂)圖簾(スダレ)に 珠玉(タマ)を節(カサリ)として附(ツ)けたるもの㊁簾の極(カギリ)めて美(ウツ)くしき物を云ふに用ゆる語㊂菓子の名、白砂糖(トウザツ)に山葵(ワサビ)の卸(オロシ)たる物を交(マゼ)て、ギユウ皮(ヒ)に包みたるものを云ふ語、

たまだすき(玉襷)圖襷のコトを丁寧(テイネイ)に云ふ語、

たまつき(玉突)圖西洋より來(キ)たれる一種の遊戯、大なる長方形の布(ヌノ)を敷(シキ)たる臺の上へ、紅白(コウハク)の小玉を敷個置き、棒(ボウ)にて其の玉を突きて、他の玉と衝突(ツキアタ)せしめて勝敗を爭ふもの、

たまづさ(玉章)圖手紙のコト、

たまつくり(玉造)圖玉をみがきて、細工(サイク)をする人、

たまつばき(玉椿)圖椿をめでゝ云ふ語、

たまつきだい(玉突臺)圖玉突(タマツキ)をなす臺にて、細長く大なる物、四本の足ありて、其の上に毛織物を敷きたるもの、

たまて(玉手)圖女子の美しくやさしき手のコトを云ふ、

たまてばこ(玉手匣)圖貴(ウヤ)とき大切なる物を入れ置く箱、

たまなげ(球擲)圖毬(マリ)を投げ合つて互ひに勝敗(カチマケ)を爭ふ游戯(ユウギ)のコトを云ふ、

たまなし(玉無)圖物を殘(ノコ)らず、無なしたるコト㊁物が其の役(ヤク)に立ずなりしコトを云ふ、

たまに(偶)副時より、たまさか、まれに、

たまねぎ(玉葱)圖葱(ネギ)の一種にて、其の根は球狀をなせる、大なるもの、根を食料に供す、

たまのお(玉緒)圖小さき玉をつなぎたる緒㊁轉じて生命(イノチ)のコト、此の上なき貴(トウト)きと云ふ意より出づ、

たまのり(球乘)圖大なる球に乘りて樣々の藝當をなす見世物、

たまのすがた(玉姿)圖うるはしき姿のコトを云ふ、

たまのみきり(玉刷)圖最も美しき庭園(ニワ)のコトを云ふ、

たまのるのうめ(玉井梅)圖梅の一種、薄紅色(ウスベニイロ)の大なる花を咲(カ)ず、香氣の殊に高きを以て、其名あらはる、

たまのかんばせ(玉顏)圖貴人のお顏つきを申す㊁美しき顏と云ふ煎味(イ)、㊂美人の顏のコトを云ふ、

たまはね(玉花)圖霰(アラレ)の一名、

たまはる(賜)圖目上(メウヘ)の人より物を下される、㊁さづかる、

たまはりもの(賜物)圖目上(メウヘ)の人より下されし物、拜領(ハイリヤウ)物、

たまふ(賜)他動人に物を與(ア)える、

たまふ(給)(接尾)我れより身分の高き人の爲す事を云ひ表(アラ)はす時に用ゆる敬語、假令ば喜(コノ)び給ふなど、

たまぼや(玉火屋)圖洋燈(カンテラ)のホヤの圓(マル)き形をせる物、

たままつり(魂祭)圖死したる人の靈魂(コンパク)を祭るコト、

たままみづ(玉水)圖あまだれ、

たままみそ(玉味噌)圖大豆(ダイズ)の煮たる物を搗(ツキ)すして、其のまゝ麹(コウジ)と交ぜて、藥(クスリ)にて包みて、貯(タクハ)へし物、

たまむし(玉蟲)圖最(イト)も美(ウツ)くしき虫にてその形は油虫(ユムシ)に似て大きく、長さ一寸ほどあり、背(セ)には硬(カタ)き甲(カフ)を有し、綠色を呈せる中に、數條の金線(キンセン)あり、腹(ハラ)は黃金色(オウコンシヨク)を呈して、六本の足を有する、極(ハナ)めて美麗(ビレイ)なり、此の虫は多く深山の榎(エノキ)に生ずるものである、

たまむすび(玉結)圖紐(ヒモ)の結び方の一種、玉の如く閉く結ぶ、

たまもく(玉目)圖木材(モクザイ)の渦狀(ウヅジヤウ)をなせる美しき木目(モクメ)、

たまるの(賜物)圖たまはりたる物、さづかりたる物のコト、

たまや(玉屋)圖玉及び玉の細工物を賣る人、又は其の店、

たまや(靈屋)圖位ある高く貴(ウヤ)とき人の靈魂(コンパク)を祀ってある所を云ふ、

たまよび(玉除)圖大砲の丸(タマ)の來(キ)るを、防ぐ道具のコト、

だまる(默)他動だまつてる、口を利(キ)ぬ(無言)㊁議場(ギジヤウ)なぞで、我意見を述(ノ)ぬ、

たまる(溜)自動物の集つてある㊁のこる㊂貯はえて置く(金がたまる)㊃ふえる

たまり(溜)圖物のあつまつてあるコト㊁人々の集りて休み居るところ㊂醤油(ショウユ)の、特に上等の物、濃(コク)くして味甘(アマク)し、

たまりみづ(溜水)圖一處(ヒトカ)に溜つて流れぬ水、水だまり、

たまりのま(溜間)圖人の集(ツド)まつて扣(ヒカ)えゐる室(ツマ)、德川時代に大名及び重役方の、扣へ居る間(マ)即ち千代田城内に在りしもの、

（ただみ）

たみ(民)圖人々、同胞(ハラカラ)、

たみくさ(民草)圖人民のコト、

たみごえ(濁聲)圖にごりたる音聲のコトを云ふ、

たみごえ(訛聲)圖なまりたる音聲、

たみぞ(田溝)圖田圃のあぜなどに在る田の水の流れゆく溝、「トを云ふ、

たみち(田路)圖田圃道(ハタケミチ)、あぜ道のコ

たみづ(田水)圖田面に溜(タマ)つてる水のコトを云ふ、

たまも(玉藻)圖美しき衣物、

たむ(回)他動まわる。めぐる、

たむ(彩)他動色どる。さいしきをなして美しくなす、

たみん(情民)圖志氣(キモ)の衰(オトロ)えて振(フル)はざるコト㊁意(コヽロ)たりて樂寢(ウチ)するコト、

（ただめ）

たむ(矯)他動曲(マ)れるを正しくする㊁改めて善くす㊂我が心に思ふ事を自身に抑(オサ)えつけて外(ソト)へ表はさぬ、

たむ(採)他動凡て曲(マ)れる物を眞直(マヽ)に、のべ直す、㊂轉じて惡しきを改(アラタ)めて善くなす、

たむ(溜)他動たくはへる㊁一所に集めてべつのコトを云ふ、

たむけ(手向)圖旅のはなむけ、即ちせん

たむし(田虫)圖皮膚病(ヒフビヤウ)の名皮膚に輪形(ワナ)の赤き腫物(モノ)を生ずる病氣、甚しく痒(カユ)く、次第に廣がり行くもの

たむろ(屯)圖人の集(ツド)まつてる場所㊁警察署のコトを云ふ、東京の方言、

（ただめ）

ため(溜)圖物を一所(ヒトト)に集め置く處㊁囚人の病者を入れ置く處即ち(病監)の別名、

たゆ(爲)圖わけがら㊁我が身の利益になるコト㊂我に關係(カヽワリ)あるものコトを云ふ、

だめ(駄目)圖物の用に立ぬコト㊁功(コウ)なきコト㊂物事に就ての最後(サイゴ)の決定(ケツテイ)、即ち駄目をおすの類、

ためいけ(溜池)圖田を養ふ用水を溜めて置く池、

ためう(他名)圖別の名、ほかの名㊁他人「の家の名前、

ためおく(溜置)他動たくはへて置く、ためて置く、「するコト、

ためし(試)圖こゝろみるコト㊁試驗(ヒヤウ)

ためし(例)圖前よりのしきたり㊂手本(ホン)

ためしぎり(試斬)圖新刀(タウ)の斬れ工合(ヨ)を試(ヒ)して見るべく人又は獸(ケモノ)などを斬るコト、

ためしもの(試物)圖試し斬の用に供せらるる物件(ブツケン)、

ためす(試)他動こゝろみる、

ためすじ(爲筋)圖人(ヒト)などの用ゆる語にて、自分の利益になる客人のコトを云ふ、「れだから、

ために(爲)副其故に、其れだに依りて、其

ためぬり(溜塗)圖赤黑(アカグロ)き漆(ウルシ)ぬりのコトを云ふ、

ためらひ(躊躇)自動迷(マヨ)ふて決斷しかぬる㊁ぐづぐづする、

ためん(他面)圖ほかの方面、又は平面のコトを云ふ、

ためん(多面)圖多くの方面又は多くの平面のコトを云ふ、

（ただも）

たも(保)圖大切に持つてる、

たもつ(保)自動失(ウシナ)なはぬやうにする㊁長く持つ、

たもと(秩)圖袖(ソデ)のコト㊁山の麓(フモト)のコト㊂傍(ソバ)の場所、假令ば池のたもとなど、「を云ふ、

たもとどけい(秩時計)圖懷中時計のコト

たもとのくそ(秩屑)圖衣物の秩の底(ソコ)に、塵埃(ホコリ)が自然と溜(タマ)りて、かたまりたる物の稱、

たもの(駄物)圖下等の品物、

たもん(多聞)圖城の周圍(マワリ)の壁(カベ)の作り方の一種、即ち城壁を長屋(ナガヤ)の如くに作りて、人の住まふやうに、なしたるもの、

たもんでん(多聞天)圖佛法の語にて、びしやもんてんのコト、

（ただや）

たやす(絶)他動れだやしにする、つぐすなくする、「とてがるに、

たやすく(輙)副わけなしに、ようゐに、い

たやすし(容易)圖無雜作(ムザサ)に㊁いと安らかに㊂難(カタ)からずあり、

（ただゆ）

たゆ(絶)自動物事のつゞかぬ、はなれる、㊁生命(イノチ)の亡(ナク)なる、即ち息(イキ)がたゆ㊂往來(ユキキ)の出來なくなる㊃つきる、

たゆし(懈)圖奮發(ハツパ)の氣なきさま㊁怠(ナマケ)りたるさま、

たゆみ(弛)圖弱(ヨワ)くなる㊁ゆるくなる㊂心の疲(ツカレ)れるコト、

たゆむ(弛)自動弱くなりゆく㊁ゆるくなりゆく㊂物事をなす氣力のよわりゆく

（ただよ）

たより(多用)圖用事(ヨウジ)の多くあるコトいそがはしきコト、

たより(便)圖おとづれ㊁力としたのむ㊂ついで(序手)㊃てづる、

たよる(便)自動たよりにする、たのみにする、力とする、

たよく(多慾)圖慾心のつよき、慾のふかきコトを云ふ、

（たら）

たら(鱈)圖北海の寒き海中に棲(ス)る魚にて、其の形鱈(ヒラス)に似て大きく、鱗(ウロコ)細(ヒソ)かく、目及び頭共に大なり、肉(ニク)は冬期は美味(ビミ)なれども、夏期は味なし、多くは乾物(ホシモノ)となして諸方へ輸送す、

たらかす(誑)他動すかしなだめる、だます、こまかす、あざむく、

たらかんゆ(鱈肝油)圖鱈より取りたる一種の臭氣を有する油、强壯(ツヨク)藥として用ひらる、

たらく(墮落)圖佛法の語、佛の道を守る能はずして、俗界(ゾクカイ)へ落るコト㊁品行(ヒンコウ)を正しくせずして、横道(ヨコミチ)へ落ち込みたるコト(不品行)㊂おちぶれ

たるコト、

たらくるの(墮落者)圖品行の惡しくしておちぶれたる者、

たらし(滴)圖しづくの落るコト、

たらし(滴)(接尾)水や油などの、ひたたるを數(カゾ)ふに用ゆる語、

たらしこむ(滴込)他動又た垂込とも書く滴し込む、ポッポツとひたらせる、

たらす(垂)他動ブラ下げる㊁水などを靜(シヅ)かに流(ナガ)し落す、

たらすけ(陀羅助)圖腹痛(イタミ)の藥の名、だらにすけに同じ、

たらずまへ(不足前)圖たりない分量、たしまへのコトを云ふ、

たらちね(垂乳根)圖母のコト㊁父母のコトを云ふ、

たらにすけ(陀羅尼助)センブリの根を煮(ニ)つめて、製したる黑色のかたまり、其味極め苦く(ニガ)く、腹痛(イタミ)の藥として用ゆるもの、

たらひ(盥)圖湯水(ユミヅ)を盛りて、手足其他衣類(イルイ)などを洗(アラ)ふに用ゆる道具、淺き扁平(ヘヒラ)き桶(オケ)の如き形をせる物、

たらふく(多羅福)圖俗語にて、物を多分に食して、腹が一ぱいになつたと云ふコトしこたま、

（ただり）

たり(人)(接尾)凡て人數(ヒトカズ)を數えるに用ゆる語、假令ば二人(フタリ)、

たりう(他流)圖ほかの流儀、

たりつ(他律)圖ほかの規則、ほかのおきてのコトを云ふ、

たりき(他力)圖他人の力(チカラ)、

たりやう(多量)圖かさの多きコト、

たりやう(他領)圖他人のりやうぶん、

たりよく(多力)圖力の強きコト、

たりよく(他力)圖たりきに同じ、

たりゆうしあひ(他流試合)圖武術の語にて、他の流儀を修(オサ)めたる人と腕を試(ヘ)し合ふコト、

たりきしゆう(他力宗)圖彌陀如來(ミダニヨライ)の功德(クドク)に依りて、極樂淨土(ゴクラクジヤウド)を遂(ト)られると云ふコトを、主とする宗旨(シウシ)のコト、卽ち淨土宗や、一向宗のコトを云ふ、

（ただる）

たる(樽)圖器具の名、酒醬油などの凡て液體(エキタイ)を入れ置くに用ゆるもの、形圓く桶(オケ)に似て、蓋(フタ)あり呑口(ノミクチ)の具(ウツワ)はれるもの、

たる(足)自動十分にあり㊁みちてゐる㊂困(ナヤ)らぬ㊃其の事柄を能く爲しあたふコトを云ふ、

たる(垂)他動下へつるしおろす、下(サ)る㊁つるし下す㊂後の世までのこる、卽ち(名を後世に垂(タ)る)、

たる(垂)自動たれ下がつてる㊁したたり落(オチ)る㊂物の尖(サキ)の下に向ひてるつるされてある、

たるゐ(垂水)圖流れ落つる水のコト、卽ち(ちたき、

たるゐ(墮淚)圖悲(カナシ)の情が迫(セマ)り來て、泪(ナミダ)の流れ出るコト、

たるき(垂木)圖家の棟(ムネ)より橋(キ)の方へ、横(ヨコ)に掛け渡(ワタ)されたる木材のコトを云ふ、

たるし(怠)腦疲(ノウヒ)れて身體の弱(ヨワ)てある㊁物事をてきぱきせずに遲々(チチ)してる、

たるひ(垂氷)圖垂れ下がつてる氷、卽ちつゝらのコトを云ふ、

たるま(達磨)圖佛語にて、天竺(テンヂク)の學識(ガクシキ)德行(トクギヤウ)、共に高かりし僧侶の名㊁淫賣婦の一名、

たるみ(弛)圖たるむコト、

たるむ(弛)他動ゆるくなつてる㊁張(ハ)りし力のおとろえたる、

たるがき(樽柿)圖酒の明樽(アカダル)に澁柿(シブガキ)を塡(ツメ)て、むさせて澁氣(シブミ)を去りし柿の實(ミ)のコト、

たるそと(樽底)圖樽の底(ソコ)㊁樽の底になつたる酒(サケ)のコト、

たるだい(樽代)圖酒を買ふ代金(ネダン)、

たるぬき(樽拔)圖樽柿に同じ、

たるまきく(達磨菊)圖菊の一種にて、枝を生ぜず、莖(クキ)一本に一つの大なる白色、又は藍色(アイイロ)の花を咲かす物、除虫菊(ヂヨヂユキク)の一種にて除虫の功あり、

たるまがへし(達磨返)圖女子の髮の結(ユ)方の名、

（ただれ）

たれ(垂)圖物の垂れさがつてるコト、又は垂れ下がつてる物㊁籠(カゴ)の左右に垂れ下つてる筵戸(ムシロド)のコトを云ふ、

たれ(垂)圖料理に用ゆる、醬油の一種にて、醬油と味淋(ミリン)と砂糖を合して製したる物と、味噌(ミソ)に醬油に味淋に砂糖(サトウ)を加えて製したる物との二種あり、前者は蒲燒(カバヤキ)照燒(テリヤキ)などを燒くに用ひ、後者は肉類(ニクルイ)などを味(アヂ)よく煮(ニ)に用ゆるもの、

たれ(誰)圖どの人、どなた、

たれかど(垂蔵籠)圖小形の駕(カゴ)にて、左右にむしろ戸の垂れ下るやうに出來てゐるもの、

たれかれ(誰彼)圖だれも、かれも、凡ての人のコトを云ふ、

たれぬの(垂布)圖とばり、どんちやう㊁のれんのコトを云ふ、

たれびと(誰人)圖何處の誰(ハタ)と云ふコトを云ふ、

たれみみ(垂耳)圖耳朶(ミミタブ)の垂れてつてるコトを云ふ、

（ただわ）

たわざ(田業)圖田畠(ハタケ)を、たがやすコトを云ふ、農事、

たわむ(撓)圖たはめるコト、

たわめる(撓)自動まがる、しなふ、輪形(ワ)になる、

たわめる(撓)他動なげる、たわまする、

（ただん）

たん(旦)圖あさのコト。夜あけのコト㊁あした、あすのあさ㊂夜を眠(ネム)らずに明かす㊃あきらかなるさまを云ふ、

たん(但)圖だけれども。たゞし㊁あらかたおうよそ㊂特別に。格別に㊃いたづらにの意、

たん(胆)圖はだをぬぐコト。肌をぬいてるコトを云ふ、

たん(啖)圖食(クラ)ふコト。くふコト㊁かむかじるコト、

たん(炭)圖すみのコト㊁火、

たん(澁)圖水の流れの急なるコト㊁はやきコト。はやし、

たん(蟹)圖女の漁師。あま㊁南の方に在る、えびすのコト、

たん(湛)圖水などのたゞよひ滿てるさま㊁水のすめるさま㊂沈(シズ)む㊃重(オモ)なりて厚きコト、

たん(耽)圖ふける。おぼれる㊁勢つよく物を見るさま、

たん(探)圖さがすコト。ねらふコト㊁卷へるコト。うかゞふ、

たん(疸)圖胃病が原因(モト)となりて、生ずる一種の病氣の名、

たん(粗)圖屑(クズ)をぬぐコト。はだをぬぐコトを云ふ、

たん(貪)圖むさぼるの慾(ヨク)のふかきコトほしがる。

たん(端)圖はし。いとぐち。はじめ㊁正しきコト㊂すなほなるコト㊃もつぱらのコト㊄くわしきコト㊅布(ノノ)の長さを、はかるの語一端は二丈七八尺なり、

たん(蟇)圖又たどんとも讀むくろき雲のコトを云ふ㊁くもる。くもりたるコトを云ふ、

たん(蟾)圖武器の名、長きほこのコトを云ふ㊁まく切れる刄物、

たん(譚)圖話(ハナシ)。物語(モノガタリ)㊁ほしいまゝ。我がまゝ㊂廣大なるさまを云ひ表はす語、

たん(彈)圖はぢく。はれかへるコト㊁しらべる。たゞすコト㊂うつ。ばたくコトを云ふ、

たん(擔)圖かつぐコト。になふコト㊁荷物(ニモツ)のコトを云ふ、

たん(潭)圖水のうごきたゞよふさまを云ふ㊁安らかなるコト。しづかなるコト㊂平(タイラ)かなるコト㊃あわゆきコトを云ふ、

たん(綻)圖ほころぶコト㊁ひらくコト㊂ほぐれるコト、

たん(憚)圖はゞかるコト㊁おそる。きらふ㊂なやむ。つかれる㊃そばむ。はゞむ

たん(赧)圖はづかしがる。はづる㊁はぢて顏を赤くなすコト、

たん(淡)圖うすきコト。あはゆきコト、㊁水の靜かに流る狀、

たん(丹)圖赤き繪具(ヱノグ)の名、即ち辰砂(シンシヤ)、丹砂(シンサ)に同じ㊁赤色(アカイロ)まごころ、

「ト。

たん(坦)圖平なるコト㊁なめらかなるコト㊂込み合はざる㊃ひとえ㊅一つ、

たん(膽)圖キモ心根(コヽロネ)のコト、

たん(短)みぢかきコト㊁欠(カ)けているコトを云ふ、即ち短所(タンショ)、

たん(潭)圖水のたまつて深き處を云ふ川のコトを云ふ、

たん(歎)圖歎息(タンソク)の歎にて、なげくコト㊁心底(シンテイ)より感ずるコト㊂ほむるコト㊃かなしむコト、

たん(痰)圖肺臟(ハイゾウ)の中より咳(セキ)に依りて、口へ出て來る粘(ネバ)き液(エキ)、

たん(反)圖段に同じ㊁吳服太物(ゴフクタモノ)を數ふるに用ゆる語にて、鯨尺(クジラジヤク)にて二丈七尺の長を一反と定む、

たん(斷)圖決斷の斷にて、物事を思ひ切つて行ふコト㊁堅(カタ)く決心せるコト㊂物を二つに斷(タ)ち切る如く、是非善惡を判然と、さばきつけるコトを云ふ、

だん(壇)圖他の場處より、特に高くなしたる場處㊁祭事(マツリ)を行ふ時に、物を供(ソナ)へる爲めに、土を一段(ダン)高く盛りたる處、

だん(段)圖だんばしご、きざはし、

たん(段)(接尾)數字の下に加えて、田畑(ハタケ)の廣さを計(カ)るに用ゆる語にて、三百歩を一段と定む、

「コト、

だん(暖)圖あたゝかきコト、あたゝまる

だん(男)圖をとこ㊁息子(ムスコ)㊂五等爵(ハクシヤク)位の五等目、即ち男爵の略、

だん(團)圖集(ツド)まつて一塊(ヒトマカタ)となる㊁組合(クミアヒ)、仲間(ナカマ)㊂まるきコト、

だん(談)圖はなしする、物語りする、

だんあい(淡靄)圖うすがすみ、

だんあん(斷案)圖判斷(ハンダン)するコト、即ち斷定に同じ、

たんい(坦夷)圖平らかなるコト。平地又は平面のコトを云ふ、

たんい(單衣)圖裏のなき衣服、即ちひとえ物㊁一枚の衣物のコト、

たんい(短衣)圖丈(タケ)の短かき衣服㊁はつて行ふコト㊂堅(カタ)く決心せるコト㊃物を二つに斷(タ)ち切る如く、是非善惡を判然と、さばきつけるコトを云ふ、

だん(壇)圖他の場處より、特に高くなしたる場處㊁祭事(マツリ)を行ふ時に、物を供(ソナ)へる爲めに、土を一段(ダン)高く盛りたる處、

だん(段)圖だんばしご、きざはし、

たん(段)(接尾)數字の下に加えて、田畑(ハタケ)の廣さを計(カ)るに用ゆる語にて、三百歩を一段と定む、

「コト、

だん(暖)圖あたゝかきコト、あたゝまる

だん(男)圖をとこ㊁息子(ムスコ)㊂五等爵(ハクシヤク)位の五等目、即ち男爵の略、

だん(團)圖集(ツド)まつて一塊(ヒトマカタ)となる㊁組合(クミアヒ)、仲間(ナカマ)㊂まるきコト、

だん(談)圖はなしする、物語りする、

だんあい(淡靄)圖うすがすみ、

だんあん(斷案)圖判斷(ハンダン)するコト、即ち斷定に同じ、

たんい(坦夷)圖平らかなるコト。平地又は平面のコトを云ふ、

たんい(單衣)圖裏のなき衣服、即ちひとえ物㊁一枚の衣物のコト、

たんい(短衣)圖丈(タケ)の短かき衣服㊁はんてん、じゅばんの稱、

だんい(暖衣)圖あたたかき衣物㊁澤山(タクサン)に衣物を着ているコト、

たんい(單位)圖數學の語にて、物を數ふる本となる數のコトを云ふ、假令ば單位は錢位に止むるか、又は單位を十とするかの如し、

たんいつ(單一)圖たゞ一つ㊁其ればつかり㊂他に交(マジ)り氣のなきを云ふコトを云ふ、

たんいつぶつ(單一物)圖他に交(マジ)り物なく、其のもの一つにて、一つの物體(ブツタイ)をなせるものの稱、

だんう(彈雨)圖彈丸が、雨の如くに飛(ト)ぶコトを云ふ、

たんうん(淡雲)圖うすぐも、

だんうん(斷雲)圖きれぎれになつている雲のコト、

たんえき(膽液)圖膽藏中に在る膽汁(タンジウ)のコトを云ふ、

たんえふ(單葉)圖一枚の葉(ハ)、

たんえん(淡烟)圖うすきけむり。あわゆき烟(リケム)のコト、

だんえん(團圓)圖まるきコト、まんまるのコトを云ふ、

「むり、

だんえん(斷煙)圖切れ切れに立ち上るけむり、

たんえふくわ(單葉華)圖一さえの花のコトを云ふ、

だんをち(檀越)圖旦那に同じ、

たんおん(單音)圖母音(ボイン)のコトにて、即ち五十音中のアイウエオの五音を云ふ、

だんおん(暖溫)圖あたたかなるコト。ぬくきコトを云ふ、

たんか(單舸)圖小さき舟㊁はしけ舟のコト、

たんか(擔荷)圖荷物をになふコト、荷なふにる荷物、

たんか(短歌)圖長歌に對しての稱にて、普通の歌のコト、即ち三十一文字の歌のコト、

たんか(擔架)圖病人や怪我人(ケガニン)を載(ノ)せて運ぶ道具、即ちズツク布(ノノ)の左右兩側(リヤウガワ)に竹又は棒(ボウ)を通し、前後(ゼンゴ)より其棒を持つて運ぶもの、

たんが(端雅)圖正しくしてみやびなるコトを云ふ、

だんか(檀家)圖其の寺について俗家、だ

だんかい(段階)圖物の順序(ジユンジヨ)㊁きざはし㊂位(クラヰ)のコト、

だんがい(斷崖)圖がけをたち切つたるが如き、けはしきがけのコトを云ふ、

だんがい(彈劾)圖官吏の失策(シツサク)を發(ハツ)きて其の罪(ツミ)を責(セ)める、

たんかう(炭坑)圖石炭(セキタン)を堀り採(ト)べく穿(ウガ)ちたる穴、

たんかう(單行)圖ひとすじ㊁一人にて旅(タビ)をするコト㊂自分一人で思ひ通りに物事をするコト㊃一つの本として出版するコト、

だんかう(斷行)圖思ひ切つて行なふ㊁押し切つて思ふ事を爲す、

だんかう(斷交)圖交(マジ)を斷(タ)つ㊁交際を止るコト、

たんかく(蛋殼)圖玉子のから、

だんかく(談客)圖はなし相手、

たんかつ(短褐)圖みじかきぬのこ、胴衣(ドウイ)などの類、

たんがん(赧顏)圖赧面(ホンメン)に同じ、

たんかん(單簡)圖てみじかに、ひつこかに、「のコト、

だんがん(斷岸)圖きつかけになつてる岸

たんかいとう(探海燈)圖サーチライトの事にて、夜中敵の容手を探ぐる爲めに軍艦又は陸地より、海中又は敵陣を照(テ)し視る爲めの電氣仕掛の光力(クワウリヨク)強き燈、

たんき(短期)圖期限(キゲン)の短かきコト、短かき期限(キゲン)、

たんき(短氣)図きみじかのコト、

たんき(膽氣)図がうき(剛氣)のコト、物事に怖れぬ強き氣前(ケマ)、

たんき(單騎)図伴(ハン)なしに一人で、馬に乘て進むコト、

たんき(暖氣)図あたたかきコト、

だんき(彈機)図はじき、即ちばねのコトを云ふ、

だんき(談義)図物事に就(ツイ)て道理を話し聞(カク)すコト㊁意見(ケン)する、小言(コト)を云ふ、

だんき(彈碁)図碁石(ゴイシ)を用ひて遊ぶ一種の遊戯にて、即ち中高(ナカダカ)になつて る盤(バン)に、兩人對座となり各目(ヒトツ)に碁石を六個又は八個宛(ヅツ)持ちて、甲の人先づ我が碁石を彈(ハジ)て、中央の高き處を越(コ)せて、相手の碁石に中(ア)る遊のコト、

たんきゅう(探究)図物の道理を十分にさぐり、きわめるコト、

たんきょ(端居)図ぎようぎよく坐(ザ)っているコト、即ち端坐、

だんきん(斷金)図殊の外に交(マジ)り深きコト、極(ゴク)めて仲のよき、

だんきん(彈琴)図琴(コト)をかなづるコトを云ふ、

たんきゅう(談興)図話のおもしろみ。談話の興味のコトを云ふ、

たんきょう(端拱)図正しく兩手を組(ク)むコトを云ふ、

たんきより(短距離)図へだたりの短かきコト、

たんきとう(炭氣燈)図瓦斯燈、

たんきふほう(單級法)図學力の相等(ヒトシ)からざる生徒を、一室に集(アツ)めて教授(ジユウ)するコト、

たんきりあめ(痰切飴)図かた飴(アメ)を、薄く平(ヒラ)たく延(ノバ)して、一寸(スン)ほどに切りしもの、

たんきふせいがくかう(單級小學校)図單級法に依りて、生徒を教授する、小學校のコトを云ふ、

たんくわ(短靴)図みじかきくつ半靴(ハンカ)のコトを云ふ、

たんくわ(丹花)図凡て紅(カ)く美しき色を呈する花のコト㊁美くしき女の唇(ハシ)のコト、

たんくわい(怛懷)図平氣なる心、

たんくわう(蛋黄)図卵子の黄味(キミ)のコトを云ふ、

たんくわう(炭鑛)図石炭のコトを云ふ、

たんくわん(丹欵)図誠の心。まごころのコトを云ふ、

たんぐわん(歎願)図事の次第を委しく述べて只管(ヒタスラ)に賴む㊁なげきて、たのむコト、

だんぐわん(彈丸)図大砲の丸、

だんけ(檀家)図寺院に墓所(ハカバ)の在る家を、其の寺院の僧侶が呼ぶ語、檀那寺(ダンナ)に對しての稱、「に出るコト、

たんけ(淡氣)図淡持(モチ)、即ち淡(タン)が常

たんけい(短檠)図臺の低(ヒク)き燈火(トモシビ)丈(ケタ)の低き燭臺(ダイ)、

たんけい(短計)図つたなきはかりごとのコトを云ふ、

たんけい(端溪)図支那の端溪と云ふ處より産出する黑紫色(ムラサキイロ)の滑(ナメラカ)なる石にて製したる上等の硯(スズリ)のコト、嘱じて硯の一名、

たんげい(端倪)図うかがひはかるコト、推量(スイリヤウ)のコト、

たんげつ(淡月)図おぼろに、かすめる月のコト、重(モチ)に春の夜の月に云ふ語、

たんげつ(端月)図正月の一名、

だんけつ(斷決)図判然と決定するコト。キツパリ定めるコト、

だんけつ(團結)図團體をくみたてるコト㊁多くの人が心を一にするコト、

たんけん(短見)図深き考のなきコト、即ち浅はかな考へ、

たんけん(短劍)図短かきつるぎ、

たんけん(探檢)図さぐりて物事を十分にしらべるコト、

たんけん(探險)図危險(ケン)なる事柄を冒(オカ)して、實地の有樣(サマ)を調べるコトを云ふ、

たんげん(端嚴)図正しくしておごそかなるコトを云ふ、「ト、

だんげん(斷言)図キツパリと云ひ切るコ

たんけんたい(探險隊)図探險に赴く人々の一團のコト、

だんけつりよく(團結力)図人々が團結して物事をなす力㊁團結したる力即ち其の團結の仕方(ヤウ)が強きか弱きかを意味(イ)す、

たんこ(炭庫)図炭(スミ)を入れ置く庫(クラ)㊁石炭(セキタン)を貯(タクハ)へ置く處、

たんこ(短袴)図みじかきはかま、

たんご(端午)図陰曆の五月五日の節句(セツク)のコトを云ふ、

たんこ(蟹戸)図女の漁師即ちあまの住家㊁漁師の家のコト、

たんご(單語)図熟語(ジユクゴ)に對しての稱にて、一ケの詞(ヒトツ)、假令ば大さか絹(キヌ)とかの如し、

だんご(談語)図物語、話し合ひ、

だんご(團子)図食品の一、米の粉を湯にて捏(コネ)れ、蒸(ムシ)て搗(ツ)きたるもののコト、

だんご(段碁)図圍碁(ゴ)の語にて、初段をうつことかと云ふコトを云ふ、

だんこ(斷乎)副深き決心を持(モ)るさまに云ふ語、即ち何(ナニ)あつてもの意なり

たんこう(短竿)図みじかき竹にて作りたる杖(ツエ)のコトを云ふ、

だんこう(彈孔)図彈丸があたりて爲めに穿(ア)けたる孔(ナ)、

たんこう(淡紅)図うすき桃色、

たんこう(鍛工)図かぢしよく、

だんこう(男工)図女工に對しての稱にて、「するコト、

だんごう(談合)図はなし合ふ㊁相談(ソウダン)

だんこく(暖國)図時候(ジコウ)のあたたかき國のコトを云ふ、

だんごく(斷獄)図罪狀を裁斷する㊁訴訟(ウツタヘ)を裁判するコト、

たんこぶ(痰瘤)図身體に生ずるこぶのコトを云ふ、

たんこん(斷魂)図殊更にかなしきコト㊁極めていたましきコト、

だんごいし(團子石)図圓(マル)き石をなせる小石のコト、

たんごじま(丹後縞)図丹後地方より織出だす織物(オリモノ)、

たんごぶり(丹後鰤)図丹後の沿海(エンカイ)なる、日本海方面に産する鰤(ブリ)にて、味よろし、

たんごちゞみ(丹後縮)図織物の名にて木綿縮(モメンチヂミ)の一種なり丹後の國より産出す、

たんごつむき(丹後紬)図絹織物(キヌオリモノ)の一種にて、丹後の與謝地方より産出する紬織(ツムギオリ)、「ちタンシヤ、

たんさ(丹砂)図赤(アカ)き繪具(エノグ)の名、即

たんさ(歎嗟)図なげくコト㊁さいきをつくコト、「コトを云ふ、

たんざ(單坐)図唯だ一人で坐(ス)ってる

たんざ(端坐)図正しく坐(ス)るコトを云ふ、

だんざ(團坐)図圓くなつて坐す即ち車座(クルマザ)のコトを云ふ、

たんさい(短才)図智慧(チエ)の少なきコト。物の出來ぬコト、

たんさい(淡彩)図あつさりと施したるさいしきのコト、

だんざい(斷罪)図罪を裁判するコト㊁罪

人の首を切るコト、

たんさう(短槍)図其の柄の短かき槍(手槍)のコトを云ふ、

たんさう(淡粧)図うすげしよう(薄化粧)のコトを云ふ、

たんさう(端莊)図正しくしておごそかなるコトを云ふ、

たんさく(探索)図さぐり調べるコト ㊁罪人の行衛をさがす、

たんざく(短冊)図細長かく截ち切りて、文字を記して物に符譜として結び付ける紙を云ふ ㊁料理の語にて凡て料理に用ゆる食品を細長く切りたるコトを云ふ和歌を認むるに用ゆる特別に作られたる、厚き美くしき紙のコトにて、普通の定は、縦が一尺一寸五分で、横幅が一寸八分ときれたるもの、

たんさん(炭酸)図化學上の語にて、無水炭酸が、水と和合して生じたるもの ㊁重炭酸曹達の略語なり、

たんざん(赧慚)図恥をかくコト、恥かしきコト、

たんざくいし(短冊石)図細長く切りたる庭園の飾り石、

たんざくかけ(短冊掛)図多くは板にて作られてある、即ち短冊を挾みて、柱などに掛け置く用をなす器具、

たんざくとうふ(短冊豆腐)図豆腐を細長く短冊の如き形狀に切りたるものを云ふ、

たんし(短視)図近眼のコト、

たんし(彈子)図大砲の丸の内に填る小さき丸、即ち霰彈や榴霰彈の内に入れる丸のコト、

たんし(簞食)図ワリゴに盛りたる飯のコトを云ふ、

たんし(丹脂)図紅のコト、

たんし(彈絲)図琴を彈くコト、

たんし(耽嗜)図樂みに甚だしくふけるコトを云ふ、

たんし(彈指)図佛語にて、極めて短かき時間のコトを云ふ、

たんし(檀紙)図紙の名、厚くしてキメの細かき上等の紙、大高小高の名あり、儀式に用ゆ物、

たんじ(歎辭)図感歎せる意を表はすに用ゆる語、

たんし(男子)図男のコト、

たんじ(男兒)図男の子供、

たんじ(談次)図物語のついで、

たんじき(斷食)図自己の意を達すべく爲めに、神佛に願をかけて食物を斷つコトを云ふ、

たんしき(單式)図簿記の語にて、一つの取引に就て、數種の帳面に記する方法のコトを云ふ、

たんしつ(丹漆)図赤色のうるし、

だんしつ(暖室)図あたたかき部屋 ㊁或る方法に依りて、特別に暖かくなしたる部屋、即ち室のコト、

たんじつ(旦日)図朝の日と云ふ意より轉じて、明日と云ふコトに用ゆる語、

たんじつ(短日)図みじかき日 ㊁冬の日のコトを云ふ、

たんじつ(誕日)図たんじよう日即ち生れたる日のコト、

だんしや(談者)図話をする人 ㊁談判をする人のコト、

たんしよ(端書)図葉便はがき、

たんしよ(短冊)図旁つてる處 ㊁足らざる處のコト云ふ、

たんしん(單身)図ひとりぼつち、

たんしん(丹心)図まごころ、

たんしん(短身)図せいのひくき身體のコトを云ふ、

たんしん(丹晨)図赤きくちびる、

たんしん(誕辰)図誕生日、

たんじん(短人)図たけのひくき人。せいみぢかき人のコト、

たんじかん(短時間)図時間の短かきコト ㊁僅かの間、

だんじやう(壇上)図土などを盛り上げたる上、即ち祭壇の上 ㊁演壇の上、

たんじやう(鍛正)図かぢ職、

たんじやく(短尺)図短冊に同じ其の條を見られよ、

だんしやく(男爵)図爵位の最下級第五位の爵位の名稱、

たんじゆう(短銃)図小さき銃ピストルのコトを云ふ、

たんじゆう(膽汁)図膽囊の中に貯へ置かれてある汁なり、其色は黄にして、非常に苦きもの、此れが腸の内へ來りて、食物を十分に消化す用を爲す、

たんしゆく(短縮)図ちゞかまるコト。ちゞむコトを云ふ、

たんしゆく(端肅)図正しくして、しづかなるコト、

たんじゆん(單純)図まじりものなき、一すじなる物の稱、

たんしよう(探勝)図勝地をさぐる即ち風景のよき處を探し遊ぶコト、

たんしより(嘆稱)図ほめたゝえる ㊁感心してほめる、

たんしより(歎賞)図嘆稱に同じ、

たんしよく(貪色)図色情に厚くひつこきコトを云ふ、

たんしよく(貪食)図いぢのきたなきコト ㊁食をむさぼるコト、

たんす(簞笥)図引出のある大なる箱にて、衣服を藏し置く道具の一、

たんず(歎)自動なげく ㊁うのめく ㊂かなしむ ㊃怒る、

たんす(彈)自動琴などをひく ㊁ひく、まさぐる、

たんす(談)自動話する、物語すする、「き處」を云ふ、

たんする(澁水)図谷川などの瀨の早き處、即ち鹽氣のコト、

たんする(淡水)清水のコト、

だんする(斷水)図通ふる水の、通はぬやふになるコトを云ふ、

たんせい(丹青)図赤と青との二コト ㊁繪具のコト、

たんせい(丹誠)図いつわりなき正しき心即ちまごころ ㊁まごころより力を盡して物事を爲すコト ㊂一心に力を盡すコト、

たんせい(端正)図たゞしきコト ㊁物事の行き届いてるコト、

たんせい(灘聲)図烈しく流れ行く水音のコトを云ふ、

たんせい(歎聲)図なげきのこゑ ㊁ためいき、「き、

たんせい(丹精)図丹誠の ㊁及び ㊂に同じその條を見られよ、

たんせい(男聲)図男の音聲、

たんせい(男生)図男の學校生徒、女生に對しての稱、

だんせい(男性)図男のコト ㊁男に生れてるもの ㊂男の氣性、

たんせう(短小)図小さきコト、

たんせう(短情)図夏の夜の短かきコト。特に夏の夜の稱、「云ふ、

たんぜう(誕生)図人の生れ出つるコトを云ふ、

たんせう(淡粧)図うす化粧、

たんせう(談笑)図笑ひつゝ物語る ㊁轉じて寛て話すコト、

たんせき(旦夕)図あさばん、あけくれ ㊁絶えずと云ふ意 ㊂時機の差し迫つたるコトを云ふ、

たんせき(粗糲)図ぼだぬぐコトを云ふ

たんせき(嘆惜)図なげきおしむるコトを云ふ、

たんせき(痰咳)図痰と、せき、

たんせつ(短拙)図下手のコト、つたなすコト、

きコト、

たんせつ(短折)圖年の若きに死するコト

わか死のコトを云ふ、

たんぜつ(斷絶)圖たつと、きるとニ物事のつゞかぬコトを云ふ、

たんせつ(斷截)圖たち切るコト、

たんせん(端船)圖はしけ舟、

たんせん(袒跣)圖肌をぬぐコトとはだしのコトを云ふ、

「トを云ふ、

たんせん(短箋)圖一寸(ツヂ)した手紙のコ

たんせん(單線)圖複線(フクセン)に對しての稱にて、線路の一すじなるを云ふ、

たんせん(團扇)圖うちはのコト、

たんせん(丹前)圖廣袖(ヒロザ)になしたる、どてらのコトを云ふ、

たんぜん(湛然)圖水などの充(ミ)ちたゞえて靜(シヅ)かなるさま、

たんぜん(斷然)圖キツパリと云ふ意ニ思ひ切つて事を爲すと云ふ意ニ我が思ふコトを押し通(ホト)してなす意を表はす語、

「くなるさま、

たんぜん(赧然)圖恥かしくして、顏の赤

たんぜん(端然)圖物事の調(トヽ)ひてきちようめんなるさま、

たんせん(斷線)圖線路を截ち切るニ電線(ヂン)を切る又た切れし線、

たんせいと(男生徒)圖男の學校生徒、

たんぜうび(誕生日)圖人の生れたる日、

たんせいくわ(單性花)圖同じ花物にて、雄蕊(ヲシ)の花と、雌蕊(メシ)の花と異なれものゝコトを云ふ、

たんそう(彈奏)圖琴(コト)などをひきかなでるコト、

たんそう(斷層)圖地理學の語、地層のくづれきれるコト、卽ちずべりのコトを云ふ、

たんそく(歎息)圖なげきうれふるコトニ

「コト、

たんぞく(斷續)圖たつるコトとつゞけるコト、

たんたい(單體)圖一種の物質(ブツシツ)より、成り立つているもの、卽ち如何なる方法を以てするも、分析(ブンセキ)し能はぬ物體のコト、

たんだい(探題)圖詩又は歌の會に於て、詩歌の題を互(カタ)ひに、さぐりて分取(ワケ)ひにするコトニ北條氏時代の役の名、卽ち遠國に置きて、其の地方の政治(セイヂ)を執(ト)り合せて、其の地方へ外國より來る、敵を防ぐ役向のコトを云ふ、假令ば九州探題など、

たんたい(暖帶)圖地理學の語にて、地球上の寒暖(カンダン)の地方を、寒帶と熱帶と暖帶とに分(ワケ)たれてある、其の暖帶のコトにて、卽ち寒帶と熱帶との間の地帶を云ふ、委(クハシ)しく云へば、赤道(セキダウ)より共に南北へ二十三度(ド)より、六十六度までの間を云ふ、

たんたい(團體)圖多人數集(アツ)まりたる一組(ヒトクミ)ニ多くの人が心を合せて其の行動(コウドウ)を同一にすべく一組となりたる一隊を云ふ、

たんたう(短刀)圖みじかき刀(カタナ)、あいくちのコト、

たんたう(坦道)圖平らかなる道路(ダウロ)ニ平たんなる道、

たんたう(擔當)圖うけもつコトニ引き受けて爲すコトを云ふ、

たんだう(彈道)圖放たれたる彈丸の、とび去りし道(ハヂ)、

たんたう(探討)圖さぐりたづね、

たんてき(怛惕)圖怖(オヂ)れるコト、

たんたん(淡淡)圖あつさりとしてる狀(サマ)に云ふ語、

たんたん(坦坦)圖平らかなるコトを云ふ

たんたん(耽耽)圖おくゆかしき狀(サマ)を云ひ表はす語、

たんたん(團團)圖月などの圓き形を表(ヒヤウ)はせる狀(サマ)に云ふ、

たんだん(段段)圖其れから其へと、次第に進み又退くを云ふ、

「のコト、

たんたうにん(擔當人)圖引受人、受持人

たんだらじま(段段縞)圖織物の一種にて色糸にて織りたる横縞(ヨコ)物のコトを云ふ、

たんだらぞめ(段段染)圖染め模樣(モヨウ)の一種にて、眞(マコ)なりたる色にて横筋(ヨコスヂ)を表はしたるもの、

たんたんぜん(赧赧然)圖此の上もなく恥ぢたるさまに云ふ語、

たんち(探知)圖さぐり知る、

たんち(暖地)圖時候のあたたかなる土地を云ふ、

たんぢ(鍛冶)圖かぢ又はかぢ職、

たんちや(碾茶)圖支那より製出する紅茶の一種、

たんちよ(端緒)圖物事のはじめニ物の起(ハヂ)コ起原(キゲン)、

たんぢよ(男女)圖男と女、

たんちがひ(段違)圖段の違ふコト、卽ち優劣(ユウレツ)の相違(ソウヰ)あるコト、

たんちやう(暖帳)圖どん帳のコト、卽ちちたれたる幕(マク)、

たんぢやう(壇場)圖壇を出來(シタク)たる處壇を設くる處、

たんちより(斷腸)圖腸(ハラワタ)のちぎれるほど、かなしきコトゝかなしみのきわみのコトを云ふ、

「の別の名、

たんちようくわ(斷腸花)圖秋海棠(シウカイダウ)

たんぢよどうけん(男女同權)圖男も女も同一の權利を有してるコト、

たんつう(緞通)圖織物(オリモノ)の一種にて毛(ケ)、又は毛と木綿(モメン)とにて太く織りたる敷物用の物、

たんてい(端艇)圖はしけのコトニボート

たんてい(探偵)圖人知れず物事をさぐるコトニまはし者、卽ち穩密(オンミツ)のコトニ密(ヒソ)に罪人の所在又は罪の咎子をさぐり調らべるコト、又は其の役を勤むる人のコトを云ふ、

たんてい(斷定)圖キツパリと判斷するニ確(カク)かに定める、

たんてう(單調)圖一本調子(ヂヤウ)卽ち變化なき調子、興味少きコト、

たんてう(丹頂)圖鶴の一種、形大く毛白く、頂(ヒタヽ)に紅(クレナイ)の毛あり翼(ツバサ)の下に黑色の羽(ハネ)あり、嘴(クチバシ)は青くして脚(アシ)は、うす黑し、

たんてき(談敵)圖話をする相手方(カタヘ)のコト、話あひて、

たんでき(耽溺)圖酒色(シユシヨク)におぼれる

たんでん(丹田)圖人體の名稱にて臍(ホゾ)の下一寸五分ほどの部分を指して云ふ

たんていり(探偵吏)圖探偵する警官(ケイクワン)のコト、

たんていかかり(探偵掛)圖犯罪の探偵を爲すを職務とする人、

たんと(炭斗)圖炭とり、炭入れ、炭箱のコトを云ふ、

だんと(檀徒)圖檀家の人々、

「コト、

たんと(澤山)圖多きコト、餘計に在(ア)る

だんとう(斷頭)圖首をたち切る、

たんどく(丹毒)圖丹毒バクテリアが皮膚(ヒフ)にある疵口(キズグチ)より入(イ)つて熱(ネツ)を起す一種の膿物、

たんどく(單獨)圖我れ一人と云ふコト、相手のなきコト、

たんどく(短牘)圖短かき手紙ニ一寸(ツヂ)とした手紙、

だんどり(段取)圖物事の順序を定めるコトを云ふニ凡て仕事の下仕度(カタヅケ)を爲すコト、

だんとうだい(斷頭臺)圖死刑囚の首を斬り落す臺のコト、

だんとうぢやう(斷頭場)圖罪人の首を斷(タヤ)ち斬る處、死刑を執行する刑場、

だんな(檀那)圖佛語にて、檀家の主人の

コトを云ふ㊂奉公人が主人を呼ぶに用ゆる言葉(ヨト)㊃妻が夫(ツマ)を呼ぶ語㊄妾(カケ)が身體(カラダ)を委(ヤツ)し居る男を呼ぶ語㊅商人が其の顧客(マヒキ)を呼ぶに用ゆる語㊆身分(ミブン)の低(ヒク)き者より身分の高き人を呼ぶに用ゆる敬語㊇藝人などが凡て恩顧(ヒイキ)を受けてる人を呼ぶに用ゆる敬語、

たんな(旦那)図檀那に同じ、

たんなでら(檀那寺)図自家(ウチ)の・ぼたい所のある寺のコト、

たんなとり(旦那取)図人の妾(メカケ)と爲り居る女を云ふ、

たんにん(擔任)図自分のなすべき任務、即ちうけもちのコト、

たんにんしや(擔任者)図受持人のコト、

たんねん(斷念)図思ひ切るコトを云ふ。あきらめるコト、

たんねん(丹念)図十分に心を用ひて魂氣(ココロ)よく物事を爲すコト、

たんのう(淡濃)図うすきとこうきと㊁あつさりせるとひつこきとのコトを云ふ

たんのう(堪能)図十分なるコト、

たんのう(膽囊)図肝臟(カンゾウ)の下に在る小さき囊(フクロ)にて、中に膽汁とて苦(ニガ)き汁を貯へ置くもの、

たんば(湯婆)図湯暖(タンダン)を取る道具にて陶器(キヤウ)又金屬にて坊主枕(ボウズマクラ)の如き形に製せられて、上に小さき口ありて其處(コヽ)より湯を入れ臥床(コシカケ)へ入れてあたたむるもの、ゆたんぽのコト、

たんばう(檀方)図檀家のコト、

たんばう(探訪)図百般の出來事を探(サグ)り出すコト、

たんはき(痰吐)図其の中へ痰を吐くべく用ゆる器具、

たんぱく(淡泊)図あつさりとしたるコト

たんぱく(蛋白)図玉子のしろみのコト㊁蛋白質(タンパクシツ)のコト、

たんはつ(彈發)図大砲を放(ウ)つコトを「を云ふ、

たんばつ(短髮)図みじかき髪の毛(ケ)㊁短かく刈りたる髪の毛、

たんばつ(斷髮)図髪の毛を斷ち切るコトを云ふ、

たんばん(談判)図或る事件(コトガラ)に就て、其の結果を定(キメ)めべく爲に相談し合ふコト、即ちかけあひ、

たんばん(丹礬)図硫酸銅のコトにて青色を呈する石の如きものにて大の毒藥なり、

たんぱうし(丹波牛)図丹波地方にて産する良種の牛(ウシ)、

たんぱぐり(丹波栗)図丹波地方に産する栗にて、其の實(ミ)の大なる日本一なりと云ふ、

だんばしご(段梯子)図二階へ上る爲めに設けられたる梯子、

たんぱくしつ(蛋白質)図其物の成分(ナリヨウ)が、蛋白質、即ち玉子の白味(シロミ)と同一なる物を云ふ、

たんばんかん(擔板漢)図一部分のみを見て、其の全體を見ひ能(ヒ)はぬコトを云ふ、此れは板をかつぎ居る男が、其の板の爲めに、遮(サヘ)きられて、一方面より見えぬと云ふ意義より出し語なり、

たんばくにより(蛋白尿)図精力(セイリヨク)の衰える病氣の名にて、腎臟病(ジンゾウビヤウ)などの爲めに、人體を養ふ第一の主成分(ナリヨウ)たる、蛋白質が小便の中に混(マヂ)りて出る病氣、

たんび(歎美)図感心してほめたたえるコトを云ふ語、

たんび(團匪)図志(ココロ)を合して一團(ヒトカタ)となりたる不良(ワルヨ)徒(トモガラ)、

だんびら(段平)図刀剣(トウケン)の及のコトを「トを云ふ、云ふ、

たんひ(斷碑)図かけくだけたる石碑のコト

たんぶ(擔夫)図荷物をかつぎ運(ハコ)ぶ人足、

たんぶ(貪夫)図がうよくなる人のコトを「云ふ、

たんぶく(單複)図單純(コンジヤウ)なると、こみ入りたると、

たんぶん(探聞)図さくつて聞き出すコト

たんぶん(短文)図みじかき文章㊁一寸(ヨツ)とした文、「云ふ、

たんふくろ(段袋)図つたふくろのコトを

たんふんかん(擔糞漢)図こえ取り人のコトを云ふ、「を云ふ、

たんへい(端平)図正しく平らかなるコト

たんぺい(短兵)短かき武器と云ふ意にて即ち刀劍のコト、

たんへい(談柄)図語り草㊁話(ハナシ)べき事實のコトを云ふ、「を云ふ、

たんぺき(丹碧)図赤き色と青き色のコト

たんべつ(段別)図田及び畑を一段づゝ別(ワケ)ちたるコト㊁田及び畑の區分(クブン)を云ふ、反別とも書く、

たんぺん(短篇)図篇(ヘン)の短かき文章、即ち短篇小説など、

たんぺん(單瓣)図ひとえの花びら。一つの花びらの花のコト、

たんぺん(彈片)図破裂彈(ガンタヒ)の其のかけらのコトを云ふ、

たんぺん(斷篇)図きれきれになつてる文書のコトを云ふ、

たんぺん(斷片)図物のきれはしのコトを云ふ。かけらのコト、

たんぺいきふ(短兵急)副だしぬけに迫(セマ)る、急きつゝ尚(ナホ)ふさまを云ひ表はす語、「稱、

たんぼ(田圃)図田地や畑(ハタケ)のある所の

たんぼ(擔保)図貸金(カシキン)の抵當(テイタウ)として預(アヅ)かる品の稱、

たんぼ(旦暮)図あさゆう㊁絶え間(マ)なき㊂物事の時機(キヒ)が差し迫(セマ)つて來てるコトを云ふ、

たんぼ(蒲公英)図草の名にて、タンポポ

たんぼう(談鋒)図はなしのほさき㊁はなしつふりのコト、

たんぼう(誕忘)図又たタンモウとも讀む即ちだます、うそをつく、

たんぼう(煖飽)図暖(ダン)たかき衣物を着て、甘き物を十分に食ふと云ふコト、

たんぼく(淡墨)図うすすみ、

たんぼく(蒲公英)図野生の草の名にて、春の頃に長さ四五寸の圓き菊の葉の如き葉を生ず、其の葉が芽(メ)である。此の葉を摘み灰汁(アク)にて湯煮(ニ)て、食料とす、此の葉の汁(シル)を取りて藥品を製す、

たんぼひん(擔保品)図擔保として、受取置(オ)く物品、抵當品(テイタウヒン)、

たんぼみち(田圃道)図田の中に在る細き道、あぜ道、

だんぼうくわい(煖房會)図移轉の披露、又は新築落成の爲めに、親意を表する酒宴のコト、

たんまり(默)図だまつてるコト㊁芝居道の語にて、二人以上の俳優(ヤクシヤ)が舞臺に現はれ、無言にて斬り合ふ狂言のコトを云ふ、

たんまつ(端末)図物のはしすえ、

だんまつま(斷末魔)図死にぎわのコトを云ふ、佛教(ブツキヤウ)より出たる語なり、

たんみ(淡味)図あつさりとしてる味(アジ)のコトを云ふ、

たんめい(短命)図生命(イノチ)の短(ミジカ)かきコト㊁わかじにのコト、

たんめん(耽面)図耽溺(タンデキ)に同じ、

たんめん(赧面)図赤き顔をするコト㊁轉じて恥るコト、

だんめん(斷面)図截(キリ)切つたる其の切斷面(ダンメン)のコトを云ふ、

たんもち(淡持)図淡の出る病氣にかゝつてる人の稱、

たんもの(反物)図又た段物とも書く、絹

（ゼン）木綿の織物の總稱（ソウ）、

だんもの（段物）圖淨瑠璃（ルリ）などの、段（ダン）を追ふて、作（ツク）られてある語りものゝコトを云ふ、

たんもん（探問）圖さぐりたづね、

たんや（鍛冶）圖かぢ職のコト、

たんや（短夜）圖夜の短かきコト、

たんやち（端陽）圖五月の節句（セツク）のコト　卽ち端午（ゴゴ）のコト、

だんやく（彈藥）圖大砲の彈丸を放（ハナ）たしむる藥、火藥の一種、

だんやくぐら（彈藥庫）圖彈藥を貯（タク）ふ「なす車、へ置くところの庫、

だんやくしや（彈藥車）圖彈藥を運ぶ用を

たんゆう（膽勇）圖きもたまの強く、いさましきコト、

たんよく（貪欲）圖無暗（ムヤミ）に、物を欲（ホシ）がる㊁むさぼる心の强き、「の稱、

たんらい（湍瀨）圖水の流れの急きあさ瀨

たんらく（耽樂）圖樂（ラク）にふけるコト、遊びにふけるコト、「くぎり、

だんらく（段落）圖物事のくぎり㊁文章の

だんらん（團欒）圖一家のまさる㊁親（シタシ）しき者の寄合（ヨリアイ）㊂車座（クルマザ）、

たんらん（貪婪）圖取り分けて慾の深きコトを云ふ、

たんり（單利）圖金錢より生ずる利息（リソク）「を云ふ、

たんり（短慮）圖丈（タケ）の低き垣根のコト

たんり（短慮）圖氣の短かきコト、卽ち

たんりん（貪吝）圖しわんぼう㊁物を强

だんりん（檀林）圖寺院の異稱、

たんりやく（膽略）圖大膽にして而（カシ）も深き考のあるコト、

たんりよく（膽力）圖容易に物に驚かぬ氣性（キシヤウ）のコトを云ふ、

だんりよく（彈力）圖はじく力、はねる力のコトを云ふ、

たんれい（端麗）圖しまりありて、うるわしき容貌（カホカタチ）のコト、

たんれつ（單列）圖一ならひ、

たんれん（鍛練）圖きたえれるコト㊁磨じて腕をみがくコト、卽ち修業するコトを云ふ、

たんろ（坦路）圖平（ヒラ）らかなる道、

たんろ（湛露）圖葉などに露（ツユ）のたまつてるコトを云ふ、

だんろ（煖爐）圖火を焚（タキ）て室內を暖（ダン）める具、卽ちストーブイロリなどの總稱、

たんろん（談論）圖議論（ギロン）、

だんわ（暖和）圖時候（ジカウ）の程よくあたゝかきコト、

だんわ（談話）圖物語話（ハナシ）、

ちぢ（ちぢ）

ち（地）圖土（ツチ）㊁とち卽ち陸地㊂地所（ヂ）㊃場所。位置㊄どだいのところ、卽ちたちば㊅低（ヒク）き所㊆生れたる所、卽ち鄕土㊇萬物の生ずる根原、卽ち大地㊈織物（モノ）などの質（シツ）の善惡の程度、卽ち地合（ヂアイ）㊉圍碁（ゴ）にて相手の盤面を圍みたる其の部分の稱、

ち（知）圖しる。みとむる。わきもふ。おぼえるコト㊁交（マジ）はり親（シタシ）しむコト㊂つかさどるコト㊃なかま。たぐゐ㊄知（シ）り合の人のコト、卽ち知己（チキ）㊅其の人の容子を能く心得て敬（ウヤマ）ふコト㊆智に通ずちえのコト、

ち（血）圖動物の身體を循（メグ）りて養ふ赤き液（エキ）、卽ち血液（ケツエキ）、醫學上より云へば、赤血球と白血球とより成りたるもの㊁女子の病氣の名卽ち血の道の略

語

ち（治）圖おさむるコト㊁取りたゞすコト㊂しらぶるコト㊃政事のコト㊄世の中の無事なるコト、又は無事になる仕方のコト㊅いさほし。てがらのコトを云ふ、

ち（痴）圖馬鹿、おろかのろきコト、

ち（笞）圖むちうつコト㊁刑罰の名、むちうつ刑のコト、

ち（千）圖物の數の多きコト㊁物の多く繁（シゲ）かへさるるコト㊂百の十ばいの數、卽ち千（チ）、

ち（池）圖いけ㊁ほり㊂大きな溝、

ち（恥）圖はぢるコト。はづかしきコト。はづかしめのコト、

ち（耻）圖恥（ハヂ）に同じ、

ち（蚳）圖蟻（アリ）の卵千（ヂマ）のコト、

ち（蜘）圖虫の名、くものコト、

ち（蟈）圖虫の名、ひるのコト、

ち（蟈）圖龍の一種にて、黃色を呈（テイ）せるもの㊁化者（バケモノ）、

ち（縛）圖とりもちのコト、尙ほとりもちの條を見られよ、

ち（踟）圖たちもさほるコト、

ち（踟）圖ためらふコトを云ふ、

ち（遲）圖おそきコト。おくれるコト㊁ぐすぐゝせるコト。ゆるやかなるコト㊂のろきコト㊃ひさしきコト㊄待つコト

ち（稚）圖時期に遲（オクレ）れて植（ウヘ）たる稻

ち（輕）圖車の前の方が重みの爲めに、低（ヒク）くなつてるコトを云ふ㊁轉じて總て物の重くして、低（ヒク）くなつてる狀を云ひ表はす語、

ち（雉）圖鳥の名きじ㊁城のかき、卽ち城壁（ヘキ）のコトを云ふ、

ち（埴）圖石を敷きつめたる庭（ニワ）のコトを云ふ㊁單に庭、

ち（稚）圖おさなきコト。いとけなきコト㊁つたなきコトを云ふ、

ち（眤）圖みつめるコト㊁目を吊（ツリ）り上げて驚き見るコトを云ふ、

ち（馳）圖かけるコト。走るコト㊁早く進み行くコト㊂あらそふ。競（キソ）ふ㊃あとふる。施（ホドコ）す、

ち（致）圖いたす。送り屆ける㊁招（マネ）く。呼ぶ㊂まかす。ゆたねる㊃はこぶ㊄就（ツ）く、重に役などにつくを云ふ、卽ち致仕（シジ）㊅塗（ヌリ）する。いたる、

ち（緻）圖こまやかなるコト。細（ホソ）かしきコト、卽ち智（ヂ）圖物事の道理を理解し、又は是非善惡を鑑識（カンシキ）する力、

ち（置）圖おく。すえる。設く㊁止（ヤ）むる㊂其の處に安んず㊃ほどこす㊄取りすつるコト、

ち（坻）圖川の中に在る淺瀨（セゼ）卽ち洲（ス）㊁渚（ナギサ）。きし、

ち（豸）圖總て足のなき虫のコト㊁次第に平（タヒラ）になり行く狀（サマ）を云ひ表はす語、

ち（陟）圖山や川や谷などの崖（ガケ）のコト㊁阪（サカ）のコト㊂こわれる。やぶれる。くづれるコト、

ち（値）圖物のあたひ㊁であふ。當（アタ）る相應（ヤウ）するコト、

ち（乳）圖ちゝのコト、

ち（峙）圖そばたつ。つゝ立てるコト㊁そなふ。そなへる㊂高くなつてる土地、卽ち、おか、「こけるコト、

ち（寔）圖けつまづくコト。たゞれるコト。

ち（茅）圖草の名ちがやのコト、

ち（愧）圖いかる。いきどうる、

ち（嶷）圖痴（チ）に同じ、

ち（鮠）圖一旦咽喉（ノド）へ入れたる物を、再び口を戻して食ふコト、

ち(膩)圖脂(アブラ)ぎつてるコト㊁あぶらあかのコト㊂なめらかなるコトを云ふ、

ち(尼)圖びくに。あまのコト、

ち(怩)圖はぢる。はづかしがる、

ち(桂)圖琴などの絃(イト)を胴より離して、支(サヽ)へ受くる道具(ダヽ)、卽ら駒(マヽ)のコトを云ふ、

ち(持)圖手に取る、にぎる、たもつコト㊁守るコト、國を持すなどの類㊂ただす、又は持し合ふ、卽ち相撲(スモウ)圍碁(ゴ)などの、互ひに勝敗(マケ)なく持ち合ふなど、

ち(痔)圖病氣の名、肛門(コウモン)に腫物(デキモノ)の生ずる病氣、

ち(路)圖みちのコト㊁たび(旅)のコト㊂ちまたのコトを云ふ、

ち(治)圖治療(ナヲシ)の治で、病氣をなほすコトを云ふ、

(ちぢあ)

ちぢあ(千秋)圖秋が千と云ふ意よりて、千歳(セン)のコトを云ふ、

ちぢあび(血合)圖魚の肉の黑くなつてる部(ブヽ)のコトの稱、

ぢぢあび(地合)圖凡て織物の地の厚薄(アツ)ぢあひ(ヒ)の狀を云ふ、

ちぢあびにく(血合肉)圖魚類(サカナ)の黑くなつてる肉のコト、

ちぢあみ(地網)圖地引網の稱にて、陸地より引き寄せ上るあみ、

ぢぢあみひき(地網引)圖地網を引くコト又は其の人の稱、

ちぢあれ(血荒)圖姙娠二三ケ月にして墮胎するコトを云ふ、

ちぢあん(治安)圖國が能く治り世の中の安らかなるコト、

ちぢあんさく(治安策)圖世(ヨ)の中を治(オサ)め行く其の仕方の考へ、

(ちぢい)

ちぢい(致意)圖眞情(マコヽロ)を盡(ツクス)すコトを云ふ、

ちぢ(地位)圖ゐどころ場處㊁自分の現在の身分の容子を云ふ、

ちぢ(地異)圖土地に異なりし事の生ぜるを云ふ、地震(ジシン)の類、

ぢぢい(祖父)圖ぢぢのコト、卽ち父の父のコトを云ふ、

ちぢいき(地域)圖土地の區域(クイキ)、

ぢぢいき(地息)圖地氣(キ)に同じ、

ちぢいく(智育)圖智惠をつけさすべく教(オシ)ゆるコト、卽ち學問、

ちぢいき(千五百)圖限りなく數(カズ)の多(オヽ)きコトを云ひ表はす語、

ちぢいろぐさ(千色草)圖竹の一名、

ちぢいん(遲引)圖ながびく、おそなる、

ちぢいん(知音)圖親友(シンユウ)のコト㊁隔てなき友達(タチ)のコト、支那の伯牙(ハクガ)と云ふ人の故事より出づ、

(ちぢう)

ちぢ(抽)圖引ぱるコト㊁引きて拔き取るコト。ひきぬく、

ちぢ(紬)圖胸さわぎのするコト㊁兄弟の女房、卽ちあひよめ、

ちぢ(紬)圖絹織物の名、つむぎのコト㊁糸をつむぐコト、

ちぢ(鈕)圖器具に付いてあるつまみ、卽ちとつてのコトを云ふ、

ちぢ(狃)圖なるゝコト。なれしたしむコト㊁正(ホン)すコト、

ちぢ(杻)圖木の名、もちの木、

ちぢ(紐)圖糸を撚(ヨ)て繩の如くなしたるもの、卽ちひも㊁結(ムス)ぶ。むすばれる㊂かゝはる。もとづく、

ちぢ(丑)圖十二支の第二位の名、卽ちうしのコト、

ちぢ(肘)圖ひじ。うで。かひな㊁ひきさゞむ。おさへつける、

ちぢ(宙)圖大そら。大空㊁天と地との間(アイ)㊂總て物と物との空隙(スキマ)のコトを云ふ、

ちぢ(籌)圖はかりごと㊁くじのコト㊂はかる。くわだつ。

ちぢ(儔)圖ともがら。たぐゐ。なかまのコト㊁ひとしきコト、

ちぢ(躊)圖たぢらふ。ためらふ。ぐずぐずして決定せぬコト、

ちぢ(疇)圖耕(タガヤ)す土地、卽ち田畑㊁たがやす。土をかぶせる㊂さかひ。くぎり㊃田のうね㊄ともがら。仲間㊅きのふ。さきごろ。むかし㊆家の業をかへずに代々傳はるコト㊇同じ。ひとしきコト、

ちぢ(晝)圖日中。ひるま、

ちぢ(轍)圖垂れ下げて置く幕、卽ちとばりのコト㊁車のこしきに付けてある革(カハ)のコト、

ちぢ(酎)圖水の混(マヂ)らぬこうき酒㊁酒をかもすコトを云ふ、

ちぢ(喟)圖鳥の暗(ヤミ)しく鳴く聲を云ふ㊂あざけるコト、

ちぢ(惆)圖望の叶(カナ)はずして、なげきかなしむコトを云ふ、

ちぢ(綢)圖まとふ。まつはる、

ちぢ(稠)圖多(オヽ)きコト。しげきコト㊁盛(サカン)なるコト、

ちぢ(禂)圖ひとへのぶすまのコトを云ふ㊁寢室(コヤ)などに垂れ下げて置くとばりのコト、

ちぢ(胄)圖そうりやうの息子(ムスコ)卽ちあと取り子。嫡子㊁家のあとめ、卽ち血筋の正しき子孫、

ちぢ(胄)圖かぶとのコト、

ちぢ(胄)圖物をかぶせて、おほひかくすコトを云ふ、

ちぢあい(忠愛)圖まごころをこめて、可愛(カワイ)がるコトを云ふ、

ちぢいん(胄胤)圖血統(ハクトウ)の正しき子孫(シソン)のコトを云ふ、

ちぢいん(抽引)圖引きぬくコト、

ちぢえい(胄裔)圖血筋正しき子孫、

ちぢかふ(胄甲)圖よろひとかぶと、

ちぢかん(臺間)圖ひるの中、

ちぢくわい(衷懷)圖まことの思ひ、

ちぢぎう(鑄造)圖銅(カネ)鐵(テツ)などの金屬(ハクブツ)を溶(トカ)して、型(カタ)へ入れて種種の物を造るコト、

ちぢぎう(鑄像)圖銅(カネ)を溶(トカ)して肖像(シヤウ)を造るコト、

ちぢさく(籌策)圖はかりごと、

ちぢさん(籌算)圖同上、

ちぢさん(書餐)圖晝の食事、

ちぢし(乳牛)圖ちち牛のコト、乳を搾(シボ)る牛のコト、

ちぢし(胄子)圖總領(ソウレイ)息子(ムスコ)㊁あとをとり子のコト、

ちぢし(禂筍)圖ひとへのふすまを入れて置く箱のコトを云ふ、

ちぢじき(晝飯)圖ひるめし、

ちぢじん(稠人)圖人の多く集まつてるコトを云ふ、

ちぢじん(禂衽)圖ねどこ。ひき布團(フトン)のコトを云ふ、

ちぢしやう(晝餉)圖午(ヒル)の辨當、午(ヒル)のめしのコト、

ちぢしやう(籌商)圖はかるコト。はかりごとのコトを云ふ、

ちぢしやう(抽象)圖物事の意義及び道理を明かに述ぶるコト、

ちぢじやう(衷情)圖まごころ、

ちぢする(抽水)圖水をぬき出す、

ちぢせき(嘖昔)圖むかし、ふるきコト㊁昨日(キノウ)㊂このほどのコト、

ちうせき(晴夕)図前(マヘ)の日、昨日、

ちうせつ(狂襲)図なれなれしきコト、禮儀を辨(ワキマ)ぬコト、

ちうせん(抽籤)図くぢを引く、

ちうちよ(躊躇)図まごまごしてる、ためらふコト、

ちうちやう(惆悵)図なげきかなしむ。なげきうれふるコト、

ちうづり(宙吊)図宙(クウヂウ)にブラ下がつてるコトを云ふ、

ちうに(宙)副そらに㊁何(ナニ)らへもつかぬ、又はきまらぬと云ふに用ゆ、卽ち(宙にいてる)、

ちうにん(廚人)図臺處(ダイドコロ)廻(マワ)りの事をする人㊁料理人(レウリニン)のコトを云ふ、

ちうのり(宙乘)図身體(カラダ)を宙に吊(ツル)して、往き來する藝當(ワザ)、

ちうはい(儔輩)図ともがらなかま、

ちうばう(廚房)図臺所(ダイドコロ)、

ちうはん(晝飯)図ひるめし、

ちうひ(廚費)図臺所(ダイドコロ)の用事をする女、おさんどんのコト、

ちうびう(綢繆)図まとひからむ。もつれあふコトを云ふ、

ちうひつ(儔匹)図なかま。同じたぐゐのコトを云ふ、

ちうみ(血膿)図血のまぢつて出るうみのコトを云ふ、

ちうみつ(稠密)図人ごみ㊁こみあつてゐる㊂雜沓(ザツトウ)するコト、

ちうや(晝夜)図ひるとよると㊁轉じてつれに引き續きの意、

ちうやけんかう(晝夜兼行)図晝は、もとより夜も眠らずに行くコト、又は行(ユク)ふコトを云ふ、

ちうりよ(儔侶)図ともがら。たぐゐ。なか

ちうりやく(籌略)図はかりごと、てだて、計略のコトを云ふ、

ちうるゐ(儔類)図たぐゐ。ともがら。なかまのコトを云ふ、

(ちぢえ)

ちえ(千枝)図夥多(オビタヽシ)しく出て繁(シゲ)れる樹の枝(エダ)のコト、

ちゑ(智惠)図才智のコト、

ちえう(治要)図風を治むるに欠くべからざる大切なるつとめ、

ちえき(地役)図法律語にて、他人の土地を自分の土地へ、通行するに便利の爲めに使ふコト、

ちえくさ(千枝草)図松(マツ)の一名、

ちえだ(千枝)図澤山な木の枝、

ちゑのいた(智惠板)図小さき板(イタ)を三角四角など種種(イロ〳〵)の形に切り、之を一所に寄せて、種種の形の物にくみたつる玩具(オモチヤ)、工夫(クフウ)を要するより此の名あり、

ちゑひ(血醉)図訛(ヤブ)つてチヨイとも云ふ、卽ち他人の負傷等にて出たる血を見て、氣を失ふコト、

ちゑふくろ(智惠袋)図智惠の入つてる袋と云ふ義にて、其の人に在るだけの智惠(ヲツ)と云ふコト㊁多人數集(ツド)まつて共に事を爲す中で、一番に智惠の優れてる人、

ちえん(鎖)図英國の里程を計るに用ゆる語、一鎖(ヒトクサリ)は六十六呎のコトなり、

ちえん(遲延)図おくれのびる。長びく。はかどらぬコト、

(ちぢおを)

ちをあらふ(洗血)図血族(ケツゾク)の者の互ひに爭そふを云ふ、

ちおね(乳母)図うば。めのと、

ちおり(血下)図婦人の陰門より血の下る一種の病氣のコトを云ふ、

ちおり(地織)図其の土地にて織りたる布帛のコトを云ふ、

ちおろし(血下)図姙娠(ニンシン)中の女子が、子をおろすコトを云ふ、

(ちぢか)

ちか(地下)図大地の下(シタ)、

ちか(地價)図土地の直打(ネウチ)、

ちか(治家)図一家を治(オサ)むるコト、家治(オサ)のコトを云ふ、

ちかい(持戒)図いましめを守りて、おかさぬコトを云ふ、

ちかおとり(近劣)図遠くより見ると、立派(ハデ)だが、近よつてみると其れほどでないと云ふコト、

ちかく(地核)図地球の内部の熱(ネツ)の爲めに溶(トケ)すして、未だ固まつてる部をいふ、

ちかく(地殼)図地球の表面の固(カタ)き部分の稱、卽ち天地、

ちかく(知覺)図物事を自身にて知りさとるコトを云ふ、

ちがく(地學)図地理學のコト、

ちかくしんけい(知覺神經)図醫學語にて痛い痒(イカユ)熱(アツ)ゐ寒(サム)ゐの感(カン)を腦(ノウ)に傳(ツタ)える神經、

ちかけい(地下莖)図莖(クキ)の地下に埋(ウヅ)もれて發育(ハツイク)する植物のコト、卽ちイモや竹などの種類、の地下に在る莖(クキ)などの稱、

ちかごろ(近頃)副このごろ、

ちかどん(地下根)図地下に根の張り生ずるもの、卽ち草木の根、

ちかし(近)副あひだ少し。へだたりのわづかなり㊁似寄(ニヨ)てあり㊂とゞきかゝる。達せんとしつゝあり㊃したし㊄血筋(ケツスヂ)が遠からずあり㊅ちかめ卽ち近眼(ムケイン)なり、

ちかし(地賃)図地面をかすコト、又地面を貸す人のコト、

ちかする(地下水)図土地の下の空處(クウヨ)を流れてゐる水、

ちかせん(地下線)図電信電話電燈などの銅線(ハリガネ)を、地下へ敷(シキ)き伏(セ)たものを云ふ、

ちかた(地方)図いなか。㊁村里(ムラサト)㊂海上より陸上を指して云ふ、

ちかたね(血刀)図血のつける刀、

ちかためる(地固)図土地を固めるコト㊁轉じて物事の基礎(イシヅ)を固むるコトを云ふ、

ちかだん(直談)図ちきちきに話をする、對坐(ムカヒスワル)の談判(ハナシ)、

ちかぢか(近近)図このごろ、其の中、

ちかづき(近附)図懇意(ネンゴロ)になる、しりあひのコト、

ちかづく(近附)自動近かよる、近くなる㊁時が近づいて來る、

ちがね(地金)図金物などを製する基礎(ソヂ)の鐵(カナ)、轉じてめつきを施(ホドコ)す元金(モトガネ)㊂其の人の本心、本根、くせのコトを云ふ、

ちかひ(誓)図ちかふコト、

ちがひめ(違目)図甲と乙と互ひにちがつてる其の境(サカヒ)目、

ちがひたな(違棚)図床の間の脇に設くる左右より上下(シタエ)にくゐちがゐに釣(ツル)た棚の稱、

ちかひのふみ(誓文)図ちかひの個條を書きたる誓書(セイショ)、

ちかふ(誓)自動神佛に對して違ひそむかぬとちぎる㊁やくそくする、

ちがふ(違)自動ちがふてる。ことなつてる㊂入りまざるゝくひちがふ㊃そむく約束の通りにせぬ㊄はづれる例ば骨がちがふ、

ちがふ(違)他動ことなつてるやうにする

㊀從はぬやうにする㊁別々にする㊂くひちがはす㊃はづれるやうにす。はづさせる、

ちかま(近間)圖近きところ、

ちかまさり(近勝)圖ちかおとりの反對にて、遠くで見るより、近くで見る方が、みさかえてあると云ふコト、

ちかまはり(近廻)圖自分のゐる所の近處

㊀ちかきところ、近所、

ちがみ(地髪)圖其の人の生へてる髪のコト、入毛(ガイ)などに對しての稱呼なり、

ちがみ(地紙)圖扇子(ギス)を貼(ハ)に用ゆる紙のコトを云ふ、

ちかみち(近路)圖路の里の他の路の里に比(クラ)ぶれば近きコト㊁物事を手取早く爲す仕方、

ちかめ(近眼)圖遠き處に在る物の見えぬ眼、卽ちキンガン㊁あさはかなる心根(ココロネ)のコト、

ちかや(茅)圖草の名カヤのコト、

ちかより(近寄)圖近くへ寄り添(ソ)ふ、近くへ進み行くコト、

ちから(力)圖人及び他の動物の筋肉が生(ウ)ず作用(ハタラキ)の程度㊁たちはたらき㊂便(タヨリ)にするコト。頼みにするコト㊃うでづく、卽ち暴力㊄ほねおり、てがらのコト㊅きゝめ。しるし㊆物をして一つの働(ハタラキ)を生ぜしむる原因となるものゝ稱、

ちから(税)圖人民の力と云ふ意より轉じて、租税(ゾイ)みつぎ物の稱、

ちからげ(力毛)圖胸に生ずる毛のコト、

ちからぐ(力付)圖他人の氣力の衰(トヨ)えたるものを慰(ナグ)さめ、又は骨を折つてやる、

ちからぬけ(力拔)圖力の少なくなるコト㊁がつかりするコト、

ちからびと(力人)圖力のすぐれて強(ツヨ)き人のコトを云ふ、

ちからまけ(力負)圖力を入れ過(ギス)て引を取るコト㊁他の技量は善きも力で負(マ)るコト、

ちからあづ(力水)圖力士(リキシ)が相撲(スモウ)を取り組む前に飲む水、

ちからもち(力持)圖重き石を持ちて、自分の力を試(ココ)すコト、

ちからもち(力餅)圖餅菓子(カシ)の名にて相撲場にて賣るあんころ餅のコトを云ふ、

ちからわざ(力業)圖勞力(ロウリキ)のコト、力を用ひて爲す仕事(ワザ)、

ちからとぶ(力瘤)圖力を出すに際して、上膊(ウデ)に生ずる瘤(コブ)㊁他人の爲めに力を盡(ツク)すコトに云ふ語、

ちからづく(力憑)圖力に因りて物事の思ふやうになるコト㊁うでづくのコトを云ふ、

ちからづく(力付)自動元氣(ゲンキ)が出て來る㊁病後の身體に力の出て來る、

ちからづく(力付)他動他人の氣力の衰(トヨ)えたるものを慰(ナグ)さめ、又は骨を折つてやる、

ちからぬけ(力拔)圖力の少なくなるコト㊁がつかりするコト、

ちからびと(力人)圖力のすぐれて強(ツヨ)き人のコトを云ふ、

ちからまけ(力負)圖力を入れ過(ギス)て引を取るコト㊁他の技量は善きも力で負(マ)るコト、

ちからあづ(力水)圖力士(リキシ)が相撲(スモウ)を取り組む前に飲む水、

ちからもち(力持)圖重き石を持ちて、自分の力を試(ココ)すコト、

ちからもち(力餅)圖餅菓子(カシ)の名にて相撲場にて賣るあんころ餅のコトを云ふ、

ちからわざ(力業)圖勞力(ロウリキ)のコト、力を用ひて爲す仕事(ワザ)、

ちからおとし(力落)圖元氣(ゲンキ)を失ふコト、がつかりするコト、

ちからぐるま(力車)圖物を載せ、人の力(チカラ)にて挽き行く車、卽ち荷車(ニグル)人力車などのコトを云ふ、

ちからくらべ(力競)圖力の多少をためし合ふコト㊁角力(スマウ)の別名、

ちからずまう(力相撲)圖相撲(スモウ)の手を用ひず、力にて轉(ココ)し合ふコトを云ふ

ちからだめし(力試)圖重き物を持ちて何れほど力があるかを試(ココ)むコトを云ふ、

ちからのれう(主税寮)圖昔時の役所の名租税や米穀のコトを扱ふ役所、

ちからまかせ(力任)圖あるだけの力を出す、一生懸命(イッシヤウケンメイ)のコト、

ちがり(地借)圖他人の地所を借るコト、借地(シヤクチ)のコト、

ちかん(痴漢)圖ばかもの、おろかしき人のコトを云ふ、

(ちぢき)

ちき(地氣)圖太陽の光線に照(テ)されて、地中の水分の昇れるもの、

ちき(知己)圖知り合ひ、朋友(ホウユウ)、

ちき(千木)圖神殿(シンデン)の屋根の棟(むね)の兩端(ハシヨウ)に、在る喰違(クヒチガ)になつてゐる木のコトを云ふ、

ちき(地祇)圖地を守らせらるゝ神、

ちき(杠秤)圖はかりのコト、

ちき(遲疑)圖疑(ウタ)がうて決(キワ)せざる狀卽ちためらふコト、

ちきう(持久)圖永(ナガ)くたもつ㊁しんぼうする、こらえてるコト、

ちきう(地球)圖我我の住むてる此の世界其形橢圓形(ダエンケイ)にして、太陽系(ケイ)に屬する遊星、

ちきうぎ(地球儀)圖教育品の名にて、地球の形を作り、其の表面に地球上の國土山川灌漑等の狀を記せるもの、

ちきうせつ(地久節)圖皇后陛下の御誕生日の事を申す、

ちきさん(直參)圖ちきぢきの家來(ケライ)のコトにして、卽ち陪臣(バイシン)に對しての語、

ちきしよ(直書)圖直筆(ヒツ)のコト、

ちきしはい(直支配)圖支配人を置かず、自分に支配するコト、

ちきそ(直訴)圖一定の手續をふまず、お上へ直(ジカ)に訴へるコト、

ちきそう(直奏)圖取次(トリツギ)を經ず、直直(ジカジカ)に天子へ申し上げたてまつるコトを云ふ、

ちきたつ(直達)圖人手をからず、じかにとどけるコト、

ちきたん(直談)圖直接談判(ダンパウ)、ぢきぢきに話をするコト、

ちきとつ(直綴)圖僧侶の用ゆる衣服にて卽ち腰より下にヒダの付けある衣物のコトを云ふ、

ちきでん(直傳)圖ぢかに其人より、秘傳を授りたるコト、又は直に授くるコトを云ふ、

ちきとりひき(直取引)圖仲買人の手を經ず、直接に取引するコト、

ちきに(直)副いま直ぐ㊁ぢきぢきにと云ふ意を表はす語、

ちきばと(千本筍)圖玩具(ガング)の一種にて卽ち三箇の重(カサ)なれる、小箱(コバコ)の蓋(フタ)ある物、中に切餅(ダンゴ)を入れあり、此は東京の芝の神明宮(シンメイグウ)の祭禮(マツリ)に限り、賣り出すもの、

ちきはいたつ(直配達)圖仲つぎ人の手を經ず直接に配達するコト、

ちきひ(直披)圖手紙の封筒に書く語、宛名の人が直に披(ヒラ)き下されと云ふ意を知らする語、

ちきひつ(直筆)図自分、又は其人の書たる文字(モジ)のコト、

ちきやう(知行)図徳川時代に武家が、其の主よりあてがはれる領地(リヤウチ)のコトを云ふ、

ちきやうしよ(地行所)図領分地のコトを云ふ、即ち支配地、

ちきやうだい(乳兄弟)図同じ乳母(メノト)の乳を飲んで、そだちたる者同士のコトを云ふ、

ちきゆしゆつ(直輸出)図商館(シヤウクワン)の手を經ず、直接に外國へ貨物を出すコトを云ふ、

ちきゆにゆう(直輸入)図外國の製品が商館の手を經ず直接に我國の商人の手に來るを云ふ、

ちきよ(池魚)図ため池に放つてかつて置く魚のコト、

ちきらん(直睡)図他人が直直に見るコトを敬ふて云ふ語、

ちきり(契)図ちかふコト、確(カク)と約束するコト㊁夫婦の縁を約束するコトを云ふ、

ちきり(杠秤)図大なる秤(ハカリ)のコト、即ち重き物を秤るにさげをへ、丸太(マルタ)を通して、荷(ニ)ひて秤るハカリのコトを云ふ、

ちきりき(乳切木)図昔巡査が持つてたり又た喧嘩の時などに持て出た、三尺棒(ボウ)のコトを云ふ、

ちきる(契)他動男女が互ひに未來の事を云ひかはす、㊁約束する。ちかふ、

ちきる(拗切)他動手にて物をもぎとる、ねぢり取る、手にて物を細かく切り離す、

ちきわ(直話)図人の取次を經ずして直直に相手と話をするコト、㊁對座(サシムカヒ)で話をするコト、

(ちぢく)

ちく(竹)図植物の名、たけのコト㊁竹にて造りたる樂器の名、ふえ、

ちく(蠶)図突き立ち、そびゆる狀(サマ)を云ふ㊁長くして眞直(マツグ)なる狀㊂正(ハタ)しきコト、直(ネ)きコト㊃草木の盛んに茂ひ繁げれる狀を云ふ、

ちく(竺)図竹(チク)に同じ、たけ、

ちく(筑)図支那の樂器の名、瑟(コト)の如き形をなせるもの㊁ひらふ。ひらひ上げるコト、

ちく(築)図土や石を組(ク)み立て固(カタ)めて、一つの物となす、即ちきづく。こしらへる㊁ひらふ、

ちく(畜)図鳥や獸などを家に飼ひ養ふコト、又は其のもの㊁やしなふ㊂たくはふ。たくはへる㊃したがふ㊄止(ヤ)むる

ちく(蓄)図たくはふ。たくはへたるもの㊁積(ツ)みて藏(カク)す㊂たくはふ。あつむる㊃積(ツ)みたるもの㊄飼ひ養なふ、又は其のもの、

ちく(擣)図引きつける。ひきつるコト㊁身體の肉が引きつれ動きて痛むコト㊂筋肉の痛み、

ちく(逐)図追(オ)ふ。追ひ拂ふ㊁かける。走る。㊂のける。しりぞける。はなつ㊃爭(ソウ)そふ。はりあふ。きそふ㊄心のせわしき狀。早くかけり行く狀(サマ)、

ちく(恒)図はづかしきコト。はぢるコト㊁狂(クル)に通ず、なれる。したしむコト、

ちく(衂)図又たじつとも讀む、鼻(ハナ)より出る血、即ちはなぢ㊁戰ひに敗(マケ)れたるコト㊂ひしぐ、

ちく(衂)図前條に同じ、

ちく(愆)図恒に通ず、はづかしきコト。はづるコト。はづかしがるコトを云ふ、

ちく(軸)図凡て物を卷(マキ)つくる基礎(ハジメ)の木㊁車の心木(シンボク)㊂植物の莖(クキ)㊃書畫等の懸物のコト㊄致旬(ホツク)の評

者即ち選者が詠(ヨム)たる句のコトを云ふ、

ちく(軸)図舟のへさき、

ちく(馳驅)図はしるコト、

ちく(痴愚)図おろかなコト、

ちくいう(竹油)図竹より取りたる油(アブラ)のコト藥となる、

ちくいつ(逐一)図一々順(ジユン)を追ふ、くわしく、つまびらかのコト、

ちくいん(竹印)図竹に刻(キザ)たる印形(イインガタ)のコトを云ふ、

ちぐう(知遇)図能く我の氣質(カタギ)を知られてるコト㊁丁寧(テイネイ)に取りもたれるコト、

ちぐう(値遇)図でくわすコト、

ちくえふ(竹葉)図竹のは㊁酒の一名、

ちくゑん(竹園)図たけのその㊁皇族(ソウク)の異稱、

ちくえん(竹椽)図竹を研(ガ)きて板(タイ)の代りに敷きたる椽がわ、

ちくおんき(蓄音機)図一種の器械にて、音聲を記して、長く蓄へ置き、必用に應じて其の音聲を、いつにても其のまゝ聞き得らるゝやうに、造られたるもの、英人エジソン氏の發明にかゝる、

ちくかう(築港)図港(ハナ)でなかつた所を港とするコト又た港となされたる所のコト、

ちくかう(逐項)図項目をおふコト、

ちくがう(逐號)図新聞及び雜誌などの號數をおふコト、

ちくかん(竹簡)図竹にて造りたる札(フダ)のコトを云ふ、

ちくかん(竹竿)図竹にて造りたるさほ。竹さほのコト、「器具、

ちくき(竹器)図竹にて作られたる種々の

ちぐさ(千種)図色々樣々(サマザマ)と云ふ意多くの種類の物の集り、

ちぐさ(千草)図色々の草と云ふ意㊁千草色(イチクサ)の略、「ト、

ちくざい(蓄財)図金錢をためたくはふコ

ちくざう(築造)図きづく、つくる、

ちくさう(竹槍)図竹やり、

ちくさく(竹柵)図竹にてかこみたるやらひのコト、

ちくさし(乳臭)図乳(チチ)くさきにほひの意、轉じて子供らしくあり、又た分別のつかぬなり、

ちくさん(畜産)図かふてる獸を一つの財産(サイ)とみなして云ふ、

ちくざいか(蓄財家)図財産をこしらへるに骨を折る人、

ちぐさいろ(千草色)図濃(コ)き草色、もえぎ色のコト、

ちくし(竹紙)図うすやうさも云ふ、雁皮紙(ガンピシ)の薄きもの、

ちくし(竹枝)図竹の枝のコト㊁漢詩に竹枝と云ふコトあり、即ち其の土地の風俗及び人情をうつして表はしたる詩のコト、

ちくじ(逐次)副其れから其れへ、順々の「意、

ちくじやう(築城)図城をつくる、

ちくしやう(蓄妾)図めかけをかこひおくコト、「えてゐるコト、

ちくしゆつ(蠶出)図きわだつて高くそび

ちくじやうがく(築城學)図築城の方法をみがきおさむる學問、

ちくじやうはふ(築城法)図城を築く、其の方法と理論とのコト、

ちくするじつ(竹酔日)図陰暦の五月十三日のコト、此日に竹を植(ウ)れば枯ぬと云ふ、

ちくせう(畜生)図獸(ケモノ)鳥(トリ)魚(ウオ)の類を云ふ㊁轉じて人を惡さまに罵(ノ)しるに云ふ語、「ろのコト、

ちくせき(竹席)図竹にて編(ア)たるむし

ちくせき(蓄積)図金錢物品を積(ツ)みたくわふコト、

ちくせき(逐跡)圖逃(ニゲ)たる人を捜(サガ)すべく跡を追ふコト、

ちくせき(逐斥)圖おひのける、おひしりぞけるコトを云ふ、

ちくぜん(愍然)圖心の中にて、はづかしく愚ふ狀を云ひ表す語、

ちくせん(蓄髮)圖髯(ヒゲ)を長く生(ハヤ)してゐるコトを云ふ、

ちくせうがう(蓄生道)圖佛法の語、六界の一にて、此の處におちたる者は、畜生となつて、苦しむと云ふ世界のコトを云ふ、

ちくぜんびは(筑前琵琶)圖びわの一種にて、其の調(シラベ)薩摩(サツマ)びはに類せり、即ち赤痢の異名、

ちくそ(血屎)圖古語にて病名、赤き屎(クソ)

ちくそう(竹叢)圖たかむら、

ちくたう(竹刀)圖擊劍(ケキケン)の稽古(ケイコ)に用ゆる刀しない、

ちくぢ(粗忽)圖はづかしきコト、はぢるコトを云ふ、

ちぐち(地口)圖俗語にて、世間一般に知れ渡つてる成語(ナリコト)と其の同じ意か又は似寄(ニヨリ)の語呂を以て、一つの文句を作り、一句にて兩樣の意を表はせるもの、

ちぐちあんどん(地口行燈)圖祭禮に點(ツ)す行燈(アンドン)の一種にて、其の表面におどけ畫(エ)を描(カキ)き、其の裏に相應したる、地口文句(モンク)を書(カ)せしもの

ちくちく(逐逐)圖速かに走り行く狀を云ひ表はする語、

「ゆく、コト、

ちくでき(逐條)圖個目を順々に逐(オ)てしるコトを云ふ、

ちくでき(搖籃)圖醫學語、ひきつけるコト、

ちくでん(逐電)圖にげさる、たかとびするコトを云ふ、

「コト、

ちくでんでん(蓄電)圖電氣をたくはえておく

ちくでうしんき(逐條審議)圖條目を一つ宛、順々(ジユンジユン)に正しく委しく議論するコト、

ちくど(竹奴)圖竹夫人に同じ、ちくふじんの條を見られよ、

ちくどん(竹登子)圖昔琉球(リウキウ)にて、一番下(シタ)の役人の官名、

ちくば(竹馬)圖子供の遊戲品の一種で、タケムマのコト、

ちくはう(竹棚)圖たけのこのコトを云ふ

ちくはく(竹帛)圖昔し支那にて、紙の未だ發明(ハツメイ)あらざる時に、竹又は帛(ハク)に文字を記したるより、轉じて書物のコト を云ふ、

ちくはつ(蓄髮)圖髮(カミ)を剃(ソリ)て坊主となつた人が、又た髮(カミ)を延(ノバ)したるコトを云ふ、

ちくばのとも(竹馬友)圖竹の馬に乘つて遊んだ仲間と云ふ意にて、即ちおさなともだち、

ちくび(乳首)圖乳房(チブサ)の尖、即ち乳まめのコトを云ふ、

ちくふじん(竹夫人)圖夏の日に暑さを忘るゝ爲めに、抱(カカ)えて寢る竹にて造りたる籠(カゴ)のコト、又た抱籠(ダキカゴ)とも云ふ ⊜竹(タケ)にて造りたる椅子のコト、

ちぐも(地蜘蛛)圖つちぐも、

ちくや(逐夜)圖夜な夜な、毎ばんのコトを云ふ、

ちくやう(畜養)圖獸(ケダモノ)鳥(トリ)などをかひやしなふコト、

ちくらのおきど(千座置戸)圖秘物(ヒミツモノ)を載せたる數多の櫃、

ちくりふ(蟲立)圖高くそびえてるコト、

ちくりん(竹林)圖竹のはやしたけやぶのコトを云ふ、

ちくりんのしちけんし(竹林七賢士)圖昔時支那の晉の代(ヨ)に風雅(ヒウガ)なる談話(ハナシ)を悅びたる七人の仲のよき賢人

の稱、

ちくるる(築壘)圖とりでを、こしらへる

ちくるる(畜類)圖四つ足の獸(ケモノ)のコト

⊜家にかふ獸のコト、

ちぐるま(地車)圖重き物を運(ハコ)ぶ車にて輪(ワ)の四つあるもの、

ちくれき(竹瀝)圖竹より出る油、

ちくれん(竹簾)圖竹にて拵(コシラ)へたるすだれのコトを云ふ、

ちくろ(軸櫨)圖舟のさもとへさきのコト即ち舟の意、

ちくろく(逐鹿)圖鹿を逐(オ)と云ふ義より轉じて、天下の政權(ケンケイ)を攫(ツカ)らふとか、又は土地を獲(エ)やふとして爭ふコト ⊜國會府縣會などの、選擧(センキヨ)を爭ふコト、

ちくろくぢやうり(逐鹿場裡)圖選擧の競爭(キヨウソウ)を爲す土地の區域内のコトを云ふ、

ちくわ(竹輪)圖蒲鉾(カマボコ)の一種にて、作り身を太き竹の串(クシ)に塗りて、蒸したる物、

ちくわ(地火)圖陰曆に用ゆる語にて、植木を植えたり、棟上(アムチ)などに忌む日にて、地中に火の氣ありと云ふより地火と云ふ、

「コトを云ふ、

ちくわ(治化)圖人民を治(オサ)めて宜き方(ヘ)導くコトを云ふ、

ちくわい(遲回)圖まわりくどきおそなるコトを云ふ、

「なるコト、

ちくわん(遲緩)圖のろきコト ⊜ゆるやか

ちくわん(置換)圖物をおきかへるコトを云ふ、

ちぐわん(痴頑)圖おろかにしてぐわんこなるコト。馬鹿强情(バカゴウジヤウ)、

ちぐわいはふけん(治外法權)圖外國に居住せる者が其の國の法律に依つて、身體を支配されぬコトを云ふ、

(ちぢけ)

ちげ(地下)圖昔時殿上に昇るコトを許されざりし、五位以下の官人のコトを云ふ ⊜朝廷に仕官してる人が、其の以外の人を指して云ふに用ひたりし語、

ちげ(治下)圖支配下。支配内のコト ⊜支配内の村里のコト、

ちけい(地頸)圖地峽(チケウ)に同じ、

ちけい(智計)圖すぐれたる謀、

ちけい(地形)圖山川其他土地の高低等のありさまを云ふ(地勢)、

ちけい(智慧)圖智惠(チエ)のコト。才智(サイチ)のコトを云ふ、

ちけい(笞刑)圖古の刑罰の一種、笞(ムチ)にて打くコト、

ちげき(笞擊)圖むちうつコト、

ちけふ(地峽)圖海峽に對する反對の語にて、大陸と大陸とを連れてゐる狹き陸地のコト、

ちげふ(知曉)圖能く知り、能くさとるコト ⊜すぐれたる智惠、

ちげふ(地形)圖家を建てる時に、其の地面をならし固むるコト、

ちげふいし(地形石)圖柱の基礎(ドイシ)となるべき石を云ふ、

ちけむり(血烟)圖動物を勢(イキホヒ)よく斬(キ)つた時に、生血のほとばしるコトを云ふ、

「縣の知事、

ちけん(知縣)圖其縣の最高の役人、即ち

ちけん(智見)圖ちえのコト、

ちけん(知見)圖みこみ、智惠(チエ)の活動(ハタラキ)のコト、

ちけん(知劍)圖知惠の鋭(ヤル)と云ふ意にて、即ち知惠を以て物事の捌(サバ)くコトを云ふ、

ちけん(地券)圖政府より其土地を所有せるコトを證明して與へたる證書のコト

ちけんし(地券紙)圖和紙(ワシ)の一種にて

厚(アツ)くして光澤(ツヤ)ある丈夫(ケンカウ)なる紙(カミ)、

(ちぢこ)

ちぢこ(稚兒)圖ちのみ兒㊀神社佛閣の祭式に着かざりて行列に出る子供㊁寺院にて使ふ子供の稱、

ちぢこ(持碁)圖もちごとも云ひ勝負(ショウブ)なき圍碁、

ちぢこ(地潰)圖地峽(ヒキ)の、大なるものを稱、

ちぢこ(地窖)圖物を貯ふべく地面を掘りたる穴、卽ちあなぐら、

ちぢこ(地聲)圖其人の本當の聲、卽ち生れつきの聲、

ちぢこ(千聲)圖多くの聲、卽ち多くの人の「のうなる聲、

ちぢこ(遲刻)圖定まりたる時刻より遲(オ)れたるコト、

ちぢこ(治國)圖國を能く治むるコト。國を治むる政事、

ちぢこく(地殼)圖地球の表面の一體を云ふ

ちぢこく(地獄)圖佛教の語にて凡て惡き者の墮(オ)ちる所と云ふ空想の誠(シマ)㊁轉じて苦しき目に遇ふコト惡行を懲(ヘラ)すべく責むるコト㊂火山の噴火口(クチ)より火煙(ケムリ)を噴出してる所の狀態(ヤウ)を云ふ㊃物かに春を賣る女のコト卽ち淫賣婦の稱、

ちぢこはち(地獄腹)圖俗語にて、女の子のみを多く生む婦人の事を云ふ、

ちぢこみみ(地獄耳)圖俗語にて一度(ヒト)聞きし事は、決して忘(ワス)れぬと云ふ性質の人、

ちぢこてん(持國天)圖佛(ホトケ)の名にて、東方を守らせ給ふと云ふ、四天王の一つの名、「を云ふ、

ちぢこおとし(地獄落)圖鼠取器械のコト

ちぢことどけ(遲刻屆)圖一定の時間より遲(オ)なつたと云ふコトの屆けのコト、

ちぢこたいへい(治國太平)圖國が太平無事に、能く治(ヤナサ)つてゐるコトを云ふ

ちぢぎくら(稚兒櫻)圖山櫻(ヤマザ)の一種にて樹小さく白き小花の咲くもの、

ちぢつ(恥骨)圖醫學名にて腰の骨にて左右互ひに接合せる部分の骨(ホネ)のコトを云ふ、

ちぢつ(地骨)圖石の異名、

ちぢわ(稚兒輪)圖十二三歲迄の女子の結ぶ髮の形にて、頭上に高く左右に毛にて、大なる輪を立て、つくりたる髻(ヅ)のコト、

(ちぢさ)

ちぢさ(苣)圖冬種を下し春の末に生ずる野菜の一種、

ちぢさ(齊徹樹)圖木の名にて、多く山野に生じ、高さ七八尺より一丈に及ぶ、其の葉は卵圓形(ガタマゴ)にして、白き花咲く、「あり、(ちさのき)と云ふ、

ちぢさい(小)圖形の小さくあり、細(ホソ)かく

ちぢさい(治罪)圖法律語にて、犯罪者を刑に處す手つゞきの事を云ふ、「ト、

ちぢさい(笞罪)圖笞刑に處せられる罪のコ

ちぢさい(致齋)圖齋を致(イタ)すと云ふ義にて、祖先の祭典(マツリ)を行ふ時に、身を清むるコトを云ふ、

ちぢさいはふ(治罪法)圖舊法(ホウ)の名にて現行の刑事訴訟法(ヤウイウソウ)、

ちぢさ(馳走)圖人をとりもちて、ふるまふコトを云ふ、

ちぢさ(治裝)圖たび仕度(シタク)をととのえるコト㊁裝束(シヤウゾク)の出來たるコトを云ふ、

ちぢさ(地藏)圖地藏菩薩(ボサツ)の略語、卽ち六道能化(ロクダウ)の菩薩の稱、

ちぢさおほ(地藏頭)圖見るからに鬧鬧(ウ)しき顏㊁幾時(イクジ)もニコニコしてゐる顏を云ふ、

ちぢさかひ(地境)圖土地と土地との境目(サカヒ)のコト、土地のくぎり、

ちぢさと(千里)圖雅語にて、多くの村里(ムラザト)と云ふ意、

ちぢむらひ(地侍)圖其の土地に居すはりの武士のコトを云ふ、

ちぢさん(持參)圖品物や、金錢などを持つて行くコト、

ちぢさん(治產)圖法律の語にて、生活の道をたてて行くコト、

ちぢさん(遲參)圖一定の時刻より遲れて行くコト、又は遲れるコト、

ちぢさんきん(持參金)圖聟(ムコ)や嫁(ヨメ)が他家へ緣付(エンヅキ)ときに、其の實家より持て行く金子のコト、

(ちぢし)

ちし(地子)圖年貢(ネング)。地租のコト、

ちし(致仕)圖官吏の職をやめるコト、卽ち辭職するコトを云ふ、

ちし(痴子)圖馬鹿な子、愚かな子、

ちし(地誌)圖地理上の事柄(ジケイ)を記したる書物の稱、

ちし、致死)圖人を打ち擊(ウ)きて、死に至らしめたるコト、

ちじ(知事)圖一府一縣の上長官の名、卽ち地方長官のコト、

ちし(稺齒)圖智齒とも書く、智惠の出盛(デサカ)り、卽ち二十五六歲以上に至りて、生ずる齒、又た親不知(オヤシラズ)とも云ふ、

ちし(稚子)圖おさなき子供、

ちしり(馳驟)圖早く行くコト。はしるコト。かけるコト、

ちしき(智識)圖智惠ありて能く物事に通じてるコト㊁物識(シモノ)、學問に達してるコトを云ふ、

ちしき(知識)圖十分に知る。知れる物事、

ちしど(知死期)圖其人の生年月日より判斷して、其の人の死ぬ時を知るコトを云ふ、

ぢしつ(地質)圖土地の性質、卽ち石地、砂地、軟(ヤワラカ)き地硬(カタ)き地などのコト

ちしつ(知悉)圖のこらず知る、くはしく知るコトを云ふ、

ちじつ(遲日)圖晝間(マヒル)の永き日春の日ながのコト㊁春の末より夏の初へかけての日のコトを云ふ、

ぢしつ(痔疾)圖病氣の名痔のコト、

ちしつがく(地質學)圖地面の成立、地面の硬軟(カタヒラオ)などの容子を、研(ミガ)き修(オサ)むる學問、「の、

ちしはり(地縛)圖草の名、憲(ケン)の如きも

ちしぶ(地澁)圖そぶのコトにて、卽ち溜(タマ)水の表面に、赤く濁(ニゴ)りて浮んでるあかのコトを云ふ、

ちしほ(千入)圖幾度(イクタビ)も色を染めるコト、轉じて取分(トリワケ)尙更(ナホ)と云ふ意を表はす語、

ちしほ(血汐)圖血漿とも書く、流れ出づる血のコトを云ふ、

ちしや(知者)圖物知りのコトを云ふ、

ちしや(智者)圖智惠ある人㊁物事を正しく分別する力の有る人、

ちしや(治者)圖世の中を治めゆく人、

ちしや(痴者)圖おろかなる人、

ちしや(持者)圖持行者(ヂギヤウシヤ)のコトにて、山伏(ヤマブシ)の如きものを云ふ、

ちしやり(智將)圖智惠ある大將、

ちじやり(痴情)圖色慾(シキヨク)に、心のところけるコトを云ふ、

ちしやく(地借)圖地面をかりる、

ちしゆ(置酒)圖酒を置く、卽ち酒盛(サカモリ)をするコトを云ふ、

ちしゆ(地主)圖地ぬしのコト、卽ち其の土地を有(モ)てる人㊁其の土地を守(モリ)

つてる神のコトを云ふ。

ちしゆ(地種)図土地の種類、官有地とか民有地とか荒地(クワウチ)とかと云ふ、土地の種別のコトを云ふ、

ちじゆつ(治術)図病氣をなほすわざ㊁國を治(オサ)むる手だて、

ちじゆつ(智術)図はかりごと、くわだて、もくろみのコト、

ちしよ(地所)図とち、ちめん、

ちしよ(治所)図官舎の總稱、卽ち政事を行ふ役所のコト、

ちじよく(笞辱)図むちうちてはづかしむるコトを云ふ、

ちしる(乳汁)図乳のコト、

ちしろ(地代)図土地の損料、土地のかりちん、㊁白き絹織物のコト、

ちしろ(地白)図織物の地色の白きもの、

ちしん(地神)図くにつかみ、卽ち土地を治めたもふ神のコト、(地祇)、

ちしん(地心)図地球の中心、地の中、

ちしん(地震)図地球内部の變化に依り、地面が震(フル)ひ動くコト、

ちじん(痴人)図おろかな人、ばかな人のコトを云ふ、

ちじん(知人)図知ってる人、こんゐな人㊁ともだちのコト、

ちじん(智仁)図智惠もあれば、仁(ハナヤ)もあると云ふコト、

ちしんき(地震器)図理學上の器械の名、地震のゆり方の方角(ホウガク)其容子、其強弱(ヨワイ)を計る器械、

ちしんがく(地震學)図地震の起る理由(ワケ)及び地震の起(オコ)る事を前以て知る等の事を究(キワ)むる學問、

ちしんかげ(地震影)図或る場處にて地震が起りゆり廣(ヒロ)がらふとして行く途中に、高山があつて、其れで喰(クヒ)止(メ)られて、其の山より向へ行ぬ處のコトを云ふ、

ちしんけい(地震計)図地震の起りし有樣を計(カ)り知る器械、

(ちぢす)

ちす(治)自動病氣がなほる㊁よくおさまる、

ちす(治)他動病氣をなほす㊁世の中をおさめる㊂罪(ツミ)などをただしてしらべる、

ちす(持)自動もちこたふ、たもつ、

ちすゐ(池水)図池の水、

ちすゐ(地水)図地面の内に在る水、卽ち地下水のコト、

ちすゐ(治水)図水を治めるコト、卽ち川筋の堤防を善し、水の出るを防ぐコトを云ふ、

ちすゐ(痴醉)図我身知らずに酒を飲みて馬鹿醉をするコト、

ちすぢ(血筋)図血のめぐる道筋㊁轉じて先祖より順順に血を分けて來たコト、卽ち實の親子、兄弟、

ちすべり(地辷)図地層(カウソ)が離れくづるコト。土地の一部分が、自然にくづれておちるコト、

ちすり(地擦)図雞(ニワトリ)の一種にて、眼牌共に黄色を呈せる、チヤボの小さきものゝコトを云ふ、

(ちぢせ)

ちせい(地勢)図土地のありさま、地形に同じ、

ちせい(治世)図世の中の能く治まつてるコト㊁天子の政治を執らせ給ふ間、

ちせい(地税)図土地の年貢(ネング)、地租(ソ)に同じ、

ちせき(地籍)図田畑宅地の持主を記せる

帳(ヨガチ)の稱、

ちせき(治蹟)図政事のいさほし、政のてがら㊁國の治まれる有樣、

ちせつ(痴説)図道理に適(カナ)はぬ馬鹿氣た考のコト、

ちせつ(持説)図我の信じ守(モリ)つてゐる意見のコトを云ふ、

ちせん(地氈)図花見遊山などに地上へ敷く毛織物の稱、

ちぜん(痴禪)図佛に事(ツカヘ)ながら其道を守らぬ馬鹿坊主のコト、

(ちぢそ)

ちそ(地租)図國庫に納(オサ)める土地の税金のコトを云ふ、

ちそう(持僧)図貴き人、身分ある人の爲めに、常に祈禱(イノリ)する僧のコトを云ふ、

ちそう(馳走)図かけはしるコト㊁もてなしふるまふコトを云ふ、

ちそう(地層)図地質學上の語にて、地質(ツチシツ)の相違に因て、土地が幾層(イクソ)にも自然にしきられ分たれて、ゐるコトないふ、

ちそく(遲速)図おそきと、はやき、

ちそく(持續)図つづひてる、もちつづく事を云ふ、

(ちぢた)

ちたい(地體)図根本、もと㊁轉じて、れつからさいふ俗語、

ちたい(痴態)図おろかなるさま㊁馬鹿氣(バカ)た事をするありさま㊂亂(ミダ)ちなる行ひのコト、

ちたい(遲滯)図どこうるコト、おくれはかどらぬコト、

ちたい(治體)図政事の行き屆きて世の治まつてるさま、

ちたい(地代)図土地を借る賃料、

ちたち(薙刀)図なぎなた、

ちたち(池塘)図池の周圍(マワリ)にある堤防(ツツミ)のコト、池のつゝみ、

ちたち(地道)図土地の下に造りにる道、トンネルのコト、

ちたち(馳道)図天子の御通行になる道のコトを云ふ、

ちたち(治道)図天下を治(オサ)むる道。政治を行ふ道のコト、

ちたつ(笞撻)図むちにて打(ウ)つコト、うちこらすコト、

ちたつ(横奪)図うばひとる、卽ち勲章を横奪するなど、

ちたま(血球)図珊瑚珠(サンゴジユ)の一種にて血の如き眞紅(マカ)な珠(タマ)、

ちたま(地卵)図其の土地の鶴(ツル)が生みし卵(タマゴ)、他處より來た物でない卵のコト、

ちたまご(地玉子)図地卵(ちたま)を見よ、

ちたらけ(血塗)図血にそまつてゐるコト、ちまぶれのコト、

ちたんだ(地蹈鞴)図ふいごの大なる物、足にて踏むふいご、

ちたんだ(地段太)図俗語にて腹を立て夢中(ウツチ)となつて、大地を蹈(ム)て怒るコトを云ふ、

(ちぢち)

ちち(乳)図ちしる哺乳動物(ホニユウドウブツ)の乳房(チブサ)より出る白き汁(ルイ)㊁乳房のコトを云ふ㊂羽織(ハオリ)旗(ハタ)草鞋(ワラジ)などの緣(ヘリ)にある小さき輪(ワ)の形を爲せる物のコトを云ふ、其の形が乳房に似てるより云ふ、卽ち小さき輪は紐(ヒモ)又は旗の竿(サオ)を通す用のもの、

ちち(致知)図物事の道理に、能く通づる

コトを云ふ、

ちち(父)圖男の、たや、

ちち(千千)副數數(カズカズ)たくさん、

ぢぢ(老爺)圖男子の老人のコト㊁父又は母の父卽ちおほぢ(祖父)、

ちち(遲遲)副おききコトを云ふ、

ちちう(躊躇)圖決斷に乏(トボ)しきコト、卽ちためらふコト、

ちちうへ(父上)圖父の敬語、

ちちかた(父方)圖父の血統(ケイトウ)の親類のコトを云ふ、　「父上に同じ、

ちちぎみ(父君)圖我が父を尊んで云ふ語

ちちく(馳逐)圖走りおふ。おひまはる。おひまくるコト、　「くなれる、

ちぢく(縮)自動ちゃまる。ちゃみて小さくなる。

ちぢく(地軸)圖地球の中心(シンシン)を貫(ツラヌ)きたる軸のコトにて、學說上の語なり、

ちちくさ(乳草)圖植物の名にて、ケンアザミのコト、其蓋(カサ)を切れば白き乳の如き汁が出るより云ふ、

ちちくび(乳頭)圖乳房(チブサ)の尖の圓きさこのコトを云ふ、　「むる、

ちちくる(乳繰)自動男と女が情を通じ戯

ぢぢぐさし(不潔)形きたなならし㊁きたなく見ゆるなり、

ちちくさし(乳臭)形乳汁の香(カヲリ)あり㊁いとけなし㊂拙(ツタ)なくあり、

ちちご(父御)圖他人の父の敬語、

ちちなしご(父無子)圖父親(オヤヂ)のなき子みなし子㊁野合に因り生れた子のコトを云ふ、

ちちのと(乳粉)圖赤子に與(アタ)ふる物、寒晒(カンサラシ)の米の粉のコト、

ちちはは(父母)圖ちちと、ははと、

ぢぢばば(翁嫗)圖おぢいと、おばあとの　「絹のコトを云ふ、

ちちぶ(秩父)圖絹織物の名にて、ちちぶ

ちちぶきぬ(秩父絹)圖絹裏地(ダキスク)の粗製なるものにて、武藏(ムサシ)の秩父郡地方より產す、

ちちぶじま(秩父縞)圖粗末なる絹織物にて、メイセンのコト、　一のコト、

ちちぶめいせん(秩父銘仙)圖ちちぶじま

ちぢみ(縮)圖物の小さくなるコト㊁衣服地の織り方の名縮織の略、

ちぢみおり(縮織)圖右撚(ヨリヌギ)と左撚の糸を交(マジ)へて、之を綜糸(ヘダテ)として織し物の總稱、

ちぢみさし(縮尺)圖裁縫(サイホウ)物の雛形(ヒナガタ)を製するに用ゆる尺(シヤク)にて、普通に縮尺(シヤクジヤク)の七寸を二尺とせる物、

ちぢみかたびら(縮帷子)圖麻糸(アサイト)をちぢませて織たるもの、

ちぢむ(縮)自動短(ミジ)かく、又はせまく小さくなる㊁身躰を、くすめる㊂しぼまる、

ちぢやり(治定)圖おさまり定まるコト㊁心のおちつくコト、

ちぢやり(笞杖)圖むちと、つえと、

ちぢやく(遲着)圖一定の時間より遲(オソ)れて來りつくコト、

ちちゆ(躊躇)圖ためらふコト、

ちちゆ(蜘蛛)圖虫の名、くも、

ちちゆり(池中)圖池の中、

ちぢゆり(地中)圖土地のなか㊁くぎりのついてる地面の內、

ちぢゆり(持重)圖大事を取るコト㊁からはずみたせぬコト、

ちちよ(躊躇)圖ためらふコト、

ちちる(縮)自動しぼまりて、かゞまる、

ちぢれ(縮)圖毛髮などの縮(ヂミ)むコト㊁ちゃみて、しぼまるコト、

ちぢれけ(縮毛)圖毛の一種の病氣にて、縮みて延(ノビ)ぬ毛のコト、

ちちろむし(蟋蟀)圖虫の名、こうろぎ、

ちちんさい(地鎭祭)圖地均(ヂガタ)をし基礎石(ヰシヅエ)を置く時に、其土地の神を祭る儀式のコト、

(ちぢつ)

ちつ(秩)圖ふち。俸給(ホウキウ)。ふちまい。ろく㊁くらゐ、卽ち官職㊂愼(ツツシ)む。うやまふ㊃ついで。つれ㊄智愚のすぐれてるコト㊅永なごの靜かに流れ行くさま㊆十年のコトを一秩と云ふ、

ちつ(窒)圖ふさがつてるコト。ふさがるコト㊁室(シツ)に通ずれやのコトを云ふ、

ちつ(扶)圖鞭(ムチ)にてはたくコト、

ちつ(抵)圖稻(ネ)を刈るコト、稻を刈り取る擊のコト、

ちつ(鋌)圖稻を刈るに用ゆるかま、

ぢつ(昵)圖したしき。ちかづく。むつまじきコトを云ふ、

ちつ(帙)圖厚き紙にて製したる書物を包むもの卽ちふみつゝみ、　「云ふ、

ちつ(膣)圖醫學名にて產道(サンドウ)のコトを

ちづ(地圖)圖地球上の山川海陸の狀(サマ)を描(カ)たる圖面、

ちづか(千束)圖多くの束(ツカ)㊁稻を束(ツカ)にして澤山に集めたもの、

ちつかふ(昵狎)圖能くなれてしたしむコト。なれて親(シタ)しくなるコト、

ちつかたる(膣加多兒)圖產道(サンドウ)のただれる婦人の病氣の名、

ちつき(地搗)圖家を建つべく地面を、つきならすコト、地かため、

ちつきよ(蟄居)圖とぢこもつてゐる㊁德川時代の輕き刑の一種、家內にきんしんしゐて、外出を許されぬ刑、

ちつきん(昵近)圖したしみちかづく、なかのよきコトを云ふ、

ちつけ(乳附)圖ちちつけの略にて、生れたばかりの小兒に、初めて乳を呑ますコトを云ふ、

ちつとん(昵懇)圖極めてしたしい、取分けて仲のよきコト、

ちつし(窒死)圖呼吸(キ)がつまつて死ぬコトをいふ、

ちつじ(秩次)圖ただしき順序(ジユンジヨ)、つゞきのコトを云ふ、

ちつじよ(秩序)圖物事の順序がよく正しく調(トトノ)ふコト、

ちつぜん(秩然)圖物事が正しく順序(ジユンジヨ)よく、揃(ソロ)ひとのふてるさまを云ひ表はす語、

ちつそ(窒素)圖化學上の語にて、元素(ゲンソ)の一、色なく味なく臭(クサ)なき瓦斯(ガス)體にて、空氣中に五分だけ含まれてゐるもの、

ちつそく(窒息)圖呼吸(キ)のふさがるコトを云ふ、

ちつそく(窒塞)圖つかえて、通(ツウ)らぬコト、ふさがるコト、

ちつちつ(蟄蟄)副打ちとけてる、卽ちやわらぎあつまる狀(サマ)を云ふ、

ちつちつ(秩秩)副秩序のさゝなふてるさまを云ふ語、

ちつちゆう(蟄蟲)圖土の中にむぐり樓んでる虫のコトを云ふ、

ちつちよく(黜陟)圖官等を上げると下げるとのコト、又は官等を昇せたり退ぞけたりするコトを云ふ、

ちつづき(地續)圖土地の連なり合つてるコト、甲の地と乙の地とつづき合てるコトを云ふ、

ちつと(些)副少しわづかのコト、

ちつばく(縶縛)圖しばつてつなぎをくコトを云ふ、

ちつぶく(蟄伏)圖虫が冬中土の中にもぐり込んでゐるコト㊁轉じて一室にとじ籠(コモ)りて、外出せぬコトを云ふ、

ちつぼ(地坪)圖地面の坪數、其の家を建てた坪數に對していふ語、

ちつろく(秩祿)圖ふち、ろく、

（ちぢて）

ちてい（池堤）圖池のつつみ、

ちてい（池汀）圖池のみぎは、

ちてい（池亭）圖池の汀に建られたる小さき家のコト、

ちてい（地堤）圖土地の長く續きて持ち上りて兩側の次第に低くなれるものを云ふ㊁土堤、つつみのコト、

ちてい（地底）圖大地のそこ、地面の下のコト㊁單にそこのコト、

ちてい（治定）圖能く治まり定まつてるコトを云ふ、

ちてき（血滴）圖血漿のしづく、

ちてつ（地鐵）圖ぢがれ、地金、

ちてん（地點）圖ところ又は場所のコト、ある地點に達しなど、

（ちぢと）

ちど（些）副少し、わづか、いささか、

ちとう（池頭）圖池のそば、池の汀、

ちどう（地動）圖ぢしんのコト、

ちとう（地頭）圖昔時源の頼朝が諸國の莊園を、支配せしめたる役人のコト㊁一區域の土地を支配してる人、

ちとく（知得）圖物事を知りおぼへるコト卽ちのみこむコト、

ちとせ（千歳）圖千年の意にて、長き年月のコトを云ふ、

ちとせがい（千歳貝）圖薄黄色にて、濃茶色の筋ある螺に似たる小き貝、

ちどり（地鳥）圖外國産の鷄のコト、云ふ、內地産の鷄に對して

ちどり（地取）圖地面の區域をつけるコト㊁相撲の稽古のコトを云ふ、

ちどり（千鳥）圖澤山の鳥と云ふコト㊁水鳥の名、冬の頃に多く群りて水邊に廻り飛んでゐる、尾の短かき、背の青黑き、腹の白き小さき鳥㊂踊にて四五人連りて廻り合ふコトを云ふ、

ちどりあし（千鳥足）圖酒に醉ふてよろめき歩む、足なみのコト、

ちどりがひ（千鳥貝）圖其形千鳥の如くにて、薄茶色の筋ある、其の色の白く美しき貝、

ちどりがけ（千鳥掛）圖縫方の一種にて、伸縮するもの、又は其地質の厚きもの、或は裁目のほつれるを防ぐ爲めに、抑へへ縫ふ仕方の一種にて、普通の縫ひ方とは幾分の相違あり、卽ち左より右へ、斜に一針づつ拔きて縫ふ仕方を云ふ、

ちどりはふ（千鳥破風）圖破風造の一種にて、普通の宮、御殿風の建築に用ゆものにて、形容の美しきもの、イリモヤウチドリハフとも云ふ、

ちどん（痴鈍）圖にぶきコト、おろかなるコト、きのきかぬコト、

（ちぢな）

ちない（地內）圖一區劃をせる土地のかまへうち、

ちなう（智囊）圖ちえぶくろ㊁智惠のすぐれてある人のコト、

ちなまぐさ（血腥）圖血のにほひ㊁戰爭がつづいてあると云ふ意を表はす語、

ちなまぐさきかぜ（血腥風）圖風が血のにほひを持つて來る㊁世が亂れてると云ふコト、「よりて、

ちなみ（因）圖ゆかり。いんえん㊁ついで、

ちなむ（因）自動たよる。よる、

ちならし（地均）圖凹凸のある土地を平らな土地に直すコト㊁地面に砂を敷

て平になす、

ちなり（地鳴）圖山の噴火又は地震などにて、地盤の鳴り響くコト㊁道普請などに敷きたる砂利をならすべく大きな、圓き石の柱の如き物を、横にして轟かし行く、其の石の柱の如き物の名稱、

ちなり（地形）圖土地のかつこう、

ぢなん（呢喃）圖やたらにしやべるコト、

（ちぢに）

ちにぬく（鳴血）圖鳴きつゝ血を吐くコト㊁轉じて甚だしくかなしみ泣くコトを云ふ、

（ちぢぬ）

ちぬ（茅渟）圖ちぬだひの略、

ちぬし（乳主）圖乳母の子、

ちぬし（地主）圖土地を有つてる人のコトを云ふ、

ちぬだひ（茅渟鯛）圖くろだひの一名、攝津のちぬの浦にて、多く産するより此の名あり、

ちぬる（血塗）圖又た釁の字をも書く、祭事を行ふ時に、牲の血を祭器にぬりつけて、神をまつるコトを云ふ㊁戰ひの初めに、動物を殺し、血を軍器にぬりつけて、軍神を祭るコト㊂血を物にぬりつけるコト、

（ちぢね）

ぢねづみ（地鼠）圖鼠の一種、常に地中に棲ひて、虫を捕りて食ひ居るもの、むぐらの類、

ちねつ（地熱）圖地球の中心に在ると云ふ甚だしき熱のコト、

（ちぢの）

ちのあめ（血雨）圖戰爭などにて死傷者の多くして、血の流れるコトの夥多

ちのいけ（血池）圖地獄に在ると云ふ、血しきさまを云ふ、

ちのう（智能）圖すぐれたるコトを云ふ、

ちのう（智惠）圖智惠のすぐれてある人のコトを云ふ、

ちのなみだ（血涙）圖涙に血がまざりて出

るると云ふ意より、轉じて甚だしくなげきかなしむコト、

ちのぼせ（血逆）圖頭へ血が多く集りてたちくらみするコト卽ちめまひのコト、

ちのみご（乳呑兒）圖乳を呑んでる兒、ややこ、あかごのコトを云ふ、

ちのみち（血道）圖婦人病の名血の循の惡しきより生ずる病氣㊁特にヒステリーのコト、

ちのり（地乘）圖馬術の一種にて、馬の足並を揃へて、靜かに乘り行くコトを云ふ、

ちのり（地利）圖土地の有據の利益のある「コト、

ちのりのゆき（千箭靭）圖澤山の箭を盛り入れたる、ゆきのコトを云ふ、

ちのわ（茅輪）圖すがにて作りたる大きな輪にて、大祓式に用るもの、人が此の輪をくぐれば、惡き病に罹ぬと云ふ、

（ちぢは）

ちはう（治邦）圖政事の行き屆きて能く治まれる國㊁國ををさむるコトを云ふ、

ちはう(地方)圖其の國の首都(ミヤコ)の外の土地の稱㊁轉じて、いなかのコト㊂軍隊にて、其の兵營以外の土地のコトを云ふ語、例ば地方人などと云ふかごとし㊃土地の一部落の稱、

ちはうぜい(地方稅)圖國稅に對する稱にて、地方官廳にて、其の管轄地方の入費を充(ア)す爲めに、其の地方の人民に、一般に課する稅金のコトを云ふ、

ちはうくわん(地方官)圖地方行政官(ギヤウセイクワン)に同じ、

ちはうぎくわい(地方議會)圖中央議會に對しての稱にて、府縣會及び市町村會のコトを云ふ、

ちはうさいばんしよ(地方裁判所)圖各府縣に在りて、區裁判所の直ぐ上級の裁判所にて、三人の判事より成る、合議制度の裁判所のコトを云ふ、

ちはうちやうくわん(地方長官)圖地方の行政を掌る最上官のコト、卽ち北海道長官及び各府縣の知事のコトを云ふ、

ちはうえうねんがくかう(地方幼年學校)圖中央幼年學校へ入校すべき生徒を養成教育する學校の稱、

ちはうぎやうせいくわん(地方行政官)圖地方の行政を掌どる官吏の總稱、卽ち府縣の知事、事務官及び郡長等のコトを云ふ、

ちばしる(血走)自動血が勢(イキヒ)つよく流れ出る㊁眼に血筋が立つ、

ちはつ(薙髮)圖髮をそるコト、

ちばなれ(乳離)圖子供が成人して、乳汁(チチ)を呑(ノ)まなくなるコト、

ちはま(地濱)圖碁に云ふ語にて、相手方の石を圍みて取りて、而して其の地を我の有(ノ)となせるコトを云ふ、

ちばや(裨)圖巫女(コミ)の着る一稱の衣物の名、白地にて作り、袖(ソデ)を經(ヘ)ずに只だ一寸(ヲチ)と紙捻(コヨリ)にて結びて着るもの、

ちばやふる(千早振)圖勇氣の盛んなるコト を云ふ語、

ちばら(茅原)圖かやの多く生(ハ)へ茂れる所のコトを云ふ、

ちはん(池畔)圖池のほとり。池の汀(ハヅ)のコトを云ふ、

ちばん(地盤)圖大地のコト㊁自分の根據(ヨリ)となる物事の稱、

(ちぢひ)

ちひ(地皮)圖地球を包むでる皮と云ふ意にて、地殼(ヂカク)のコト、

ちひき(千引)圖千人もかからねば、引き寄らせれぬと云ふ意にて、無暗に重きコトを云ふ、

ちひき(地引)圖海の底に地引網(イアミ)を敷きて、陸地へ次第々々に引き寄せるコトを云ふ㊁地引網(アミヒキ)の略語なり、

ちひき(血引)圖魚の名、ぼらに似て全身の眞紅(カウ)なるもの、其の大なるは三尺に達す、

ちひきあみ(地引網)圖網の一種、大仕掛のあみにて、之を水中に張り、魚の入るのを待つて、次第次第に陸地へ引き寄せる仕掛になれるもの、重に濱(ハマ)の高からぬ淺き海に用ゆるものなり、

ちひきいし(千引石)圖ちひきいはに同じ次條を見よ、

ちひきいは(千引岩)圖千人もかゝらねば動かぬと云ふ大きな岩、

ちひきなは(地引繩)圖地引網に、ついてるなはのコトを云ふ、

ちひさし(小)圖すこしばかり㊁大きくない㊂年のゆかぬ㊃數(カズ)の多からぬなり、

ちひちひ(少少)副すこしづつ、

ちひと(千人)圖たくさんの人、他人數のコトを云ふ、

ちひひき(地響)圖地面にひびきの生ずるコト㊁地面の音して動くコト、

ちひふで(禿筆)圖筆の穗(ホ)のすり切れたるもの、坊主筆(ボウズフデ)のコト、

ちひやり(持病)圖全治(ヤウ)せずに、時時發する病氣のコト、

ちひる(禿)自動短かくなりてちひる。すれきれて尖(サキ)なくなる、

ちひろ(千尋)圖千ひろもある深さ、無暗に深きコトを云ふ、

(ちぢふ)

ちふ(蟄)圖つなぐコト。ほだすコト。ほだしのコトを云ふ、

ちふ(動)自動といふと云ふ語の約(ツヅ)語にて、てふと云ふ意に同じ、

ちふ(蟄)圖土などの中に、かくれてるコト㊁かくれひそんでるコト㊂おだやかにして、和(ヤハ)らげる狀(サマ)を云ひ表はす語、

ちふ(禿)自動總て細き物の尖(サキ)が、すり切れて細く小さくなる、

ちふ(知府)圖一府の長官と云ふ意にて、府知事のコトを云ふ、

ちふ(茅生)圖ちがやの生へ茂げつてる原のコト、かやばら、

ちふ(蹴鞠)圖走り廻はるコト。駈(カ)け廻はるコトを云ふ、

ちふ(乳離)圖女子の乳房(チブサ)の膓(ハラワタ)で、大きくなる病氣の稱、

ちふう(致富)圖富貴に成る、金持に成るコトを云ふ、

ちふく(地輻)圖門(モン)のしきゐのコトを云ふ、

ちふく(地腹)圖地面の中、土地の下のコトを云ふ、

ちふくら(乳脹)圖乳房の腫(ハレ)て、三味線の胴(ドウ)の、兩方のふくれ出てる處を云ふ、

ちふくろ(地袋)圖床の間にそふてある、ふくろとだなのコト、

ちふさ(乳房)圖乳の胸より、膨(ボウ)れ出てる部分のコトを云ふ、

ちふす(窒扶斯)圖病氣の名にて、腸チブスの略語なり、

ちふつ(持佛)圖我家に常に祀りて、信心する佛像㊁我が信心する佛の守り札のコトを云ふ、

ちふつだう(持佛堂)圖我家にて、自己の信ずる佛及び先祖代代の位牌(イハイ)を祀(マツ)つて置くところ、

ちふてりあ(實布的里亞)圖小兒に最も多き恐るべき傳染病にて、大熱を發し、咽喉が痛み、白き薄皮の咽喉に生ずる病氣のコト、

ちふと(地太)圖織物(オリモノ)の其の織糸の太きものゝコトを云ふ、

ちふね(千船)圖多くの船㊁澤山に船の集まつてるコトを云ふ、

ちふるい(血振)圖動物を斬(キル)たる血の附た刀を振つて、其の血を振ひ落すコト㊁產後(サンゴ)の婦人が血の道に身體(カラダ)の振ふコト、

ちふん(地文)圖大地のありさまのコトにて、山川、草木及び土地の高低、其他凡て地球上の有樣を指(サ)して云ふ㊁地文學(チブンガク)の略、

ちふんがく(地文學)圖地球(チキウ)の自然(シゼン)に變(カワ)るコトの有樣や、地球の表面に在る水、空氣、草木などの關係、及び地球と天然の關係を調(シラ)べる學問の稱、

(ちぢへ)

ちへ(千重)圖物の量(カサ)の甚だ澤山なるコトを云ふ、

ちへい(治兵)圖軍隊をとゝのへるコト、

ちへい(地平)圖土地の平らかなるコト、即ち大地の平面のコトを云ふ、

ちへい(治平)圖世の中の太平無事に治(オサ)まつてるコト、

ちへいせん(地平線)圖土地の平面と天空(テンクウ)と相連(アイツラ)る如く見へてる部分の稱㊁一般に見渡し得らるゝ範圍内のコト、

ちへき(癖癖)圖おろかなるくせ、

ちへん(地邊)圖地のはた、

ちへん(池變)圖池異(イチ)に同じ、

ちべん(智辨)圖智慧のはたらき、わきまへのよきコトを云ふ、

(ちぢほ)

ちほ(地歩)圖自分のゐる位地、即ちたちばのコトを云ふ、

ちほ(掏摸)圖すりのコト、往來で人の所持物を取るぬす人の稱、

ちほあき(千百秋)圖千百年と云ふ意にて長き年月のコトを云ふ、

ちほう(地方)圖其の土地のコト、轉じて田舍(イナカ)のコト、

ちほう(地望)圖其の土地にての名望家、土地のいへがらのコト、

ちほう(智謀)圖はかりごとを廻らすコト「云ふ、才智のコトを云ふ、

ちぼそ(地細)圖織物の地糸の細きコトを

ちほん(馳奔)圖走り廻るコト、

(ちぢま)

ちまい(地米)圖其の土地にて出來たる米のコト、他地方より來りたる米に對しての稱、

ちまう(蜘網)圖くものすのコト、

ちまき(茅卷)圖又た粽とも書す、餅菓子の名、糯米(モチゴメ)又は白米の粉をねり、砂糖を加へ甘味(アマミ)をつけ、篠(ササ)又は葦の葉にて卷き蒸(ムシ)たる物、

ちまきざさ(穆笹)圖笹の一種にて熊笹(クマザサ)のコトを云ふ、

ちまき(地柾)圖上等の和紙の名、

ちまた(巷)圖道(ミチ)のコト、街道、

ちまた(岐)圖道の幾條(イクスジ)にも別れた所㊁場所(バショ)、土地(チ)、

ちまちだ(千町田)圖澤山に連らなつてある田地のコトを云ふ、

ちまつり(血祭)圖昔戰爭の時に、行ひし式にて、戰ふに當り、動物の生血(イキチ)を軍神にささげて、戰捷を祈るコトを云ふ、

ちまつり(地祭)圖家を建(タテ)る時に、其の地所にて神を祭るコト、

ちまなこ(血眼)圖眼に血筋(ケスジ)のたつコト、血ばしつたるまなこ、

ちまはり(地廻)圖其の土地の近邊(キンペン)を廻り歩くコト、商人などの㊁其の土地の近在より、其土地へ品物を廻し送つて來るコト、米などを、

ちまぶれ(血塗)圖又たチマビレとも云ふ血に染(ソマ)るコト、血だらけになるコトを云ふ、

ちまよひ(血迷)圖夢中(ムチュウ)になる、とりのぼせる、きがくるふコト、

ちまん(持滿)圖滿を持すと云ふコトにて十分に好き機會(キカイ)に逢せるも、尙控へて活動(カツドウ)せぬコト㊁弓に矢をつがへて、十分に張つた時のコトを云ふ、

ちまん(遲慢)圖おそきコト㊁ぐずぐずして、のろきコトを云ふ、

(ちぢみ)

ちみ(魑魅)圖すだま㊁ばけ者のコトを云ふ、

ちみ(地味)圖其の土地が物を生育させる事の善惡の程合、

ちみ(質朴)圖物に飾(カザ)り氣のなきコト㊁染色縞柄などの華美(ハデ)ならぬもの、稱、

ちみち(地道)圖常の歩み、即ち靜かに歩むコト㊁正當(タイ)の道、あたりまへのコト、即ち地道にかせぐなど、

ちみち(血道)圖動脉(ヤウク)のコト、即ち血の通ふすじのコトを云ふ、

ちみつ(緻密)圖こまかしき㊁くはしきコトを云ふ、

ちみどろ(血塗)圖ちだらけ、ちまぶれ、

ちみやく(地脉)圖大地の自然に重(カサ)り合つてる、其の筋道(スジ)の稱、

ちみん(治民)圖人民を善き方に導くべく治むるコトを云ふ、

ちむし(地虫)圖土の中に、棲(ス)てる虫の子にて、イモ虫の如き形をせるもの、草の根を食ふて害をなす、

(ちぢめ)

ちめい(地名)圖土地の名目。土地の稱(トナ)

ちめい(知名)圖名の世間に廣まつてるコト、名だかきコト、

ちめい(知命)圖我が生命を知るコト、即ち五十歳の異名、人生五十年の義より出づと云ふ、

ちめい(致命)圖生命を失ふコト㊁或る原因の爲に、生命を失ふコト、

ちめん(地面)圖土地、場所㊁土地の表面(ウワベ)のコトを云ふ、

ちめんもち(地面持)圖地所を持(モ)てゐる人のコトを云ふ、

(ちぢも)

ちもと(千本)圖多く木の生じてるコトを云ふ、

ちもの(地者)圖遊女に對して、素人(シロウト)の女のコトを云ふ鄙(イナカ)しき俗語、

ちもり(道守)圖昔時道路の番をなせしもの、今の巡査の如きもの㊁道路を守るコトを云ふ、

ちもり(地守)圖其土地を差配(サハイ)する人のコトを云ふ、

ちもん(地紋)圖染物、織物或は漆器細工(シツキチ)などの地の模樣(モヨウ)、

ちや(茶)圖木の名、小さき木にして五六月頃嫩葉(ワカバ)を生ず、葉は綠色にして一種の光澤(ツヤ)あり、秋の末に至りて白色の花を咲かす㊁此の木の嫩葉を蒸(ム)して乾かして製したるもの、之を湯に浸して其の汁をすふ、一番茶二番茶等の別あり㊂茶の湯即ち茶道の略㊃茶色の略、

ちやいれ(茶入)圖茶を入れて貯ふ器具(ウツワ)、金製(カネ)、木製(モクセイ)、紙製(カミ)、土製(ツチ)等種種あり、

ちやいろ(茶色)圖染色の名、赤黃色に精や黑色を帶びたる色合のコトを云ふ、即ちとび色、

ちやう(長)圖ながきコト、久しきコト、とうきコト㊁のびるコト大きくなるコト㊂そだつコト㊃かしら。つかさ㊄物事にぬきんでゝ秀(ヒイ)でてるコト㊅教へみちびくコト㊆盛なるコト㊇年のたけてるコトを云ふ、

ちやう(帳)圖なげき、いたむコト㊁うらむコトを云ふ、

ちやう(腸)圖腹のふくれはれるコト又は其の病氣㊁轉じてはらわたのコトを云ふ、

ちやう(料)圖食事。かてのコト㊁菓子の

一種、あめのコト、

ちやう(漲)図水の盛んに満ちひろがるコト、卽ちみなぎるコト、

ちやう(倀)図こける。たをれる㊁まよふ。狂(クワウ)ふコト、

ちやう(緩)図弓を入れて置くふくろのコト、卽ちゆみぶくろ、

ちやう(聽)図十分にきく㊁ききわける㊂ゆるす。ききとゞけ㊃したがふコト、

ちやう(項)図いたゞき。一番上の所の稱㊁うなじのコト、

ちやう(暢)図やわらぐ。のぶ。十分なるコト

ちやう(嚐)図香氣ある一種の草の名㊁鞭(ムチ)及び暢(ノブ)に同じ各其の條を見られよ、

ちやう(町)図まち㊁町村制の法律に依りて、定められたる市(シ)に次ぐ土地の稱(ハヤ)㊂土地の長を計る名、卽ち一間の六十倍㊃反別の名にて、一反の十倍をいふ、

ちやう(疔)図面(カホ)や胴(カド)に生ずる惡性(ヤケド)の腫物(ヒデモノ)の名、

ちやう(丁)(接尾)書籍(シホ)の紙數(カミカズ)を數ふる語、又は豆腐(トウフ)を數ふる語㊁町の略語に用ゆる、

ちやう(丈)図たけ長さ㊁藝人の名宛の下に用ゆる語㊂禪家の老僧(ロウソウ)をいふ、

ちやう(杖)図つえ㊁古の刑罰の名にて、罪人を打(タ)く刑、

ちやう(長吁)図長きあひだ、たんそくせる聲のコトを云ふ、

ちやう(長夏)図夏の初めのコト、卽ち六月のコトを云ふ、

ちやう(長歌)図句數の長き歌、假令(タトヘ)ば唱歌(シヨウカ)新體詩(シンタイシ)のごとき歌、長歌に對し、普通の歌を短歌と云ふ、

ちやうか(町家)図商人の家、

ちやうき(長期)図期限(キゲン)の長きコト、

ちやうき(聽器)図音聲をきく器具(ウツワ)、卽ち耳(ミミ)のコトを云ふ、

ちやうき(定器)図何々に用ゆると定りたる道具㊁平常定めて用ひてる道具のコトを云ふ、

ちやうき(定規)図定木に同じ、

ちやうき(長)図かしら、つかさ㊁ながきコト㊂物事にひゐでたるコト㊃年のたけたるコト、

ちやう(張)図物のはり延(ノバ)てるコト㊁琴や弓(ユミ)などを數ふる語、

ちやう(帳)図紙をとぢて製(ツクリ)りたる物、帳面㊁とばり、幕(マク)のコト、

ちやう(腸)図はらわた、百ひろのコト㊁轉じて心(ココロ)のコトを云ふ、

ちやう(廳)図上(カミ)にたつやくしよ、卽ち府廳・縣廳など㊁つかさ、かしらのコト

ちやう(孃)図身分ある人の娘を指していふ語㊁凡て女を尊(タフト)んで呼ぶに用ゆる語、

ちやう(娘)図むすめ。女の子供、

ちやうき(定木)図質(カタ)の堅き木を、細長く、正しく切りけづりたる物、紙類をたつに用ゆ、又た紙などに正しく線を引くに用ゆるもの、

ちやうく(長驅)図身丈(ミタケ)の高きコト。脊(セ)のたかきコト、

ちやうく(長驅)図遠くまで追ひ行く㊁馬に乘りて遠方へ行く、

ちやうけ(茶受)図茶を呑む時に食ふ菓子

ちやうど(長語)図ながきことばゝ、ながばなしのコト、

ちやうざ(長坐)図人の家に行きて、ながゐするコトを云ふ、

ちやうし(長子)図長男、そうりやう息子のコトを云ふ、

ちやうじ(丁子)図植物の名、肉桂(ニクケイ)に似たる木なれども、熱帶(ネツタイ)地にあらざれば產せず、其の木の蒼(アヲ)を取り

乾して、商品と爲す、一般に云ふ丁子なり、其香氣(カホリ)よろしく、化粧品(ケシヤヒン)の原料、又は醫業用として廣く用ちる、

ちやうじ(停止)図とゞめる。やめさす。さしとゞむるコト、

ちやうす(茶臼)図葉茶を粉となす爲めに挽く、小さな鐵の臼、

ちやうと(長途)図長きみち㊁ながき旅路のコトを云ふ、

ちやうど(丁度)(副)都合(ツゴウ)まくと云ふ意能く似てゐる、さながら、

ちやうど(丈度)図身のたけ、又は物の長さのコトを云ふ、

ちやうば(町場)図宿と宿(シユク)との間の里程を云ふ、轉じて何處其處(ソコ)より、何處其處までの間、

ちやうば(帳場)図商家にて帳面をつけ、又た金錢の計算をするところのコト、卽ち勘定場、

ちやうび(定日)図互ひに約束して定めたる日のコトを云ふ、

ちやうび(長尾)図ながき尾のコト、

ちやうふ(長婦)図長男のよめ(嫁)、

ちやうぶ(丈夫)図身體の強健なるコト㊁轉じて容易(タヤス)く損ぜぬ強き物のコトを云ふ、

ちやうふ(丈夫)図男らしき男、ますらをのコトを云ふ、

ちやうふ(定府)図德川時代に諸國の大小名が、江戸の邸宅に住ゐ居ることを云ふ、

ちやうぼ(帳簿)図帳面のコト、

ちやうぼ(場圃)図はたけのコト、

ちやうぼ(醸母)図酒を製する時に、其原料たる米を、麹となすべき黴菌(バイキン)、卽ちもやしのコト、

ちやうむ(定務)図きまつたるつとめ。一定の職務(タヤム)のコト、

ちやうも(暢茂)図草木の盛んに茂ひしげつてゐる狀(マヤ)を云ふ、

ちやうや(長夜)図よながが卽ち冬の夜のコトを云ふ、

ちやうり(定離)図佛法語にて、人は必ず別れ離れねばならぬと定まつてると云ふコト、

ちやうり(長吏)図役人の中のかしら、頭立つたる役人、

ちやうあひ(帳合)図帳面と金錢の勘定とを照し合つて間違なきを調(シラ)ぶる「

ちやういつ(漲溢)図水などの、みなぎりあふれるコト、

ちやういつ(長揖)図支那人の禮式にて、左右の手を互違(タガヒ)に袖へ入れ、高く差し上げて爲す禮、

ちやうえき(腸液)図醫學語にて、動物の腸(ハラワタ)より出る汁(シル)、此の液(エキ)に因り、食物が乳(チチ)の如き有樣の物に消化(ケシ)される、

ちやうおん(長音)図長く引く音、

ちやうかう(長庚)図宵(ヨヒ)の明星(ミヤウジヤウ)のコトを云ふ、

ちやうかう(聽講)図かう義をきくコトを云ふ、

ちやうかく(長角)図ながきつの、

ちやうかく(聽覺)図物事が耳に達して、種々の判斷をなすはたらき、

ちやうかん(聽感)図前條に同じ、

ちやうきう(長久)図長くひさしき㊁いく久しきコト。とこしへ、

ちやうきよ(聽許)図ききとどける㊁ゆるす㊂しようちするコト、

ちやうぎん(丁銀)図丈た挺銀とも書す、慶長年間に製せられたる銀貨にて、一つの目方(メカタ)が、四十二匁ある版、又は棒(ボウ)に爲し置きて、必要に應じ切つて使ひたるもの、

ちやうけい(長計)図ささざきのほかりごとのコトを云ふ、

ちやうけい(長兄)図一番上のあに、

ちやうけう(長橋)圖長き橋(ハシ)、

ちやうけし(帳消)圖勘定が濟(ス)て帳面を消すコト㊁貸借(カシ)其他權利(ケン)義務の失(ウシナ)なつたコトを云ふ、

ちやうげつ(暢月)圖陰曆の十一月のコトを云ふ、

ちやうけふ(長狹)圖巾(ハバ)せまくして、丈(タケ)の長きコト、

ちやうげふ(定業)圖其人に定まつた因果(インガ)因念(インネン)のコト、

ちやうけん(町間)圖測量の名にて、町の間尺(カンシヤク)を測(ハカ)るコト、

ちやうけん(長劍)圖長いつるぎ、

ちやうこ(長袴)圖ながはかま、

ちやうこう(聽講)圖講釋(コウシヤク)を聽くコト、講義をきくコト、

ちやうこう(長江)圖流の長き川のコトを云ふ。大川(オホカハ)、

ちやうこう(丁香)圖丁子(チヤウジ)の實(ミ)を乾かして粉となしたる物、

ちやうこん(長恨)圖ながきうらみ、

ちやうこん(悵恨)圖かこちつつ、うらむコトを云ふ、

ちやうざい(杖罪)圖杖(ツエ)にてはたく昔の刑罰の名、

ちやうさう(長槍)圖穗先(ホサキ)の長き槍のコトを云ふ、

ちやうざう(釀造)圖酒や醬油などを、つくるコトを云ふ、

ちやうしき(定式)圖定められたる儀式(キ)のコトを云ふ、

ちやうしつ(丈室)圖寺の方丈の稱、

ちやうじつ(長日)圖日の長きコト、

ちやうじや(長者)圖自分より目上(マウヘ)の人㊁學問あり德高き人㊂年のゆきたる人㊃金滿家、財産家のコトを云ふ、

ちやうしゆ(腹膨)圖膨物(ボウブツ)などのはれて赤くふくれ上るコト、

ちやうしゆ(釀酒)圖酒をかもすコトを云ふ、卽ち酒造(ゾウシユ)、

ちやうしゆ(長主)圖內親王(ナイシンワウ)の御事、卽ちひめみやさま、

ちやうじゆ(長壽)圖命(イノチ)の長きコト。長いきしてるコト、

ちやうしよ(長所)圖其人の他の人に比(クラ)べて殊(ホカ)にすぐれてるところのコトを云ふ、

ちやうじり(帳尻)圖帳面に因つて勘定し上げたコトを云ふ、

ちやうしん(聽診)圖醫學語にて、胸など打(ウ)きて音を聽き、又た胸の內の音を聽きて、病氣の容子を知るコトを云ふ、

ちやうしん(長身)圖背(セ)の高き人のコト、「の高き人のコト。背

ちやうじん(丈人)圖長老の別名㊁夫(オツト)より云ふ舅(シウト)、卽ち妻の父の事を云ふ、敬語、

ちやうすう(丁數)圖里程(リテイ)の一丁五丁十丁などと云ふコト、㊁書物の紙數(カミカズ)のコトを云ふ、

ちやうせい(町政)圖町を治むる其仕方(シカタ)、卽ち町行政(マチギヤウセイ)、

ちやうせい(長生)圖ながいき、

ちやうせい(釀成)圖酒たかもしこしらへるコト㊁轉じて騷(サワ)ぎを爲る種(タネ)災(ワザハヒ)の種をつくりなすコトを云ふ、

ちやうぜい(町稅)圖町の入用の稅金のコトを云ふ、「コトを云ふ

ちやうせき(長嘯)圖長時間うそぶいてる

ちやうせき(定席)圖一定したる場席㊁ませ(寄席)のコト、

ちやうせき(長逝)圖死するコト、

ちやうせき(定石)圖碁(ゴ)を圍(カコ)むときに於ける、定(サダ)まつた石の打ち方のコトを云ふ、

ちやうぜつ(長舌)圖口先(クチサキ)のみにて、工合のよき事を云ふて、へつらふコトを云ふ語、

ちやうぜん(悵然)圖甚だしくかこつありさまに云ふ語、

ちやうせん(長髯)圖ひげを長く生(ハヤ)してる。長くのびてるひげ。

ちやうそく(長足)圖歩く事の早さコト㊁物事の發達する事の早さ、

ちやうそん(村町)圖町と村、

ちやうだい(長大)圖長(ナガ)く大(オホキ)きく爲る㊁成人(オトナ)となるコト、

ちやうだい(町代)圖一つの町の住民の代理を勤むるコト、

ちやうだい(張大)圖ふとくはる、

ちやうだい(脹大)圖はれて大きくふくれるコトを云ふ、

ちやうだい(帳臺)圖上段(ダンダン)の間(マ)のコト、貴人の御座所(ゴザシヨ)、

ちやうだう(廳堂)圖役所のコト㊁大廣間(オヒロビ)のコト、

ちやうたう(長刀)圖長きかたな、

ちやうだつ(暢達)圖のびたつする、のびのびするコト、「トを云ふ、

ちやうたん(長歎)圖甚だしく歎息するコ

ちやうたん(長短)圖ながみぢかく轉じて優(スグ)れてると、優れぬと、よしあしと云ふコト、

ちやうたん(長談)圖ながばなし、

ちやうぢよ(長舒)圖氣ののびやかにしてゆたかなるコト、

ちやうぢよ(長女)圖初めに生れた娘、

ちやうちん(提燈)圖又た提灯と書く、竹を心(シン)とし紙を張りて、圓形に作りたるもの、火を點(ツケ)して夜道を歩く時などに用ゆる具、

ちやうつけ(帳附)圖帳面に記載し置くコト㊁掛賣(カケウリ)のコト、

ちやうづけ(丁附)圖書物の紙數の順をつけるコト、又は其とじゆん次、

ちやうづめ(腸詰)圖西洋料理の一種にてソセイヂとも云ふ、豚(ブタ)の腸官(チヤウカン)を製して、其の內へ豚の肉を料理して詰(ツメ)た物、

ちやうてい(長程)圖長きみちの里、

ちやうてい(長堤)圖長く續(ツヅ)ひてるつつみのコト、

ちやうてい(長汀)圖池(イケ)などのみぎはの長くつづくコト、

ちやうてい(長亭)圖道中(ドウチウ)の驛(エキ)と驛(エキ)との間の長きコト、

ちやうとじ(帳綴)圖帳面をこしらへるコトを云ふ、

ちやうない(町內)圖町の內(ウチ)㊁我の住む町の內㊂轉じて近處(ハツカ)、

ちやうない(帳內)圖定まりたる場所の內と云ふコト、

ちやうない(帳內)圖まくのなか、

ちやうなみ(町並)圖町町、諸處の町のふりあひのコト、

ちやうなん(長男)圖總領(ソウリヤウ)の息子(ムスコ)のコトを云ふ、

ちやうにん(町人)圖其の町に住む人㊁轉じて商人の事を云ふ、

ちやうばち(悵望)圖うらめしそうに眺(ナガ)めるコト、

ちやうばち(丈房)圖寺のコト、

ちやうばと(帳箱)圖帳面を納(イレ)て置く箱、かんちやう箱、

ちやうはつ(長髮)圖髮(カミ)を長くのばしてるコト。長くのびしかみ、

ちやうはふ(定法)圖一定したる型(カタ)㊁定りたる、きそく、おきて、

ちやうはん(丁半)圖賽(サイ)の目の一三五と、二四六との事を云ふ㊁賽を用ひて爲す博奕(バクエキ)のコト㊂一つかばつかの危險(キケン)な利を爭ふコトを云ふ、

ちやうふう(長風)圖遠方より靜かに、やわらかく吹き來る風、

ちやうぶつ(長物)圖長すぎて役(ヤク)に立ぬと云ふ意より、轉じてむだものと云

ふコト、

ちやうぶん(長文)図長き文章、

ちやうへん(長篇)図文章や詩の長きものの稱、

ちやうほん(張本)図はじめ、おこり、どだい㊁悪事の發頭(ホツタウ)人、

ちやうまく(腸膜)図腸(チヤウ)の周圍(ウヒ)を被(オホ)ふ薄きかわのコト、

ちやうまへ(錠前)図錠のコト、

ちやうまん(脹満)図腹内に水の溜る病氣醫學上より云へば卵巣(ラウソウ)、水腫(スイシユ)のコトを云ふ、

ちやうみん(町民)図其の町に住んでる人

ちやうめい(町名)図町の名稱、

ちやうめい(長命)図ながぬき、

ちやうめう(定命)図さだまつたる命(チイノ)是れまでの生命(チイノ)、

ちやうめん(帳面)図紙をとぢ合せて作りたる物、金錢の出入其他の物事を記し置くもの、

ちやうめん(定免)図常に一定して、租税「を許されるコト

ちやうもと(帳元)図帳面の元(モト)と云ふ義よりして、興行物(コウギヤウモノ)などの勘定方のコトを云ふ、

ちやうもん(聽聞)図説教(セツケウ)講釋など「を聞くコト

ちやうもん(定紋)図先祖より傳(ツタ)はつて來てる、其家の紋所、

ちやうやう(張揚)図はり揚(ハリ)ると云ふ義よりして、物事(モノゴト)を大きく云ひ觸すコトを云ふ、

ちやうやく(定役)図德川時代に武家方にて、勘定方の役人又は雜役(ザツヤク)に從ふ下役人のコト、

ちやうやく(町役)図其の町の役人(ヤクニン)、

ちやうよう(聽容)図ときき入れる㊁ゆるすコトで承諾するコト、

ちやうらう(長老)図年よりたる德(トク)の高き人㊁禪宗の僧(ソウ)にして、年よりて學識德行(トクカウ)、共に高く厚き人のコトを云ふ、

ちやうらう(長廊)図長きらうか、

ちやうらく(長樂)図心がのびやかにして「るコト

ちやうらん(漲亂)図水のみなぎりみだれたのしきコト、

ちやうりう(漲流)図水が勢(イキホヒ)すさまじく流れ行く狀、

ちやうれい(廳令)図廳と云ふ名の附く役所、假令(ウト)ば警視廳とか北海道廳とかの如き役所より發する、命令(レイ)規則などの稱、「りたるしきたり

ちやうれい(定例)図定りたる例式。きまつ

ちやうれん(定連)図常に家に來る定まつた連中のコト、

ちやうろく(丈六)図其の丈(タケ)が一丈六尺ある佛像の事を云ふ㊁あらなかくと云ふ俗語、「遠方へ行くコト

ちやうきやく(長脚)図足のながきコト㊁

ちやうきより(長距離)図長いへだたり㊁遠(トホ)さかつてるコト、

ちやうぐわい(帳外)図まくの外(ホカ)㊁帳簿に記載せざる物又は事、

ちやうくわう(長廣)図ひろく長きコトを云ふ、「(ハヒ)、卽ち耳(ミミ)のコト

ちやうくわん(聽官)図音をきく官能(クワンノウ)

ちやうくわん(長管)図長きくだ、

ちやうくわん(長官)図其の役所の最上官のコトを云ふ、

ちやうじいろ(丁子色)図丁子の如き黑く赤き色合のコトを云ふ、

ちやうじそめ(丁子染)図丁子の汁(シル)にて染めたる物、

ちやうじひき(丁子引)図丁子の形を色摺(イロヒ)にした紙、襖(フスマ)壁(カベ)などか貼る

ちやうじやう(長上)図目上の人、

ちやうしやう(聽訟)図うつたえを聽くこと。公事(クジ)をさばくコト、

ちやうじやう(長城)図城の長く繼(ツヅ)いてるコト㊁要害(ヤウガイ)堅固(カタヒ)な城のコト

トを云ふ、

ちやうしゆう(聽衆)図ときき、演説や講話又た説教などを聽くべく集まつる人人のコト、

ちやうしゆん(長春)図四季草花(クサバナ)などの咲きてあるコト㊁四季咲きのバラ㊂のどかなる春の日、

ちやうしんき(聽診器)図醫療器具の名にて、肺臟(ハイゾウ)心臟(シンゾウ)等の音を聽くもの、

ちやうちやう(町長)図市(シ)の次に位する町の行政を取締(トリシマ)る人卽ち町制(チヨウセイ)を敷(シ)れてある自治團(ジチダン)の長、

ちやうちやう(打打)図物をはたく音(オト)のコトを云ふ、「引く病氣のコト

ちやうびやう(長病)図ながわづらひ。長

ちやうびやく(丁百)図きつちり百、

ちやうりやう(丈量)図地面の面積を、はかるコトを云ふ、

ちやうけつかく(腸結核)図腸に結核の生ずる病氣、不治の症なり、

ちやうかうゆう(丁香油)図丁子(チヨウジ)より取りて製したる香油(コウユ)、

ちやうとうしゆ(長公主)図帝王の姉君のことを申す、「不足なく五十

ちやうどじゆう(丁五十)図きつちり五十

ちやうじがしら(丁子頭)図燈火(トウクワ)のもえかすが固(カタ)まつて、丁子の頭(アタマ)の如き形を爲せる物、

ちやうしんけい(聽神經)図耳(ミミ)へ通(カヨ)つてる神經のコト、聽く事をつかさどるもの、

ちやうそくりう(長東流)図又たながつかの流と云ふ、馬衛(バヱイ)の一派にして、ホルトガル人の我が國に傳(ツタ)へたものなりと云ふ、

ちやうたんす(帳箪笥)図帳面や金錢などを入れ置く小形のたんす、

ちやうたいそく(長大息)図おほためいき太(フト)きためいき、

ちやうちんもち(提燈持)図提燈を持ちて道を照し行く人㊁人のおさきに使はれる人を、のゝしつて云ふ語、「コト

ちやうはうけい(長方形)図長き四角形の

ちやうほんにん(張本人)図惡事(アクジ)をつくる發頭人(ホツトウニン)、

ちやうやのいん(長夜飲)図夜あかしなして、酒を飲むコト、

ちやうらくもん(長樂門)図京都の御所内に在る門の名、

ちやうしゆうもの(長袖者)図長き袖(ソデ)の衣服を着てる人と云ふ義より、身分ある人㊁僧侶のコト、

ちやうくわんくわんぼう(長官官房)図役所内に設(モウケ)けられてある、長官の事務室(シツム)のコト、

ちやうゑん(茶園)図ちやばたけ、

ちやがひ(茶粥)図茶の煎じ汁(シル)にて、たきたるおかゆのコト、「トを云ふ

ちやかご(茶籠)図茶を入れる籠(カゴ)のコト

ちやかす(茶滓)図茶(チヤ)を煎じ出したるあとのかすのコト、

ちやがま(茶釜)図茶を一度(ヒト)に澤山煎すべく爲めに用ゆる、金物製の釜(カマ)のコト、「味を帶びたる色

ちやかつしよく(茶褐色)図茶色の稍や黑

ちやき(茶器)図茶の湯、又は茶を煎じるに用ゆる總ての器物、

ちやきん(茶巾)図茶の湯に用ゆる布巾(フキン)、茶碗(チヤワン)を拭(フ)く物、

ちやく(着)図つくコト、物の屆くコト、到着のコト、「コトを云ふ

ちやく(搦)図からむ。からめて捕(トラ)ふる

ちやく(摘)図正當の妻、卽ち本妻のコト㊁よつぎの子㊂一族中の總本家のコトを云ふ、「る衣物のコト

ちやくい(着衣)図衣物を着るコト㊁きた

ちやくい(着意)図きをつけるコト㊁見込

(ミヤ)をつけるコト、

ちやくか(嫡家)図本家㊁分家(ケヲ)よりして本家のコトを云ふ語、

ちやくと(着袴)図はかまをつけるコト。はかまをつけしコト、

ちやくざ(着座)図其の處へ座(スワ)るコト。席につくコト、

「男の稱

ちやくし(嫡子)図正妻の腹に生れたる長

ちやくわ(茶菓)図お茶とお菓子、

ちやくかう(着港)図舟の港(ミナ)へ着くコト。船が港へ入るコト、

「コト

ちやくかん(着艦)図軍艦(カン)の港に着く

ちやくがん(着岸)図渡舟(ワタシ)などの岸へ着くコト、

「立てるコト㊁見込

ちやくがん(着眼)図目をつける㊁見込を

ちやくぎよ(着御)図身分貴(タカ)き御方(オカタ)のおつきを云ふ、

ちやくさう(着想)図思ひつき。工夫(クフウ)を立てるコトを云ふ、

ちやくじつ(着實)図親切(シンセツ)なるコト㊁落つきて、まめやかなるコトを云ふ、

ちやくしや(着車)図車が目的(モクテキ)の場處に着いたコト、

「物事に取りかかる

ちやくしゆ(着手)図物事を爲しはじむ、

ちやくしん(着津)図着港(チヤクカウ)に同じ、其の條を見られよ。

ちやくしん(着信)図音信(オトヅレ)の届きしコト。手紙のつくコト、

ちやくす(着)自動到着(トウチヤク)の義其處につく㊁衣物をきる、

ちやくす(着)他動我が身につける。きる㊁我が物となす、

「坐(ヲ)るコト、其の席に

ちやくせき(着席)図席につく、

ちやくせん(着船)図船がつく、

ちやくそう(嫡宗)図一族(ゾク)中の總本家(ソウケホ)のコトを云ふ、

ちやくそん(嫡孫)図嫡男の子、

ちやくたい(着帶)図姙娠五ケ月に及んで腹帶を爲す式を云ふ、

ちやくたう(着到)図いたりつく㊁到着(チヤク)のコト、

ちやくだん(着彈)図大砲や小銃などの丸(ヲ)の届(トヾ)くコト、

「男のコト

ちやくだん(嫡男)図本妻の腹に生れた長

ちやくぢよ(嫡女)図嫡男の對(ヤ)にして、本妻の生みたる長女、

「着するコト

ちやくぢん(着陣)図軍勢(グンセイ)の陣屋へ到

ちやくちやく(着着)副次第次第に。其れから其れへと云ふ意を表はすに用ゆる

「コト

語、

ちやくてい(着艇)図小舟の港に着きたる

ちやくでん(着電)図電信の届(トヾ)きしコトを云ふ、

ちやくひつ(着筆)図筆の下し方、卽ち書畫の書きつ振(フリ)のコト、

ちやくふく(着服)図衣物(ハモノ)を着るコト㊁我が物にする、取り込む、れこばばのコトを云ふ、

ちやくべん(着鞭)図鞭(ムチ)をつけると云ふ義よりして、人に先(サキ)だつて物事に取りかかるコト、

ちやくぼ(嫡母)図妾(メカケ)腹の子より、本妻(サイ)を呼ぶことは、

ちやくもく(着目)図着眼に同じ、

ちやくよう(着用)図衣物を着るコトを云ふ、

「のコト、例ば源氏の嫡流、

ちやくりう(嫡流)図嫡宗(ハツソウ)の家分れ

ちやくれん(着輦)図天子の御車がお着きになるコト、

ちやくわい(茶會)図茶の湯の會、

ちやくしゆつ(嫡出)図正妻の腹に生れたる子女のコトを云ふ、

ちやくしよく(着色)図色ざり㊁色をつけるコト。さいしきするコト、

ちやくがんてん(着眼點)図眼をつける個所㊁氣をつける個所、

ちやくはつだん(着發彈)図射(ウ)ちたる彈丸が其の目的の處に達して發烈(ハツレ)

する彈(タマ)を云ふ、

ちやくだんきより(着彈距離)図彈丸を放つた處より、其の届く所までの間を云ふ、

「㊁茶の湯に堪能せる人

ちやけ(茶家)図茶の湯の事を好(ス)く人

ちやとし(茶漉)図竹製の柄(エ)のある、小さきざる、其の中へ粉茶(ヤコチ)を入れ、其上より湯を注(カケ)て、汁を出すに用ゆる具、

「道具、竹の小さきさじ

ちやさぢ(茶匙)図抹茶をすくふに用ゆる

ちやざしき(茶座敷)図抹茶をたてる座敷二疊三疊四疊半八疊の間(マ)を用ゆ、

ちやし(茶肆)図葉茶を賣る家、

ちやし(茶師)図茶の葉を茶に製する人㊁葉茶を賣る人、

「がらを云ふ

ちやじ(茶事)図茶の湯の作法に關する事

ちやしつ(茶室)図抹茶(マツチヤ)をたてるざしき(座敷)のコト、

ちやしぶ(茶渋)図茶碗に茶の煮汁の垢(カス)のつきたるものを云ふ、

ちやじん(茶人)図茶の湯に用ゆるこつた道具(ダウグ)を好む人㊁風變(ハリウガ)なことを好む人。ものずきなコトを爲す人、

ちやしやく(茶杓)図茶を汲む用を爲す、竹の小びしやく、

ちやせき(茶席)図茶室(シツ)、

ちやせん(茶筅)図抹茶(マツチヤ)を湯にたてる時に用ゆる、長さ三寸ほどある、ササラの如きもの。

ちやせいらう(茶蒸籠)図茶の葉を蒸(ム)して、製茶とする時に用ゆる、大なる平(ヒラ)つたき蒸籠(ウロウ)のコトを云ふ、

ちやそば(茶蕎麥)図蕎麥(ソバ)の粉に挽茶(ヒキチヤ)を混(マ)て、打ちたる蕎麥切(キリ)の稱、

「又は染むるコト

ちやそめ(茶染)図茶色に染(ソ)たるもの。

ちやたい(茶臺)図客に茶を出す時に、其の茶碗を載せて出す臺、

ちやたい(茶代)図茶店(チヤミセ)に休み茶を飲みたる禮に、與ふる金錢㊁轉じて宿屋(ヤド)に泊りし時に、特別に與(ア)ふる心づけ、

ちやだう(茶道)図茶の湯の作法、

ちやたく(茶托)図茶臺に同じ、

ちやだし(茶出)図きびしよの稱、

ちやだち(茶斷)図茶を止(ヤメ)て飲(ノ)ぬコトを云ふ、

「(ヤタ)のコト

ちやだな(茶棚)図茶道具を載せておく棚

ちやだうぐ(茶道具)図茶の湯又は煎茶などに用ゆる凡ての道具、

ちやだんす(茶簞笥)図茶用の道具(ダウグ)を入れて置く、棚のある又た戸のある、小さき簞笥形のもの、

「食らふコト

ちやづけ(茶漬)図飯に煎茶(センチヤ)をかけて

ちやづつ(茶筒)図筒形をなせる茶入(チヤイレ)の稱、

「つぼ。大小種々あり

ちやつぼ(茶壺)図茶を貯ふべく入れおく

ちやつみ(茶摘)図茶の芽(メ)及び茶の葉をつみ取るコト、

ちやづけや(茶漬屋)図午飯(ヒルメシ)などを爲すべく休む、田舍(イナカ)の飲食店のコト

「のコト

ちやつみと(茶摘子)図茶の葉を摘む子供

ちやづけめし(茶漬飯)図煎茶(センチヤ)を飯へかけて食するコト、

ちやつみうた(茶摘歌)図茶の葉を摘みながら唄ふ野卑なる歌、

ちやづけちやわん(茶漬茶碗)図茶漬飯用の茶碗にて、深き形(カタ)を爲せる大きな茶碗のコト、

「稱

ちやてい(茶亭)図茶店㊁葉茶を賣る家

ちやてい(茶庭)図數寄(スキ)を極めた茶室の庭園のコトを云ふ、

ちやてん(茶店)図茶みせ、

ちやとう(茶湯)図佛(ホトケ)に番茶を煎(セン)じて供へるコト、

ちやとうび(茶湯日)図寺にて定めたる、佛に茶を供(ソナ)へる日、

ちやのと（茶子）図茶菓子のコト㊁家の佛（ホトケ）の年回に知己（シリ）の許（モト）へ贈（ヤル）る物を云ふ㊂芝居（イヘイ）などにて、客に茶や菓子を賣る女中㊃平易（スラスラ）物事を爲し得るコトを云ふ俗語、

ちやのま（茶間）図普通の家にて家族が食事をする居間（マ）のコト、

ちやのみ（茶飲）図茶を好んで多く飲む人又た飲むコト㊁老人（ヨトヒト）のコトを云ふ

ちやのゆ（茶湯）図抹碗の會を催（モヨ）すコトを云ふ、

ちやのみはなし（茶飲話）図茶話に同じ、

ちやのみともだち（茶飲友達）図老人（ヨトヒト）同士の茶を飲みながら遊ぶ仲間のコト

ちやはく（茶伯）図茶道の宗匠、

ちやばこ（茶箱）図製茶を入れて取引先（トリヒキサキ）へ送る箱、

ちやばら（茶腹）図茶を多く飲みて、腹（ハラ）の張つた時の心持、「番狂言の略

ちやばん（茶番）図茶を煮（ニ）じる役㊁茶

ちやばうき（茶箒）図鳥の羽（ハ）にて製したる小さき箒、茶の湯に用ゆ、

ちやばうず（茶坊主）図昔時武家にて、茶の湯の事を掌（ツカサドル）りたる坊主のコトを云ふ、

ちやばしら（茶柱）図番茶を煎じて茶碗へ移したる時に、其の竪（タテ）の立つて浮きたる物を云ふ、色町などにて之を吉兆として喜ぶ、

ちやばたけ（茶畑）図茶の樹のみ植（ウ）えられてある、はたけ、

ちやばなし（茶話）図茶を飲みながら浮世（ウキヨ）話をして遊ぶコト、

ちやびん（茶瓶）茶器を煎じる釜（カマ）、即ち土瓶（ドビン）茶鑵（ヤカン）の稱、

ちやびんしき（茶瓶敷）図土瓶（ドビン）や急須（クスウ）を載せて置く臺、

ちやふね（茶船）図物を運（ハコ）ぶに用ゆる小形（コガタ）の細長き舟、

ちやぶろ（茶風呂）図茶の湯の器具にて、抹茶（マツチヤ）をたつる湯を沸（ワカ）す風呂、即ち火鉢（ヒバチ）の如き物、

ちやぶくろ（茶袋）図茶を一度に多く煎じる時に、茶を入れて湯に浸（ヒタ）す袋のコト㊁製茶を入れて置く紙の袋のコト、

ちやふるる（茶篩）図挽茶をふるふ、すゐのうのコト、

ちやべんとう（茶辨當）図茶道具と辨當とを入れて持ち行く道具、

ちやぼ（矮鶏）図小さくして殊に脛（スネ）の短かき鶏の稱、

ちやぼん（茶盆）図茶碗茶瓶（ヂヤビン）及び湯さましの類を載せおく臺のコト、其形一様ならず、

ちやほうじ（茶焙）図製茶の湯（ユ）りたるを焙（ホウ）じる具にて、曲物（マゲモノ）に紙を底に貼り、柄（エ）をつけし物、

ちやほたい（食卓）図しつぽく臺、

ちやま（地山）図海より陸地の方を呼ぶ語

船頭水夫の用ゆる言葉、

ちやみせ（茶店）図路傍（ロボウ）に小屋を掛（カケ）、人を休ませて茶を出す店、

ちやめし（茶飯）図飯（メシ）のたき方の一種にて、川柳（カハヤナギ）の煎（セン）じ汁（シル）にてたきたる飯㊁酒三分と醤油一分の割合（ワリアヒ）の物を入れてたきたる飯の稱、

ちやや（茶屋）図葉茶を賣る家㊁酒を飲み遊女を呼んで遊ぶ家、

ちややあそび（茶屋遊）図貸座敷などにて酒色を爲すコト、

ちややがよひ（茶屋通）図茶屋遊にふけるコト、「コト

ちややとやもの（茶屋小屋者）図酒色を客に勸むるを業とせる家に奉公してる者のコト、

ちやり（血槍）図血のついてる槍、

ちやり（滑稽）（俗語）おどけた事を云ひ、又はおどけたるまねをするコトを云ふ

ちやるめら（喧嘩）図支那の樂器の名、吹

きて鳴（ナラ）すもの、形ラッパに似たるもの、

ちやれい（茶禮）図茶の湯の作法、

ちやれう（茶寮）図茶室茶座敷、

ちやろ（茶爐）図茶の湯に用ゆる釜をかける圍爐裏（ヰロリ）のコト、

ちやわ（茶話）図茶ばなし、即ち茶を飲みつゝなす種種の物語、

ちやわん（茶碗）図陶器製（トウキセイ）磁器製（ジキセイ）の二種あり、飯を盛（モ）り茶を盛るに用ゆる具、

ちやわくわい（茶話會）図志を同ふせる同主義の人人が集りて、茶を飲みながら相談を爲す會、

ちやわんざけ（茶碗酒）図茶飲碗に酒をつきて飲むコトを云ふ、

ちやわんむし（茶碗蒸）図料理の名、魚肉鳥肉野菜などを小さく切り、茶碗に入れ、清汁（シルスヰモノ）に卵（タマゴ）を溶き加へ、蒸籠（セイロウ）にて蒸（ム）した物、

ちやわんもり（茶碗盛）図料理の名、魚肉又は鳥肉に野菜（ヤサイ）を加へた清汁（シルスヰモノ）の稱、

ちやん（瀝青）図物の腐（クサ）れ又は漏（モレ）等を防ぐに用ゆる物にて、松脂（マツヤニ）に油を加えて練（ネ）りし物、

ちやん図子供が父を呼ぶに用ゆる俗語㊁支那人を嘲（アザケ）りて云ふ、

ちやんぽん（混同）図異（ヒト）なりたる物が一所になる㊁入り亂（ミダ）れるコトを云ふ、

（ちぢゆ）

ちゆ（蛛）図虫の名、くものコト、

ちゆ（治癒）図病氣のなほるコト、

ちゆう（株）図丈たしゆさも讀む、木のかぶ。木の根（ネ）㊁みき㊂木の根の伐りたる物、かぶた、くひせ

ちゆう（誅）図殺（コロ）す㊁きづをつけるもいたむ。やぶる㊂罪ある惡人を殺すコトを云ふ㊃責（セメ）る。打（ウチ）く。なぐるコト

ちゆう（柱）図總て物を支（ササ）え保つ木のコトを云ふ、即ちはしら㊁琴の駒、即ちことぢのコトを云ふ、

ちゆう（駐）図車馬の其の處にとゞまるコト㊁物事のとゞまりて、進行せぬコトを云ふ、

ちゆう（註）図文句と文句の間につけるしるし、即ち句點のコト、

ちゆう（蹤）図歩み行く足並（アナミ）の狀のコトを云ふ、

ちゆう（厨）図吊（ツ）り下げて置く幕（マク）、即ちとばりのコト、

ちゆう（躕）図ためらうコト。ぐづ〳〵して決定せぬコトを云ふ、

ちゆう（廚）図臺所（コロヒバ）即ちくりや㊁あるじ㊂米などを入れて置く箱（ハコ）、即ちひつの類を云ふ、

ちゆう（住）図すまひ居るコト㊁住居（スマヒ）のコト㊂とゞまつて其の處に居るコトを云ふ、

ちゆう（忡）図うれふるコト。案じるコト

ちゆう（沖）図總て飛び上りて高き處に達するコトを云ふ、例ば天に沖するなど㊁海などの陸より遠く離れてある部の稱即ちおきのコト㊂ふかきコト㊃和（ヤハラ）らぐコト㊄内部のからなるコト即ちむなしきコト㊅いとけなし。おさなくあるなり、「つきコトを云ふ

ちゆう（蟲）図むしのコト㊁熱（ネツ）即ちあ

ちゆう（忠）図正直（シヤウジキ）にして赤心（セキシン）を盡すコト㊂篤（アツ）なき、まめやかなるコト㊃心にかざり氣なく、すなほにして親切なる㊄主君（シユクン）國家（クニイヘ）及び主人（シユジン）に對して奉公の道を滿足に盡すコト、

ちゆう（中）図なか、ほど、まんなか、うち

ら(内方)㊁何(ナニ)れにもかたよらぬ㊂可(カ)もなく不可(カ)もなきコト㊃正(ダシ)し。平らかなるコト、

ちゆう(仲)図なかほど㊁一部分(ブブン)の中㊂次(ツギ)。二番目のコト、

ちゆう(註)図ときあかしと云ふコトにて文章中の解りにくき所を、解りやすく説明(ケイ)する、

ちゆう(裏)図心の中。まごころ㊁正(ダシ)しきコト。ほどよきコト㊂衣物などの内方の部の稱、即ちうら㊃善良(ヨシ)㊄相當(ヤウ)せるコト、即ちかなふ。あたる、

ぢゆう(重)図おもきコト㊁重箱(ハコ)の略語、例ば重の物など、

ぢゆう(注)図そゝぐ。つぐコト㊁總て心を一つにかたむけるコト、

ちゆうい(注意)図氣をつける㊁油斷(ユダン)せぬ㊂他人を戒(イマシ)める、他人の爲めになるコトを云ひきかすコトを云ふ、

ちゆうゐ(中尉)図軍人の官名、尉官の第二位、少尉の上の官、

ちゆうゐ(誅夷)図うちたひらぐ、うちほろぼすコトを云ふ、

ぢゆうゐ(重位)図位のたかき、位のおもきコト。たかき位、

ちゆうう(中有)図ちゆういうに同じ、その條を見られよ、

ちゆうか(中夏)図支那人が我が國を稱ふる時に用ゆる語、

「月の稱

ちゆうか(仲夏)図夏の中ごろ㊁陰曆の五

ちゆうが(駐駕)図身分高き方の車を止(トヽ)めさせらるコト㊁身分たかき方の其地に逗留(トウリウ)し居らるゝコトを云ふ

ぢゆうか(住家)図人の住でる家、人の住む家のコトを云ふ、

ぢゆうか(重科)図おもきとが、

ちゆうき(中氣)図病名、中風に同じ、ちゆうぶの條を見よ、

ちゆうき(注記)図寺にて相談のある時に其細條を讀み上る僧(ソウ)のコトを云ふ

「君につかへまつるコト

ちゆうき(忠義)図まごゝろをつくして、

ぢゆうき(重器)図大切なる器具(ウツワ)のコトを云ふ、

「に對しての稱

ちゆうと(中古)図中ごろの昔(ムカシ)、太古

ちゆうご(中午)図正午、まつびる、

ちゆうさ(中佐)図軍人の官名、佐官の第三位、少佐の上の官、

ちゆうざ(中座)図中途にて其の席を立ち去るコトを云ふ、

「トを云ふ

ちゆうし(中試)図試驗に及第(ダイ)するコト

ちゆうし(中止)図物事を中(ナカ)にて止めてしまふコト、

ちゆうし(中使)図こつそりと差し遣(ツカ)はさるる、天子のお使者(ツカヒ)のコトを云ふ語、

ちゆうし(中指)図なか指、五本の中央(ハヾ)の爲め國の爲めに働らきて死するコトを云ふ、

「を云ふ

ちゆうし(忠士)図忠義なさむらひのコト

ちゆうし(注視)図物を見つめる㊁氣をつけて見るコト、

「明す

ちゆうす(註)他動しるす㊁くわしく說き

ちゆうす(沖)自動高くへ上り達する、高くへとゞく、

ちゆうす(中)自動まんなかに至る㊁あたる例ば毒に中るなど、

ぢゆうす(住)自動すむ。すまふ、

ちゆうそ(註疏)図解(カイ)り難(ガタ)き文書、文字を委(クワシ)しく說きあかすコト、又は說きしもの、

「いしづえのコト

ちゆうそ(柱礎)図柱の下に置く石、家の

ちゆうち(中池)図心と云ふコト、

ちゆうち(蟲豸)図むしのコト、

ぢゆうぢ(住持)図一ケ寺の主人坊主、即ち住職のコト、

ちゆうと(中途)図行くべき路の里の半

(ハヾ)㊁爲しつゝある事の半、

ちゆうひ(忠婢)図まごころを盡して仕ふ女中のコト、

ちゆうぶ(中風)図病氣の名半身不隨(ハンシン)

ちゆうぶ(中部)図物のまんなか、

ぢゆうゆ(重油)図石油の未だ精製せざる粘(ネバ)り氣ある石油のコトにて、普通の石油より重し、

ちゆうろ(中呂)図陰曆の四月の稱、(月中呂に當る)など、

ちゆうわ(中和)図陰陽(オンヤウジ)なく一方(ヒトカタ)へかたよらぬ、おとなしき心を云ふ

ちゆうあう(中央)図まんなか㊁甲と乙との中ほど㊂國の首都㊃肝要なるコト、

「心に富んでゐる友だちどだい、

ちゆういう(忠友)図正しき友だち㊁親切

ちゆういう(中有)図死者の魂魄(コンパク)の中に浮かんでゐるといふ意より轉じて、中ぶらりんのコト、㊁中陰(チユウイン)のコトを云ふ、

ちゆうゐん(中陰)図佛語にて死後其の魂(コンパク)が、中に浮(カヨ)んでゐると云ふコトにて、即ち死後四十九日間のコトを云ふ

ちゆうえい(柱礎)図柱(ハシラ)、

ちゆうえう(沖幼)図おさなきコト。いとけなくあるコト、

「トを云ふ

ぢゆうえう(重要)図取り分け大切なるコト

ちゆうえふ(中葉)図なかごろの世(ヨ)。中世のコト、

ぢゆうえん(重緣)図已に婚姻せる者が重れて婚姻するコト、即ち重婚のコトを云ふ、

「家。住宅のコト

ちゆうおく(住屋)図住(スマ)ってる家。すみ

ぢゆうおん(重恩)図おもきおんぎ。あつきなさけのコト、

ちゆうかい(中海)図陸地に取り圍(コヲ)まれてる海のコト、

ちゆうかい(仲介)図甲乙双方(ソウハウ)の間に立つて、物事をまとめ、又た取扱ふコトを云ふ、

ちゆうかい(註解)図解(カイ)り難(ガタ)き文章及び意義を明り易く說くコト、又は說きたるもの、

「害のコトを云ふ

ちゆうがい(蟲害)図虫の爲めに受ける損

ちゆうかう(忠孝)図まごころをこめて君に仕(ツカ)ふること、まごころをこめて親(オヤ)に事(ツカ)ふること、

「ふるコトを云ふ、即ち忠義と孝行、

ちゆうかく(忠愨)図まめやかにして、正しくおとなしきコト、

ちゆうがく(中學)図中學の學問㊁中學校の略語なり、

ちゆうがた(中形)図浴衣(ユカタ)の染模樣のコトを云ふ、中位の大きさに種々の形を染めたるもの、

ちゆうかん(中間)図甲の物と乙の物との間、即ちすきま㊁なかほど㊂甲の地と乙の地との中途(ハヾ)の土地のコトなどを云ふ、

ちゆうかん(中幹)図月の十一日より二十日までの間を云ふ、即ち中旬(ジユン)のコト、

ちゆうかん(忠肝)図忠義な心、

ちゆうかん(忠敢)図忠義厚く武力あるコトを云ふ、

「見するコト

ちゆうかん(忠諫)図まごころをこめて意

ちゆうかん(忠姦)図忠義な者と、惡者と云ふコト、

「とめるコトを云ふ

ちゆうきう(誅求)図せめるコト、せめも

ちゆうきよ(沖虛)図精神に、わだかまりのなきコトを云ふ、

ちゆうぎよ(蟲魚)図虫と魚と、

ぢゆうきよ(住居)図住んでゐる家、すみか、住宅(ジユウタク)、

「とめるコト

ちゆうきん(忠勤)図まごころを盡してつしくくろう(中空)図大そら、

ちゆうぐう(中宮)圖皇后陛下の御座所を申す㊁轉じて皇后の御事を申し奉るコト㊂皇后の外に設られたる、妃(キサキ)の御位のコトを云ふ、　「呼ぶ語」

ちゆうくわ(中華)圖支那人が自國の事をいふ語、

ちゆうくわ(中和)圖程よくおりあふ、程よくまぢる、

ちゆうぐん(中軍)圖前後又は左右の間(アヒダ)にはさまつてゐる軍隊のコト㊁轉じて本軍又は本隊と云ふ意義、

ちゆうくん(忠勳)圖忠義を盡して立てたる功(ヒヂ)、

ちゆうくん(忠君)圖君に忠義を盡す㊁まごころを以て君に仕ふるコトを云ふ、

ちゆうけい(仲兄)圖二番目の兄、

ちゆうけい(中啓)圖扇子(オウギ)の親骨(オヤボネ)を左右共に外の方へそらして製したる扇子のコト、高位の人の用ゆるもの、

ちゆうけい(重刑)圖重罪に因り、科せられたる重きさが、

ちゆうけん(中堅)圖本軍のコト㊁轉じて咽喉首(ノンビ)、大切なる所と云ふ義に用ゆる語、　「トを云ふ

ちゆうげん(中元)圖陰曆七月十五日のコト。

ちゆうげん(中原)圖中國のコト。國の中ほどのコトを云ふ、

ちゆうげん(忠言)圖いさめる言葉(コトバ)㊁意見のことば、

ちゆうけん(忠犬)圖まめやかにつかふるいぬのコトを云ふ、

ちゆうとう(中藩)圖邸宅の奥と云ふ意にて、おくむきのコト、

ちゆうとう(中興)圖一旦(タン)は衰(オトロ)へたるも、中頃に至つて再び盛んになつたコトを云ふ、

ちゆうごく(中國)圖國全體の面積(メンセキ)の中ほどの處に位(イタ)する國と云ふ義にて、即ち我國にては山陽道(サンヨウドウ)地方のコトを云ふ、

ちゆうこく(忠告)圖まごころをこめて、人の過失(アヤマチ)をいましめるコト、又は其のことば、

ちゆうし(中腰)圖腰を半ば上げて立ち上らんとせし時の狀(サマ)、

ちゆうとん(忠魂)圖忠義なるたましゐのコトを云ふ、　一ぬ心のコトを云ふ

ちゆうとん(忠悃)圖正直にして、だまさ

ちゆうとん(重婚)圖妻(ツマ)ある夫夫(フフ)、ある妻が、更に正式をふみて夫を持ち又た妻を持つコト、

ちゆうどん(重言)圖同じ言葉(コトバ)を、かさねて云ふコト、

ちゆうさい(仲裁)圖双方(ソウハウ)の爭(アラソヒ)を聞き、双方の得心(トクシン)のゆくやうに、なかなほりするコト、

ちゆうざい(中材)圖中等の智惠のあるコト、中位(チウクラヰ)の人物のコトを云ふ語、

ちゆうざい(駐在)圖或る土地にとゞまりすまふコト、

ちゆうざい(重罪)圖おもきつみ、

ちゆうさく(重創)圖手おもききづ。ふかてのコトを云ふ、

ちゆうさつ(誅殺)圖惡者を殺す、

ちゆうさつ(駐劄)圖其の國の使臣が外國にとゞまりゐるコト、

ちゆうざら(中皿)圖中位(チウクラヰ)の大さの皿、大皿と小皿の間の皿、

ちゆうしう(中州)圖中國に同じ㊁川の中の淺き處、　「ち十五夜のコト

ちゆうしう(中秋)圖陰曆八月十五日、即

ちゆうじき(中食)圖ひるのめし、

ちゆうしと(中鉋)圖大工用の鉋の一種にて、あらけずりの次に用ゆるものゝ稱

ちゆうじつ(忠實)圖正直(シヤウヂキ)にしてまめやかなるコト、

ちゆうじつ(中日)圖春及び秋の彼岸(ヒガン)の正中(マナカ)の日、即ち曆で云ふ春分(シユンブン)、秋分(シウブン)、

ちゆうしや(中車)圖汽車電車などに云ふコトを云ふ、

ちゆうしや(注射)圖射してそゝぐコト㊁そゝぎ入れる㊂藥を身躰へさし込むコトを云ふ、　「コトを云ふ

ちゆうじや(忠邪)圖忠義さまこしまなる

ちゆうしゆ(中酒)圖飯を食べる半(ナカバ)に飲む酒のコトを云ふ、

ちゆうしよ(中暑)圖あつさにあたるコトあつけの入るコト、

ちゆうしよ(住所)圖住んでゐる所、又は其の土地のコト、

ちゆうじよ(忠恕)圖まごころを盡す、おもひやりあつきコト、

ちゆうじよ(誅鋤)圖ねだやしにする。殺しのぞくコトを云ふ、

ちゆうしん(忠信)圖まごころ厚くしてあざむかぬコト、

ちゆうしん(忠心)圖忠義なる心。まごころのコトを云ふ、　「コトを云ふ

ちゆうしん(忠臣)圖忠義なる家來(イヘラヒ)の

ちゆうじん(沖人)圖おさなき人、即ち子供のコトを云ふ、

ちゆうしん(中心)圖まんなか㊁凹き物のまんなかのコト、　「ある人のコト

ちゆうじん(中人)圖中等の身分又は財產

ちゆうしん(注進)圖變つた事を申上げる出來事を知らせる、

ちゆうしん(注心)圖氣をつけるコト、心をそゝぐコト、注意(チウイ)、

ちゆうしん(重臣)圖大切なる家來㊁位の高き家來のコト、

ちゆうしん(喪心)圖まごころのコト、

ちゆうじん(廚人)圖臺所にて働く人㊁料理人のコトを云ふ、

ちゆうしん(重心)圖重點(ヂウテン)のコトにて、物その物の重(オモ)の集まつてる處、即ち物體の中心、

ちゆうすう(注水)圖水をまく、

ちゆうすう(中樞)圖まんなか㊁大切、かんじんのコト、　「まことの心

ちゆうせい(忠誠)圖此上もなき正しき心

ちゆうせい(中性)圖何(ナニ)れにもかたよらざる性質(セイシツ)のコト㊂化學名にて、酸性(サンセイ)とアルカリ性との間の性のコトを云ふ、

ちゆうせい(中背)圖高からず低からざる身丈(ミタケ)のコトを云ふ、

ちゆうせい(中正)圖何(ナニ)れへ偏(カタヨ)らぬコト㊁中道(チウダウ)を守つて行く正しき人のコトを云ふ、

ちゆうせい(中世)圖なかごろの世㊁其の家祖先より現代に在る中ごろの代(ヨ)のコトを云ふ、　「なか

ちゆうせう(中宵)圖まよなか、しんのよ

ちゆうせき(誅責)圖せめたゝす、

ちゆうせき(柱石)圖柱の基礎(イシズエ)となるべき石㊁轉じて此の上もなき大切なる臣下、又は人のコトを云ふ語、

ちゆうせつ(忠節)圖忠義のかたまりたる正しきみさほのコト、

ちゆうせつ(註說)圖委しく解(カイ)り易く說き明したるコトを云ふ、

ちゆうせつ(中絕)圖途中にてきれる、中頃(ナカゴロ)にてたゆるコト、

ちゆうせん(忠戰)圖君の爲(ため)に生命を棄(ステ)てたゝかふ、

ちゆうせん(中船)圖舟にえふ、

ちゆうそう(重曹)圖重炭酸曹達と云ふ藥の略語、　「倡のコト

ちゆうそう(住僧)圖其の寺に住ゐする僧

ちゆうそん(中尊)圖三體の佛像(ホトケ)の並びたる中の阿彌陀如來(アミダニヨライ)のコト㊁轉じて三幅對(ツイ)の掛物(カケモノ)の中央になる、掛物のコトを云ふ、

ちゆうたい(中隊)圖軍隊の編制の稱にして、大隊の三分の一の兵員の數より成れる一隊の稱、普通は三百から四百人

迄、

ちゆうだい(重奎)図足のある奎にて、重きコト、

ちゆうたい(重體)図病人の容體(ようたい)の重きコト、

ちゆうだい(重大)図重くて大なるコト。容易(ようい)ならぬコト、

ちゆうだい(重代)図先祖代々より傳はれると云ふコト、

ちゆうだう(中道)図道のなかほど㊁何(なに)れへもよらぬ正しき道㊂人の行ふべき誠(まこと)の道、

「すみのコト

ちゆうたう(偷盗)図物をぬすむコト、ぬ

ちゆうたく(住宅)図すみ家(か)、

ちゆうたち(中達)図裁縫の用語にして、四つ身の衣物を裁(た)つコトを云ふ、

ちゆうたん(忠膽)図忠義のきもだましゐ、まごころ、

ちゆうだん(中段)図梯子(はしご)などの中ほどの段(だん)㊁中のくだりと云ふ義にも用ゆ、

「で斷(ち)ち切るコト

ちゆうだん(中段)図中途できれる、中途

ちゆうたん(重擔)図重き荷物のコト㊁おもに㊂義務(ぎむ)の重きコト㊃責任の重きコトを云ふ、

ちゆうちん(重鎭)図一方の大將㊁其土地の平和を保ち行く重(おも)なるおさへ、

ちゆうづめ(重詰)図食物を重箱へつめるコト、又は詰めたるもの、

ちゆうてい(忠貞)図忠儀を、正しき操(みさを)とのコト、

ちゆうてい(中庭)図なかには、

ちゆうてい(住第)図住ゐるやしき。住宅のコト、

「ち大そら。天

ちゆうてん(中天)図中空(なかぞら)に同じ、即ち大そら。天

ちゆうてん(沖天)図天にまで達すると云ふ意にて、勢(いきほひ)の甚だ盛んなるコトを云ふ、

「儀式(ぎしき)のコト

ちゆうてん(重典)図重きおきて、大切なコト

ちゆうとう(柱棟)図柱と、むなぎ㊁轉じて殊に大切にして頼となるべき人のコトを云ふ、

「(かつら)の部を云ふ

ちゆうとう(柱頭)図花の蘂(しべ)薬(やく)の頭

ちゆうとう(中等)図中くらゐ㊁ほどよき

「一月の別名

ちゆうとう(仲冬)図冬の中ごろ㊁陰暦十

ちゆうどう(沖童)図沖人(おきんど)に同じ、即ち子供のコト、

ちゆうどく(中毒)図毒のあたり、

ちゆうとん(駐屯)図軍隊のとまり居るコトを云ふ、

ちゆうにく(中肉)図瘠(やせ)もせず肥(こえ)りもせず、中位の肉づきの人のコトを云ふ、

ちゆうにち(中日)図七日間の其の中央(なかば)に當る日㊁春秋の彼岸(ひがん)の中央の日の稱、

「己亥の日のコト

ちゆうにち(重日)図暦の語にして陰暦の

ちゆうにち(注入)図そゝぎ入れるコト㊁學問藝術等を人に委しく教えるコトを云ふ、

ちゆうにん(仲人)図爭の仲裁をする㊁双方(そうほう)の中へ入つて、物事を取扱(とりあつか)かふ人、

ちゆうにん(重任)図重き役目、

ちゆうねん(中年)図人の最も元氣よき年頃、即ち二十前後のコトを云ふ㊁年季奉公(ねんきぼうこう)をして其年季を勤(つとめ)ずに暇(いとま)を取るコトを云ふ、

ちゆうのう(中農)図幾分か田地(でんち)を有(も)ち、自分も作り人にも作らしてゐる農夫の稱、

ちゆうばい(仲媒)図なかうど、

ちゆうはう(重砲)図大砲の大なるもの、即ち其口の直徑(ちけい)が九サンチ以上あるものゝ稱、

ちゆうはう(重寶)図大切なるたから。大事なるしなもの、

ちゆうはく(中白)図中等白米と云ふ略語

ちゆうばと(重箱)図四角なる漆(うるし)塗の重(おも)れ箱(ばこ)にて、食物を入れるに用ゆる具、

「て其の刑に處す

ちゆうばつ(誅罪)図惡人の罪を糺(ただ)し

ちゆうばつ(誅伐)図うち殺す。うち亡(ほろ)ぼすコト、

ちゆうばつ(重罰)図重き罰則、

ちゆうはば(中幅)図中位のはば、重(おも)に織物の事に用ゆ、大幅と小幅物の間の物にて、通例一尺二三寸ある物のコトを云ふ、

「たゐと云ふ意義

ちゆうはん(中半)図はんば㊁役(やく)に立

ちゆうはん(重犯)図重き罪をおかすコト重き犯罪、

ちゆうはん(重版)図他人の著作權を有(も)てる出版物を、ひそかに飜刻(ほんこく)するコト、

「れんの條を見よ

ちゆうひつ(駐蹕)図駐蹕に同じ、ちゆう

ちゆうひん(中品)図中等の品物、

ちゆうふう(中風)図中氣に同じ、

ちゆうふく(中腹)図山の中ほどのところを云ふ語、

ちゆうぶつ(重物)図大切なる品物、

ちゆうぶる(中古)図中ぐらゐの古(ふる)さ㊁餘り損(そこな)はずしてゐるもの、

ちゆうふん(忠奮)図忠義の爲めにふるひたつコト、

ちゆうふん(忠憤)図君を思ひ主人を思ふ忠義よりしていきどうるコトを云ふ、

ちゆうふん(蟲糞)図虫のくそ、

ちゆうへい(駐兵)図兵士を或る土地に置く㊁置れてある兵、

ちゆうぼく(忠僕)図主人に忠義を盡す下男㊁まめやかに立ち働く下男のコトを云ふ、

ちゆうほん(中本)図四六版に仕立(したて)たる書物のコト、即ち美濃紙を二つ折(おり)にし其を更に二つ折にした大きさの物㊁人情本のコト、

「人々(ひとびと)

ちゆうみん(住民)図其の土地に住んでる

ちゆうめつ(誅滅)図こらしたやす、うちころすコト、

「をつけるコト

ちゆうもく(注目)図目をつけるコト、氣

ちゆうもつ(重物)図大切(たいせつ)なる品物のコト、

ちゆうもん(注文)図物をあつらへるコト

ちゆうやう(仲陽)図春の中ごろ㊁陰暦二月の稱、

「役を勤めてる人

ちゆうやく(重役)図大切なる役向㊁重き

ちゆうゆう(忠勇)図忠義と勇氣、

ちゆうよう(重用)図重(おも)き位置(くらい)に用ゆ㊁重く用ひられる、

ちゆうよう(中庸)図何(なに)れへも片寄(かたよ)ぬコト㊁中道を守つてるコト、

ちゆうらう(中老)図中老人(ちうらうじん)四十五六より六十位までの人㊂德川幕府の重役の職名㊃德川時代の奥向の女中の等級にて、第二位の女中の稱、

ちゆうらふ(中臈)図宮中に仕ふる女官の第二位、即ち掌侍(しやうじ)、

ちゆうりう(中流)図川の中ほど㊁中等の身分、又は財産ある人、

ちゆうりく(誅戮)図惡者(わるもの)を殺すコト惡人をほろぼす、

ちゆうりつ(中立)図甲と乙と敵對(たいたい)してゐる時に、甲にも乙にも味方(みかた)せぬと云ふ意味(いみ)、

ちゆうりよ(中呂)図陰暦四月の異名、

ちゆうろく(重祿)図おもきふち㊁知行(ちぎやう)の多きコトを云ふ、

ちゆうれん(注連)図しめのコト、即ちしめかざり、

「きコトを云ふ

ちゆうれつ(忠烈)図取分け忠義の心あつ

ちゆうれん(柱簾)図柱にかける小さき飾(かざり)のすだれ、

ちゆうれん(柱聯)図はしら掛(がけ)、

ちゆうれん(駐輦)図天子の御車を止めらるるコト㊁轉じて天子の其の處に、止

まりゐますコトを云ふ。

ちゆうさがほ(忠義顔)図忠義らしくみせかけてゐるコト。

ちゆうさだて(忠義立)図まごころよりではなく、獻心をかはんために頼(タノ)まれもせぬ事をする。

ちゆうくらゐ(中位)図なかほど、よきほど と云ふコト。

ちゆうぐわい(中外)図「と外國との事

ちゆうくわん(重患)図大病のコト、㊁おもきうれひ。

ぢゆうさかな(重肴)図重づめにする肴。重づめにしたさかな、「を云ふ語

ちゆうしやう(中商)図陰暦の八月のコト

ぢゆうしやう(重症)図大病、

ぢゆうしやう(重傷)図重きてきず。おもききづ。ふかて、「過分のほうび

ちゆうしやう(重賞)図手あつきほうび。

ちゆうしやう(中傷)図人をきづつけると云ふ義より轉じて、陰(カゲ)に立て人の名譽をそこのふコトを云ふ、

ちゆうじやう(衷情)図心のなか。まごころのコトを云ふ、

ちゆうじやう(中將)図武官の職名將官の二位、少將の上の官、「あかすコト

ちゆうしやく(註釋)図ときあかし。ときなるやくめのコト、

ちゆうしよく(重職)図重さやくめ、大切

ちゆうしよく(住職)図其の寺の大將、住持(ジヂ)のコト、「へ

ちゆうしゅん(中春)図陰暦二月の稱(ナ)

ちゆうしゅん(仲春)図同上、

ちゆうじゅん(中旬)図月のなかごろ、即ち十日より二十日までの間を云ふ、

ちゆうじゅん(忠純)図心の取分けて、正直なるコト、「ふ意を表はす語

ぢゆうぢゆう(重重)図かさねがさねと云

ちゆうちゆう(仲仲)図疑うれふる狀に云ふ意、「云ふ意

ちゆうちゅう(中膓)図心の中はらの中と

ちゆうちよく(忠直)図まめやかにして、すなほなるコト、

ちゆうにかい(中二階)図中位(クチヰ)の高さに作りたる居間(ヰマ)、

ちゆうのうち(重内)図重箱の内に詰めたるものを云ふ㊁重づめになしたる食品の稱、

ぢゆうびやう(重病)図重き病氣、大病の

ちゆうりやう(忠良)図心だてすなほにして、忠義に富む、

ちゆうりやう(桂梁)図はしら、うつばりのコト、轉じて大切なる肝心なるコト

㊁賴(タノ)にする人、「かつた自方

ちゆうりやう(重量)図おもみ㊁其物をは

ちゆうりやく(中略)図中ほどの必要でなき部をはぶくコト、

ちゆうりよく(重力)図地球が地球上に在る總ての物體を引き寄せる力、即ち引力㊁おもみのコト、

ちゆうばいくわ(蟲媒花)図植物學上の名にて、花と花との媒介(バイカイ)をする虫と云ふコト、委しく云へば或る花の雌蕊(シヂ)か、他の花の花粉(カフン)を、虫の類や蜂の類が持つて來て吳れるのを受けて植物が生殖作用(セイシヨクサヨウ)を初むる花のコトを云ふ、

ちゆうがくかう(中學校)図中等教育を授

ちゆうがくせい(中學生)図中學校に在る生徒、

ちゆうげんゐん(中間者)図昔の武家の使用人の一にて、下僕(シモベ)と侍(サムラヒ)との中間のもの、稱、「罪を犯(オカ)す

ちゆうざいはん(重罪犯)図重罪にあたる

ぢゆうたくれう(住宅料)図官より其人に家を借る料として、賜はる金のコト、

ちゆうねんゐん(中年者)図中年より年期奉公を爲したる者、

ちゆうばとがほ(重箱顔)図重箱の如く、四角形を爲してゐる顔付のコトをあざけつて云ふ語、

ちゆうばとづら(重箱面)図前條に同じ、

ちゆうばとよみ(重箱讀)図一つの熟語の讀み方の稱(トナ)にて、即ち重箱の、ちゆうは音(オン)にて、はこは訓(クン)なるが如く、一つの熟語を、音と訓とで讀む、よみ方の稱、

ちゆうあうせいふ(中央政府)図全國各地の政事を一さくゝりにして取り締まる所にして、内閣及び各省(カクシヨウ)のコトなり、

ちゆうしやうせき(重晶石)図石の一種、總ての石の中に於て、其の目方の第一に重きものにて、其の色は青褐石(セイカツセキ)を呈し、質(カタ)細(マヒ)やかなるが故に從つて光澤(クワタク)あり、且つ其の面(メン)滑(ナメラカ)なり、俗に云ふ青石(アヰイシ)のコト、化學名にて云へば、即ち硫酸重土(リウサンヂユウド)のコトなり、

ちゆうりりしやくわい(中流社會)図中等の社會と云ふコトにて、即ち中位ゐの身分の人々の稱、

ちゆつ(黜)図しりぞけるコト。のぞくコト㊁官職又は職務をやめさせるコト、即ち貶(ヘンス)す、

ちゆつ(紬)図物を縫ふコト㊁縫ひ合はしたる其の部分のコトを云ふ、即ちぬひめのコト、

ちゆん(純)図車の名、死者の遺骸を入れたる棺(クワン)を載せて行く車、即ちひつぎぐるま、「おとすとのコト

ちゆつちよく(黜陟)図官職を昇(ノボ)すと、

(ちぢよ)

ぢよ(除)図又たちよとも讀む、のぞくコト。取り去るコト㊁算法の一、わりざんのコト㊂官職を拜命するコト㊃おさめるコト㊄開くコト㊅だんだん(段段)、即ちきざはし㊆門内に在る庭(ハ)のコト、

ちよ(箸)図飯(ゴハン)を食ひ、菜(サイ)などを挾(ハサ)む具、即ちはし㊁著(ヂヤク)に通ず、あらはすコト。いちじるしきコト、又たちやくと讀む、著(ヂヤク)に通ず、きる。かぶせる、

ちよ(著)図書物などをあらはす㊁いちじるしきコト。知れ渡るコト。目につくコトを云ふ㊂著(ヂヤク)に通ず、きる。こうむる㊃きもの(衣物)㊄順序(ジユンヨ)位次(クラヰ)㊅門の内に在る庭(ハ)㊆考へるコト。

思ふコトを云ふ、

ちよ(苧)図草の名からむし、を、

ちよ(紵)図草の名、麻(ヲ)の一種にて、いちびのコト㊁麻にて織りたるぬの、即ちあさぬの、

ちよ(楮)図木の名かうぞの木㊁楮の木より紙を製するより、轉じて紙のコト㊂紙幣、さつ、

ちよ(豬)図綿(ワタ)を入れたる衣物㊁ふくろ、嚢のコト㊂棺(クワン)にかぶせる嚢の如きもの、くわんかけ、くわんおほひ㊃ためるゝたくはふ、「コトを云ふ

ちよ(猪)図獸の名いのしゝ㊁水だまりの

ちよ(豬)図前條に同じ、

ちよ(羚)図獸の名、羊の子、即ちこひつじのコトを云ふ、

ちよ(樗)図木の名、一種の惡木にして、こんすゐのコト、其の皮及び葉共に、漆(シツ)の樹に似て青く、且つ其の葉には一種の臭氣あるもの、

ちよ(儲)図ためらふ。ぐずぐずして決定(ケツテイ)せぬコト㊁あはてゝ飛び越ゆる狀を云ふ語、

ちよ(儲)図たくはふコト。つみたてるコト㊁金錢などを、もうけるコト㊂そへ(副)のコト、

ちよ(帛)図手拭(ハナヒヲ)手ふき㊁ふきんのコトを云ふ。

ちよ(除)図竹の皮にて製したる、むしろ㊁とうむしろのコト。

ちよ(女)図おんな。おんなめ㊁娘(ムスメ)㊂汝(ナンジ)、そなた、

ちよ(千夜)図いく夜、夜(ヨ)を度度重(カサ)れたるコトを云ふ。

ちよ(千代)図長き年月日のコト、

ちよる(儲位)図皇太子の御位㊁皇太子の御事を申す語。

ちよる(苧衣)図麻にて製したる衣物、即ちかたびらのコト、

ちよい(女醫)図女子にして醫術開業免狀を持てる者、おんな醫者、「を云ふ

ちよいう(女優)図おんなやくしやのコト

ちよう(冢)図つか(ハカ)㊁はか㊂祠(ホコラ)。ほこら㊃山の頂上、即ちいただきのコト㊄大にして盛んなる狀を云ひ表はす語、

ちよう(塚)図土を盛り上げたる處、即ちつか㊁はか、墓地㊂土地の小高くなつてる處の稱、即ちおかのコトを云ふ、

ちよう(寵)図かあいがる。いつくしむ㊁お氣に入りの人、かあいがられてる人㊂めぐむ。めをかける㊃盛んに榮(サカ)ゆるコト、即ちときめくコトを云ふ、

ちよう(澄)図濁(ニゴ)なきコト、即ちすむ㊁さゆる㊂きよく美し、「コト

ちよう(懲)図こらす。いましめる。こりる

ちよう(重)図かさねる。かさなる㊁おもきコト㊂おもおもしきコト㊃おもんずるコト、即ちたつとぶ㊄小さき荷物の稱、「響き渡る聲を云ふ

ちよう(潼)図乳汁(チチ)のコト㊁皷(ツヅミ)の

ちよう(徴)図しるし。きざしのコト㊁證據(タシカ)のコト㊂呼び出す。よびよせる。召(メ)すコト㊃たづねる。とふ㊄取り入れる。差し出させる、即ちおさむるコト

例ば米を徴すなど㊅明(アキラ)かにするコト、

ちよう(醸)図こうきコト。こまやかなるコト㊁混(ナス)り物のなきこうき酒、即ち上等の酒、

ちよう(禮)図こうき衣物と云ふ意より轉して、綿(ワタ)の入つたる衣物、わた入れ㊁更に轉して衣物を多く着てゐる狀、

ちよう(冗)図むだ。つひえ㊁役にたゝぬコトを云ふ、「かこむコトを云ふ

ちよう(重圍)図幾重(イクヘ)にも取り卷き

ちよう(淨器)図清く美しき器具、即ち佛(ホトケ)に飯を供するに用ゆ器具のコトを云ふ。

ちよう(寵順)図かあいがる。目をかけるコトを云ふ、

ちよう(重五)図五を重(カサ)ねるさいふ意、五月五日の節句をいふ、

ちよう(寵賜)図かあいがつて、特別に賜(タマ)はるコト、又は物、

ちよう(寵士)図かあいがられてるさむらひ。かあいがられてる人。

ちよう(寵兒)図子を愛せぬ者はないが其中にも特別に愛せる小兒のコト㊁君寵(ユウアイ)を得て巾(ハバ)の利(キキ)人のコトを云ふ、

「中のコトを云ふ

ちよう(寵侍)図お氣に入りのそば、女

ちよう(徴)他動證據だてる㊁よぶ、めす㊂もとめる㊃ただしてたづねる。しらべる、「ていつくしむ

ちよう(寵)自動かあいがる㊁目をかけ

ちよう(重祚)図一旦帝王の位を去り給ふた御方が、再び帝王の位に即(カ)せたもふコト、

ちよう(懲治)図悪しき事をした者を、こらしてあらためさす、

ちよう(冗費)図むだなつひへ、

ちよう(徴募)図めしつのる、

ちよう(重利)図利に利がつくコト、即ち復利(フクリ)のコト、

ちよう(女郎)図遊女、娼妓、

ちようあい(寵愛)図取分てかあいがるコトを云ふ、

ちようあく(懲惡)図悪しき行(オコナヒ)を爲したる者を、こらすコト、

ちようえい(寵榮)図特別にかあいがられて、其れが爲めに榮(サカ)えるコト。我が力でなく、愛の爲めに榮ゆるコトを云ふ、

ちようえい(塚塋)図はか墓、つか、

ちようえき(懲役)図罪人をこらして、善心(ゼンシン)にたち返(カヘ)る樣に、嚴(ゼン)しく仕事をさせるコト、

ちようおん(寵恩)図可愛(イトヲ)がられたる其の恩。ふかきなさけ、

ちようかい(寵戒)図こらしさとすコト、

ちようかう(寵幸)図特にかあいがられるコトを云ふ、「ち菊節句のコト

ちようきち(重九)図九月九日の節句・即

ちようぐち(寵遇)図特別に手厚(テアツ)き、

ちようけん(寵眷)図可愛(イトヲ)がられて、取分けなさけを、かけられるコトを云ふ、

ちようとう(徴候)図證據(シルシ)となるべき有樣のコト、病氣の徴候など、

ちようこん(重婚)図夫(ヲツト)のあるに、更に夫を有(モ)コト、重縁、「を云ふ

ちようさい(家宰)図家老職(カロウク)のコト

ちようさい(重歳)図年をかさねるコト、年をとるコトを云ふ、

ちようさん(重三)図三月三日の節句のコト、即ち桃(モモ)の節句、

ちようざん(重塹)図二重(ニヘジ)に設けられたる城の堀(ホリ)のコト、

ちようしう(徴收)図官が人民より財物を取りたてるコトを云ふ、

ちようしふ(徴集)図呼び集(ツド)むるコトを云ふ、召集に同じ、

ちようしふ(重襲)図衣物をかれて着るコト。かさねぎ、

ちようしん(寵臣)図氣に入りの家來。かあいがられてる家來、

ちようぜい(徴税)図租税を取り立るコト

ちようせい(澄清)図水のすみきつて、青(アオ)み立つてるコトを云ふ、

ちようせう(徴招)図呼びまねく、

ちようせう(徴召)図呼び寄せる㊁來たれと云ふコト、「人をまねくコト

ちようせう(寵招)図手厚き方法を以て、

ちようせき(寵錫)図かあいがりて物をしたまはるコト、

ちようせん(重選)図前に選らんだ人を、引き續きにえらぶコト、

ちようてい(重訂)図更に改(アラタ)めただすコト。二度の訂正、「コトを云ふ

ちようてき(羅織)図うり米と、かい米の

ちようてつ(澄徹)図水などの清く、すみ渡(ワタ)つてるコトを云ふ、

ちようでふ(重疊)図山などのかさなつてるコト。物の重(オモ)なり合つてるコト㊁此の上もない、十分と云ふ意を云ひ表はす語、

ちようねん(重年)図年をかさねる、

ちようはう(重寶)図大切(タイセツ)なる寶(タカラ)㊁轉じて便利なる、間(マ)に合ふコトを云ふ、

ちようはつ(徴發)図戰爭などの大事件の起(オコ)りたる時に、民家より種種なる物品を、間に合させるコトを云ふ、

ちようふく(重複)図同じ事のかさなるコト。にぢゆうのコト、

ちようへい(徴兵)図滿二十歳になれば男子が若兵役(ヘキエキ)に服するコトを云ふ、

ちようへい(徴聘)図禮儀(レイギ)待遇(モテナシ)を厚(アツ)くして、人を招(マネ)き抱(カカ)えるコトを云ふ、

ちようへい(寵嬖)図女が可愛がられて氣

に入るコト。氣に入の女、

ちようへき(徴辟)圖官(シクワン)に召(メ)れて、役人に用ひられるコト、

ちようへん(重瓣)圖花片(ビヘン)の重なり合つてるコト、卽ちやえ、

ちようやう(重陽)圖重九に同じ、九月の節旬のコト、

ちようるる(重累)圖物事のかさなるコト㊁おもきわづらひのコト、

ちようろう(寵娘)圖分けて可愛き娘㊁特別(トベツ)に大切なる娘、

ちようしやう(寵妾)圖氣に入りのめかけ

ちようしやう(徴證)圖しようこをあらはし、しめすコト㊁しるし、

ちようしやう(重賞)圖度度ほめられるコト、厚きほうびのコト、

ちようしやう(寵賞)圖取り分て厚き賞與

ちようしやう(徴償)圖つぐのはせるコト㊁つぐのひと云ふコト、

ちようかいけん(懲戒權)圖正(ガ)しからざる者を、こらしいましむる權利(ケン)のコト、「る事を取り扱ふ役人

ちようへいくわん(徴兵官)圖徴兵に關す

ちようかいしよぶん(懲戒處分)圖法律に因りて、こらしいましむべく、其の處置(ショチ)を爲すコト。

ちやうていはよくほ(長汀曲浦)圖長く遠く(ハヨク)つゞきたる濱邊(ヘン)の稱、

ちようへいてきれい(徴兵適齡)圖兵役に服すべき義務の年齡に達したるコト、卽ち數(カズ)へ年二十一歳、滿二十歳のコ「コトを云ふ、

ぢよがい(除害)圖害となる物を取り去る

ぢよがう(除號)圖除算のしるし、

ぢよがく(女樂)圖女子のかなづるに適當(テキタウ)せる音樂、「モ)のコト

ぢよがく(女學)圖女子の修むべき學問(ハウ

ぢよかん(女監)圖女の罪人を入れて置く牢屋のコト、

ちよがみ(千代紙)圖色紙の一種、西内紙に五色の花紋を擦り表したる紙㊁轉じ「くる學校

ちよがくかう(女學校)圖女子に教育を授て料紙のコト、

ちよがくこう(女學校)圖女學校へ通ふて

ぢよがくせい(女學生)圖女學校へ通ふてゐる女子のコト、

ちよき(猪牙)圖ちよき舟の略語、

ぢよき(除棄)圖のぞきすてる、

ぢよきよ(除去)圖のぞきさる、

ちよきん(貯金)圖金錢をためる、

ちよきぶね(猪牙船)圖茶船を見よ、

ちよきんぼ(貯金簿)圖貯金の金高を、明細に書き置く帳面(チヨウメン)、

ちよきんはこ(貯金箱)圖金錢(キンセン)を入れて、貯(ハヨ)へて置くやうに拵(コシラ)へられたる箱(ハコ)、

ちよきんぎんかう(貯金銀行)圖貯金を爲さんとする人より金錢を預(ア)かるを業とする銀行、

ちよく(勅)圖天子が御自身にて下し給ふ命令をいふ、みことのり、

ちよく(直)圖なほきコト、まがらぬコト、ただしきコト㊁とのひ、卽ち當直㊂傍(カタハラ)に侍(ハベ)べるコト、

ちよく(猪口)圖形の小さき上が開きて下のすぼみし陶器のさかづきのコト、卽ち、ちよこ、「のコトを申す

ちよくい(勅意)圖みことのりの御旨(ムネ)

ちよくか(直下)圖其のすぐ下㊁まつすぐに勢(イキホヒ)よく下り來る、

ちよくご(勅語)圖天子の下し賜はりたるお言葉(ヒトバ)、

ちよくし(勅旨)圖天子のおぼしめし、

ちよくし(勅使)圖天子のおつかひ、

ちよくし(直視)圖まつすぐに視る㊁みつめるコトを云ふ、

ちよくゆ(勅諭)圖天子よりさとし、おしえ賜はりし御事、

ちよくろ(直盧)圖昔し蘭白(ハクラン)大納言

(ハヨコ)などの大臣、又は天子の御殿に當直(トウチ)してゐる、位高き役人等の、休息所のコトを云ふ、

ちよくろ(直路)圖まつすぐの道㊁一ト筋(スジ)道のコト、

ちよくわ(直話)圖又た聞(キ)の反對で、じかに聞た話㊁對(サシ)し向ひの話、

ちよくん(儲君)圖太子、世子、

ちよくかう(陟降)圖のぼると、下る、

ちよくかう(直航)圖何の港へも寄らず、直接に其港へ行くコト、

ちよくかう(直行)圖正しき行(ナリヨコ)ひ㊁正しき事を行ふコトを云ふ、又た心のまま行ふコト㊂途中(ナカバ)何方(カタ)へも寄らずに、目的の所へ行くコトを云ふ、

ちよくがく(勅額)圖天子のお書きあそばしたる額面(ガン)、

ちよくかく(直覺)圖人の教へ、又た經驗(ケイケン)などに依らずして、直接に能く知り覺(サト)るコト、

ちよくかく(直角)圖まつすぐに曲(マガ)りたる角、卽ち九十度となしたる角のコトを云ふ、

ちよくかつ(直轄)圖直接に支配するコト

ちよくかん(直諫)圖まのあたりいさめるうちつけにいさめる、

ちよくきよ(勅許)圖勅命に依りて出でたる、おゆるしのコト、

ちよくけい(直徑)圖圓形の物の中央(ナカヨ)を通した、さしわたしのコト㊁直(ジキ)なる細道(ホソ)、

ちよくけい(直系)圖先祖より代代、正妻の子が相續(ソウゾク)して來てるコト、

ちよくげん(直言)圖正(タダ)しき言葉、

ちよくとん(直視)圖直(マツスグ)ぐに發育(イクヨウ)する根のコト、午蒡(ゴボウ)の如きものを云ふ、「らるゝ祭事のコト

ちよくさい(勅祭)圖勅命に依りて行はせ

ちよくさい(勅裁)圖天子の御さいだん。天子のおさばき、

ちよくじつ(直日)圖宿直日のコト、

ちよくしや(直射)圖ちかに照(テ)つける、まつかうから照つける、

ちよくしや(直寫)圖其のまゝを、うつすコト。ちかに寫(ウツ)すコト、

ちよくじゆ(勅授)圖天子が親(シタ)しく臣下に位を授けらるゝコト。親任、

ちよくしん(直進)圖直(ダチ)に進むコト㊁脇目(ワキメ)を觸(フ)ずに進み行くコトを云ふ、「正しき家來のコト

ちよくしん(直臣)圖正直(シヨウジキ)なる家來。

ちよくりやうけいかう(直情徑行)圖自己の思ひだちたる事を、其のまゝ直(ジキ)に行ふコトを云ふ、

ちよくせい(直請)圖ちかに賴むコト㊁直接にもとむるコト、

ちよくぜい(直稅)圖國庫に直接に、納(ナ)め入れる稅金のコト、

ちよくせつ(直接)圖さしむかひ、ちかゝさしつけのコト、

ちよくせん(直線)圖まつすぐに直(ダ)しき線(スジ)のコト㊁まつすぐ、

ちよくぜん(直前)圖目の前㊁ぐすぐすせずに進(スス)むコト、

ちよくせん(勅撰)圖天子の命令に依りて著(アラハ)はしたる書物、

ちよくせん(勅宣)圖天子のおほせ、卽ちみことのりのコト、

ちよくせん(勅選)圖天子のおほせに依りて、えらぶコト、

ちよくだう(直道)圖曲り氣のなき㊁正(タダ)しき道㊂自分の信じてる事を曲(マゲ)げずに行(オコナ)なふコト、

ちよくたふ(直答)圖取次(トリツギ)を經ず、直直(ジキジキ)に答を爲すコト、

ちよくだん(直斷)圖正しく判斷をする㊁まつすぐに切るコト、

ちよくつう(直通)圖汽車などの途中で乘

換のなきコトを云ふ。

ちよくにふ(直入)圖まつこうから切り込むコト㊁廻りくどき事を云はずに、ありのままを云ふ㊂脇目(わキ)もふらずに飛び込む、

ちよくにん(勅任)圖天子が、したしく官

ちよくばつ(誅罰)圖功ある者をのぼせ、罪ある者をばつすコト、

ちよくひつ(直筆)圖事柄(ガラ)のまゝを飾(カザ)らずに書くコト㊁筆をまつすぐに持ちて書くコト、

「爲したる封印(イウイン)

ちよくふう(勅封)圖天子の命令に依りて

ちよくやく(直譯)圖外國の文書を其のまゝ我國の文書に書(カ)すコトを云ふ義譯(ヤク)に對しての語、

ちよくめい(勅命)圖天子の命令、

ちよくりう(直流)圖まつすぐに流れる、川の流れの曲(マガ)つてゐコト㊁一定の向(ムキ)に流れゆく電氣(デンキ)、

ちよくりつ(直立)圖まつすぐに立つ、

ちよくれい(直隷)圖直ちに天子に屬するコト、

ちよくれい(勅令)圖勅命に同じ、

ちよくわう(女皇)圖女の天子、

ちよくわう(直往)圖すぐに行く、

ちよくわん(女官)圖宮中に仕ふる女、

ちよくくわん(直管)圖直接にかんくわつする。ちかにしばいする、

ちよくぐわん(直願)圖人類(ルイ)にせず自身で直(ジカ)に願ふコト、

ちよくぐわん(勅願)圖天子が神佛に願(ガン)をおかけあそばすコト、

ちよくぢやう(勅諚)圖天子のおほせ。天子の御沙汰(ゴサタ)のコト、

ちよくちやう(直腸)圖大腸の末(スエ)の方にて、肛(コウ)門に達するところの部を云ふ、

ちよくぐわんじ(勅願寺)圖天子が御願(ゴガン)を掛させられて建(タテ)たもふたる寺を云ふ、

ちよくせんけい(直線形)圖まつすぐなる徑(ミチ)のみを以て、取り圍みて、種種の形をつくれる物、

ちよくぐわんしよ(勅願所)圖天子の願をこめたもふたところ、又はこめさせられた所を云ふ、

ちよくせんぎゐん(勅選議員)圖貴族院(クヰン)議員の一にて、身は華族にあらざるも、博學賢明にして、國家に功勞ある人を、天子が特に選ばれて、議員となされたる人、

ちよくせつだんぱん(直接談判)圖中人を介(カイ)せず、對坐(サシムカ)で談判するコト、又は其の談判、

ちよき(千代木)圖松の異名、

ちよけい(女系)圖女の血すじ、

ちよけい(女兄)圖あね、

ちよげつ(如月)圖きさらぎ月のコトにて陰曆の二月の異稱、

ちよけつ(女傑)圖えらい女子のコト、

ちよけん(女權)圖女子が男子と、同等の權利を有するコト、

ちよとう(女工)圖女の職人、

ちよとうば(女工場)圖女工の手仕事(ゴト)をするところ、

ちよとうば(女紅場)圖女子に種種の手藝(ゲイ)を教(オシ)えるところ、

ちよとざい(猪子才)圖俗語なり、なまいきと云ふ意義、

ちよざい(樗材)圖役にたゝぬ材木(ザイモク)㊁役に立ぬ智惠㊂轉じて役に立ぬ人物のコトを云ふ、

「家主(ヌシ)のコト

ちよとしゆ(女戶主)圖女のあるじ、女の

ちよざい(貯財)圖貯へたる財産㊁財産を貯へるコト、

「ト。ため置くコト

ちよざう(貯藏)圖たくはへなほし置くコト

ちよざう(女裝)圖男子が女子の姿に易をやつすコト、

ちよさう(除草)圖生(オ)たる草を刈り取る㊁土地を耕(ウナガ)して、草の生長を防ぐコト、

ちよさく(著作)圖書物をあらはし作るコト

「トを云ふ

ちよさん(除算)圖わりざん、

ちよさくか(著作家)圖著作を業とする人のコト、

「す人のコト

ちよさくしや(著作者)圖書物を著(アラ)はすコト、

ちよし(苧絲)圖からむしにて造りたる糸のコトを云ふ、

「師(シ)のコト

ちよし(女史)圖學問の出來る女㊁女の誉

ちよし(女子)圖女の子㊁をんな、

ちよし(女兒)圖女の子供、

ちよし(儲嗣)圖太子、世子、天子のおもうけなされた御子、

ちよじ(儲貳)圖同上、

ちよじつ(除日)圖大みそか、

ちようしう(女囚)圖女の罪人、

ちよしや(著者)圖書物を著(アラ)はしたる人。書物をあらはす人、

ちよしや(除砂)圖砂(スナ)を取り去るコト㊁蠶(コガネ)を入れたる莚(ムシロ)などより、蠶の食ひ餘(アマ)した桑(クワ)のかすや、蠶の糞(クソ)を取り去るコトを云ふ、

ちよしよ(著書)圖著(アラ)はしたる書物、卽ち著作物のコトを云ふ、

ちよしん(女神)圖めがみ㊁天帝のすがた

「女主人のコト

ちよしやう(女將)圖客商賣をなせる家の

ちよじゆつ(著述)圖書物をあらはすコト

ちよしよく(女色)圖女の情合(アヒヅ)、色香

「る人

のコトを云ふ、

ちよじゆつしや(著述者)圖著作を業とせ

ちよす(滌)(他動)水をせきさめてただふ。

水をたまらせる、

「せる

ちよす(叙)(他動)官に任ず、やく目につか

ちよす(除)(他動)のぞく。はぶく。去る㊁わり算をする、

ちよする(貯水)圖水をたくわへ置くコト㊁貯へ置きたる水(ミズ)、

ちよする(緒水)圖たまり水、

ちよするち(貯水池)圖上水を貯(タ)はえて置く池、

「てゐる苗字(ミヤウジ)

ちよせい(著姓)圖世の中に能く知れ渡つ

ちよせい(女婿)圖むすめの、むこ、

ちよせい(女性)圖女子のコト、

ちよせい(女生)圖女の仲間(ナカマ)㊁女學生の略、

ちよせき(貯積)圖つみたくはへる、

ちよせき(除夕)圖除夜に同じ、大みそか。

おほつもごりのコト、

「るコト

ちよせき(除籍)圖戶籍より名を除(ノゾ)取

ちよせき(除所)圖しりぞけ、のけるコト㊁法律にて判事又は裁判書記が、一つの訴訟事件(ソシヨウジケン)に付き、其事件の裁判より、のぞかれるコトを云ふ、

ちよせいと(女生徒)圖女の生徒、

ちよせんせい(楮先生)圖紙のコト、

ちよそ(除租)圖租稅を許して取らぬコト

ちよぞく(除族)圖華族(クワゾク)が其身分を下られて平民となるコト、

「のコト

ちよそん(女孫)圖むすめの生みたるまご

ちよたい(著大)圖殊に目だつて大ゐなるコトを云ふ、

ちよたい(女隊)圖女の一むれ、

ちよたい(除隊)圖兵士が其の隊より除かれるコト、卽ち服務年限を終りて、隊より出るコト、

「ちのコトを云ふ

ちよたち(女道)圖女の守るべき教えのみ

ちよたつ(除脫)圖のぞきぬく、のぞきさる、取り去るコト、

ちよたん(貯炭)圖石炭や木炭(スミ)を貯へ置くコト、又は貯へし石炭、

ちよたんこ(貯炭庫)圖石炭(ヤキ)を貯(タメ)えて置く庫(クラ)のコト、

ちよち(除地)圖年貢を取りたてぬ土地(チ)のコトを云ふ、

「トを云ふ

ちよちく(貯蓄)圖たくはへる、ためるコ

ちよちよ(儲儲)圖物事を意に介せぬ、頓着(トンチヤク)せぬ狀を云ふ、

ちよちゆう(女中)圖女中の總稱㊁奉公せる女、ななごし、

「コトを云ふ

ちよちくきん(貯蓄金)圖ためたる金子の

ちよちやうふ(女丈夫)圖男も及ばぬ女。男まさりの女、

ちよちゆうきく(除虫菊)圖一名むしとり菊と云ふ、菊の一種にて、蚤(ノミ)蚊(カ)等を捕ふるに用ゆ、彼の蚤取粉(ノミトリコ)は、此の花を乾かして粉となせしもの、

ちよちゆうことば(女中詞)圖御殿(ゴテン)に使ふ、やまとことば、

ちよつと(一寸)圖少し暫時(シバラク)、

ちよてい(女帝)圖女の天子、

ちよてい(女弟)圖いもうと、

ちよてい(女婿)圖めい、即ち兄弟のむすめ、

ちよなん(女難)圖男子が女子に關係して受くる災難、

「コトを云ふ

ちよなぐさ(千代菜草)圖若(カワ)き菜(ナ)の

ちよばう(佇望)圖立ちさゝまつて、望(ノゾ)み見るコトを云ふ、

ちよはち(除法)圖わりざんのコト、

ちよび(椿皮)圖こうづ木の皮、

ちよふく(女服)圖女子の着る衣物(ハキモ)のコト、男服に對しての稱、

ちよふく(除服)圖忌(イミ)あけ、

ちよへい(椿幣)圖紙幣。サツ、

ちよほ(點)圖ぼち、てんのコトにて、しるし㊁すこしのコトを云ふ、

ちよほ(樗蒲)圖かりうちの事にて、花札(ハナフダ)の如く、四十八枚の紙札より成り、其れに種種の模樣を記し、十二枚を以て一組とし、之を四組用ひて、勝負を爭ふ(ばくち)の一種、轉じて博奕(チバク)の別名、

ちよぼくゑ圖關東地方の方言、小さき木魚(モクギヨ)を叩(タタ)きて、鄙(ヒナ)しき歌を唄(タタ)ひながら、金錢を貰ひ歩く乞食(コジキ)の一種、

ちよま(苧麻)圖からむし、あさ、

ちよまくしき(除幕式)圖新設したる銅像などに、幕を四方よりかぶせ置きて、日を卜(ボク)して、其の幕を取りのぞく式の稱、

「トを云ふ

ちよみぐさ(千代見草)圖草名、菊(キク)のコ

ちよめい(著明)圖いちぢるしきコト、なだかきコトを云ふ、

ちよめい(著名)圖名だかい、名が知れ渡つてるコトを云ふ、

ちよめい(除名)圖組合又は仲間より名を去る、組合よりはぶく、

ちよや(除夜)圖十二月三十一日の夜たいふ、

「ト㊁無鐵砲なる勇氣

ちよゆう(猪勇)圖向ふ見ずに進み行くコ

ちよら(女羅)圖植物の名にて、日陰(ヒカ)かづらのコト、

ちよらう(女郎)圖女を指していふ語㊁客に招(マネ)かれ色を賣る女、

ちよらうや(女郎屋)圖遊女(ユウジヨ)を置く家貸座敷(カシザシキ)、娼家(シヤウカ)、

ちよらうかひ(女郎買)圖遊女を相手にして遊ぶコトを云ふ、

ちよらうあがり(女郎上)圖遊女(ユウジヨ)が素人(シロウト)と爲りて、世帶(ショタイ)を持ちたるコト、

ちよりう(女流)圖女の仲間、なんな、

ちよりつ(佇立)圖たつてるコト、

ちよれい(女禮)圖女子の行ひ守るべき作法(サホウ)、

「守るべき禮儀、作法

ちよれいしき(女禮式)圖女子の特に修め

ちよろけん(著羅絹)圖絹織物の一種にて無地の絹布なり、其狀カイキに似たり

ちよわう(儲王)圖王のおよつぎ、

ちよわう(女王)圖女の王㊁親王の御宣下なき、皇族のひめぎみの御事を申す語

ちよんの(手斧)圖小さきまさかり、即ち手(テ)おの、コト、

ちよんぼり(俗語)にて、少しばかりと云ふコト、

ちよんまげ圖ちんぼまけのコトを云ふ、

(ちぢら)

ちらい(地雷)圖地雷火(ヂライクワ)の略にて、地面に爆裂藥(バクレツヤク)を仕掛て置き、火をつけるか、電氣をかけて破裂させるもの

ちらいくわ(地雷火)圖地下に火藥を伏せ置き、敵の來た時に、火を移して破裂させるもの、

「る牢屋(つちらう)

ちらう(地牢)圖地面に穴を堀りて作りた

ちらう(痔勞)圖病氣の名にて、性質(セイシツ)の惡き痔疾(ヂシツ)のコト、

ちらかる(散亂)(百)動散り亂れてる。ちらばつてるる、

ちらし(散)圖ばらばらにする、ちらかすコト㊁廣告の爲めに、配(クバ)る紙札㊂ごもく鯖(サバ)の略語㊃カルタを一ぱいにちらかして、取る仕方のコトを云ふ、

ちらしがき(散書)圖女の手紙又は歌、さてはつや文(ブミ)などを書くに、美しく一行(ヒトクダリ)置きとか、又は飛飛(トビトビ)に書くコトを云ふ、

ちらしがみ(散髮)圖女の髮を結(ユ)ずに、毛をバラバラさせてるコト、

ちらしすし(散鮨)圖ごもくずし、

ちらしまい(散米)圖惡魔(アクマ)を拂(ハラ)ふ爲めに、神に祈つて米をまくコト、又はまく米の稱、

ちらしどるく(散五目)圖ごもくずし、又たごもくめしのコト、

ちらしたいこ(散太鼓)圖芝居などのハテ(終)に叩く、太鼓の打ちかた、即ち打出し太鼓のコトを云ふ、

ちらしもやう(散模樣)圖布(ヌノ)又は紙などに、飛飛(トビトビ)に、種種の模樣を染めたるものを云ふ、

ちらす(散)他動ちらかす、ばらばらにする㊁種種(イロイロ)の事を云ひ觸(フレ)す㊂ばらまく、

ちらちら(閃閃)圖眼前(ヘイゼン)に物が動(ウゴ)ひてゐるやうに感ぜられて見えたり、見えなんだりする狀(ヤウ)を云ひ表はす語、

ちらちら(霏霏)圖又片片とも書く、花や雪などの、ヒラヒラと飛び散る狀(ヤウ)を云ひ表はす語、

ちらちら(寸寸)圖チヨイチヨイと耳に聞ゆる狀(ヤウ)㊁或る話を途絕(トダエ)途切に、耳へ入れる狀を云ふ、

ちらほら(占占)圖まばらに、ぢびぢびに

「るるコト

と云ふ意を表はす語、

ちらん(治亂)圖世の中の、治まると亂だ

(ちぢり)

ちり(散)圖ばらばらになるコト、飛び去るコト、亂(ミダ)れ離るコト、

ちり(地利)圖其の土地の物產より生じて來る利益㊁其の土地の有樣(ユウヤウ)の便利(ベンリ)なるコト、

ちり(地理)圖地面上に現らはる狀態(ジヤウタイ)のコト、即ち山(ヤマ)川(カワ)及び海、陸地(チリク)物產(ブツサン)風俗などのわけがらの總稱、

ちり(塵)圖總て物の細かく碎(クダ)けたる物、又は物のかすなどの飛び散るもの、稱㊁ごみ。ごもくくず㊂少しばかりいささか㊃けがらはしきコト。よごれたるコト㊄うるさきコト、煩(ワズラ)らはしきコト、即ち世俗のコト㊅世の中のゝみだれのコト㊆直打(ヂカウチ)なきもの。取るに足らぬコト、

ちりあな(塵穴)圖塵を纏(マトメ)め棄てく爲めに、土地に穴を堀たもの、

ちりあくた(塵芥)圖ほこりと、ごもく㊁

轉じて直打(チウ)なきもの、

ちりゐ(塵居)圖ほこりに、まぶれてゐること云ふコト、

ちりう(運留)圖とどまるコト、

ちりがく(地理學)圖地理を研究する學問のコト、

ちりかた(散方)圖花のちる有樣、又た物のちらかつてる容子(ヨウ)、

ちりがみ(塵紙)圖紙の名、楮(ヒチ)の皮を交(カウ)て漉(スキ)たる粗末なる紙、

ちりけ(身柱)圖脊骨(セキコツ)の最上部にて、項(クビ)の下のところの稱、

ちりざうり(塵草履)圖東國地方の俗語にて、わらざうりのコト、「のコト

ちりしよ(地理書)圖地理學を修むる書物

ちりち(塵地)圖梨地(ナシジ)のコト、

ちりちり(散散)圖とびとび㊁ちらばるコトを云ふ、「だめ、ごもく場

ちりづか(塵塚)圖塵を棄てる場處、はき

ちりとり(塵取)圖塵をかき寄せて棄てる道具の名、

ちりどろ(塵泥)圖塵と泥と㊁轉じて直打(チウ)なきもの。やくざ者、取るに足らぬ人のコトを云ふ、

ちりのみ(塵身)圖物の役に立たぬ身體(カラダ)㊁けがれたる身體、

ちりのとる(散殘)自動花や葉の散(ヲチ)ずに枝(エダ)に殘つてある、

ちりばね(散花)圖散りて落たる花、

ちりばむ(鏤、他動)金石に種種の形をほりあらはす、「りだらけになる

ちりばむ(塵染)自動塵にまびれる、ほこ

ちりばかり(塵計)圖少しと云ふ意を表はす語にて、わづか、いささかと云ふコト

ちりはじむ(散始)自動花などが散(ヲ)り出す、「ばらびのコト

ちりはらひ(塵拂)圖ほこりはたき、さい

ちりほこり(塵埃)圖ごもく、ごみ、

ちりみだる(散亂)自動ちらかつてる。ばらばらになれる、

ちりめん(縮緬)圖絹織物の一種にて、生絲(キイト)に左撚(ヨリ)と、右撚の二種の撚を強くかけたる物を、緯(ハタヒ)として織りたる後、練(ネリ)て縮(チヂ)ませたもの、

ちりめんどろ(縮緬吳呂)圖ちりめんのコトを云ふ、

ちりめんしそ(縮緬紫蘇)圖紫蘇の一種にて、其の葉に小皺(コジワ)の澤出に寄りて、一種縮緬の如き觀(ミル)を呈するもの、

ちりめんぢやこ(縮緬雜魚)圖白魚(シラウヲ)の子を乾かしたる物、卽ちしらつぶしのコト、

ちりやう(智量)圖智惠と度量、

ちりやく(智略)圖智惠を能く働(ハタ)らかして、物の役に立るコト、

ちりよ(智慮)圖ふかきかんがえ、

ちりよけ(塵除)圖塵埃(チリホコリ)の衣服にかからぬやうに、衣服の上より着る單物(ヒトヘ)の外套(ガイトウ)、

ちりよく(地力)圖其の土地が物を培(ツチカヒ)ひ產(ウム)つる力のコトを云ふ、卽ち地味の程度(ホドイ)、「ばたらきのコト

ちりよく(智力)圖智惠の力、卽ち智惠の

ちりれんげ(散蓮花)圖レンゲとも云ふ、陶器製の小さき匙(サジ)にて、其形が蓮花の花瓣(ハナビラ)に似たるより云ふ、

(ちぢる)

ちる(散)自動ほなればなれになる。ばらばらになる、ちらかる㊁みだれる。みだる㊂他へ聞へ知らる㊃噪(ハヤ)などがにじむ、

ちるゐ(地類)圖土地の種類、

(ちぢれ)

ちれう(知了)圖十分に知るコト。知りさとるコトを云ふ、

ちれう(治療)圖病氣の手當を加へるコト病氣を直すコト、

(ちぢる)

ちち(地燼)圖いろりのコト、

ちちう(痔瘻)圖痔疾の一種にて、あなぢのコトを云ふ、

ちちり(銚釐)圖錫(スズ)の類にて作られたる、筒形(ツツガタ)の口のある燗銚子(カンチヤウシ)、酒を溫める具、

ちちん(持論)圖持前の議論。持ち前の云ひ草のコトを云ふ、

(ちぢわ)

ちわ(痴話)圖なれそめたる男女間の、じやれ話のコトを云ふ、

ちわう(地黃)圖草の名、其の葉はからし菜に似て、紫(ムラサキ)又は白色の花を咲す、其の根は藥となる、

ちわうせん(地黃煎)圖藥飴の一種、地黃の根を煎じて、其の汁に飴(アメ)を入れてれりたる物、

ちわく(地別)他動道を切り開く、

ちわぐるひ(痴話狂)圖男女互ひに親しみて、話し戲むるコト、

ちわけんくわ(痴話喧嘩)圖男女が痴情(ヒトウ)の爲めに、互ひにいさかひをするコト、

ちわさうどう(痴話騷動)圖男女が痴情の爲めに、又物三昧に及ぶコトを云ふ、

ちわのふみ(痴話文)圖色文(ヒラブミ)のコト㊁墓ふ心のまことを、戀人(コヒビト)に云ひ送る文のコト、「にわりつけるコト

ちわり(地割)圖俗語にて、土地を其の用

(ちぢん)

ちん(朕)圖天皇が御自身の御事を仰(オホ)せらるる時の御言葉、

ちん(珍)圖めづらしきコト㊁類のなきコト㊂美事なるコト㊃大切なるコトを云ふ、

ちん(鎭)圖しづめるコト。おだやかになすコト㊁おさへるコト。おさへのコト、例ば一方の鎭、

ちん(沈)圖しづむ。おぼれるコト㊁水なゝの底(ソコ)に、たまれるおりのコト㊂かくれる。かくる㊃深(フカ)きコト、

ちん(枕)圖まくらのコト㊁轉じて眠(ネム)る、ねるコト、

ちん(砧)圖布帛(ヌノ)を打(ウツ)く爲めの石、又は木にて作られたる臺(ダイ)のコト、卽ちきぬた、

ちん(趁)圖驅ぐコト㊁追(オ)ふコト㊂ふみこえるコト㊃走る、

ちん(賃)圖報償(ムクヒ)を出して、人又は物を使ふコト㊁仕事(シゴト)、又は賃(チン)たる物の報償金のコト、

ちん(亭)圖庭園などに造りたる風雅(フウガ)な家のコトを云ふ、

ちん(狆)圖動物の名、猫(ネコ)の如きものなれども、犬の種類なり、

ちん(鎭)圖しづめるコトを云ふ、

ちん(鴆)圖支那に棲(スム)む鳥(トリ)の如き鳥にて、大毒あるもの、

ちん(疾)圖病氣にかゝるコト。患ふるコト㊁熱病のコト㊂味(アジ)の殊に美なる食品のコト、

ちん(親)圖牛の鼻につけれある紐(ヒモ)、卽ち牛のはづなのコト、

ちん(酖)圖鴆(チン)に同じ、其の條を見よ㊁酒におぼれるコトを云ふ、

ちん(耽)圖汚(ヨゴ)れたるかす。あか㊂きたなき、しみのコト、

ちん(圓)圖顏を出す。飛び込む㊂移(ウツ)と

容子をうかがふ、

ちん(陳)圖つらなる。ならべるコト㊁甲し述(ノブ)るコト㊂古(ムカシ)きコト㊃時の經(ヘ)つコト卽ち久し㊄門より堂の下(シタ)へ至る細き徑(ミチ)のコトを云ふ、

ぢん(陣)圖兵士の隊列㊁物事の列㊂そなへ㊃兵士の屯(ヒロヰ)してる處の稱㊄戰爭たゝかひ、

ぢん(椹)圖木の名、さはら㊁桑の木の實(ミ)㊂木材を斫(キル)る臺、

ぢん(鎮)圖椹(ヂン)の㊁に同じ、

ぢん(搢)圖木材を斫る音㊁打(ウチ)かんと身搢(ミウチ)ふ狀(ヤウ)を云ふ、

ぢん(碪)圖砧(ヂン)に同じ、きぬた、

ぢん(塵)圖ちりのコト、委しくは塵(チリ)の條に在り、就ひて見らるべし、

ちんあ(沈痾)圖ながびく病氣㊁持病(ヨクヒ)のコトを云ふ、

ちんあい(珍愛)圖めづらしがつて、かあいがる㊁調法(チヨウホウ)がつて愛する㊂甚だしく可愛がる、

ちんあい(塵埃)圖ちりほこり、

ちんあつ(鎭壓)圖おししずめるコト㊁制して穩(オダヤカ)になすコト、

ちんあつき(鎭壓器)圖物を壓(オサ)えつける器械、製本職などの用ゆる、

ちんあいびやう(塵埃病)圖塵(ヅチ)ほこりを吸(スヒ)ひ込むより、發する病氣のコトを云ふ、卽ち塵か病氣の原因となるもの、

ちんあ(珍異)圖めづらしきこと、

ちんうつ(沈鬱)圖氣のくすむコト。心の引き立たぬコト、

ちんあい(陣營)圖陣屋のコト、

ぢんあ(塵汚)圖ちりほこりのコト、轉じてきたなき物のコト、

ちんあく(貸屋)圖金錢を受けて家をかす(かしや)のコト、

ぢんがい(陣貝)圖陣中にて合圖の爲めに吹く、ホラ貝のコト、

ぢんかい(塵芥)圖ちり、あくた、ごもく、ほこりのコトを云ふ、

ちんかい(塵界)圖世俗。浮世、

ちんかう(沈香)圖熱帶地方に產する木の名、其木は香氣(カオリ)高きを以て香料に用ゆ、

「お客のコト

ちんかく(珍客)圖めづらしき客㊁大切なる普請し戰爭の時に陣中で被(カブ)りし中高(チカウ)の笠㊂陣笠連の略、

ぢんがさ(陣笠)圖兵士雜卒のコト

ぢんがされん(陣笠連)圖㊁譯わからずに贊成して騷き立つる人々のコトを云ふ、

ちんがし(貸貸)圖相當の金錢を受け物をかすコト、

ちんかしげふ(貸借業)圖種種の品物を相當の貸錢にて、貸(カシ)つくる業とするコト、損料屋、

ちんがね(陣鐘)圖陣中にて戰爭のかけ引きの合圖に打つ半鐘(ハンシヤウ)、

ちんがら(珍柄)圖めづらしき品(シナ)㊁美事な縞柄(シマガラ)のコト、

ちんき(珍貴)圖めづらしくして、たつとひコトを云ふ、

ちんき(珍卉)圖めづらしき草、

ちんき(沈毅)圖おちついてゐて强(ツヨ)きコトを云ふ、

「コトを云ふ

ちんき(珍奇)圖めづらしく、きみやうな

ちんき(珍器)圖めづらしきうつわ㊁大切なる器具、

「布(ヌノ)のコトを云ふ

ぢんきち(陣吉)圖布(ヌノ)で製(ツク)りたる財

ちんきん(沈金)圖漆塗(ウルシヌリ)の器物に文字を隱し刻(ホリ)にして、其に金粉(コガネ)を差し入れたもの、

ちんきん(珍禽)圖めづらしき鳥、

ちんきん(貸金)圖ちんせん、

ちんきん(沈吟)圖うめく、うなる、

ちんきん(貸銀)圖ちんせん、

ちんきやう(陳供)圖神佛などに物をそな

へささぐるコト、

ちんきやく(珍客)圖久し振(ブリ)に來た客、大切(ヒツシ)なる客のコト、

ちんきんぬり(沈金塗)圖漆器(シツキ)の模樣(モヨウ)の一種にて、卽ち其の漆器に好むところの模樣を毛彫(ケボリ)にして、其の彫(ホリ)て凹(ヘコ)んだ部(ヘヤ)に金の粉を埋(ウヅ)めし物、

ちんきんぼり(沈金彫)圖同上、

ちんぐ(珍具)圖めづらしき道具、

ちりくわ(珍果)圖めづらしきくだもの、めづらしき菓子(クワシ)、

ちんくわ(珍貨)圖たから物、

ちんくわ(珍菓)圖めづらしきくわし㊁美事なる菓子、

「消ゆるコトを云ふ

ちんくわ(鎭火)圖燃(モ)てる火の靜まり

ちんくわい(珍怪)圖めづらしく、ふしぎなるコトを云ふ、

ぢんぐわい(塵外)圖浮世の外(ソト)と云ふ意にて、世の中の事に關(カヽワ)ぜぬと云ふ意、

ちんぐわん(珍玩)圖珍(メヅ)らしがりて樂む器具㊁珍らしきおもちや、

ちんくわさい(鎭火祭)圖ひぶせの祭り、卽ち火の用慎を守らせ給へと祈(イノ)る祭のコトを云ふ、

ちんけい(陣形)圖陣取のありさま、

ぢんけふ(塵境)圖ちりにまびれてると云ふ意より轉じて、わずらはしき身の上と云ふコト㊁世俗。浮世のコト、

ちんげん(陳言)圖ふるくさきはなし。ありふれたるはなし、

ちんけいざい(鎭經劑)圖頭痛めまゐ氣鬱(ウツ)などの神經の作用(ハタラキ)に因つて發する病氣を、鎭(シヅ)める藥の總稱を云ふ

ちんこ(沈痼)圖ぐわんこな病氣。長(ナガ)びく病氣のコト、

ちんご(陣伍)圖軍隊の隊列(レツ)、

ちんご(鎭護)圖世の中を鎭めまもるコトを云ふ、

「こと。沈みゆくコト、

ちんこう(沈降)圖水中などへしづみ下る

ぢんこう(塵垢)圖ちりと、ほこり㊁不潔(ケツ)、きたなきコト、

ちんこんさい(鎭魂祭)圖神道(シンタウ)にて、死亡者の魂(タマシヒ)を祭るコトを云ふ、

ちんざ(鎭座)圖神の御靈(ミタマ)が、其處に鎭(シヅ)まりますコト、

ちんざり(珍藏)圖大切にしまゐおく。念を入れて直し置く、

「トを云ふ

ちんさつ(鴆殺)圖鴆酒を飲ませて殺すコ

ちんじ(塵事)圖世の中の事、

ちんじ(珍事)圖めづらしき出來事㊁かわつた事、不時(フジ)の出來事、

ちんし(沈思)圖おちついて思案(シアン)する深く物を考へるコト、

ちんじ(椿事)圖容易(ヨウイ)ならぬ出來事。大事件のコト、

ちんしう(珍羞)圖めづらしき御馳走(ゴチソウ)㊁味のよきお料理、

ちんじう(珍什)圖めづらしき道具、

ちんしや(陳謝)圖あやまる㊁禮をのべるコトを云ふ、

ちんしゆ(鴆酒)圖鴆毒(ヂドク)を混(マゼ)たる酒にて、毒酒の一種、

「コトを云ふ

ちんしゆ(陳酒)圖古酒(コシ)、ひねざけの

ちんじゆ(鎭守)圖兵士を置きて、其土地の安寧(アンネイ)を守らしむるコト㊁其土地の安寧を守る神樣、又は其社(ヤシロ)、鎭守樣など、

ちんしよ(珍書)圖めづらしき書物、

ちんじよ(陳叙)圖云ひたつる、

ぢんしよ(陣所)圖陣屋(ヤシキ)兵營(ヘイ)、

ちんしごと(貸仕事)圖貸錢を受け取つて仕事をするコト、

「(ブン)るコト

ちんじやう(陳情)圖事情(コヽロ)を申し述

ちんしやう(珍賞)圖めづらしがつてほめ立る㊁過分のほうび、

ちんじゆく(陳熟)圖ふるくさきコト㊁物

のふるくなるコト、

ちんじゆつ(陳述)圖日にて事柄(ハナシ)を申し立てるコト、

ちんじゆふ(鎮守府)圖各軍港(ミナトグチ)に置かれて、其の軍港所屬の軍艦兵員等一切の事、及び軍港防備の事を司(ツカサド)る所の名、

ちんしやくち(賃借地)圖年貢(ネンゴ)又は賃錢を出して借りてゐる地、

ちんじやうしよ(陳情書)圖其の情實(ジツジヤウ)を日(ヒ)で云ふ代(カハ)りに、書面に認(シタ)ためたるもの、

ちんしやくにん(賃借人)圖賃錢を出して物を借りてゐる人、

ちんしやくぶつ(賃借物)圖賃金を出して借りてゐる物を云ふ、

ちんじゆつしよ(陳述書)圖陳情書に同じ

ちんすゐ(沈醉)圖甚だしく酒に酔ふコト㊁或物(モノ)におぼれて、精神を失ふコト、

ちんずゐ(珍瑞)圖めづらしき、よききざし

ちんせい(鎮靜)圖しづまつて、しづかなるコトを云ふ、

ちんせい(沈靜)圖靜(シヅ)かなる、しづまりかえる。おちついてゐる、

ちんせい(陳請)圖譯(ワケ)を申し立てて、たのむコト、

ちんせい(陣勢)圖陣構(ヂンガマ)のいきほひ「㊀軍隊の勢力

ちんせい(塵世)圖世の中が塵(チリ)だらけと云ふ意にて、卽ちみだれ汚(ケガ)れてる世と云ふコト、「と云ふ義

ちんせき(枕席)圖枕としき物、卽ちれやづらしがりておしむコト、

ちんせき(珍惜)圖大事にかけるコト㊁め

ちんせつ(珍說)圖めづらしきはなし、

ちんぜん(珍膳)圖めづらしき膳部。ごちさうのコト、

ちんせん(賃錢)圖働に對する報酬(ホウシウ)の金、卽ちてまだい、

ちんせん(陣扇)圖戰爭にて大將が部下を指揮(サシヅ)する、ぐんばいうちわのコトを云ふ、「表はす語

ちんぜん(闖然)圖頭を突き出す狀を云ひ

ちんそ(陳訴)圖のべうつたえる、

ちんそ(陳疏)圖云ひ開きをする、云ひ譯(ワケ)をするコト。

ちんそう(陣僧)圖軍隊に附いて、戰地に行く僧侶のコト、

ちんそく(塵俗)圖世間(セケン)、世の中、

ちんたい(沈滯)圖一處(ヒトコロ)に止(ト)まつてる㊁役人などの等級(トウキウ)の進まぬコトを云ふ、

ちんたい(鎭臺)圖其の地方の安寧を守る爲に屯(ヨウ)してゐる兵營のコト、又た其の地方を守る軍人の長のコトを云ふ

ぢんだい(陣代)圖其の陣屋の大將の代(カハ)りになつてる人、

ちんたち(陳套)圖ふるくさきコトを云ふ卽ちちんぶのコト、

ぢんたち(陣刀)圖戰爭に用ゆる刀、

ぢんたく(蹠躇)圖跛(ハシ)の人の歩み行く狀を云ひ表はす語㊁定まらざる狀を云ふ語、「くばるコトを云ふ

ちんたて(陣立)圖陣地を定めて、兵をまく

ちんだん(珍談)圖めづらしきはなし。變(カハ)りたる物語り、

ちんたいと(陣太鼓)圖昔の戰爭にて、其の進退(シリゾ)を知らせる爲めに、陣屋にて叩きし太鼓、「人のコト

ちんたいにん(賃貸人)圖ちんがしをする

ちんたいかかく(賃貸價格)圖賃貸(カチン)する物の直打(ネウチ)の高、

ちんたいしやく(賃貸借)圖自己の所有物を、他人に借(カ)して、相當(トウタウ)の賃錢を受取るコト、

ぢんち(陣地)圖軍隊をまくばる地㊁陣をすえるに適(ヨ)せる場所、

ちんちん(陳陳)圖物のふるくなつてゐる

ありさまを云ふ、

ちんちん(沈沈)圖靜まりかへつて、森(シン)としてるさま㊁夜の更(フケ)て靜かなる狀(サマ)に云ふ語、「云ふ語

ちんちん(陣陣)圖風の吹きすさむ有樣を

ちんちやう(珍重)圖めでたきコト㊁珍らしき物として大切にする、「云ふ

ちんちやう(沈重)圖おちつきてるコトを

ちんちやく(沈着)圖おちついてるコト。物事に驚き騷がぬコト、

ちんちゆう(塵中)圖ちりの中㊁世の中のコトを云ふ、

ちんちゆう(陣中)圖陣屋の中、

ちんつう(陣痛)圖產婦が出產に際して緩の部に感ずる痛みのコト卽ちしきりの「いたみ止(ヤ)のコト

ちんつう(鎭痛)圖痛をしづめなほすコト

ちんつき(賃搗)圖ちんもち、

ちんでき(沈溺)圖酒色におぼれて、夢中になるコト㊁水中へはまるコト。おぼれ死すコト、

ちんでん(沈澱)圖水又は液(エキ)の底(ソコ)に其の中に含まれてる物の沈(シヅ)みてにごつてるコト、

ちんど(塵土)圖ほこりと土のコト轉じて三文(モンジン)の直打(ネウチ)もなき事を云ふ語

ちんとう(枕頭)圖まくらもと、

ぢんとう(陣頭)圖じんのはな、卽ち陣屋の前のコトを云ふ、

ちんどく(鴆毒)圖鴆(チン)と云ふ鳥の體內に在る毒分(ブンシ)のコト、

ちんとり(陣取)圖陣地を定めて、陣構を爲すコト、陣がまえを爲したるコトを云ふ、「トを云ふ

ちんにふ(闖入)圖突然(ヤブヨリ)に暴れ込むコト

ちんのざ(陣之座)圖昔時宮中にて公卿(クゲ)が、公事(クジ)を取り扱ひたる所のコトを云ふ、

ちんば(跛)圖片足の短かい不具(カタワ)㊁轉じて揃(ソロ)ふてある物の欠(カ)て揃はぬやうになつたコト、

ちんばら(珍寶)圖めづらしきたから物㊁大切になすたからもの、

ぢんばら(陣亡)圖陣中にて死ぬ、うちぢにのコトを云ふ、

ちんばう(賃房)圖賃錢を受けて、部屋(ヘヤ)をかすコト、かしま、

ぢんばふ(陣法)圖戰陣を張る其の方法㊁陣中のおきてのコト、

ちんばん(鎭藩)圖其地方を鎭める爲に置(オ)れてある大名のコト、

ぢんばおり(陣羽織)圖陣中にて、具足(グソク)の上より着けたる、袖のなき羽織の如きもの、

ぢんばらひ(陣拂)圖陣所を引き上げるコト㊁軍隊を引き上るコト、

ちんび(陣皮)圖蜜柑の皮を干(ホ)、かためて細かに切りたるもの、

ちんびき(賃紡)圖賃錢を受けて、糸をつむぐコト、「なる物品

ちんびん(珍品)圖めづらしきしな㊁大切

ちんぷ(鎭撫)圖亂を鎭めて民を安ず㊁なぐさめて鎭ませるコト、

ちんぷ(賃夫)圖賃錢を得て、他家の用を爲す人のコト、「れたる事

ちんぷ(陳腐)圖ふるくさきコト、ありふ

ちんぷ(陳布)圖しきならべる、

ちんぷつ(珍物)圖めづらしき、しなもの。美事なる物品、「云ふ命令(ヤイ)へと

ぢんぷれ(陣觸)圖陣屋を出て戰(カタ)へと

ちんぷん(珍聞)圖めづらしき、うはさ㊁面白き物語(モノガタリ)り、

ちんぷんかん(珍糞漢)圖わけのわからぬコトを云ふコト㊁わけのわからぬ事を云ふ人、

ちんぺん(枕邊)圖まくらもと、

ちんぺん(陳辯)圖申し開きを爲すコトを云ふ。云ひ開き、

ちんぼく(珍木)圖めづらしき木、

ちんぼつ(沈没)圖水の中に沈みて、姿(スガタ)のきゆるコト、

ちんぼつ(陣歿)圖戰死するコト、

ちんまい(陳米)圖ひねごめ、古米(フルヨネ)、

ちんまく(陣幕)圖陣中に張る、まく、

ちんみ(珍味)圖めづらしき、ごちそう、極めて味のよき食ひ物、

ちんむるゐ(珍無類)圖此の上もなきめづらしきコトと云ふ意㊁類のないほどめづらしきコト、

ちんめん(沈湎)圖酒におぼれて、飲みつづけてゐるコト

ちんもく(沈默)圖だまつてるコト。口數(クチカズ)を利ぬコト、

ちんもち(賃餅)圖賃を受けて餅をつくコト、

ちんもん(陣門)圖陣屋の出入(デイリ)の口のコト、

ちんや(陣屋)圖兵卒の集り居る假りの兵營㊁德川時代に郡代(グンダイ)や代官(ダイカン)の役所として居る所、卽ち官宅の一名、

ちんよう(賃傭)圖賃錢を取りて雇(ヤト)はるゝコトを云ふ、

ちんりん(沈淪)圖水中に沈むコト㊁おちぶれて見る影もなくなれるコト、

ちんれつ(陣列)圖陣屋の並(ナラ)んでる有樣を云ふ、

ちんれつ(陳列)圖品物を工合よくならべつらねるコト、

ちんれつぢやう(陳列場)圖種種の品物を列(ナラ)べて人に見せる處、

つづ

(つづ)

つ(唾)圖口より出る水の如きしる、卽ちつばきのコト、つばきは、アルカリ性にして、澱粉を砂糖(サタウ)となす作用(ハタラキ)を有するもの、

つ(津)圖舟のとゞまる處を云ふ、卽ちみなと㊁渡(ワタ)し場のコト、

づ(頭)圖頭(カシラ)のコト、とうの條を見られよ、かしら。あたま、

づ(徒)圖古の刑罰の一の名、にて、流刑(ルケイ)卽ち島ながしより輕くして、一定の年限內、相當の苦役(クエキ)に服さす刑、現行の懲役(チヨウエキ)又は徒刑(トケイ)に同じ、

づ(圖)圖繪圖(エズ)のづにて、とうに同じ、圖(ズ)の條を見られよ、

づ(豆)圖とうの吳音(ゴオン)、とう(豆)の條を見られよ、

(つづい)

つい圖思ひもよらず。思ひがけなき。はからず。意外(イガイ)。思はず知らずと云ふ意を表す語、

つゐ(追)圖おゐまくる。おゐかける㊁及(オヨ)ぶ。屬く。たつする㊂もとへもどる。さかのぼる、

つゐ(槌)圖器具の名、木にて造(ツク)られたる、かなづちの如きもの、卽ちつちのコトを云ふ㊁轉じて打つ。はたく。たゝく

つゐ(鎚)圖道具の名、かなづちのコト㊁鐵(カナ)又は鉛(ナマリ)にて造られたる球(タマ)の如き物、おもり、

つゐ(縋)圖うつコト。たたく、

つゐ(墜)圖なはのコト㊁紐(モモ)の太(フト)きもの㊂繩(ナワ)又は紐(モモ)を、上よりブラ下げるコト、又はブラ下げられたるひも。なは㊃すがる。すがりつく㊄轉じて力(チカラ)となす。たよる。たよりにす、

つゐ(墜)圖おちる。おつ。おとすコト㊁うしなふ。無くなす、

つゐ(椎)圖槌に通ず、つちのコト㊁なぐる。たゝく。はたく。うつ㊂曲(マガ)りもせず、ゆがみもせざるコトを云ふ㊃木の名、又たすねとも讀む、しゐの木のコト

つゐ(堆)圖うづだかし。土のもちがつてるコト、

つゐ(對)圖そろふコト、つがゐ㊁二個以上の物が、揃(ソロ)ふて一つとなるコト、卽ち二對(ニツイ)又は三對(サンツイ)など㊂向ふむかひふ㊃こたへ。こたふ㊄てき、

つゐ(對)(接尾)數詞の下に付けて、揃たる物を數(カズ)ふるに用ゆる語、

つゐおく(追憶)圖後(アト)なり思ひをこすコト、

「つきて下るコト

つゐか(縋下)圖取りすがつて下る。とり

つゐか(追加)圖後(アト)より足し增(ス)コトを云ふ、つけくはへる、

つゐかう(追考)圖過ぎ去りたる物事(コトヒト)に就きて考ふるコト㊁思案(シアン)たしなほすコト、

「條の見られよ

ついがき(築墻)圖築地(ツイヂ)に同じ、其の

ついかさね(衝重)圖器具の一種、古代用ひたる膳の一種にて、形三寶(サンポウ)に似たり、方形の塞の上に折敷(オシキ)を重れ載(モ)たるもの、

つゐかよさん(追加豫算)圖臨時に豫算外に、必用の生じたる時に、其の必要に應じ立てたる豫算のコトを云ふ、

つゐかやくそう(追加條約)圖定めたる條約に、尙ほ附け加へたる條約のコトを云ふ、

つゐかにふさつ(追加入札)圖一旦入れた札の金額を、後より增して別になしたる入札のコトを云ふ、

つゐき(追記)圖後より書き加(クワ)えるコト。かきたし、

つゐき(追騎)圖馬を馳(セ)て後より追ひかけるコト。馬で追ふ、

つゐきゆう(追求)圖どこまでも、おひもとむるコト、

「くコトを云ふ

つゐきゆう(追及)圖おひをよぶ、おいつ

つゐきゆう(追究)圖どこまでも調べきはめるコトを云ふ、

つゐきゆう(追笞)圖何處(ヨコ)までも詮議(センギ)だてをして、とがむるコトを云ふ

つゐく(對句)圖詩又は文章に同じ語數で同じ口調(クチ)の文句を二つ並べ列(ナラ)れたるもの、

つゐく(追驅)圖追ひかけて行くコト。後を追ふて走り行く、

「の條を見よ

つゐぐう(對偶)圖對句(ツイク)に同じ

つゐくわい(追懷)圖過ぎさりし物事、又は死したる人の事などを、思ひ出すコト、

つゐくわん(追完)圖成就(ジヤウジユ)させたる物事の、不備(フビ)なる點を、後(ノチ)よりおぎなふコトを云ふ、

つゐぐわん(追願)圖おひねがひ、

つゐけい(追啓)圖手紙に用ゆる語にて、おつて書の初めに書する語なり、

つゐげき(追擊)圖逃げ行く敵を後よりおつかけてうつコト、

「コトを云ふ

つゐげさ(鎚擊)圖鎚(ツイ)にて物をはたく

つゐど(對語)圖向ひ合つて話をするコト㊁對句(ツイク)に同じ、

つゐとう(堆紅)圖漆細工の一種にて、下に朱(シユ)の漆を塗り、其の上に黑の漆を厚く掛けて、朱の部(ヒヨコ)もまで、模樣(モヨウ)を刻りしもの、

つゐとく(堆圓)圖漆細工(ウルシ)の一種にて、全體(ゼンタイ)に漆(ウルシ)を厚く塗(ヌ)り、其の上に種々の模樣を薄く刻(キ)りたる物を云ふ、

「コト

つゐさう(追想)過ぎ去りし事を思ひ起す

つゐし(追思)圖思ひ出すコト、

つゐし(追賜)圖死後に下したまはる物。又は其のコト、

「コトを云ふ

つゐし(追諡)圖死後につけるをくり名の

つゐじく(對軸)圖つゐのかけもの、卽ち二幅對(ニフクツイ)のかけもの、

つゐしゆ(堆朱)圖漆細工(ウルシ)の一種に

て、全體に朱の漆を厚く塗り、其上へ模様を刻(ほり)りしもの、

つゐしよ(追書)圖文書や手紙の本文の末(すえ)に、かき加(くわ)えるコトを云ふおつてがきのコト、

つゐじよ(追叙)圖死者に、位(くらゐ)を贈(おくり)てほめるコト、後より褒美(ほうび)を與ふコトを云ふ

つゐしよう(追從)圖人の後より附きまとふコト㊁世辭(ゆ)を云ふ、へつらふコト

つゐしよう(追躡)圖逃ぐる後を、おひつめて行くコト、

つゐず(對)自動むかひ合つて並ぶ㊁互に相同(あなじ)しき、「ふコトを云ふ

つゐずる(追隨)圖人の後よりつきしたがふ

ついせき(追跡)圖逃げ行きし人の後(あと)を追ひかけて行くコト、

つゐせき(追惜)圖死したる人を、おしみいたむコト、

つゐぜん(追善)圖死者の成佛(ほとけ)を祈りて善き事をなすコト㊁死者の靈(たま)を慰(なぐさ)むべく、年回(ねんかい)を祭(まつり)に營(いとな)むコト、

つゐぜんくやう(追善供養)圖死したる人の靈魂(たましい)を慰むる爲めになす供養のコト、

つゐそ(追訴)圖追加して訴えるコト、おいうつたえ、

つゐそう(追送)圖足(あし)ざる物を後(あと)より送(おくり)るコトを云ふ、

つゐぞう(追贈)圖死後(しご)に位を贈りたまはるコトを云ふ、

つゐそん(追尊)圖死者の靈(たま)を、あがめたつとぶコト、

つゐたん(追儺)圖鬼やらひ豆垣(まがき)のコト、「トを云ふ

つゐたう(追悼)圖死したる人のコトを思ひ出して、いたみかなしむコトを云ふ

つゐたう(追討)圖賊軍をおひかけてうち平(たひら)らぐるコト、

つゐだけ(突丈)圖裁縫の語にて、布(ぬの)を其の人の着るだけの長さに裁ち切りて作りたるもの、コト、卽ち腰上(こしうへ)のなき、衣服(きもの)のコトを云ふ、

ついたち(朔)圖其の月の第一日のコト、

ついたて(衝立)圖まつすぐに立つてる物の總稱㊁つい立障子(しやうじ)の略語、衝立障子の條を見よ、

つゐだつ(追奪)圖をひかけ行きて、無理にうばふコト、

つゐたうし(追討使)圖天子の使者として賊徒を征伐に向ふ、總大將(そうたいしやう)のコトを云ふ、

つゐたうくわい(追悼會)圖死者に對し、追悼の情(こころ)を表はす爲めに行ふ會合、

ついたてしやうじ(衝立障子)圖襖障子の如く製せられたる物にて、臺あり隨意に持ち運びし得らるるもの、

つゐち(追馳)圖追ひかけるコト、

ついち(築地)圖垣(かき)の造り方の一種にて、卽ち屋根(やね)のある垣、板(いた)にて先づ屋根を作り、其の上に土を置き、其上を瓦(かわら)にて葺(ふき)たるもの、

つゐちく(追逐)圖追ひ行く、追ひ拂(はら)ふコトを云ふ、

つゐちん(追陳)圖追啓(ついけい)に同じ、

つゐちよう(追徵)圖後(あと)より足(たし)す前を、取り立(たて)るコトを云ふ、

ついて(就)副其れだに依て、其れゆえにと云ふ意を表はす語、

ついで(尋)副ひきつづひて、ま(間)もなしにと云ふ意を表はす語、

ついで(叙)他動物事の順序(じゆんじよ)を定(さだ)む、順序を正(ただ)しくする、

ついで(序)圖都合よきコト㊁順序(じゆんじよ)のコトを云ふ、

つゐてう(追弔)圖死したる人の靈魂(たましい)をとむらふコト、

つゐ(追儺)圖粗末なるかこひ、卽ちおにやらひ。まめがき、

つゐね(都維那)圖僧侶の官職の名、寺院にて事務を取り扱ふ僧、

つゐにん(追認)圖此れまで在りし事實(ことがら)を考へて、然(しか)りと認(みとめ)むるコトを云ふ、「り納めるコト

つゐのう(追納)圖不足の金額(きんがく)を後より納めるコト

つゐはい(墜廢)圖すたれたるコトを云ふ

つゐはう(追放)圖おひはなつおひやる㊁德川時代の刑罰(けいばつ)の一、所拂(ところはらひ)のコト、「うつコトを云ふ

つゐばつ(追伐)圖敵の逃(にが)るを追ふて

つゐばつ(追罰)圖あとより罰するコト㊁罰した上に尙ほばつすコト、

つゐばむ(啄)他動鳥が嘴(くちばし)にて、物をつゝきくらふ、

つゐび(追尾)圖跡(あと)をつけて行くコトを云ふ、卽ち追跡、

つゐびでんぼう(追尾電報)圖電報の受取人が、其の居處にあらずして、他へ移轉せる時に、其移轉先へ其の電報を送る手續(てつづき)を取りし電報、「ト

つゐふく(追福)圖追善(ついぜん)供養(くやう)のコ

つゐふく(對幅)圖二つ揃(そろ)ひ卽ち對(つい)になりたる掛物、卽ち對軸、

つゐへい(追兵)圖おひうちをなす兵士、追擊(ついげき)兵、

つゐほ(追補)圖後よりおぎなひ足(たし)す

つゐぼ(追慕)圖死したる人、又は遠方へ行きてあらざる人の事を、思ひ出して慕(した)ふコト、

つゐほ(追捕)圖惡者をおつかけゆきて、引つ捕(とら)へるコト、

つゐほし(追捕使)圖昔時賊徒(ぞくと)を征伐して捕ふる爲めに、國々に置かれたる役人の名、

つゐらく(墜落)圖おちるコト㊁おちこむコト、例ば土なごの、

つゐまい(堆埋)圖人を殺して、土の中へうづめ置くコトを云ふ、

ついまつ(續松)圖たいまつに同じ、

つゐみん(對廂)圖二つならべて置くコトを云ふ、「るコト

つゐみん(鎚鍊)圖鎚にて物を打ちきたゆ

つゐろく(追錄)圖後より記き足すコト、

(づつう)

つう(通)圖とゝこほりなきコト㊁物事を見通(みとお)し察する力(ちから)、神通力㊂其物事に就て、十分に心得てゐる力のあるコトを云ふ㊃人情(にんじよう)を能く察してコトを云ふ

追補(ついほ)した上に尙ほつすコト、

つう(通)(接尾)數字の下に附けて、手紙證書類を數(かぞ)ふるに用ゆる語、卽ち二通とか、五通(つう)とか、

つうあい(痛愛)圖取りわけて可愛(かわい)がるコトを云ふ、

つうあい(痛哀)圖いたくかなしみなげく

つういう(通有)圖一般の物に在る。總ての物に具(そな)はつてるコト、

つういうせい(通有性)圖何(なに)れにも此(この)にも具(そな)はれる性質、

つういふ(通邑)圖四方八方に通じてゐる邑(むら)。都會(とかい)のコト、

つういん(痛飲)圖大酒(おさけ)を飲むコト、ふか酒をのむコト、

つういん(通韻)圖其の語の音(おと)が、互ひに通じ合ふコト、

つういうせい(通有性)圖如何なる種類の物にても、必ずず具(そな)へてゐる性質(せいしつ)のコトを云ふ、「コト

つううん(通運)圖物品をはこびとゝくる

つううんくわいしや(通運會社)圖荷物の發送(はつそう)到着(とうちやく)を取り扱ふを業とする會社、

つうおん(通音)圖文法上の語にて、其のひらけたるを云ふ例ば通がるなどのるゐ、

語の音(オン)と音とが互ひに相通(カヨヒ)ふコトを云ふ、假令(タトヘ)ばツウコウと云ふがごとし、

つうかう(通行)図通り行くコト。過ぎ行く コトを云ふ

つうかく(通客)図通人(ツウジン)に同じ其の條を見られよ、

つうがく(通學)図我が家より學校へ通ひ學問を修(オサ)むるコト、

つうき(通規)図一ぱんにあてはまる規則のコトを云ふ、

つうぎ(通義)図一般の道理、

つうきよ(通御)図天子(テンシ)の御車(ミクルマ)の通らせたもふコト、

つうきん(通勤)図かよひつとめ、

つうきやく(通客)図通人のコト卽ち粋人(スイジン)のコト、

つうく(痛苦)図いたみくるしむコト。甚だしくくるしむコト、

つうく(通衢)図とうりみち往來。大道(オホミチ)のコトを云ふ、

つうくわ(通過)図通りすぎるコト㊁議事(ギジ)の議場(ギジヨウ)を通る、卽ち可決(カケツ)されるコトを云ふ、

つうくわ(通貨)図通用貨幣(ヘイカ)のコト、卽ち紙幣金銀貨のコト、

つうくわい(痛快)図非常に心持のよきコトを云ふ、

つうくわん(通欵)図欵を敵に通ず、卽ちひそかに好(ヨシ)を敵に通ずるコト、

つうくわん(通貫)図ぬきとうる。つらぬくコトを云ふ、

つうくわん(通觀)図一ト通り見る、目を通すコトを云ふ、

つうくわん(通患)図一般にうれふる。一般のうれひとなるコト、

つうけい(通計)図殘(コ)らずの〆高(シメダカ)卽ち總計。合計のコト、

つうげふ(通曉)図夜通(ヨドホシ)に眠らずにゐるコト㊁物事の道理に十分に達してる(タチ)コト、

つうけん(通券)図通行(ツウカウ)し得らる手形

つうげん(通減)図殘(コ)らずの數(カズ)より引き去るコトを云ふ、

つうげん(通言)図一般に行はれる言葉、誰にでもわかる言葉、

つうげん(痛言)図身にこたゆる言葉と云ふ意にて、物事をきびしく云ふコトを云ふ、

つうこ(通鼓)図太鼓を鳴して、全體(ゼンタイ)の者に合圖(アヒヅ)するコト、

つうご(通語)図世間一般に行はれる言葉(ヨウ)。通りことば、

つうこう(痛功)図すばらしい手柄(テガラ)㊁大なるいさほし、

つうこう(通好)図好(コノ)を通ずる卽ち交際(マジハリ)するコト、

つうこく(通國)図國中(クニウチ)、

つうこく(痛哭)図いたみかなしむコト。甚だしくなげくコト、

つうこん(痛恨)図くちをしがる㊁きびしくうらむコト、

つうさ(通差)図双方(ソウホウ)に通じたるちがひのコトを云ふ、

つうさつ(通察)図のこらず、卽ち全部を明瞭(メイレウ)に觀ぬ、知るコトを云ふ、

つうさん(通算)図殘らずの計算。全體の勘定のコト、

つうじ(通)図とうるコト、つうづるコト㊁大小便(ベン)の出るコト、

つうじ(通事)図物事の双方の間に通(カヨ)はすと云ふ意より轉じて通辯(ツウベン)のコトを云ふ、

つうしき(通式)図一般に用ひられる儀式(ギシキ)㊁廣く行はれる方式(ホウシキ)しかたのコト、

つうしん(通信)図音信を通ずるコト、卽「ちだより、おとづれ

つうじん(通人)図素人(シロウト)にして、遊藝(ユウゲイ)に達してる人のコト、

つうしん(痛心)図心を痛むと云ふ意にて心配する、氣にする、案(アン)じるコトを云ふ、

つうしやう(通商)図外國と互ひに商業をなげくコト、

つうしやう(痛傷)図いたむコト㊁いたみ「事情(ジヨウ)のコト

つうじやう(通情)図普通の人情㊁一般の

つうじよう(通常)図あたりまへ、常々の通りと云ふコト、

つうしよう(通稱)図一般のとなえ、卽ちとほり名のコト、

つうしんしや(通信社)図世間の中の出來事を知せる事を業とせる會社のコト、

つうしんゐん(通信員)図世間の中の新らしき出來事を通信する役の人、又は其を業とする人、

つうしやうきよく(通商局)図外國と通商の事を取り扱ふ一局、外務省内に在り、

つうず(通)自動物事を十分に心得てる㊁善く知つてる㊂とうる、かよう㊃太小便が出る㊄男女情をかよはす、

つうず(通)他動とうるやうにす、かよふやふにす㊁知らせる、告げる㊂いたす、とゞける、

つうせう(通宵)図夜あかし、

つうせき(痛惜)図いたみ、おしむ、

つうせつ(痛切)図取り分けてれんごろなるコト㊁其の事情(ジヨウ)に能くあて、はまつてるコト、

つうせん(通船)図かよひ舟、

つうそ(痛楚)図いたむコト、くるしむコト、困難(ナンギ)するコト、

つうそく(通則)図一般に用ひらる規則、全部の規則のコト、

つうぞく(通俗)図世間一般に通ずるコトを云ふ㊁上下の區別なく誰にでも能く解(ワカ)るコト、

つうぞくぶん(通俗文)図世間一般の人々に解るやふに易(ヤス)く書きたる文章、㊁手紙の文のコトを云ふ、

つうたち(痛悼)図他人の死したるを、いたみなげくコト、

つうたつ(通達)図物事を告げ知らせる㊁もれなく達するコト、

つうたん(痛歎)図いたみなげく。甚だしくかなしむコト、

つうち(通知)図告げ知らせる、

つうちし よ(通知書)図通知すべき事實(ヘウ)を認めたる文書(ブンシヨ)、

つうちやう(通帳)図かよひ(通)のコト。「トかよいちやうのコト、

つうてつ(通徹)図つらぬくコトをうすコ

つうてふ(通牒)図書面を以て、物事を告げ知らせるコト、

つうどく(通讀)図書物などを一ト通り、目を通すコトを云ふ、

つうば(痛罵)図はげしくのゝしる。きつうのゝしるコト、

つうはう(通報)図知らせのコト、

つうはう(通寶)図世間(セケン)に一般に用ひらるる寶(タカラ)、卽ち金錢のコトを云ふ

つうはふ(通法)図一般に通ずる方則。何にても間(マ)に合ふ定め、

つうふう(痛風)図病氣の名、關節(フシブシ)の痛む、永びく病氣、

つうふう(通風)図風を通すコト、風の通「(カヨ)ひ來るコト

つうふん(痛憤)図つよくいかる、

つうふうき(通風器)図風のかよはぬ處へ風を送る器械(キカイ)、せんぷう器のコトを云ふ、

つうへい(通弊)図一般が認(ミト)むる弊害「(ヘイガイ)のコト

つうべん(通辯)図通譯(ツウヤク)に同じ其の條を見られよ、

つうぼう(通謀)図はかりごとを互ひにし「めし合ふコト

つうやく(通譯)図外國の語を本國の語に直すコトを云ふ、

つうやくゐん(通譯官)図外國の語を本邦の語に直す役人又は官名のコト、

つうよう(痛痒)圖いたむとかゆきとのコトにて、即ち苦(クルシミ)を感ずるコトを云ふ、

「トを云ふ

つうよう(通用)圖一般に通じて用ゆるコ

つうようぐち(通用口)圖常に出入(デイリ)する入口のコトを云ふ、非常口に對しての稱、

つうようもん(通用門)圖常に出入する門

つうらん(通覽)圖殘(コル)らず、目を通して見(ミ)るコトを云ふ、

つうり(通理)圖通義に同じ、

つうりき(通力)圖神通力(ジンツウリキ)の事にて、如何(カイ)なる事にても、爲し能(タ)ふと云ふ偉大なる力、

つうれい(通例)圖あたりまへ、普通(フツウ)一般のコトを云ふ、

つうろ(通路)圖道路㊁凡て人の往(ユク)き來する道のコトを云ふ、

つうろん(通論)圖全體(ゼンタイ)に渡りたる議論㊁物事の道理が普く通りたる議論のコト、

「きびしき議論のコト

つうろん(痛論)圖はげしく議論するコト

(つづえ)

つゑ(杖)圖竹(ツク)又は木を三尺ほどの長さに切りたる物、之を手に持ち地面を突きつゝ、樂(ラク)に歩み得(エ)らるゝ用に供す㊁依賴(イライ)とす、力とす、たよりとするコト、即ち杖柱(ジヤウチユウ)の稱なり、

つゑつき(杖突)圖杖をつきて歩くコト㊁轉じて、杖をつきつゝ歩み行く老人のコトを云ふ、

つゑはしら(杖柱)圖つゑと、はしらと云ふ意にて、賴(ライ)にする。たよりにする力とするコト、即ち杖柱とたのむ、

つゑをひく(曳杖)圖杖をつきて歩くと云ふ意なり轉じて、其の處に遊び歩くと云ふコト、

(つづか)

つか(柄)圖エイのコト、刀劍(トケン)及び小刀(コガタナ)などの手に持ち握(ニギ)るところを云ふ㊁凡て握(ニギ)るべき物、ちくのコトを云ふ、

つか(塚)圖土(ツチ)を小高く盛り上げて標(シルシ)となしたる物を云ふ㊁土を小高く盛り上げて墓(カ)となしたるを云ふ㊂一般に墓、

つか(束)圖梁(ハリ)と棟(ムネ)との間などに、立てある細き小さき柱(ハシラ)、即ち束柱(ツカバシラ)の略㊂短少時間のコトを云ふ、即ち束の間(マ)など、

つか(束)(接尾)物の長さを計(ハカ)るに用ゆる語にて、一束は指(ユビ)を四本横(ヨコ)に並(ナラ)べたる長さのコト、

つが(栂)圖木の名、とがの木、

つかあな(塚穴)圖死者を葬むる穴。はかあな。墓のコト、

づかい(圖解)圖書物の中に畫、圖を入れて、本文中の解(カイ)り難き點(シテン)を補(オギナ)ひ助くるコト㊁一つの事柄の關係を、其れから其へと、線(セン)に引きて表(ア)はして、解(カイ)り易(ヤス)く爲したるものゝ稱、

づがい(頭蓋)圖頭蓋骨の略にて、頭のさらのコトを云ふ、

つかいと(柄絲)圖刀のつかに、飾(カザリ)として卷き付けて置く組糸(クミイト)のコトを云ふ、

「處を云ふ

つかかしら(柄頭)圖刀のつかの端(ハシ)の

つかさ(司)圖官所、役所㊁職務を勤(ツト)むるコト㊂かしら、長官、

つかさめ　柄鮫)圖ブツブツのある鮫(サメ)の皮を製して、刀(カタナ)の柄(ツカ)に卷きたるもの、

つかさどる(掌)(他動)役目を仰せつかつて

る㊁執(トル)り行ふ支配(シハイ)する、勤を取り扱(アツカ)ふ、

「する人。官吏

つかさびと(官人)圖公(オホヤケ)の職務に從事

つかに(津蟹)圖蟹の一種にて、多く川の石垣(イシガキ)の中に棲(スム)む、足及び鋏(ハサミ)に毛の多く生ぜるもの、

つかぬ(束)(他動)物を集めてたばねる㊁合せて一つとす、

つかのま(束間)圖わづかの間(マ)、暫(シバシ)しの間のコトを云ふ、

つかはす(遣)圖さしむける、あたえる、

つかばしら(束柱)圖棟(ムネ)と梁(ハリ)との間に、立つる小(チイ)さき柱、

つかひ(使)圖人に代りて、用を足す人㊁入用に用(モチ)ゆるコト、

つかひ(番)圖組(クミ)み合すコト、即ち關節(ツガヒ)㊁鳥獸の雌雄(メオス)を合せて一にして云ふコト㊂配偶(ハイグウ)のコトを云ふ

つかひて(使手)圖物をたくみに使ふ人、即ち名人(メイジン)㊁人を使(ツカ)ふ人㊂金錢を惜氣(ヲシゲ)もなく費(ツイ)やす人のコトを云ふ、

「に合ひし處の稱

つがひめ(番目)圖ちようつがひの、互ひ

つかひかた(使方)圖つかひやうのコト。

つかひ振(ブリ)のコト、

つかひなる(使慣)(他動)つかひつけたる。

用ひなれたる、

つかひびと(使人)圖使に歩く人㊁召しつ

つかひばと(使鳩)圖傳書鳩(デンシヨバト)のコトを云ふ、

つかひばん(使番)圖昔時本陣の命令を、諸方へ傳へに行きし人㊁其の月の使ひ歩きをする役の人、

つかひみち(使道)圖物を使用する仕方(シカタ)のコトを云ふ、

つかひもの(遣物)圖贈り物、進上物、

つかひとなす(運用)(他動)其の物をきように使ひ用ゆる、

つかひどころ(使處)圖其の物を使用するに最も相當せる場處、又は其の場合のコトを云ふ、

つかひならす(使馴)(他動)長き間使用して能く其の事になれたる、

つかひやつこ(使奴)圖小使男、

つがふ(番)(他動)つがはしむ組(クミ)み合す

つがふ(番)圖弓に矢をはさむ㊁云ひかはす、

つがふ(番)(自動)組み合ふ、二つ一所にする㊁めすとをすと一所になる、

つかふ(仕)(自動)役人となつて其の職務を執(トル)る㊁奉公する、

つかふ(使)(他動)役(ヤク)に立せべく用ゆる、

㊁人を動かして用を爲さしむ金をつひやす(因)物を食ふ、

つかふ(事)(自動)つかへまつる、即ち主君父母の傍(カタハラ)に侍(ハベリ)つて忠實に用事を行ふ、

つかふ(支)(自動)邪魔(ジヤマ)物ありて通(ツウ)じぬ㊁ささへ支(ツカ)へる㊂食物の腹(ハラ)に落ちつかぬ㊃ふさがる。どゞこうる

つかふくろ(柄袋)圖刀のつかにかぶせて置く小さき袋の稱、

つかへ(支)圖つかへるコト。ふさがるコ

つかへ(仕)圖奉公(ホウコウ)するコト、役に就(ツク)くコトを云ふ、

つかまつる(仕)(他動)つかへて仕事を爲す㊁忠を盡し孝をいたす、

「へる

つかまへる(捉)(他動)引つ捕へる、捕り押

つかみ(摑)圖器具の名、鐵にて造りたる熊手(クマデ)の如き物を、左右より抱(ダキ)き合せたるもの、此に紐を付て引けば、左右に別れ、放(ハナ)せば合す仕掛(シカケ)になつてるもの、井戸などへ落ちたる物を拾(ヒロ)ひ上ぐるに用ゆる具㊁物をにぎりつかむコトを云ふ、

つかみあひ(摑合)圖つかみあふ、

つかみあふ(摑合)(他動)互ひにつかみて爭ふ、即ち組打(クミウチ)する、

つかみだす(摑出)(他動)つかみて取り出す

㊀わけもなく取り出す、

つかみどり(摑取)圖物をつかみて取るコト㊁無雜作(ムザサ)に取るコト㊂むさぼり取るコト、

つかみころす(摑殺)他動つかんで殺す㊀無手にて容易く殺す、

つかむ(摑)他動物をつかみにぎる、

つかゆる(支)自動ふさぐ、さまたげる、

つからす(疲)他動勢(ホヒヒ)を弱(ワ)らせる、おとろへさせる、

つからかす(疲)他動よはらす、勢(ホヒヒ)のおとろえるやうさする、

つかる(疲)自動勢が失(ウ)せる、くたびれる、よはる、おとろへる、

つかる(浸)自動水の中に入(ハ)つてる、水の中に在る、

つかる(漬)自動つかつてる即ち水の中に在る㊁香の物善くつく、

つがるぬり(津輕塗)圖陸奥の津輕より製出する漆塗細工(ウカサイル)の一種にて、若狹(ワカ)塗に似たるもの、

つかれ(疲)圖つかれたるコト、

づかんそくぬつ(頭寒足熱)圖身體の順調(ヂウヨウ)なるコト、即ち身體の健康なるコトを云ふ、

(つづき)

つき(月)圖太陰(タイイン)のコト、即ち月球(ウ)㊁一年を十二に分ちたる一つ、大の月は三十一日、小は三十日となる、

つき(月)(接尾)數字の下に附け加えて月數を表はすに用ゆる語、即ち一ト月、二タ月など、

つき(槻)圖木の名、けやきの一種、

つき(壺)圖ゆきづまり、無くなるコト、しまゐになるコト、

つき(搗)圖つくコト、餅(モチ)などを、

つき(繼)圖つき布(フ)の略、即ち衣服の破れを補ふ布片(ヘン)、

つき(附)圖從がふコト、添(ソウ)てるコト㊁おとも、其人に從ふて種種の用事をなすコト㊂物に火の移(ウツ)るさまを云ふ、

つき(付)(接尾)或る語の下に附けて、其の語の有樣(ヤウス)を云ひ表(ワ)はす語、假令ば面付(ツラツキ)など、「コトを云ふ

つき(次)圖物の第二位㊁其の下につづく

つき(次)副其の後(ノチ)につづきて、其からに其れよりと云ふ意を表す語、

つきあぐ(築上)他動土又は石などを、小高(コタカ)く積み上る、

つきあげ(突上)他動下より上へ押し上げるやうにしてある戸、主(シウ)に店戸に用ゆ、

つきあたり(突當)圖ゆきつまりし所まで行きたるコト㊁物につきあたりしコト

つきあたる(突當)自動ぶつあたる、㊁行きつまる處まで進み行きたる、

つきあはす(突合)他動互(タガ)ひに向ひ合せて意見(イケン)を述(ノ)べさす、

つきあはす(繼合)他動つぎてつけあはす合せてぬふ、

つきあはせ(繼合)圖甲の物と乙の物とをつなぎ合すコト、

つきあぶ(突上)他動下よりつきて上へやる、おしあげる、

つきあし(繼足)圖ゴム又は木などにて作りたる足即ち義足(ギソク)、「るつきあつ(突當)他動思ふ處へつきてあて

つきあひ(附合)圖つきあふコト、

つきあふ(突合)他動互(タガ)ひに突きくらをする、

つきあふ(附合)自動互ひに、くつつき合つてる㊁人と交(マジ)はる、㊂其の人の意に從ふて、其の人と同一のコトを爲す

つきあかり(月明)圖月の光(ヒカリ)にて明(アカ)るき事を云ふ語、

つきあげど(突上戸)圖下より上へ押し上げるやうにしてある戸、主(シウ)に店戸に用ゆ、

つきあたり(突當)圖ゆきつまりし所まで行きたるコト㊁物につきあたりしコト

つきあたる(突當)自動ぶつあたる、㊁行きつまる處まで進み行きたる、

つきあはす(突合)他動互(タガ)ひに向ひ合せて意見(イケン)を述(ノ)べさす、

つきあはす(繼合)他動つぎてつけあはす合せてぬふ、

つきあはせ(繼合)圖甲の物と乙の物とをつなぎ合すコト、

つきいと(繼絲)圖つぎ物を爲す糸、

つきいる(突入)他動つき込む、

つきうた(次歌)圖元祿(ゲンロク)年間に流行(ハヤ)し歌にて、又た次節(ツギフシ)とも云ふ、

つきうす(春臼)圖米などをつく爲めの臼(ウス)、挽臼(ヒキウス)に對しての稱、

つきうるし(繼漆)圖物と物とを、つけ合すに用ゆる漆、漆(ウルシ)にうどん粉を混ぜて製したるもの、

つきえり(突襟)圖衣物の襟を殊更(コトサラ)に後の方へ突き出して着る、

つきおくり(月送)圖今月に爲すべき事を來月に廻しのべる、

つきおくり(次送)圖次から次へ順次(ジンジ)に送りやるコト回章(カイシヤウ)などの、

つきおくり(繼送)圖次から次へと受けつぎて、荷物などを送り運(ハコ)ぶコトを云ふ、「つきとばす

つきおとす(突落)他動ついて下へおとす

つきがき(築垣)圖築地(ツイヂ)に同じ、

つきがけ(月掛)圖一ケ月に幾計(イクバク)と定めて、掛金を爲すコトを云ふ、

つきかげ(月影)圖月の光(ヒカリ)の、其の影(カゲ)のコト、

つきかさ(月暈)圖おぼろ月夜に、月球(キウ)の周圍(シウイ)に表はるる輪(ワ)のコトを云ふ、「即ち半圓形(ハンヰエン)

つきかた(月形)圖弦月(ゲンゲツ)の形を云ふ、

つきかた(接方)圖接木(ツギキ)をなす其の方法(ハウホウ)のコトを云ふ、「てきづく

つきかふ(築替)他動きづきかへる、改め

つきかみ(繼紙)圖つぎ合したる紙、

つきかかる(突掛)自動せめかける、うちかかる、つかんと進む、

つきかはす(突交)他動二人以上、互ひにつきあふ、「ふコトを云ふ

つきかはり(月代)圖一月毎に、かはり合

つきかへす(突返)他動突きて後へかへす、㊁無理に押しへす、

つきかへす(突返)他動突きて後へかへす、㊁無理に押し戻(モド)す、

つきかんな(突鉋)圖突くやふにして削(ケヅ)る、かんな即ち又巾(ハバ)の廣くして其の兩端(ハシ)に、柄(エ)の附てる物、

つきき(接木)圖生(ナマ)てる木を臺木(ダイ)とし、此れに他の木の枝をつぎ合せて發育せしむるもの、「のコト

つききず(突傷)圖突きて受けたる疵(キズ)

つききり(附切)圖少しの間(マ)も、其の人の傍を立ち去らぬコト㊁其の人にのみ從(シタガ)ふて、其の人の用事のみを爲すコト㊂其の事にのみ力を盡(ツク)して、他の事には手を出さぬコトを云ふ、

つききれ(繼切)圖衣類の破損(ハソン)せし部分を、つくのふべく用ゆる布(ヌノ)、

つきくづす(突崩)他動つきて、くづけさせる、突きてこはす、「細かくする

つきくだく(搗碎)他動臼(ウス)にてつきて、

つきげ(月毛)圖馬の毛色の名にて、赤みを帶し色の毛、「て入れる

つきこむ(突込)他動押して入れる、つい

つきこむ(注込)他動水氣(スイキ)の物を器物の中へそそぎ入れる、㊁其の人に金錢を支出(シシツ)する、

つきこめ(春米)圖つき上げし米、即ち精米(セイマイ)のコトを云ふ、

つきこめや(春米屋)圖米をつきて賣る家又は米をつく人、

つきころす(突殺)他動ついて殺す、刺(サ)し貫(ツラ)ぬて死に致らしむ、

つきころばす(突轉)他動強く押してころがす、おしたをす、「うす

つきさす(突差)他動突きたてる、つきと

つきざほ(繼竿)圖釣竿(ツリザホ)の一種、つなぎ合して用ゆる物、

つきのさはり(月障)圖月經(ケイケイ)に同じ、即ち女子のつきやく、

つきざらひ(月復習)圖又た月淩とも書く毎月一回、もやふする遊藝(ユウゲイ)のさらつきか、つきき

えのコト、

つきしろ(月代)圖さかゆきのコト㊁額(ヒタヒ)に限り白き毛の在る馬のコトを云ふ、

つきしろ(月白)圖月の將に現(アラ)はれんとする時に、天空(ソラ)の白く光(カガ)れるコトを云ふ、

つきずへ(月末)圖月の終りの頃(ロロ)、卽ち二十七八日より三十日頃までのコトを云ふ、

つきそで(突袖)圖左右の袂(タモト)に手を入れて、袂を前へ突き出してるコトを云ふ、

つきそひ(附添)圖つきそふコト、又は其「の人」

つきそひ(附添)他動其の人に從ひて用事を爲す、

つきそひにん(附添人)圖附きそふてゐる「人(ヒト)」のコト

つきだい(接臺)圖接木(ツギキ)の臺(ダイ)となるべき木㊁せつぎ臺、卽ちふみ臺、

つきだし(突出)圖つき出すコト、

つきだす(突出)他動突きて外へ出す㊁初めて其の場へ出る、「る」

つきたす(撞出)他動釣鐘(カネツリ)を撞き初める、

つきたす(繼足)他動在る上へ尙ほ足し加える、

つきたつ(突立)圖つ立てるコト、

つきたつ(突立)他動物をさし込む、㊁强くつく、

つきたつ(繼立)他動宿場(シクバ)にて人足、又は宿馬などをつき替(カヘ)る、

つきたをす(突倒)他動つきてこかす、

つきたてば(繼立場)圖人馬のつぎ立をなす所、卽ち宿(シクバ)の立場(ハバ)、

つきたらず(月不足)圖胎兒(コドモ)が十月にならずして生れたるコト、

つきだしまど(突出窓)圖戸を突き開けるる樣に出來(デキ)えてある窓、

つきち(築地)圖川や海邊(ベリ)などを堤(ツツ)て宅地(タク)となしたるもの、卽ち堤立地のコトを云ふ、「ゆる語」

つきづき(月月)圖月ごとに云ふさまに用きつづきに、かはりがはりに、

つきつく(突付)他動目の前へ差しつける㊁無理にあてがふ、

つきつけ(突付)圖つきつけるコト、

つきつむ(突詰)他動押しつめる㊁物事をたしかめる、

つきて(繼手)圖物と物とを、つなぎ合(アワ)せたる部分(ブブン)のコト、

つきて(注手)圖酒などを注(ツ)ぎ入れる人㊁お酌(シヤク)する人、

つきてあて(月手當)圖月月に與ふる手當卽ち月俸(ゲツポウ)、

つきてつぼう(突鐵砲)圖子供の戲具、かみてつぽうに同じ、

つきとむ(突止)他動つきころす㊁つきつけて動(ウゴ)けぬやふにする、㊂確實(シカツカリ)「ぬく」

つきとうす(突通)他動物に物をさしつらなりと見屆くる、

つきとばす(突飛)他動力つよく押して、たをす、

つきねみ(月並)圖毎月(マイゲツ)月月(ツキヅキ)、

つきねほし(築直)他動改めてきづきかへる、きづきなほす、

つきなみくわい(月次會)圖毎月日を定めて會合する集會を云ふ、

つきなみのまつり(月次祭)圖陰曆(インレキ)六月及び十二月の兩度(リヤウド)に伊勢(イセ)の大廟(タイベウ)にて行はせられる神事のコトを云ふ、「きて孔(ナカ)をあける」

つきぬく(突抜)自動つきとうつてる。

つきぬく(突抜)他動つきとうす、つらぬく、「于(ホカ)などに云ふ」

つきぬく(搗抜)他動十分につく、多く圖

つきぬけ(突抜)圖つきとうるコト㊁此處(ココ)より彼處(カナタ)へ行き通ひの出來るコト、

つきぬきだんご(搗拔團子)圖むしたるまゝの團子、卽ち(しんこ)に對しての稱にて、搗きて餅(モチ)の如くになしたる團子のコト、「(槻)の條を見よ」

つきのき(槻)圖木の名つきに同じ、

つきのわ(月輪)圖滿月(ガツ)の形を云ふ㊁僧侶の用ゆる袈裟(ケサ)の飾(カザリ)となせる輪になつてる物、重(ヂユウ)に象牙(ゾウゲ)の類で製せらる㊂藁(ワラ)を輪形(ワガタ)に編(ア)て作られし釜敷(カマシキ)㊃熊(クマ)の咽喉(ノド)に在る牛月形の白き毛の部を云ふ、

つきのしづく(月雫)圖露(ツユ)のコトを云ふ㊁菓子の名、葡萄(ブダウ)の實(ミ)の干したるもの、砂糖の衣(コロモ)を掛けたるもの、「に滿ちて來る、うしほ」

つきのでしほ(月出汐)圖月が出ると同時

つきばえ(月映)圖月の光り輝(カガ)やく狀の麗(ウルハ)しきを云ふ、「(ツ)ひしコト

つきはて(盡果)圖のこらずなくなつて了

つきばな(淺)圖鼻水(ハナミヅ)。水ばなのコトを云ふ、

つきばん(月番)圖一月づつ、其の受持を定めて物事を爲すを云ふ、

つきはなす(突放)他動突きて向(ムカフ)へやる、つきさばす、

つきはらひ(月拂)圖一ケ月の終りに計算して其の月中にかりたる代金を支拂(ハラ)ふコトを云ふ、

つきひ(月日)圖太陽と太陰と㊁日(ヒ)の經(ヘ)るコト、卽ち光陰(クワウイン)、

つきびと(附人)圖附添人(ツキニン)、

つきひかい(月日貝)圖はまぐりの種類にて、大きく圓く、殼(カラ)の半分が赤き色をせる物、

つきひたい(月額)圖月代(ツキシロ)に同じ、其の條を見られよ、

つきしたがふ(附從)自動人の後(アト)より尾(ツ)き從ふて行く、

つきほ(接穗)圖接(ツ)ぎたる木の枝(エダ)の

つきまち(月待)圖陰曆の二十三又は二十六日の月の出を、寢(ネ)ずに見るべく待つてるコト、

つきまつ(繼松)圖たいまつの古語、

つきまたぎ(月跨)圖其の月中に仕事が仕切(シキ)ずして翌月へまたがりたるコト「ふてゐるコト」を云ふ、

つきまとふ(附纏)圖絕(タエ)ず附きしたご

つきまはり(月廻)圖月月にまはつて來て、吉凶(キツキヨウ)ある番㊁月の廻り來た工合(ヨウ)に依る景色(ケシキ)を眺めるコト、

つきみ(月見)圖秋の中旬に、月の冴(サエ)たる景色(ケシキ)を眺めるコト、

つきみぐさ(月見草)圖萩(ハギ)の別名、

つきみづき(月見月)陰曆(インレキ)の八月のコト、「異名」

つきみずつき(月不見月)圖陰曆の五月の

つきみのえん(月見宴)圖月を見ながら酒宴(サカモリ)を爲すコト、

つきめ(突眼)圖人物を表(アラハ)したる浮繪細工(サイク)の顏(カホ)に、其の目を墨にて描(カ)しものを云ふ、

つきめ(繼目)圖つなぎ合せたるところ、「コトを云ふ」

つきもち(搗餅)圖つき上げたる餅のコト「なぎ繼(ツ)ぎ」を云ふ、

つきもの(繼物)圖衣物の破れたるを、つ

つきもの(附物)圖或る物に附屬してるもの㊁或る物に必ならず無くてならぬ物假令ば德利に盃の類㊂附きまとふてる人㊃附きまとふて祟(タタリ)をなす靈魂(レイコン)のコト、「する家、又は其の人」

つきや(春屋)圖來を搗(ツ)くコトを業と

つきやく(月經)圖女子に在るなる月のもの、卽ちふじやうのコト、

つきやま(築山)圖土を盛り上げて、庭に出來(デキ)たる小山(コヤマ)、

つきやる(突遣)他動ついてわきへやる、おしのける、

つきやとひ(月屋)圖一ケ月に付き若干(ヤ)

ぢの手當と定めて人を雇(ハ)ふコトを云ふ、

つきやぶる(突破)他動つきてそこねさす

つきよ(月夜)圖月の出てる夜(ヨル)、

つきよがらす(月夜鴉)圖月の冴えたる光(ヒカリ)を見て、夜明(ケア)なりと思ひて鳴く鴉のコト、

つきわり(月割)圖或る當(ガ)を月に割り

づきん(頭巾)圖布(ヌノ)又は羅紗(ラシヤ)にて作られたる被(カブ)り物、

（つづく）

つく(鈗)圖弓術の語にて、弓へ矢をつける、其の塲處の印(シルシ)として、弓の中央(ナカバ)に打ちつけある、金具(カナ)のコト、

つぐ(桃榔)圖暖國に生ずる樹の名にて、棕櫚(シユロ)の一種、木質(ヒモノ)は殊に堅くして美しきに依り、種種の器具を製するに用ひられ、其の毛皮(ケガワ)は、亦た棕櫚の其の如く、亦た種々の器具として用ひらる、

づく(豆蔻)圖木の名、葉は長き卵形(ナガタマゴ)にして、周圍は鋸(ノコギリ)の齒(ハ)の如く裂け、花は五瓣(ハナビラ)にして、絣(カスリ)がかりし黄色を呈す、實は龍眼肉(リヤウガン)の如くにして、一種の香氣を發す、味(アジ)は辛(カラ)し、之を干(ホ)して藥用(ヤクヨウ)とす、即ち豆肉蔻(ズクク)是なり、

「ろ(臭)

づく(木菟)圖みみづくのコト、即ちふくろ、

つく(附)自動とどく、達す㊁くつつき合はす、よく合ふ㊂從ふ、添ふ、かしづく㊃のりうつる㊄つたはつて行く、より添ふて行く㊅知らる㊆直打(チヨウ)する㊇火が燃(モエ)る、火が物に移る㊈はじまるかかる即ち病附(ヤミツ)など㊉植木(ウエキ)が枯(カレ)すに芽(メ)を出す、植木がつく、

つく(附)他動又は着の字を書く、つけ合す、くつつかせる㊁そそぐ即ち氣を附るなど㊂屆(トド)く達(タツ)する㊃從(シタガ)がはす㊄後を追ふて行く、おひかけて行く㊅書き止める、しるす㊆坐(ヲス)らせる即ち座につかせる㊇火をもやす、火を物にうつす、即ち火をつける㊈從ひ學(マナ)ばせる、即ち師に附くなど㊉味方(カミ)につける仲間へ入れる、

つく(吐)他動口(クチ)より物を外へ出す㊁聲を出して物事を語る、

つく(漬)自動水につかる、水にぬれる㊁香の物著(ツ)くつかりたる、

つく(漬)他動物を水の中へ入れてひたす㊁香の物をつける、

つぐ(繼)他動後(アト)をうける、即ち相續(ソウゾク)㊁前の物事を傳(ツタヘ)られ受ける㊂破(ヤブ)れたるを縫ひ合す㊃足らざるを補(オギナ)ふ、增し加(クワ)える、假令ば炭(スミ)を繼ぐ、

つく、盡(自動)形をとめぬ、なくなる㊁終

つく(盡)(接尾)或る名詞に添えて、精(セイ)一ぱいあらん限りと云ふ意を表す語、假令ば金盡(カネヅク)相談盡(ソウダンヅク)、

つく(搗)他動臼(ウス)の中へ物を入れて杵(キネ)の端(ハシ)にて打ち碎きてかたまらする、

つく(撞)他動杵(キネ)を動(ウゴ)かして、其の尖(サキ)を鐘(カネ)に突き當て音(オト)を出さしむる、

「狐が遷くなど

つく(遷)自動身體にのりうつる、假令ば

つく(就)自動師に從ふて學ぶ、㊁職業の道を得る㊂勤務(ムヤク)に取りかかる、即ち官に就く、又は役に就くなど、

つく(即)自動天子の御位に登られ給ふ、㊁座席にすはる、

「價をきめる

つく(値)自動直打(チヨウ)ある、あたいする

つく(突)他動勢ひつよく當(アタ)る㊁吐(ハ)く、假令ばヘドを突く、又は嘯(ウソ)を突くなど、

つく(衝)他動突(ツク)に同じ、

つく(築)他動きづく、こしらへる、

つぐ(告)他動物事を他人に云ひ知らせる

つぐ(次)自動後につづく、下(シタ)につく、次(ツギ)にしたがふ、

つぐ(注)他動たらしこむ、そそぎ入る、

つぐ(接)他動はなれたる物をつなぎ合す

折(オリ)たる物をつぎ合す、即ち接骨など

づくいも(佛掌薯)圖つくれ芋のコト、つくれいもの條を見よ、

つくえ(机)圖木にて製せられたる臺(ダイ)にて、其の形狀(カタチ)種種あれども、多くは長方形か、四角形とす、書を讀み文字(モジ)を書き、食事(タベモノ)を爲すに用ゆ具、

つくし(盡)(接尾)或る名詞に付け加えて其の物の一部類を殘らず上げたる意を示すに用ゆる語、假令ば苗字盡(ミヤウジヅク)、魚(サカナ)盡など、

つくしごと(築紫琴)圖現今俗間(ゾクカン)に於て盛んに用ひられてる、十三弦(ゲン)の琴(コト)のコト、

つくす(盡)他動力だけの事をす、骨を折る㊁なくす、むなしくす、

づくせん(銑錢)圖銑鐵を以て造りたる錢にて、即ち ナベ錢(セン)、

つくだ(佃)圖耕(カタ)やす田地、つくり物をなす田地(ヂチ)のコトを云ふ、

つくだに、佃煮圖小さき魚を其のまま醬油にて、煮き詰めたる物、

つくし(土筆)圖草の名、春に於て芽(メ)を出す、筆(フデ)の如くにして、節(フシ)のあるもの、茹(ウデ)て食す、

つくつくぼふし(寒蟬)圖虫の名、蟬(セミ)の一種にて、秋の末より冬の初へかけて、日暮(ヒグレ)に鳴く、小さき色の黑き虫、

づくてつ(銑鐵)圖鍋(ナベ)釜(カマ)を造る材料(ザイリヤウ)となる物にて、鐵を溶(トカ)して鐵分(テツブン)のみと、せしもの、

づくとりのしき(木菟鳥島)圖九州筑紫(ツクシ)の異名、

「物をこしらへる

つくねる(捏)他動手にてこねて、種々の

つくねいも(佛掌薯)圖やまの芋の一種にて、其の根、殊に大きく、味(アジ)亦た美なり、

つくねんきやう(泥人形)圖土をつくねて細工せし粗末(ツマ)な人形、

つぐのひ(償)圖つぐのふコト㊁うめあはするコト、

つぐのふ(償)自動人に代(カ)りて相當の賃金を得て仕事(トシゴト)をす、

つぐのふ(償)他動品物又は金錢を出して まどふ、㊁金錢を出して自己(ヨノ)の過失(シツ)をうめあはす、

つぐのひきん(償金)圖つぐのひの爲めに差し出す金錢(カネ)、

つくばね(衝羽根)圖深山に生ずる小さき木の名㊁はねのコト、女子の翫具(ヤウグ)の一、

「くばるコトを云ふ

つくばひ(蹲)圖つくばふコト、即ち平つ

つくばふ(蹲踞)自動うづくまる、平(ヒラ)つくばる、しやがむ、

つくぼう(突棒)圖昔時用ひし、罪人を捕ふる道具の一鐵にて、撞木(シモク)の如き形に造りたる物に、多くの齒を附け、之を長き棒の柄に取り附けたるもの、逃げ行く罪人の衣物にからめつかせて、倒(タオ)して捕ふなり、

つぐみ(鶫)圖小鳥(コトリ)の名、燕(ツバメ)に似たる鳥にて、山中の穴に棲むもの、

つぐむ(噤)他動口をおさへて物を云はぬだまつてる、

つくもがみ(篷髮)圖年老ひたる女の白髮(シラガ)のコトを云ふ、

つくよ(月夜)圖つき夜の訛り、

つくり(作)圖こしらへるコト。製造するコト㊁物をこしらへ上たる其の體裁(ナリ)㊂化粧(ケシヤウ)など施したるの其のありさま、例ば男作(ヲトコヅクリ)など㊃作身(ツクリミ)の略即ちさしみのコト、

つくり(造)圖物をこしらへるコト㊁家などをたてるコト、

つくり(旁)圖漢字の扁(ヘン)に對しての稱にて、例ば作の(乍)、又は位の(立)などのコトを云ふ、

「ろどりたる畫

つくりゑ(作繪)圖彩色を施したる畫。い

つくりじ(作字)圖我國にて作りたる漢字(カンジ)のコト、

つくりて(作手)圖物を作りたる人、物を作る人㊁轉して百姓のコト、

つくりな(作名)圖勝手(カツテ)につけたる名即ち號名(ナヅ)、僞名(ハイヨ)、

つくりみ(作身)圖料理の一種魚肉の身と皮を去りて、細かく切りたる物、即ちさしみのコトを云ふ、

つくりかた(作方)圖こしらえやう製作の仕方(シカタ)㊁こしらへたるさま、

つくりかは(作皮)圖なめしがわのコトを云ふ、即ち革(カハ)、

つくりかふ(作替)他動一旦(タン)こしらへし物を、再ひこしらへ直す、㊁人の作りし物にまれて作る、

つくりかへ(作替)圖つくりかへるコト又た作りかへられたる物、

つくりどえ(作聲)圖故意にこしらへて出した聲㊁我が聲音(ヒトヅ)を匿(カク)して、他人の聲を出すコト、

つくりごと(作事)圖こしらへ事、ありもせぬ事をあつたやふに云ふ、

つくりだす(作出)他動物事(コトノ)をこしらへ出す㊁野の物をつくる、

つくりたち(造太刀)圖竹に銀紙などを貼(ハ)りたる刀㊁木にて作りし刀、即ち木刀(ボクトウ)、

「こしらへたてのコト

つくりたて(作立)圖出來上りたるばかり來ざるやふに作りしコト、

つくりつけ(作附)圖物を取りはずしの出

つくりつち(作土)圖田畑の表面に在る軟(ケ)らかき土を云ふ、

つくりとり(作取)圖田畑に作りたる物が全部我が所有となるコト、

つくりなき(作泣)圖かなしからざるに、故意(ワザ)に泣くコト、

つくりばな(造花)圖帛(ハク)又た紙にて、天然の物の如くにこしらへたる花のコトを云ふ、

つくりひげ(作髭)圖つけ髯のコト、

つくりもの(造物)圖凡て人の力に依りこしらへられたる物の稱、

つくりもの(作物)圖田畑に植付(ウヱツ)られて出來たる物の總稱㊁祭禮(レイ)などの時に、工夫(クフウ)してこしらえし飾物(カザ)の稱、

つくりより(造樣)圖凡て物をこしらへ上げたる有樣(サマ)、出來工合、

つくりさいし(作才子)圖才子らしくみせかけてる人のコトを云ふ、

つくりざかや(造酒店)圖酒を釀造(ジヤウ)して、販賣するを業となす家。釀造家のコトを云ふ、

つくりばなし(作話)圖事實ならぬ事を、實(マコ)らしくつくりたる話、

つくりぼとけ(作佛)圖木にて製作せる佛像(ゾウ)のコトを云ふ、

つくりわらひ(作笑)圖おかしくもなきにおかしとして笑ふコト、即ち追從(ツイシヨウ)笑のコト、

つくりびやうき(作病氣)圖病氣でもなきに、病氣の體(テイ)をよそふ、即ちけびよう、にせびやうき、

「しに同じ

つくりものがたり(作物語)圖つくりばな

つくらふ(繕)圖物事をつくらふ、

つくらふ(繕)他動損(ソン)したる物を、おぎなひ直す㊁毀(コワ)れし物を、おぎなひ直す㊂とりなす、

つくる(作)圖つくりたる物つくりたるコト。こしらへるコト、

つくる(作)他動物をこしらへる㊁詩歌文章をこしらへる㊂書籍こすべき原稿を編(ヘン)み、又は著(チヨ)はす㊃田畑(ハタケ)に物を植へそだてる㊄いとなむ㊅いつはりの物事を爲す、假令ば作病(ヨウビ)など、

つくる(造)他動作に同じ、

づくわ(圖書)圖畫(エ)と圖(ヅ)、

（つづき）

つけ(附)圖勘定書のコトを云ふ、

つげ(告)圖云ひ聞かすコト、物事を知らすコト㊁神佛の靈驗(レイゲン)、即ち神のお告げ佛のお告げなど、

つげ(黃楊)圖木の名、卵形(タマゴ)の葉を有し、其の緣(リヒド)色四時變(ヘン)するコトなく、春の末(ベ)に小さき白色の花を咲かす、其の木質(モクシツ)は白色にて頗る堅し、故に印材(ヰイン)小間物の細工に用らる、

つけあひ(附合)圖俳諧(ハイカイ)の體(タイ)に附け合する連歌(レンガ)のコト、

つけあはす(附合)他動そへなへる、つけそへる、一所にならべる、

つけあはせ(附合)圖つけあはすコト、つけ合したるもの㊁料理にて魚肉に野菜(イヤサ)を添(ツ)へて、一皿(サラ)に盛たる物のコト、

つけいし(附石)圖かれつけ石、

つけうめ(漬梅)圖鹽漬となしたる梅(ウメ)、梅干(ホシ)のコトを云ふ、

つけうり(漬瓜)圖白瓜(シロウリ)のコト㊁白瓜を鹽漬になしたる物、

つけかけ(附掛)圖通帳(チヨウ)又は書附(カキ)などに、實際(ホウ)より餘分(ヨブン)に金額(カネ)の附けてあるコト、

つけがみ(附紙)圖文書(ブンショ)中の注意(チウイ)すべき處、又は不審(フシン)なる處に附(ツケ)て置く紙㊁注意すべく爲めに下げて置く紙のコト、即ち附箋(フセン)のコトを云ふ、

つけがみ(附髮)圖入れ毛のコト、

つけからう(附家老)圖德川時代に將軍家より一族(ヤカラ)の大名へ、又は大名より分家の大名へ、監督(カントク)として差し向け置し家老の稱、

つけぎ(附木)圖たき附に火を移(ウツ)す用を爲す物にて、木を薄(ウス)くそぎ、細長く小さく切りて、其の尖(サキ)に硫黃(リウワウ)をつけたる物、

つけぎや(附木屋)圖附木を拵(コシラ)へて

る人、又は附木を賣る人、

つげぐち(告口)圖他人が秘密(ヒミツ)に爲し居る事を人に告げ知らせるコトを云ふ

つげぐし(黃楊櫛)圖黃楊の木を材料(ザイレウ)として作(ツク)りたる櫛、

つけぐすり(附藥)圖外用藥のコト、ぬり藥のコトを云ふ、

つけこみ(附込)圖つけこむコト、

つけこみ(突込)圖つけこむコト、

つけこむ(附込)自動或る機會(キカイ)に乘じて我の利益を圖(ハカ)る、

つけこむ(漬込)圖香の物を澤山につけて

つけさし(附差)圖我れの持てる盃(サカヅキ)又は煙管(キセル)などを人にやるコトを云ふ

つげさとす(告諭)他動いひ聞かす、さとし聞かせる、

つけじろ(附城)圖本城(ホンジヤウ)に附屬(ツク)せる城のコトを云ふ、

つけじやう(附狀)圖そえ手紙、

つげしらす(告知)他動知らせる、

つけそへ(附添)圖或る物に或る物を附け加える、㊁附添人(ヒトビト)の略㊂附き添ふコト、

つけたし(附出)圖帳簿(チヨウボ)又は書附(カキツケ)の書き初めのコト㊁賣掛(カケ)代金の請求書(セイキウ)のコト、

つけたり(附)圖つけ加へられてあるコト㊁つけ加へるコト㊂とは云ふもの、

實(ツ)はうそなりと云ふコトを、云ひ表はす語、

つけたり(附)〈接〉其れに加へて。ついでに、即ちつけたり、何々など、

つけぢえ(附智惠)図他人に智惠(チエ)をつけられるコト、又は其の智惠、即ち入れ智惠、

つけどころ(着所)図手をつけべき所。着手(カカリ)るべき所㊁肝心の所、即ち着目點(チヤクモ)、

つけとどけ(附届)図一定の時期を定めて品物又は金錢などを、贈(ヤ)り與(ヤ)ふるコト。心づけ、

つけな(漬菜)図鹽漬(ガシホ)となしたる菜(ナ)㊁鹽漬となすべき菜㊂唐菜(トウナ)のコト、

つけね(附直)図買手(カヒ)の方よりつけた

つけね(附根)図幹(ミキ)より枝(エダ)の出たる其の處の稱、

「價(アタ)のコト

つけねだん(附直段)図買ひ手の附けたる

つけねらひ(附狙)図油斷(シユダ)せずに、ねらひ居るコトを云ふ、

つけはな(附鼻)図鼻の損じたる人の用ゆべく爲めに、造(ツク)られたる人工の鼻のコト、

「(ツル)かに住宅へ火を放つ

つけび(附火)図放火(ホウク)のコト、即ち物

つけひげ(附髭)図作られたる髭、之を上あごに附けて用ゆ、

つけひと(附人)図其の人の守(マモ)をなすべく、附き添ふ人の稱、

つけひも(附紐)図子供(コドモ)の衣服に縫ひ付けてられある紐、

つけびやうし(附拍子)図芝居道(シバイ)の語、役者の立ち廻(マワ)などを爲す時に、拍子木(ヒヨウシギ)を叩きて其の足拍子(ヨウシビ)を合するコト、

つけふだ(附札)図ぶらさげて置く札㊁つけ紙附箋(シセン)のコト、

つけふみ(附文)図男女のこひ文、即ちいろふみ、艶書(エンシヨ)、

つけまげ(附髷)図種々の髷の形を作りたる物、髪に結び附けて用ゆ、

つけもの(漬物)図神社の祭禮にこしらへるかざり物の稱、

つけもの(漬物)図大根(ダイコン)菜(ナ)などを鹽漬(シホヅケ)になしたる物、

つけものをけ(漬物桶)図漬物をなすに用ゆる桶のコト、

つけやき(附焼)図料理の一種にて、魚類の切り身に、砂糖醤油又は味淋(ミリン)醤油を附けて、炙(アブ)りたるもの、即ちて

つけやきば(附焼及)図つき智惠(チエ)、入れ智惠のコト、

（つづこ）

つづこ(都合)図のこらずで引つくるめてと云ふ意を表はす語、

つづこ(都合)図てはづ。打ち合せ。だんどりのコト㊁塲合(バアイ)。其の折(オリ)㊂成行(ナリユキ)のコト、

つづこもり(晦)図月ごもりと云ふ意より轉じ來りし者にて、月の全く光(ヒカリ)を放(ハナ)たざる日のコト㊁太陰暦(タイイン)の月の終りの日のコト、又たみそかとも云ふ、

づざい(徒罪)図昔時の刑名、一定の年限内苦役に服さす刑現行の懲役に同じ、

（つづさ）

づざん(杜撰)図著作物(チヨサクブツ)や詩、歌などに念を入れずして作りたる爲め、間違(マチガ)多く、且つ正しき文字事實(コトジツ)等の用ひられてあらぬコトを云ふ、

（つづし）

つじ(辻)図道路の曲(マガ)り角㊁道路の交叉(コウサ)してる處、四つ角(カド)、

づし(廚子)図書畫(ガカ)又は日用品を入れて置く棚(タナ)のある厨(ズ)㊁佛像(ブツゾウ)を納め置く、眉く長くして扉(トビラ)のあるもの、

つじ(旋毛)図渦(ウズ)の巻いてる如くに生

づし(途子)図本道路(ホンドウ)の左右に在る、小さき路、

「商賣せる商人

つじあきなひ(辻商)図道路に店を出して

つじうら(辻占)図小さき紙に種々の文句(モノ)を記せし物を、澤山(タクサン)の中より取り出して、其れを見て吉凶禍福(キツキヨウカフク)を判斷(ハンダン)するコト、

つじうり(辻賣)図大道商賣(アキナ)のコトを云ふ、つじあきうど、

つじうらなひ(辻占)図往來にゐて、通行人の吉凶禍福を占(ウラナ)ひ、商賣とせる人、

つじかぜ(旋風)図つむじ風、

つじかため(辻固)図道の辻々に見張(ミハリ)をしてゐるコト又は其の人、

づしき(圖式)図畫圖(ズ)にて物の形を表(カタ)はし示せるもの、

つじぎみ(辻君)図ちごくいんばい、

つじぎり(辻斬)図昔の野蠻人(ヤバンジン)が、新刀の切れ味(アジ)を試(ココロ)さんとて、辻に匿(カク)れてゐて、通行人を突然(トツゼン)に切りつけるコト、

つじぐるま(辻車)図辻に客待をしてゐる人力車のコトを云ふ、

つじとうしやく(辻講釋)図往來に立つて講釋せるを業とする人、大道講釋のコトを云ふ、

つじしばゐ(辻芝居)図臨時(リンジ)に假小屋を掛けて、爲す、下等の芝居。こじきしばゐのコト、

つじずまふ(辻相撲)図街道筋に假小屋(カリゴヤ)を掛けて、爲す相撲(スモウ)、

つじだう(辻堂)図往來(オウライ)傍に在る、小さき佛堂(ブツダウ)のコト、

つじばん(辻番)図德川時代に町の辻に設(モウ)けられてある番所のコト、現今の派出所の如きもの㊁こたつのコト(ばんどころ)、

つじばしや(辻馬車)図往來(オウライ)に客待(マチ)をしてゐて、客を乘せる馬車のコトを云ふ、

つじばんところ(辻番所)図德川時代に江戸市中の、大名の門外に、小屋(コヤ)を設けて、往來の取締(トリシマリ)をなす役人の居た所、

「て置く番附

つじばんづけ(辻番附)図辻々に張り出し

つじばんにん(辻番人)図辻番所にゐて番をする人、

づしほとけ(廚子佛)図廚子の内に安置(アンチ)されてある佛像(ブツゾウ)、

つしまと(對島砥)図剃刀(カミソリ)を研(ト)ぐ砥石(シイ)の一種にて、對馬より產す上等のもの、

つじまつり(辻祭)図昔時道傍(ミチバタ)の小社(コヤシロ)にて、道を守らせる神、即ち道祖神の祭をなせしコト、

つじみせ(辻店)図大道店(オオミチダナ)、

づじやう(頭上)図あたまの上、

つじやしろ(辻社)図街道(カイダウ)筋に在る小さな祠(ホコラ)のコト、

「を云ふ

づしよ(圖書)図畫圖(ズ)と書物とのコト

づしよくわん(圖書館)図廣く内外の圖書を備へ置きて、一般の人々の閲覽(エツラン)に供する處、

（つづた）

つた(蔦)図草の名、墓(ボ)の如く其莖(ソノクキ)

は細く長く延(ノビ)て、樹(キ)又は壁(カベ)にからみ附くもの、其の葉(ハ)は掌(テノヒラ)の如き形をなして、幾個(イクツ)にか裂(サ)け薄黄色(イウロイイロ)にして、夏に開く、而して葉は秋に至れば、楓(カエデ)のごとく紅葉(コウヨウ)して麗(ウルハシ)し、

つた(沙羅)図又た寸羅とも書く、壁土(カベツチ)の中へ塗(ヌ)りたる、其の土の落(チ)ざるために、藁(ワラ)又は麻(アサ)を細(コマ)かく刻(キザ)みて入れる其物を云ふ、卽ちスサのコト、

づた(頭陀)図僧侶が修業のために、金錢の他力(タリキ)を受けつゝ、旅行するコト又は其の僧侶、

つたし(津出)図港より舟を出す、

つたなし(拙)図下手(ヘタ)なり、まづし㊁にぶし、のろし㊂勇氣なし㊃運(ウン)わるし

つたはる(傳)自動受けつぐ、うつり行く㊁物に沿(ソ)つて動き行く、

づだぶくろ(頭陀袋)図頭陀(ズダ)の僧が雜物を入れて頸(クビ)に掛けて歩く袋㊁死したる人の頭に掛け置く袋のコトを云ふ、

つだみ(口吐)図赤兒(アカゴ)が飲みたる乳汁(チチ)を吐き出すコト、

つち(槌)図物を打(ウ)く道具、柄(エ)の先に横(ヨコ)に圓き物をつけたるもの、鐵製の物を金槌(カナヅチ)と云ひ、木製の物をさい槌と云ふ、

つち(土)図地球(チキウ)の外皮(ソトカワ)、卽ち地球の外面を形成(カタチ)つてる岩石(ガンセキ)、土塊(ツチクレ)の類㊁地球表面の岩石などが自然に粉(コナ)となりしもの、稱、

つち(地)図天に對して地の稱、卽ち天地(アメツチ)の、つち、

つちあな(土穴)図地面に掘りたる穴のコト

つちゐ(土居)図土を積み重れて造りたる壞(ヘイ)、どべい(土塀)、

つちいろ(土色)図染色(イロドリ)の名、土の如き色合(アイロ)のコトを云ふ、

つちかど(土籠)図土を入れて持ちはこぶ「かご」

つちかべ(土壁)図土にて塗りたる壁のコト、

つちきみ(土公)図土の神、卽ち土公神(ドクジン)のコト

つちくも(土蜘蛛)図蜘蛛(クモ)の一種にて、樹の根(ネ)、土の中などに巣(ス)を作りて、樓(ロウ)えたる頭の大きなる體の獲(ヤ)たるもの、色は黒く赤し㊁古穴の中に住ゐたる、性猛惡なりし野蠻人(ヤバンジン)の一族(ヤウ)の名、

つちくら(土倉)図土を塗りたる倉(クラ)㊁地面を掘つて物を入れる處とせるもの卽ちあなぐら、

つちくれ(土塊)図土のかたまりたる物㊁「墓(ハカ)の別名

つちくさし(土臭)図土のやふなる臭氣と云ふに用ゆ、

つちぐるま(槌車)図紋所の名稱、

つちぐろし(土黑)図其の色が土の如く黑きさまに云ふ語、

つちけむり(土烟)図砂(スナ)ぼこりの高く、烟の如くに上(アガ)るコト、

つちとね(土捏)図壁(カベ)に塗るべく、粘土(ネバツチ)をこねるコトを云ふ、

つちとふ(培)他動草木の根に土をかぶせて養ふ、卽ち草木をそだつる、

つちさいく(土細工)図土にて造(ツク)りたる樣々(サマザマ)の物、

つちせい(土製)図土を原料として製したるもの、又は土を原料として物を作(ツク)るコト、

つちつま(條理)図俗語にて、物事の道理(ダウリ)成行(ナリユキ)理屈(リクツ)のコト、

つちど(土戸)図土を厚く塗(ヌ)り付けし

戸、土藏の戸前、又は窓(マド)などに用ゆる戸、

つちなべ(土鍋)図土を燒きて造(ツク)りたる鍋(ナベ)、卽ち陶器製なべ、

つちならし(土均)図土塊(ツチクレ)を割り碎(クダ)きて平らかにならす、

つちにんぎやう(土人形)図土にて細工されたる人形、

つちのえ(戊)図十干の五番目、

つちのと(己)図十干の六番目、

つちばし(土橋)図土をしきたる橋、どば「し」

つちばち(土蜂)図蜂の一種にて、あなばちのコト、

つちばらひ(土拂)図車に泥(ドロ)のかゝらぬやふになせる器具(キグ)の名、どろよけのコト、

つちぶね(土船)図土をはこぶ船のコト「云ふ

つちふまず(土不踏)図足の裏の中央(ナカヤウ)の凹(ヘコ)みたる處を云ふ、

つちふるひ(土篩)図土をふるひ分(ワ)るに用ゆる荒目のすいのう、

つちほこり(土埃)図砂(スナ)などの風に吹き上られし物の稱、

つちほたる(土螢)図螢の子の未だ翼(ツバサ)の生ぜざる時の稱、

つちほとけ(土佛)図陶器製(トウキセイ)の佛像(ブツゾウ)のコトを云ふ、

つつ(宛)(接尾)數字の下に附け加えて、同じ數(カズ)の物を數ふるに用ゆ語、二つ宛三つ宛のごとし、

つつ(筒)図圓く長くして、內(ナカ)の空(カラ)なるもの、卽ち管(クダ)㊁鐵砲大砲の胴(ドウ)㊂井戸側(イドガワ)のコト卽ち井筒(イヅツ)

づつ(豆子)図器具の名椀(ワン)に似たる形なせる物にて內の深(フカ)きもの、

つつる(筒井)図筒形に掘りたる井戸(イド)のコトを云ふ、

つつるづつ(筒井筒)図圓く掘りたる井戸の井筒(イヅツ)のコト、

づつう(頭痛)図頭の痛(イタミ)む病氣㊁轉じて氣になるコト、責任(セキニン)を負ふコト、

つつが(恙)図身體にさはりのあるコト、卽ち病氣のコト、

つつかけ(突掛)図突きかゝつて行くコト㊁だしぬけに事をなす㊂手つゞきをふまずになす、

つつかひ(突支)図倒れぬやうに物を以て支(ツカ)ゆるコト㊁さゝへるものゝコトを云ふ、

つつかふ(突支)他動物に物を添えてささへ持つ㊁片側(カタガワ)より物を、あてがひて支(ツカ)える、

つつかはら(筒瓦)図半圓形をなせる瓦、卽ちオガワラのコト、

つづき(續)図つづきたるコト㊁つゞきたる物㊂互ひに相關係してるコトを云ふ

つつきり(筒切)図圓くして長き物を横(ヨコ)に切るコトを云ふ、

つつきる(筒切)他動眞直(マツスグ)に向へ通りぬけて行く、

つづきもの(續物)図幾回にも淆(マジ)り、又は何册にもなつてゐる小說又は講談物のコト、

つづく(續)自動つながる、切れずにある「つゞひてる

つづく(續)他動つゞかせる㊁途切(トギ)ぬやうにする、

つつぐち(筒口)図つつぎのコト(鐵砲の筒口など)

つつげ(沸湧)図鳥が生れた時に、初めて、生へたる毛、卽ちにこげ、

つづけうち(續打)図打ちつゞけるコト、打ちとうすコト、

つづけさま(續樣)図物事の引き續きて止まざる狀を云ふ、

つつけんどん(突慳貪)図俗語にて、此の上もなきつれなき、

つつこみ(突込)図つつこむコト、

つつこむ(突込)他動物を無理に入れる　他人の意見をへこます、

つつさき(筒咲)図花びらが筒(ツヽ)の如くに爲りて咲くものを云ふ、

つつさき(筒先)図筒のさきの處㊁大砲小銃などの丸(タマ)の出る口㊂消防方(ヒケシ)のポンプの先(サキ)を持つてる人のコトを云ふ、

つつじ(躑躅)図木の名、山に多く自生ず葉は淡綠色にして、花は漏斗狀(ジョウゴナリ)をなす、色は桃色(カバイロ)多く、紫(ムラサキ)もあり時としては白色なるもある㊁重(カサ)の色目、表は紅梅色にして、青色なるものを云ふ、

つつしみ(慎)他動我れと我をいましむ㊁物事を大切にする㊂萬事に氣をつける㊃物事を控目(ヒカヘメ)にする㊄おもんず、

つつじり(筒尻)図筒の根(トモ)の部、筒の後の部の稱、

つつそで(筒袖)図衣物の袂(タモト)を圓く筒の如く縫ひ附けたる物、

つつたい(筒臺)図鐵砲をたてかけて置くなしたる竹のコト、

つつたけ(筒竹)図竹の筒(ツヽ)、輪切(ワギ)に

つつたつ(突立)自動眞直(スヽグ)に立つ㊁急

つつつぼ(筒袖)図筒袖に作りたる衣物のコトを云ふ、

つつなり(筒形)図筒の形をしてるコトを

つつばり(突張)図つつばるコト又たつつばる爲に用ゆる柱(ハシラ)、

つつばる(突張)他動物に物をあてゝさゝふる、㊁物を押し當(チカ)て止める、㊂ふせぐ㊃受け止(メ)る㊄我が意見を押し通す、

つつひめ(筒姫)図夏の神のコト、

つづまり(約)図小さくしまりたるコト㊁物事が終を告(ツゲ)しコト、

つつまる(包)自動つれまれてある㊁かこまれてある、

つづまる(約)自動小さくなつて行く、細く狹(セ)くまさまる㊁手輕(ハガ)になる㊂ほどよく片附(カタ)く、手輕にまとまる、

「の條を見よ」

つつまやか(約)図つゞまるコト、約(アツマ)

つつまやかに(約)副手輕(ヒヤヒ)に、かんりやくに、小さく狹(セ)まる狀を云ふ、

つづみ(鼓)図櫻の木を材料として内をくり、兩端(ハシヅ)を窄げて圓くし、其の内(ウチ)を空(カラ)にして、兩方へ鹿(シカ)のなめし皮を張りたる樂器の名にて、大小の二種あり㊁革(カワ)を内の空(カラ)にせし物へ張りて打ち鳴(ナラ)す樂器の總稱、

つつみ(包)図物の周圍(マワリ)を覆(オホ)ひかくすコト、又はおほひかくせし物、

つつみ(堤)図水のあふれ出るを防(フセ)ぐ爲め、川に沿(ソヒ)ひ又は池の周圍に、土を積(ツミ)たる土手の稱、

つつみいひ(包飯)図にぎり飯、

つづみをけ(鼓桶)図かつら桶

つつみがみ(包紙)図品物を包むに用ゆる紙のコト、

つつみやき(包燒)図料理の一種、玉子に肉類を包みて燒たる物、

つつみかくし(包隱)図つゝみかくすコト

つつみかくす(包隱)他動物をつゝみて外(ソト)より見え能はぬやふになす㊁物事を秘密(ヒミツ)にして、他人に知らせぬや

うにする、

つつみかざる(包飾)自動惡しき事をしながら爲さゞる樣にかくしよそふ㊁外觀(ガイケン)の美を裝ふ、「用を爲す袋

つつみふくろ(包袋)図物を入れてつゝむ

つつみぼたん(包釦)図釦(ボタン)の上を布帛(ヌノ)にて包みたる物、かざり釦のコトを云ふ、

つつむ(包)他動おほひかぶせて内へ入れる㊁ぐるりをかこむ㊂合せて取る㊃惡しき事を、つゝみかくす。かくして、人に知られぬやうにする㊄ふくむ。内に在りてみへぬ、「がるにする

つづむ(約)他動しめて小さくする、㊁て

つつむ(隱)他動かくす、知られぬやふにする、かくしてゐる、

つつもたせ(美人局)図女房が夫(ヲトコ)と謀(ハカ)し合せて、故意(ワザ)に姦通して其の相手を、夫がなぐさして金を取るコト

つつもたせ(奸間)図同上、

つづら(葛)図あをかずらの別名にて、カツラフジに同じ㊁竜(ヒヤ)れの色目、表は帶黑綠色(ヒヤクロミドリイロ)にて、裏(ウラ)の淡綠色(ウスミドリイロ)なる物を云ふ、

つづら(葛籠)図竹を編みて匣(ハコ)とし、上を紙にて貼(ハ)たる入れ物、

つづらをれ(九十折)図道のゥ子ゥ子と、甚しく多く曲(マガ)つてるコトを云ふ、

つづり(綴)図つゞるコト㊁つなぎ合せて仕立(シタテ)たる衣服のコト、

つづりかた(綴方)図文字又は語句をつなぎあはせて、一つの文章となす仕方、卽ち作文(サクブン)、

つづりあはす(綴合)他動つゞりて一つにする、

つづる(綴)他動つなぎ合す、つぎあはす㊁書物などを、とぢる㊂言葉(ハヒ)を連れて一つの文章と爲す、

つづれ(襤褸)図細かき布(ヌノ)をつなぎ合せて製したる衣類(イルヒ)㊁ボロ布(ヌノ)のコトを云ふ、

つづれのにしき(綴錦)図最上等の絹織物の名、花鳥人物などの極彩色畫を織りて現(ハ)はしたる錦織(ニシキオリ)を云ふ、

（つづく）

つて(傳)図物事を爲す助となるコト、卽ちてづる㊁ことづけ、卽ち序手(ツヒテ)に賴むコト㊂賴(ヒヤ)となるコト又は賴みとなすコト、

つと(苞)図たぼのコトを云ふ、

つと、(苞苴)図藁(ワラ)の筒(ツヽ)の如くに結びて、物を入れたるもの㊁みやげ物、卽ち「ふ意を表はす語

つど(都度)副たびごとに、まるまると云

つときし(包挿)図たぼさし、たぼとめのコト、

つとどうふ(苞豆腐)図藁づとなどへ入れたる豆腐(トウフ)で、普通のものより硬(カタ)きもの、

つとぬつと(苞納豆)図藁(ワラ)の小さきつとの内へ入れられてある、納豆(ナツトウ)のコト、

つとに(夙)副いち早く㊁朝早く㊂子供の時分より其の物事に心を碎(クダ)ひてゐたと云ふ狀(ヤウ)を表はす語、

つどふ(集)自動あつまる、一所になる、むらがる、たかる、「らがらす

つどふ(集)他動一所にする、寄せ合す、む

つとふ(傳)図物事を甲の人より乙の人へ授(ツタ)くる、㊁物が物に派ふて移(ウツリ)行く、「が力にたゆる

つとまる(勤)自動つとめ得(エ)られる。我

つとむ(勤)他動精を出す、骨を折る、勉強する、

つとめ(勤)名主君又は主人に仕て我が役を爲すコト㊁自己の職務に精を出すコト㊂僧侶が佛に仕えてお守を十分になすコトを云ふ、

つとめき(勤氣)名遊女などが、本心よりではなく、稼業上よりして、客をとりなす心地のコト、

つとめど(勤子)名客を取り扱ふ稼業の女

つとめて(勉)副無理からに、よんどころなく、好まねども好むやふにすと云ふ意を表はす語、「云ふ

つとめさき(勤先)名我の勤めてゐる所を

つとめにん(勤人)名俸給に依りて、定まりたる役を爲す人、官吏又は會社員など、「サ、容子のコトを云ふ

つとめむき(勤向)名我れの勤めの有樣

つとめざかり(勤盛)名分別あり經驗ありて、勤向に最も適切なる年頃を云ふ、即ち三十歳以上五十歳前後のころ、

づとり(圖取)名物の形狀を其のまゝ畫圖に寫し取りたる物、

(つづな)

つな(綱)名物の動かぬやふに、つなぎ止めて置く太縄㊁つながりすがりて、頼りにするコトを云ふ、即ち生命の綱、

つながる(繋)自動つらなつてる㊁つなぎつけられてる㊂しばられる㊃互ひに關係し合ふてる、即ち縁につながる、

つなぎ(繋)名つなぐコト㊁つなぐもの、

つなぎうま(繋馬)名紋疋の名にて、つなぎたる馬の狀を描きたる紋所のコトを云ふ、「ト。つないである舟、

つなぎふね(繋舟)名舟のつなぎてあるコト

つなぐ(繋)他動縄又たは紐の類を以て、はなれぬやうに結びつける㊁長くつゞくやうになす、㊂しばる。いはへる。むすびつける、

づなし(副無)形程度を越て馬鹿に大

つなし(鯛)名魚の名このしろの子のコト

つなそ(綱麻)名草の名、いちびのコトを云ふ、

つなて(綱手)名船をつなぐ綱又は船に結び付けて引つぱるに用ゆる綱、

つなぬき(綱貫)名履物の一種、革にて作りたる先の方に、多くの、ひだをこしらへたる、くつ、

つなひき(綱曳)名綱又は紐をつけて物を引き寄せるコト㊁一種の遊戯、太き綱の兩端を多人數にて持ち引き合ふて勝敗を決す㊂綱をつけて引き走る人力車、

つなみ(津浪)名海底に地震ありて爲めに荒き大なる浪の起りて、俄かに陸地へ押し寄せ、人家を倒し、人命をうばふもの、

つなわたし(綱渡)名水瀬の早き川に兩岸へ、綱を引き張り置きて、其の綱にすがりて舟を運ぶ渡の事、

つなわたり(綱渡)名綱を宙に引き張て置きて、其の上を渡り行く曲藝のコトを云ふ、

(つづね)

つね(常)名其のまゝにて、終始變らざるコト㊁ふだん、平素㊂あたりまへ、きまりきつたるコト㊃一定せる道理、「上するコト

づねつ(頭熟)名頭に熟を持つコト、逆

つねる(抓)他動指頭にて人の身體を摘みてつねちる、ひねる、

(つづの)

つの(角)名哺乳動物の龍頭の左右に突き出てゐる骨の如きもの、即ち牛鹿羊等に殊に著し㊁とげのコト㊂凡て物の頭又は物の表面に突き出てゐる物を稱して云ふ語

づのう(頭腦)名腦髄のコト、

つのかみ(角髪)名女の髪の結ひ方の一種にて、あげまきのコト、

つのかくし(角隠)名德川時代に婦人が、墓詣などをなす時に、被りし輪形の帽子、

つのきり(角切)名獸の角を切るコト重に鹿の角に云ふ㊁カガ茅の實のコト、「つてゐる所のコト

つのさき(角尖)名獸の角の先の尖

つのざいく(角細工)名獸の角を用ひて細工なすコト、又た細工された物、

つのしぼり(角絞)名かの子絞の一種にて其の絞り方を強くして、尖をとがらせたる物、多くは女の根掛に用ゆ

つのだつ(角立)自動角をそばだてる㊁かどだつ㊂きはだつ、

つのだつ(角立)他動角を起したゝせる㊁きわだゝせる、

つのたる(角樽)名柄樽の一名、

つのだらひ(角盥)名左右に柄が角の知く に附けられてある漆細工の盥、即ちみゝだらひのコト、

つのつき(角突)名角と角とを突き合させて喧嘩するコト、重に牛に云ふ㊁轉じて仲の悪しきコトを云ふ、

つのつきあひ(角突合)名双方の中に不平が生じて、互に睨みあを云ふ、

つのはし(角箸)名角にて造られたる箸のコト

つのふで(角筆)名角を細くけづりたる物にて書物の文字を突きつゝ讀む具、即ち字つき、

つのまた(角又)名海に生する草の名、我が國にては重に東海岸に產す、フノリの一種にて、色は蒼白し、之を干せば黑色となる、煮きて糊にし用ゆ、

つのむし(角蟲)名あぶら虫、

つのめだつ(角目立)自動かどだつ㊁双方の意見が一致せぬ、

つのめつきあひ(角目突合)名婦人が嫉妬の爲めに云ひ爭ふて仲たがねとなるコト、

つのり(募)名或る事柄に應じすべく人を招くコト㊁段々と増長するコト、

つのる(募)自動増長するる、強くなる

つのる(募)他動世間に告げて人を招き集む㊁増長して來た、

(つづば)

つば(鍔)名刀の身と柄との間に箝られてある金屬製の小判形の薄き物㊁帽子の前又は其の周圍に廂の如く出てゐるもの㊂釜の周圍にかけるところを云ふ、

つば(唾)名ツバキに同じ、「てる汁

つばき(椿)名常に日中なる、うるほし

つばき(椿)名美しき花を咲す木の名、葉は茶の葉に似て大きく、且つ硬くして、一種の光澤あり、春に大なる花を咲す、色は赤、白、桃等あり、其の實は、之を絞りて、上等の油を製する、「連なつてる處を云ふ

つばきわ(鍔際)名刀の身と鍔とが、相

つばきむし（嗤虫）図あわふき虫の一名、

つばきもち（椿餅）図椿の葉に包（ツツ）みたるあん餅、

つばきもも（椿桃）図桃の一種、其の果實（クワジツ）は毛なくして、熟（ウレ）すれば鮮紅色を呈ず、

つばきあぶら（椿油）図椿の實（ミ）を絞りて製したる油、女子の頭髪用として最上のもの、

つばくろ（燕）図益鳥の一種、即ち保護鳥（ホゴチウ）に屬するもの、春に暖（ハタ）かき土地へ來たりて人家の軒（ノキ）などに巣（ス）をくひ、秋至りて暖かき土地へ行く、全體は黑紫色（コクシイロ）を呈し、嘴（クチバシ）は細く、扁平（ヘヒヘイ）して、口は裂けたり、又た尾は二つに別れてゐる、又の名をつばめと云ふ、

つばくろくち（燕口）図品物を入れて持ち運ぶ用の袋にて、布帛（フハク）にて作られ、口を開けば燕の尾の如き狀（ジヤウ）をなせるもの、

つばさ（翼）図鳥の足（アシ）の邊より、左右へ出てゐる大なる羽（ハネ）、之（コレ）を動（ウゴ）かして飛ぶ㊁物事（モノゴト）のたすけとなるコトを云ふ、

づはづれ（圖外）図圖拔（ヅバヌ）に同じ、

つばな（茅花）図茅（チガヤ）の花のコト、

つばなかす（結）他動物をつまみひろげて毛ばだつやふにほゝげさす、

つばふき（石蕗）図草花の名、葉（ハ）至（ヤウ）ともに蕗（フキ）に異（ヒ）ならず、秋の頃（ホロ）に黄色の花を咲（カ）すもの、

つばめ（燕）図つばくろのコト、

つばめがひ（燕貝）図蛤（ハマグリ）の一種にて、殼（カラ）薄く赤黑（クロ）き色を呈す、

つばもと（鍔元）図つばざはの一種にて、

つはもの（兵）図戰爭に用ゆる凡ての武器（キ）のコトを云ふ㊁兵士㊂いさましき士（ヒト）、猛（タケ）き人、

つはり（惡阻）図妊婦に定（サダ）まつて發（ハツ）する病の名、姙娠二三ケ月にして、吐氣（ハキケ）を催し、頭痛（ヅツウ）を來し、從（ガテン）つて酸味（ス）を好むやうになる病氣の稱、

つはる（熟）他動果實（クワジツ）の十分にじゆくしたる、

（つづひ）

つひ（終）図おはるコト、つきるコト、無なるコト㊁死するコト、

つひえ（費）図入り用㊁不必要に入るコト㊂むだな事に金錢物品をつかひすつるコト、

つひえ（弊）図くづれて惡（ワル）くなるコト

づひき（圖引）図蕾圖（ツボ）を作るコト、又は其の人、

つひそ（終）副今までに、一度（ヒト）も、

つひに（終）副をわりに、しまひに、はてにいまだに、

つひやす（費）他動金錢を惜（オシ）氣なく使ふ㊁財產を失（ウシナ）す、へらす㊂むだに使ふ、

「傾（カタム）く、惡くなりゆく

つひゆ（弊）自動くるしむ、まわりゆく㊁

つひゆ（費）自動車隙がつぶれて、めちやめちやに破（ヤブ）れる、

つひゆ（費）自動へる、次第になくなる、入用に無くなりゆく、

（つづぶ）

つぶ（粒）図凡て小さくして、圓き形の物を云ふ㊁米の種（タネ）、即ち米の實（ミ）、豆（マメ）の實（ミ）などを云ふ、米粒（コツブ）豆粒など、

「切れるコト

つぶきれ（粒切）図物の細（コマ）かく裂（サ）けしたる物を云ふ、

つぶきん（粒銀）図銀（ギン）を小さき粒になしたる物を云ふ、

つぶき（具）図くはしく、もれのなきコト、

こらす、善くそらふてゐる、

つぶし（潰）図つぶすコト、おさえつけてくづすコト㊁金屬にて作られし器具を地金（ヂガネ）とするコト㊂亡（ホロ）すコト、

たやすコト㊃其の人を現在（ヰマ）の位置（ヰ）、又は現在の職業より去らしめて、無位置、無職（ムシキ）の人とした時の直打（ヂウ）、

つぶしぬ（潰直）図役（ヤク）に立たなくなつた金具類を、地金（ヂガネ）となして見積（ミツモ）たる直段（ネダン）のコト㊁轉じて二足三文（ニソクサンモン）の安直（ヤスネ）、

つぶしば（粒鹽）図燒鹽（ヤキシホ）の一種にて、鹽を精製して、小さき粒となしたる物を云ふ、

つぶしあん（潰餡）図小豆（アヅキ）を摺（ス）つぶして、其のまゝ漉（ウ）すに、餡（アン）となしれる物を云ふ、

つぶじらみ（陰虱）図寄生虫（キセイチウ）の名にて、男女の陰部（ヰン）の毛の中に發生する虱（シラミ）、

つぶしいたけ（粒椎茸）図椎茸（シヒタケ）の一種にて、細かく粒（ツブ）に爲つてゐるものを云ふ、

つぶす（潰）他動めちやめちやにする㊁亡（ホロ）ぼす㊂たやす㊃金具（カナ）を地金（ヂガネ）とす押しくだく、

つぶたつ（粒立）自動粒（ツブ）の形をなせる物の生（ウ）りたつ、㊁多くの中にて際立（キワダ）つて目につく、

「の形に云ふ語

つぶつぶ（粒粒）副圓（マル）くして小さき物

つぶて（飛礫）図打ちつけべく爲めに投（ナ）やる小石のコトを云ふ、

つぶてうち（飛礫打）図小石を投（ナ）げつけて人に當てるコト、

つぶとし（圖太）図クソ強情（コワヂヤウ）のコト㊁惡（ワル）らしくして、大膽不敵（ダイタンフテキ）なるコト、

「る、即ちヅクぬれのコト

づぶぬれ（圖部濡）図俗語にて、甚しく濡

つぶね（奴）図下男、下僕、

つぶぶし（蹶）図足のつけねに、圓くなりて出てる骨、即ちくるぶし、

つぶやく（呟）自動一人（ヒトリ）て口（クチ）小言（コゴト）を云ふ、ブツブツとこぼす、

つぶら（藁籠）図藁（ワラ）を編みて作りたる籠（カゴ）にて、フゴの如きもの、多く子供（コドモ）を入れて、遊（アソ）ばせるもの、

つぶら（巻）図とりでのコト、

つぶり（頭）図頭（アタマ）のコト、

つぶる（潰）自動押されてくづれる㊁亡（ホロ）ぶる、倒（タフ）れる㊂くづれて形を無くす㊃こすれて入る、

づぶろく（圖部六）図俗語にて、十二分に酒に醉ひて、前後正體（ヤウ）なきコトを云ふ、

（つづぼ）

つぼ（坪）図地面の廣狹（ヒロサ）を數ふるに用ゆる語にて、曲尺（カネ）六尺四方を一坪と定む㊁砂利（ジリ）土などを數（カス）ふるに用ゆる語、六尺立方（ポウ）即ち高さ巾（ハバ）とも六尺つゝある一坪と定む㊂貴（トウ）き織物の嵩（カサ）を計（ハカ）るに用ゆる語にて、假令ば金襴（キンラン）に在りては曲尺（カネ）の一寸四方を一坪とし、又た革（カハ）及び古渡（コワタ）の更紗（サラ）類に在りては、一尺四方を一坪（ヘイ）とす、

つぼ（壺）図土を燒きて製したる物にて、大抵（タイ）は圓形にして其の口の小さきもの㊁會席（クワイセキ）料理の膳部に、小さき深かき丼（ドンブリ）に着を盛りたる物を云ふ㊂凡てくぼみたる處を云ふ、

つぼ（鍋）図金具の一種にて、つぼかれのコトを云ふ、

つぼ（甕）図ホウと音（オト）す、笛（フエ）の一種なる壺（ツボ）の管（クダ）の立てるもの、

つぼあぶみ（壺鐙）図昔時に用ひられし鐙（アブミ）

にて、壺(ツボ)の形狀をなせるものにて、足くびを半分かけるもの、

つぼいり(壺煎)圖つぼやきに同じ、つぼやきの條を見よ、

つぼおろし(壺卸)圖和船の帆(ホ)を取り

つぼがね(壺金)圖戸などに打ちつける掛金(カナ)を受け止める金具にて、卽ちヒヂツボ、

つぼ錐り(壺錐)圖細き管(クダ)を二つに縱(タテ)に割(ワ)りたる如き形を爲せる、もみ錐(キリ)にて、貫き孔(アナ)をあけるに用ゆ、

つぼぐち(壺口)圖壺の口のコトを云ふ㊁轉じて人が口を小さくすぼめて、とがらしたるをいふ、

つぼさかづき(壺盃)圖壺の如き形狀をせる深き皿のコトを云ふ、

つぼざら(壺皿)圖食物を盛(モ)るに用ゆる深き皿のコトを云ふ、

づぼし(圖星)圖我の見込を立てたるコト目的のコトを云ふ、

つぼすみれ(壺菫)圖草の名、すみれ草の「一名

つぼぜんざい(壺前栽)圖座敷と座敷(ザシキ)の間に在る前栽、卽ち中にはのコトを云ふ、

つぼね(局)圖宮中に於て一間(マヒト)づゝ設(モウ)けられたる部屋(ヘヤ)のコト㊁宮中に於て、我が居室(ヰシツ)を戴(ヒタヾ)いてゐる女官のコトを云ふ、

つぼねまち(局町)圖宮中に於て局の多く連(ツラ)なり在るところ、

つぼみ(蕾)圖花の未だ開(ヒラ)かざるもの㊁此れより出世(シユツセ)をしやふと云ふ年の若(ワカ)きもの㊂十四五歳の娘のコトを、花に喩(タトヘ)えて云ふ語、

つぼむ(窄)自動細く小さくなる、卽ちすぼまるコトを云ふ、

つぼむ(蕾)自動木に蕾(ツボミ)を持て來た㊁一旦開きし花の、すぼみたる㊂轉じて勢のおとろへ來る、

つぼやき(壺燒)圖料理の一種、螺貝(サザエ)を引き出して、肉(ニク)を細(コマ)かく切りて貝へ入れ、醬油と砂糖とを加(カ)へ、其の貝殼(カラ)を鍋と見て、燒きたるもの、

つぼやきしほ(壺燒鹽)圖素燒(スヤキ)の壺に入れてある燒鹽の固まれるものの稱、

(つづま)

つま(褄)圖衣服の部分の語にて、衽(エリ)の裾の緣(ハシ)のコトを云ふ、

つま(妻)圖夫(ヲツト)が女房を呼ぶに用ゆる語㊁料語にて、剌身(サシミ)又は吸物(スヰモノ)などに添(ソ)えて用ゆる野菜(ヤサイ)物のコトを云ふ、

「に用ゆる語

つま(夫)圖女房(ニヨウバウ)より夫(ヲツト)を呼ぶ

つま(爪)(接頭)爪(ツメ)にて事を爲すと云ふ、意を或る語の上に冠(カブ)らせて云ひ表はす語、假令ば爪彈(ツマビ)、爪立(ツマダ)びなどのコト、

つま(端)圖物のはし、へり、ふち、

つまおと(爪音)圖琴(コト)を彈(ヒク)する音(オト)卽ち琴の音(ネ)㊁馬の歩く足音(アシオト)のコトを云ふ、

「云ふ

つまをり(爪折)圖物のはしを折るコトを

つまをりかさ(端折傘)圖骨の先を內方へ折り曲(マガ)たる傘(カサ)、

つまかけ(爪掛)圖高下駄(タカゲタ)の先につけてある袋の如き物のコト、

つまかは(爪革)圖爪掛(ツマカケ)に同じ、

つまきり(爪切)圖爪を切るコト㊁爪を切る小さき小刀(コガタナ)のコト、

つまぐち(褄口)圖衣類の裾(スソ)のツマのはしの稱、

つまぐる(爪繰)他動指先(ユビサキ)でくる、

つまぐろ(端黑)圖物のはしの黑きコトを云ふ、

つまくれなゐ(爪紅)圖草の名、鳳仙花(ホウセンクワ)の異名

うまくれなゐ(端紅)圖卷紙(マキガミ)などの端(ハシ)に、紅(ベニ)が染められてある物の稱、「語

つまと(妻子)圖妻と子、

つまごと(妻琴)圖琴のコトを呼ぶに用ゆ

つまさき(褄先)圖褄のはしの薙刀形(ナギナタ)に爲てる部の稱、

つまさき(爪先)圖足のさき、

つまさきあがり(爪先上)圖次第次第に高くなつて行くコト、又は次第に高くなりゆく路(ミチ)のコト、

つまし(儉)肥しまつよろし㊁つゞまやかなる㊂おごらずにあり、

つましろ(端白)圖物のはしの白きコトを

つましらべ(爪調)圖琴を彈するに先だつて、其の調(シラベ)を合すコト、

つまたつ(爪立)自動足の先(サキ)を地に付けて立ちあがる、

つまづく(躓)自動物に足をあてる卽ちけつまずく㊁轉じて物事の進行(シンコウ)を妨(サマ)たげられて、あしくなりゆく、

つまど(妻戸)圖一枚の開き戸のコト、多くは檜(ヒノキ)の戸に用ゆ、

つまどる(褄取)他動褄を手にて持ちて裾(スソ)をからげる、

つまにほひのよろひ(爪匂鎧)圖緣(ヘリ)を彩色(サイシキ)なしたる鎧、

つまはじき(爪彈)圖爪にて物をはじきとばす㊁轉じて自己の忌み嫌(キラ)ふ人を遠(トホ)ざく意を示す語、

つまはづれ(褄外)圖とりまわしのありさま、身のこなし、

つまびき(爪彈)圖つめびきに同じ。ばちを持たずにひくコト、

つまみ(撮)圖つまむコト㊁つまみて持つやふに、物につけてあるもの、卽ち取手(トツテ)のコト、

つまみな(摘菜)圖まびき菜、

つまみぐひ(摘食)圖物を摘み取つて食ふコト㊁主人が下女に手を出す齷(セク)し き行を云ふ、

つまみこむ(撮込)他動つまんで內へ入れる㊁無雜作に內へ入れる、

つまみだす(撮出)他動つまんで外へ出す㊁無雜作に外(ソト)へ出す、

つまみとる(撮取)他動つまんでとる㊁多くの中よりよりとる、

つまみあらひ(撮洗)圖衣服などの其の汚(ヨゴ)れたる部分のみをつまみて洗ふコトを云ふ、

つまむ(摘)他動撮(ツマミ)に同じ、

つまむ(撮)他動指(ユビ)にて物を挾(ハサ)み持つ㊁えらび拔(ヌ)く、えりぬく㊂女子に色情(シキジヤウ)の關係をつける㊃金を一寸(スコシ)

つまやうじ(爪楊枝)圖食後齒にはさまつてる物を取り除くに用ゆる小楊枝のコトを云ふ、

つまやしろ(妻社)圖田舍道(イナカ)の傍(ハタ)に在る小さな社(ヤシロ)、

つまよる(爪搓)他動矢を左の手の指尖(ユビサキ)にて持ちて、右の手でひねりつゝ突き出して、曲(マガ)つてるや否やをためし見る、

つまり(詰)圖つまるコト㊁ドン底(ソコ)㊂最終(サイシウ)卽ちゆきつまり、

つまる(詰)他動つかえて通(カヨ)はぬ㊁くるしむ、なやむ㊂十分になる、滿(ミ)る㊃小さくなる、段々と短(ミジ)かくなる㊄せまる、

つまるところ(詰所)圖おしつまつたるところ、せんずるところ、ひつきやうするに、

(つづみ)

つみ(罪)圖德義(トクギ)を破り、又は規則(ノリ)を犯し法律に反きたる所業、

つみあぐ(積上)他動積みて高くなす㊁積みかさね終(ワ)りたる、

つみいし(積石)名 積み重ねたる石㊀基礎石(トダイイシ)のコト、

つみいれ(摘入)名 料理の一種にて、魚肉(ギヨニク)の肉(ミ)を摺り潰(ツブ)して、其れに小麥粉(コムギコ)を少しく加へ、捏(コ)ねて味(アジ)を附けつ、煮出(ニダ)したる汁の中へ摘み落(オト)して煮(ニ)たる吸物(スイモノ)、

つみいれはんぺん(摘入半片)名 一種の料理、味噌汁(ミソシル)を仕立て、其の中へ魚肉の摺り身を、團子にして入れたる物、

つみおくり(積送)名 荷物を積みて送るコト、

つみおくる(積送)他動 荷物を車又は船に「載(ノ)せ先方へ送り届く

つみかた(積方)名 積み重(カサ)ぬる其の仕方(シカタ)積み上げたる有樣、

つみかね(積金)名 金錢(キンセン)を貯(タク)はえるコト、又た貯えたる金錢㊀金錢を集めるコト、

つみかへ(積替)他動 改(アラタ)めて積む、卽「ち積み直(ナホ)す

つみかさね(積重)名 つみかされたるコト「れ上げる

つみかさね(積重)他動 上が上へさ重(カサ)ね積み上げたるコト、

つみからす(摘枯)他動 木の葉又は出かゝりたる芽(メ)を、無暗(ムサ)に摘み取りて枯す、「(ザイ)。積んである材木(ザイモク)

つみき(積木)名 積(ツ)み重ねたる木材(モク)

つみきる(積切)他動 積み重ねおはりたる殘らず積む、「でしまふたる

つみきる(摘切)他動 つまみて切る、摘ん

つみくさ(摘草)名 春の野に野生の草花(サク)(バナ)を摘み取るコト、

つみこみ(積込)名 つみこむコト、

つみこむ(積込)他動 內へつみて入れる。舟や車へつみ入れる、

つみしろ(罪代)名 罪のつぐなひ。罪のおぎなひのコトを云ふ、「む

つみす(罪)名 罪さして取り扱ふ㊁罪さ定

つみた(摘田)名 稻(ネ)の作り方の一種にて、初めより水田へ籾(モミ)を下(オロ)し、一尺ほどに成長(セイチヤウ)せし時に、不完全(フカンゼン)なる苗(ナエ)を摘み去りて、其の後(ノチ)を其まゝ成長させる稻(イネ)の作り方、

つみたか(積高)名 つみ重ねたる物の嵩(カサ)、總計(ソウケイ)、

つみだし(積出)他動 貨物を車や船などに積みて送(オク)り出す、「はえる

つみたつ(積立)他動 次弟(シダイ)に積みて貯

つみたて(積立)名 つみたつコト、

つみたてる(積立)他動 積み重ねて高くなす㊀金錢をポツポツと貯へて增(フヤ)してゆく、「たる金子(キンス)のコト

つみたてきん(積立金)名 積み貯(タク)はえ

つみつくる(罪作)名 道德に反する行爲(コウヰ)をなしたるコト、

つみとが(罪科)名 つみさ、とが、

つみな(摘菜)名 若き菜の多さに失(ウシナ)する物を摘(ツ)み取りたる菜(ナ)、卽ちまびき菜、つまみ菜、

つみなほし(積直)名 積み直す、

つみなほす(積直)他動 一旦積(ツ)みたる物を更に積みかへる、

つみに(積荷)名 車や船に積みたる荷物(ニモツ)のコトを云ふ、

つみびと(罪人)名 罪ある人、

つみほろぼし(罪滅)名 善き事を爲して、以前になしたる不道德(フダウトク)の所爲をつぐのふコト、

つみもの(積物)名 凡て積(ツ)み重ねたる品物のコトを云ふ、

つみやぐ(積夜具)名 夜具を疊(タタ)みて積み重(カサ)ねたるを云ふ、

（つづむ）

つむ(紡錘)名 糸車の用具にて、太き針(ハリ)の如き物、綿(ワタ)を引き出して糸(イト)さなしたる物を、卷きつけて玉(タマ)に爲す用をなすもの、

つむ(詰)自動 つまる、おしせまる、假令ば將棊(シヤウギ)にて王將が攻めつけられて進退谷(シンタイキハ)まりしコト、又は理論に說き伏(フ)せられて恐れ入るコトを云ふ、

つむ(詰)名 一間(ヒトマ)に居る㊀勤務(ツトメ)に出て、其の場所に居る、

つむ(詰)他動 つめる、卽ち物を他の物へ入れる㊁食物を腹へ入れる㊂ふさぐ㊃行く處をなくなせる卽ち追ひつめる㊄たえまなくつゞける、

つむ(積)自動 かさなる、多くなる、たまつもる、假令ば金を積む、雪が積む、

つむ(積)他動 在る物の上へ物を更に載(ノ)せる㊁車などに荷物を載る、

つむ(抓)他動 ひねる、つめる、

つむ(紡)他動 糸をつむぐ、

つむ(摘)他動 指頭(ユビサキ)にて物をはさみ取る㊁より拔(ヌ)く、

つむがりのたち(都牟刈太刀)名 極めて善く切れる刀(カタナ)のコト、

つむぎ(紬)名 眞綿(マワタ)より引き出したる糸にて織りし織物(オリモノ)の稱、

つむぐ(紡)他動 綿(ワタ)や、まゆより糸を引き出す、「見られよ

つむじ(旋毛)名 旋毛(シウ)に同じ、其の條を

つむじかぜ(旋風)名 渦(ウヅ)をなして烈(ハゲ)しく吹き起る强き風、

つむり(天窓)名 頭(アタマ)のコト、

（つづめ）

つめ(栓)名 德利、壜(ビン)などの口へつめ込む物、卽ちせん㊁總て隙間(スキマ)へつめる物の稱、

つめ(爪)名 人、獸類の手及び足の指(ユビ)の尖(サキ)の表面に附てある、薄く堅き骨質(コツシツ)の物を云ふ、

つめ(詰)名 はさり、そば卽ち橋詰(ハシヅメ)㊁勤むべき處に行きてさゞまつてるコト

つめ(詰)(接尾)或る語の下に付け加へて進退谷(シンタイキハマ)る狀を表はす語、卽ち道理詰(ヅメ)など、

つめあと(爪痕)名 物に殘(ノコ)つてる爪のあさ、爪で引きかきし痕、「るコト

つめあひ(詰合)名 二人以上同じ場所に居

つめいん(爪印)名 實印(ジツイン)の代りに、我が拇指の尖(サキ)に肉(ニク)をつけて捺(オ)したる判のコト、

つめかた(爪形)名 つめあさに同じ、つめあさの條を見よ　「を云ふ、

つめかた(詰方)名 物をつめ込む其の仕方

つめきり(詰切)名 つめきつているコトを云ふ、

つめきり(爪切)名 爪を切るコト㊁爪切鋏(ツメキリハサミ)略

つめきる(詰切)自動 其の處につめてゐる勤(ツト)めかね、「てしもふたる

つめきる(詰切)他動 物を十分に詰め込み

つめきりはさみ(爪切鋏)名 爪を切る爲めに用ゆる小形の鋏、

つめこみ(詰込)名 つめこむコト、

つめこむ(詰込)他動 入(イ)るだけ入れる、㊁飯を十分に食する、

つめこすり(爪擦)名 爪(ツメ)を取りたる後(アト)をならす爲に用ゆる具(グ)、小さき木片(キギレ)に木賊(トクサ)を貼りたるもの、

つめさき(爪先)名 爪のさき、指のさきのコトを云ふ、

つめしよ(詰所)名 多數の人々がつめかけてゐる所㊁役人の出勤して控へゐる所を云ふ、「コトを云ふ

つめしゆう(詰衆)名 詰め合ふてる人々の

つめしやうぎ(詰將棊)名 將棊の一種にて相手の駒を何處(ドコ)までも追ひつめて取る將棊、

つめたし(冷)形 さもひややかし、

つめばら(詰腹)名 他人より責(セ)め迫(セマ)られて、據處なく腹を切るコトを云ふ

つめばん(爪判)名 つめいんに同じ、つめ

いんの條を見よ、

「コトを云ふ

つめばん（詰番）図當番（トウ）當直（ヨウチ）の

つめひき（爪彈）図三味線（シヤミセン）を爪先にて調子（チヨウシ）低（ヒク）く彈くコト、

つめる（抓）他動ひれる、

つめろう（詰牢）図漸（ヨウ）やく我が身體（カラダ）の、入り得らるるだけなる、小さき牢獄（ロウ）のコトを云ふ、

（つづも）

つもり（積）図物のつみ重（カサ）なるコト㊁數（カズ）へて下組（シタグミ）をなすコト假令ば衣服をつもる㊂考（カンガ）ふ工夫（クフウ）する都合（ツゴウ）するコト、

つもりがき（積書）図あらかたの計算（ケイサン）を爲して、其の事實（ジツ）を記したる文書を云ふ、卽ち豫算書（ヨサンガキ）の如きもの、「雪がつもるなど」

つもる（積）自動上が上とかさなり合ふ、

つもる（積）他動積み重れる㊁下勘定（シタカンジヤウ）する㊂工夫する、考がへる、思案（シアン）する、

（つづや）

つや（艶）図エンと音す、うるわしく光（ヒカリ）る色美（ウツク）くしく、あざやかなる有樣を云ふ㊁愛敬（アイキヤウ）のあふるるコトを云ふ、

つや（通夜）図寺院の御堂（ミドウ）に、終夜とち籠（コモ）りて、祈願（キガン）をこむるコト㊁死者を納（オサ）めたる棺側に、終夜、守（マモ）りをなすコトを云ふ、

つやけし（艶消）図艶を取り去るコト㊁摺（スリ）硝子のコト、卽ちつやけし硝子、

つやつや（艶艶）副凡て物の色つやのきはだつてうるわしきさま、

つやべに（艶紅）図繪具の一種にて、上等の紅（ベニ）のコト、

つやもの（艶物）図淨（ジヤウ）るりにて、男女の人情に關するコトを云ひ表（アラ）はしたる語物（カタリモノ）、

つやがたり（艶語）図艶物を語る人、又は

つやぶさん（光澤布巾）図器物に光澤を出さすべく拭く布巾（フキン）のコトを云ふ、

つやものがたり（艶物語）図つや物の淨瑠璃（ジヤウルリ）を語たるに得意なる人、

つやけしがらす（艶消硝子）図スリ硝子のコト、卽ち硝子を金剛砂（コンゴウシヤ）で摺りしもの、

（つづゆ）

つゆ（梅雨）図六月の十日頃より七月の十日頃（ホド）までの氣節（キセツ）を云ふ、此の頃には雨多し。さみだれ、

つゆ（液）図水氣を含みてる物、卽ち液體（エキタイ）、しる㊁料理の語、水に醬油と、ダシを加へて煮（ニ）たる物、

つゆ（露）図夜間の寒冷（カンレイ）の爲めに、空氣中に含（フク）まれてゐる水蒸氣（スイジヤウキ）の凝（カタ）まつて地上に降りし物、

つゆ（露）図露は太陽の光線に逢（アフ）ば忽ち蒸發（ジヤウハツ）して、其の形を止めぬより、轉じてはかなきコトを云ふひ表すに用ゆる語、

つゆ（露）副極（ゴク）めて少なきコトを云ひ表はすに用ゆる語、卽ち露知らず、露いさゝかなど、

つゆ（潰）自動ついゆの訛（ナマ）にて、メチヤメチヤになる、くだける、

つゆあけ（出梅）図梅雨の氣節が終りたるコトにて、卽ち七月の十一二日頃のコトを云ふ、

つゆあふひ（梅雨葵）図花のあふひに同じ

つゆいささか（露聊）副少し、わづか、誠に

すこしく、

「ふさまし

つゆけし（露）形露の多く降つてあると云

つゆしも（露霜）図露の霜と爲りかゝりし物を云ふ、卽ち俗に云ふ水霜（ミズシモ）のコト、

「れる露のコトを云ふ

つゆたま（露玉）図小さき玉の如き形に成

つゆとりぐさ（露取草）図芋（モノ）のコトを云ふ雅語、

つゆのま（露間）図露のある間と云ふ意にて、卽ちしばしの間（アヒ）、わずかの間（カン）のコトを云ふ、

「ふコト

つゆのみ（露身）図はかなき此の身體と云

つゆのよ（露世）図はかなき此の浮世（ウキヨ）と云ふ意、

「たる其の第一日

つゆのいり（梅雨入）図梅雨の期節に入り

つゆのいのち（露命）図人生のはかなきを露に喩えて云ふ、

つゆばかり（露許）副少しばかりと云ふコトを表はすに用ゆ語、

つゆはらひ（露拂）図露を拂（ハラ）ふと云ふ意より轉じて、先（マヅ）に立ちつゝ道（ミチ）を開き行くコト㊁遊藝にて其の最初（イチバン）に勤（ツト）むるコトを云ふ㊂相撲道にて横綱（ヨコヅナ）力士の土俵（ドヒヤウ）入りをする時に、先（マヅ）に立て土俵へ上る力士のコト、

つゆわけどろも（露分衣）図露の降つてる中を行く時に、着る衣服のコトを云ふ、

（つづよ）

つよし（強）形勢ひたけたけし㊁身體（カラダ）の丈夫（ジヤウブ）らし㊂風（カゼ）せゐ、驚（オドロ）かぬ、㊃破れぬこわれぬ㊄はげし、すさまじ、

「たのみのコト

つよみ（強）図つよきコト㊁たよりにす、

（つづら）

つら（面）図かほ顏のコト㊁おもて、物の外に向つてる方表面、

つら（頬）図ホウベタのコト、卽ち鼻の左右にて眼の下の部、

「いるコト

つら（列）図つらなつてるコト、ならんで

つらあて（面當）図悪（ワル）んでる人に、此れ見よがしの所業（ショギヤウ）をなすコト㊁恨み憎くめる人の面前にて、其の人に對する所業を他の人に對して爲すコトを云ふ、

「顏の皮の

つらかは（面皮）図我が顏面の皮（カワ）、人の

つらかがり（面燈）図面火（ビヤウ）に同じ、つらひの條を見よ、

つらがまへ（面構）図顏付（カホツキ）、相手の人相（ニンソウ）のコト、

つらたましい（面魂）図中々に勇氣ありてしつかりしてる容子が、顏色（カホイロ）に表はれてるコト、

つらづゑ（面杖）図頬（ホホ）に手をあてゝつえつくコトを云ふ、

つらつき（面貌）図つらがまへ、顏の容子のコトを云ふ、

つらつら（熟）副おちつきて、念を入れるさま、卽ちよくよく、つくつく、

つらつら（滑滑）副物の表面のなめらかにして、平（タヒラカ）なるさまを云ふ、卽ちつるつる、ぬるぬる、

つらなる（連）自動ならぶ、つゞく、つながる㊁互ひに合して一つと爲る、

つらにくし（面憎）図其の顏を見てさへも憎々しいと云ふコト、

つらね（列）他動並（ナラ）べて、つづかせる、

つらぬき（貫）図昔時用ひたりし履物（ハキモノ）の一種、草にて作られたる紐（ヒモ）つきの奢（ヨウ）、

つらぬく（貫）図つらぬくコト、

つらぬく（貫）他動つき通（カヨ）す、卽ち表より裏へさし通す㊁物事を仕遂（ヤリトヲ）る、一藝（ゲイ）に達す、

つらひ(面火)図芝居などにて役者の前へ差し出す燈火(ヒカ)のコト、

つらぶち(面扶持)図其の家の人數に應じて下される扶持米、

つらまふ(提)他動とらへる、をさへつける、つかまへる、

つらまる(提)自動とらへられる、すがりつく、とりすがる、

つらみせ(面見世)図芝居道(シバイ)の語にて、顔みせのコト、

つらら(氷柱)図垂(ハン)る水の、氷(ヒ)りて柱(ハシラ)となりし物、卽ちたるひ、

(つづり)

つり(釣)図魚類(ギヨイ)をつるコトを云ふ㊀物を求めて、其の支拂(シハラ)ふ代金を、價格より多分に出して、其の餘分だけの金を受取るコトを云ふ、卽ち釣錢(ツリセン)の略語、

つり(吊)図物を引きかくるコト、物を垂(タ)かして置くコト㊁物を引きかけ置く爲めに用ゆる紐(モヒ)、

つりあぐ(釣上)他動物を繩(ハナ)又は紐(モヒ)に結び付けて引き上る、㊁魚が釣れたる、

つりあひ(釣合)図つりあふコト、

つりあふ(釣合)自動似合(ニ)ふ、甲の物と乙の物と相應(オウ)する、

つりいと(釣糸)図物をつるすべく爲(ス)に用ゆる糸、㊁釣針に結(ユヒ)び附けて水中へ入れる糸、

つりがき(釣柿)図つるしがき、

つりかご(釣籠)図釣竿(ツリザヲ)にて釣り上げたる魚を入れて置くかご、釣りさげてあるかご、釣り下げるやふに出來てあるかご、

つりかね(釣鐘)図釣り下げて置きて撞木(シユモク)を動して突き鳴(ナラ)す仕掛になつてる大きな鐘(カネ)、

つりがま(釣釜)図左右に環(クワン)のついてある釜、之を自在(ジザイ)に吊(ツル)して、下より火を燃し、湯を沸し飯を炊く用に供す、

つりがねだち(釣鐘堂)図釣鐘のつるされ「てある堂(ダウ)のコト

つりくわびん(釣花瓶)図花を挿して吊り下げ置く花瓶(ハナ)、

つりとむ(釣込)他動あざむひて味方に引き入れる、さそひ込む、

つりさぐ(釣下)他動上より下へ物をブラ下げ置く、㊁吊(ツル)し置く、

つりさほ(釣竿)図魚を釣るに用ゆる、竹にて作りたる細き竿、「下がつてる

つりさがる(釣下)他動ぶら下る、つるし

つりしのぶ(釣忍)図忍草を輪形(ワガタ)になしたる物にて、夏(ナツ)軒(ノキ)に吊(ツル)して眺むるもの、「ぶ」のコトを云ふ

つりせん(釣錢)図つりに出すべき小錢(コセン)

つりだい(釣臺)図物を載(ノ)せて擔(カツ)ぎ行く用に出來てる物、卽ち板を臺とし、其の兩端(ハシ)に竹を曲(マ)て、打ちつけ其に棒(ボウ)を通して擔ぐやふになれる物、「りはじまる

つりだす(釣出)他動さそひ出す㊁魚が釣

つりだうぐ(釣道具)図魚を釣るに用ゆる器具の總稱、

つりて(吊手)図物を吊り下げる用を爲す物、蚊帳(カヤ)のつり手など、

つりて(釣手)図魚をつり上げる人。魚をつる人、

つりちやうちん(釣提灯)図吊り下げて用ゆる樣に作(ツク)られたる提灯、

つりどと(釣床)図汽船などに設(モウ)けられてある臥床(ネドコ)のコト、卽ち釣り下げられある臥床、

つりどの(釣殿)図水邊に設けられたる、たかどのゝコトを云ふ、

つりとだな(釣戸棚)図釣り下げられてあるやふに取付(トリツ)けられた半戸棚のコトを云ふ、

つりとほし(釣篩)図とほしの一種、上より釣り下げ置きて用ゆる大形の物、

つりとうろう(釣燈籠)図軒(ノキ)などへ吊し下げる飾(カザリ)のある燈籠、種類多し、

つりなは(釣繩)図物を釣(ツル)し上げるに用ゆる繩のコト、

つりばし(釣橋)図橋杭(ハシ)もなく基礎(ドイシ)もなく、橋板をば針金又は藤蔓(フジカヅラ)などにて釣(ツル)しかけて置く橋、谷川などに在り㊁渡るべき時に架(カ)け渡(ワタ)らぬ時に上げて置く橋、卽ちはれ橋のコト、

つりぼり(釣針)図魚を釣るに用ゆる曲(マガ)り針(ハリ)、

つりはしご(釣梯子)図全部繩(ナワ)を編(ア)て作りたる梯子にて、其の先に鈎(カギ)を掛け、塀などに吊して登り行く具、

つりはないけ(釣花瓶)図つりくわびんに同じ、

つりびと(釣人)図魚を釣る人、

つりふね(釣船)図魚(ウオ)を釣に用ゆる小舟(フネ)のコト、

つりぼり(釣堀)図池に魚を放(ハナ)ち置きて、相當の賃錢を取りて、其の魚を釣らせる處のコトを云ふ、

(つづる)

つる(鶴)図鳥の名其の大なる者は丈(タケ)四五尺に及ぶ、全身白色の毛を生ず、又た處々に黑き毛の生じてるあり、頭(ヒタ)嘴(クチバシ)足(アシ)共に長く、顔(カホ)と目とは赤色を呈し、能く水中をくゞる、小魚(コウオ)を捕えて食ふ、其の毛は種々の細工(ザイク)を爲すに用ひられ、又た肉は滋養(ジヨウ)ある食料となる、

つる(蔓)図植物(シヨクブツ)の名、莖(クキ)の細長く延びてる物、假令ば朝顔の蔓、胡瓜(キウリ)の蔓など㊁づてを求め得るコト、假令ば金の蔓を得たなど㊂鑛脈(コウミヤク)のコト、卽ち金銀の蔓、石炭の蔓など、

つる(弦)図弓のつるのコト、

つる(釣)自動引きつけられて一處へ寄る髪の毛がつる㊁上の方へ引き上げられる、眼瞼(マブタ)がつる、

つる(釣)他動魚をつり上げる、㊁物を上の方に引き掛(カケ)て下の方へ垂(タレ)して置く㊂高き處へ物をかけ渡して置く、卽ち釣橋など、

つるうち(弦打)図弓の弦をはぢきて、悪しきを拂ひ飛ばすコト、

つるおと(弦音)図弓(ユミ)につがひたる矢を放(ハナ)つ時に、弦(ツル)が震(フル)へて鳴る音、

つるがき(鶴柿)図柿の一種にて、早く熟(ウレ)する物、其形は細長きより此の名あり、

つるき(劔)図けんのコト、

つるきのまひ(劔舞)図ケンブに同じ、

つるぐさ(蔓草)図莖(クキ)より蔓(ツル)の出る草類のコトを云ふ、

つるくび(鶴頸)図長き頸の人㊁德利や花瓶(ハナビン)などの口が、鶴の頸(クビ)の如く細長くなつてる物、

つるし(吊)図つるして置くコト、

つるしがき(吊柿)図澁(シブ)き柿の皮を去りて、吊(ツル)し置きて甘くなしたる物、

つるしぎり(吊切)図物を吊して置きて切り放つコト、「かわかしたる大根

つるしだいこん(吊大根)図吊し置きて、

つるす(吊)他動引き掛(カケ)て下ろす。つるし下げる。つるし下げて置く。ブラ下げて置く、

つるたち(蔓立)図草類(クサルイ)の莖(クキ)が蔓(ツル)になつて生(ハエ)るコト、

つるたつ(蔓立)自動蔓が出だす、蔓が生す、朝顔(アサガホ)の蔓立(ツルタ)つ。

つるなべ(蔓鍋)図自在(イヂザイ)など へ吊しかゝる爲めに、弦の附いてゐる鍋(ナベ)のコト、

つるのかみ(鶴髪)図白髪(シラガ)のコト、鶴「の毛の白きより云ふ

つるのまる(鶴丸)図紋所の名にて、鶴の羽を擴げてる狀(サマ)を、圓く描きしもの

つるのひとこゑ(鶴一聲)図最も目上の人又は勢力ある人の云ひ出でたる言葉のコトにて、一聲で皆從ふと云ふコト、

つるはし(鶴嘴)図硬き物を打ち碎(クダ)き、又は大地(ダイチ)を堀る爲の具にて、柄の尖(サキ)に鐵製の曲(マガ)りて尖(ガト)りし物の附けられある物、

つるはじき(弦彈)図ゆかけのコト卽ち弓を射る時に、手にはめる革(カハ)の手袋の如きもの〻稱、

つるはしり(弦走)図弦弓につけ置きたる弦の自然に切れるコト、

つるぶくろ(弦袋)図弦を藏(カク)し置く袋、

つるべ(釣瓶)図木又は鐵(テツ)で出來てる、小さき桶(オケ)、繩をつけて井戸水を汲(ク)む具、

つるべうち(連發)図鐵砲を竝(ナラ)べ續けて、續けさまに放(ハナ)つコト、

つるべさは(釣瓶竿)図釣瓶に付けて、水を汲(ク)む竿、

つるべなは(釣瓶繩)図釣瓶につけた繩、

つるべおとし(釣瓶落)図釣瓶を誤(アヤマ)つて井戸へ落したる時の如く俄に速やかに落るコト、

つるまき(弦卷)図弓の弦(ツル)を卷き附け置く道具、革(カハ)を圓く切り、其の中央(ナカバ)に、穴(ナ)をあけたる物を二つ合せしものにて、小さき車の如き形をなせるもの、

つるむ(交)自動まじはる㊀さかる、卽ち男女の兩性が一つになる、

(つづれ)

つれ(連)図伴(ツレ)れだち行くコト㊀おとも、仲間(ナカマ)、假令(カリ)ば三人連(ヅレ)れなど㊁能樂(ノガク)を演する人、

つれ(連)自動附き從(シタガ)がふて行く㊁一所になつて事をする、假令ば聲(コヱ)につれて云ふなど㊂其の事に從ふて事をなす、卽ち世につれてなど、

つれ(連)他動伴(ツレ)れられる㊀從(シタガ)ふて行かしむる、

つれあひ(連合)図つれあふたるコト㊁夫婦のコトを云ふ、

つれあふ(連合)自動つれそふ、互にともなふ、一所に行く、

つれと(連子)図妻(ツマ)の伴(ツレ)れて來た子供のコトを云ふ、

つれそふ(連添)自動つれあふ、夫婦になる、共々に行く、

つれづれ(徒徒)図たいくつなるコト、さむしきコトを云ふ、

つれたつ(連立)自動つれあふて行く、共々にならび行く、

つれなし(强顏)図なさけ心の少し、同情心(ココロジヨウ)のなきなり、「の雅名

つれなしぐさ(無情草)図水草の名、蓮(ハス)

つれびき(連彈)図二人以上同じ調子(シラベ)にて三味線を彈(ヒ)くコト、

つれぶし(連節)図同じ歌を二人以上、口を揃(ソロ)へて唄(ウタ)ふコト、

つれゆく(連行)他動共々に歩み行く、ともなひ行く、

(つづろ)

づろう(杜漏)図ぞんざいなるコト、ぬかり多きコト、しめくくりなきコトを云ふ、

(つづん)

つんぎり(頭切)図太(フト)き物を、細く横に切るコト、「(ツ)く

つんざく(劈)他動突(ツ)き通して引き裂

づんばい(繩石)図竿の尖(サキ)に糸を結びぬけ、其の糸に石を結びつけて、つぶてとして投げるもの、又は竹の端を少しく裂(サキ)て、其れに石を挾(ハサ)みて、つぶてとして投げるものを云ふ、

つんぼ(聾)図耳(ミミ)の聞へぬコト、又は耳の聞へぬ人のコト、

つんぼざし(聾座敷)図芝居の舞臺(ブタイ)に、最も遠(トホ)ざかつてる場所のコト、卽ち後の方の大入場、

て で

(てで)

て(手)図人の肩(カタ)より左右へ長く出てるもの㊀器具(ウグ)の持つべき部の稱、卽ち柄㊁傷(ヤマ)を受けたるコト、手をひ㊃附き從ふてる人、卽ち手下(テシタ)㊄しごと。わざ㊅行くべき方、ゆく手㊆書きたる文字の形、卽ち手跡(シユセキ)㊇やうすふり㊈草花類の蔓(ツル)を卷きつかせべきもの、例ば朝顏の手など㊉故意(カヲ)に細工(サイク)をする、例ば此の酒は、手がしてあるなど㊋しかた工夫(クフウ)㊌關係緣(ユカリ)、例ば手をきるなど、

て(手)(接頭)或る語に冠(カブ)らせて、手づからなしたる意を表はす語、例ば手細工。手織物など、

て(手)(接尾)或る語の下に附け加えて、人の物事を爲すを表はすに用ゆる語、例ば騎手(ユキテ)。やりてなど、又た或る語の下に附け加えて、物の價(ネダン)のコトを、表はす語、例ば酒手(サケカ)など、

で(出)図でるコト㊀あつまるコト㊁積(ツモ)の多きコト、

(てであ)

てあき(手明)図仕事や用事のとぎれ目㊀閑(ヒマ)にてあるコト、

てあし(手足)図手と足、卽ち四肢、

てあて(手當)図イザと云ふ時の用意(ヨウイ)㊁警吏が罪人を捕ふるコト㊂月給(ツキフ)給金㊃總て爲すべき方法、仕方のコトを云ふ、

てあそび(手遊)図手に持ちて遊ぶコト、又は物㊀おもちやのコト、

てあたり(手當)図手に物のさはる感(カン)じ、手にて物にさはるコト、

てあたりしだい(手當次第)副手にふれたる物は、何等の差別もなしにと云ふ意を表はす語、

てあたりはちだい(手當放題)図何等の差別(ヘダテ)もなしに、物事を爲すコトを云ふ、「つてゐるなり。念の入

てあつし(手厚)図しんせつなり。

てあてきん(手當金)図手當として下さる金子、心づけ、

てあはせ(手合)図相手(アイテ)として、勝負(ショウブ)を爭(アラソ)ふコト、假令(カリ)ば碁(ゴ)の手合など㊀商店にて引取賣買(トリカヒバイ)の成立(ナリタ)するコトを云ふ、

てあひ(手合)図仲間組合(クミアヒ)㊁同じ種類のコトを云ふ、

であひ(出合)図互ひに廻り合ふコト、卽ち面會のコト㊁物と物との配合の宜きコト、重に色合に就て云ふ㊂意中の男女が、秘(カクシ)に會合するコト、

であひがしら(出會頭)図互ひにでつくわせたる、其の途端(トタン)、

であひばしよ（出會場所）圖互ひに出會ふべく、約束をして置きたる處のコトを云ふ、

であふ（出合）自動出合（ハイ）を爲す、でつ

であぶり（手焙）圖手をあぶるに用ゆる、小さき火鉢（ヒバチ）のコト、

であます（手餘）他動處置（シチ）に困る、てこづる、もてあます、

であらし（手荒）腕取り扱（アツカヒ）の荒し、粗

であらひ（手洗）圖手を洗（アラ）ひ清（キヨ）むるコト㊀手を洗ふ湯水（ユヅ）を盛る小だらひのコトを云ふ、

「ぐ

であらひ（手洗）自動手を洗ふ、手をすす

であらひばち（手洗鉢）圖手洗水を盛りたる鉢、卽ちてうづはち、

であらひみづ（手洗水）圖手を洗ひ清むる爲めに、鉢（ハチ）へ盛りたる水を云ふ、

（てでい）

てい（帝）圖天子の御事を申す卽ちみかど㊁ざう物師、卽ち天地の神㊂極めて明らかなるコト、

てい（悌）圖兄（ニイ）又は目上（メウエ）の者に能く從（ガ）ふて逆（ガ）らはぬコト㊁兄弟（ケイテイ）中の至極（シゴク）よろしきコト㊂和合して喜ぶさまを云ふ、

てい（貞）圖志（ココロ）の堅（カタ）くして、正しきコト㊁婦女のみさほ㊂とふ（問）、

てい（廷）圖役所（ヤクショ）のコト㊁朝廷（チヨウテイ）の略㊂裁判所の公判を爲す所、卽ち法廷㊃正しき㊄平（タヒラ）かなるコト、

てい（庭）圖にはのコト㊁朝廷㊂役所㊃正しきコトを云ふ、

てい（底）圖器物の下の方㊁物の下の方㊂物の下の方㊃とこうる㊄とゞ物の下の方卽ちそこ㊅ゆまる㊆いたる。たつす、

てい（亭）圖庭園（テイエン）などに出來たる小さき家、卽ちあづまや㊁小さき家のコト㊂はたごや料理屋などのコトを云ふ㊃とゞまる㊄ひとし。たいらか㊅とゞまるふコト、

「とのコト

てい（邸）圖やしき㊁やどや㊂どだい。もと

てい（抵）圖漆（シツ）を塗（ヌ）り、又は唐草（カラ）模樣（モヨウ）などを彫（ホリ）て、飾（カザ）となしたる弓の稱、

てい（婷）圖女子の容貌（カホカタチ）の美（ウツ）くしき狀を云ひ表はす語、

てい（鬢）圖頭（アタマ）にかざるかづら㊁入毛（ヒイレ）、かむしのコト、

てい（滯）圖とゞこうつてるコト㊁たまつてるコト㊂つもつてるコト㊃もれるコトなどの流れ込むコトを云ふ、

てい（鼎）圖いかづちのコト㊁いなびかりのコトを云ふ、

てう（碇）圖船の流れぬやうに、止（トヾ）て置く重り、卽ちいかり㊁轉じて船の碇（イカリ）に泊（トヾ）ってるコトを云ふ、

てい（鼎）圖昔時祭事などをつとむる時に物を煮（ニ）るに用ひたる三足（ミアシ）のある鍋（ナベ）の如きもの、卽ちかなへ㊁易（エキ）の卦（ケイ）の名㊂宰相（サイシヤウ）のコトを云ふ㊃支那の禹（ウ）と云ふ天子が、金を以て九つの鼎を製し、之を天子の位をつぐべき時の寶物となせりと云ふ故事より出でゝ、帝王の位のコトを云ふに用ゆ、

てい（鋌）圖一種の金屬、錫（スズ）の類㊁銀を小さき小方角に切りたる通用金の稱㊂器具の名、たかつきのコト㊃錠前（ジヤウマヘ）

てい（鋌）圖魚の名、ぼらのコト、

てい（楚）圖木の名、川柳（カハヤナギ）、

てい（遞）圖かはるがはる。次第次第に。互（タガヒ）ひにと云ふ意を表はす語㊁道中の驛場（ヤクバ）㊂しゆくつぎの人足、及び車馬、

「つれる。解（トク）る

てい（綻）圖ほころぶ。開く。咲（サク）く㊁ほたれる。役に立なくなるコト㊃水などの流れ込むコトを云ふ、

てい（碇）圖いかづちのコト㊁いなびかりのコトを云ふ、

てう（碇）圖船の流れぬやうに、止（トヾ）て置く重り、卽ちいかり㊁轉じて船の碇（イカリ）に泊（トヾ）ってるコトを云ふ、

てい（鼎）圖昔時祭事などをつとむる時に物を煮（ニ）るに用ひたる三足（ミアシ）のある鍋（ナベ）の如きもの、卽ちかなへ㊁易（エキ）の卦（ケイ）の名㊂宰相（サイシヤウ）のコトを云ふ㊃支那の禹（ウ）と云ふ天子が、金を以て九つの鼎を製し、之を天子の位をつぐべき時の寶物となせりと云ふ故事より出でゝ、帝王の位のコトを云ふに用ゆ、

てい（鋌）圖一種の金屬、錫（スズ）の類㊁銀を小さき小方角に切りたる通用金の稱㊂器具の名、たかつきのコト㊃錠前（ジヤウマヘ）

てい（鋌）圖魚の名、ぼらのコト、

てい（楚）圖木の名、川柳（カハヤナギ）、

てい（遞）圖かはるがはる。次第次第に。互（タガヒ）ひにと云ふ意を表はす語㊁道中の驛場（ヤクバ）㊂しゆくつぎの人足、及び車馬、

「つれる。解（トク）る

てい（綻）圖ほころぶ。開く。咲（サク）く㊁ほたれる。役に立なくなるコト㊃水などの流れ込むコトを云ふ、

てい（碇）圖いかづちのコト㊁いなびかりのコトを云ふ、

てう（碇）圖船の流れぬやうに、止（トヾ）て置く重り、卽ちいかり㊁轉じて船の碇（イカリ）に泊（トヾ）ってるコトを云ふ、

てい（鼎）圖昔時祭事などをつとむる時に物を煮（ニ）るに用ひたる三足（ミアシ）のある鍋（ナベ）の如きもの、卽ちかなへ㊁易（エキ）の卦（ケイ）の名㊂宰相（サイシヤウ）のコトを云ふ㊃支那の禹（ウ）と云ふ天子が、金を以て九つの鼎を製し、之を天子の位をつぐべき時の寶物となせりと云ふ故事より出でゝ、帝王の位のコトを云ふに用ゆ、

てい（鋌）圖一種の金屬、錫（スズ）の類㊁銀を小さき小方角に切りたる通用金の稱㊂器具の名、たかつきのコト㊃錠前（ジヤウマヘ）

てい（鋌）圖魚の名、ぼらのコト、

てい（楚）圖木の名、川柳（カハヤナギ）、

てい（遞）圖かはるがはる。次第次第に。互（タガヒ）ひにと云ふ意を表はす語㊁道中の驛場（ヤクバ）㊂しゆくつぎの人足、及び車馬、

「つれる。解（トク）る

てい（綻）圖ほころぶ。開く。咲（サク）く㊁ほたれる。役に立なくなるコト㊃水などの流れ込むコトを云ふ、

てい（碇）圖いかづちのコト㊁いなびかりのコトを云ふ、

てう（碇）圖船の流れぬやうに、止（トヾ）て置く重り、卽ちいかり㊁轉じて船の碇（イカリ）に泊（トヾ）ってるコトを云ふ、

てい（鼎）圖昔時祭事などをつとむる時に物を煮（ニ）るに用ひたる三足（ミアシ）のある鍋（ナベ）の如きもの、卽ちかなへ㊁易（エキ）の卦（ケイ）の名㊂宰相（サイシヤウ）のコトを云ふ㊃支那の禹（ウ）と云ふ天子が、金を以て九つの鼎を製し、之を天子の位をつぐべき時の寶物となせりと云ふ故事より出でゝ、帝王の位のコトを云ふに用ゆ、

てい（鋌）圖一種の金屬、錫（スズ）の類㊁銀を小さき小方角に切りたる通用金の稱㊂器具の名、たかつきのコト㊃錠前（ジヤウマヘ）

てい（鋌）圖魚の名、ぼらのコト、

てい（楚）圖木の名、川柳（カハヤナギ）、

てい（遞）圖かはるがはる。次第次第に。互（タガヒ）ひにと云ふ意を表はす語㊁道中の驛場（ヤクバ）㊂しゆくつぎの人足、及び車馬、

「つれる。解（トク）る

てい（綻）圖ほころぶ。開く。咲（サク）く㊁ほ

てい（鵜）圖鳥の名、う、

「トを云ふ

てい（第）圖十分に染めたる赤き色合のコト

てい（弟）圖又ただいとも讀む、邸宅（ヤシキ）。大なる家㊁しな。しなさだめをする㊂ついで。ついでに、卽ち次序（ジヨ）㊃たゞ但（ダ）し、

てい（第）圖おとうと㊁ついで、次序㊂兄又は目上の者に、能く順（ジヨウ）ふてすなほなるコト、

てい（姉）圖妹（イモウト）㊁めいのコト、

てい（綈）圖太（ハヒ）き節（ヨ）のある絹糸（イトヒ）にて織りたる物、紬（ツムギ）などの類を云ふ、

てい（梯）圖きだはし、卽ちはしご㊁はしごと云ふ意より轉じて、物事の次第に進み行くコトを云ふ、

てい（鯷）圖魚の名、極めて大なるなまづのコトを云ふ、

てい（睇）圖横目（ヨコメ）にて眺めみる。ながしめに見る。ながめる、

てい（涕）圖涙（ナミダ）のコト㊁涙を流して泣くコトを云ふ、

てい（鋌）圖やじり㊁山より掘り出したるまゝのあらかれの總稱、

てい（挺）圖てこ。棒（ボウ）㊁まつすぐなる丸き木材（キザイ）を云ふ㊂轉じて眞直（マスグ）に立つてるコト、

てい（挺）圖ぬきんでてる。ぬく㊁まつすぐなるコト。正（タヾ）しきコト㊂物をまつすぐに立て持つコトを云ふ、

てい（砥）圖玉にて作られたる笏（ハクシ）、

てい（砥）圖といしのコト㊁平（タヒラ）かにして滑（ナメ）らかなる狀を云ふ、

てい（艇）圖虫の名、さんぼのコト、

てい（底）圖手足に生ずる疣（ボウ）の如きもの、卽ちたこ、

てい（觝）圖至る、達する㊁ふれる。さはる

てい（牴）圖牴（イタ）に同じ㊁觝（イタ）に同じ、其の條を見られよ、

てい（低）圖なんなのひつじ（羊）、

てい（低）圖高からぬコト、ひくき。ひくき處㊁頭をたれる。うつむく。ふす、

てい（抵）圖いたるコト。達するコト㊁いたす（致）す㊂推（オ）す。おしやる㊃拒（ハバ）む、さからふ㊄おくる。屆（トヾ）けるなげうつ。ほる㊅はたく。うつ、

てい（低）圖小さき山㊁阪道（サカミチ）、

てい（替）圖こはれる。すたれる㊁ほろぶる。なくなる㊂ゆるむ。ゆるみ初む㊃かふ。かはる、

てい（抵）圖そしる。惡しさまに云ふ㊁あばく㊂有もせぬコトを云ふて、人を困らす、卽ちしゆ

てい（偵）圖容子を探（サグ）るコト㊁秘（ヒソ）かに伺（ウカヾ）ひ見るコト㊂しのびの者。もの、探偵（タンテイ）、

てい（禎）圖正（タヾ）しきコト。志（ココロザシ）の堅固（カタヒ）なるコト㊁幸福（ハクフク）の多きコトを云ふ、

てい（楨）圖垣（ヘイ）の兩端（ハシ）に立つてる柱（ハシラ）のコト㊁木の名、ひめつばきのコト㊂物事の總て支（ササ）えたよりとなるコトを云ひ表はすに用ゆる語、

てい（楨）圖木の楔、又た楔元の處を云ふ㊁轉じて物事のゞだい㊂もとづくコトを云ふ、

てい（呈）圖あらはす。明らかに見せる。示す。あらはれる㊁さく。解（トク）く㊂てらふ㊃たくましくあり㊄程に通ず、ほど、

てい（程）圖酒の醉（ヒヨ）のさめやらぬコト㊁二日醉（ヒヨウヒヨウ）のコト、

てい（程）圖ほど。きまり㊁道の里、道中（タウチユウ）㊂里數のほど合（ヒ）㊃度（ハカリ）量（ハカリ）衡（ハカリ）の總稱、

てい（程）圖衣物を着てゐぬコト、卽ちすはだかのコトを云ふ、

てい（定）圖さだむ。きめる。さだまるコト㊁きつと。かならず㊂さゞむ。やむ。やむ。

てい(灯)図盛んに燃(モエ)てる火、
てい(酊)図酒に強(ツヨ)う酔(ヱ)てるコト。
　えつぱらひのコト、
てい(項)図いたゞき。かしら、
てい(釘)図くぎのコト、
てい(訂)図ただすコト㊁調(ツヨ)べ改(アラタ)まるコト㊂はかるコト、
てい(町)図まち。ちまた㊁場所の區域(クヰキ)のコトを云ふ、
てい(汀)図池のきし。みぎは㊁水中の淺せ、即ち洲(ス)のコト、
てい(蹄)図ひづめのコト㊁總て獸類の足のコトを云ふ、
てい(締)図取りむすぶコト。取り結ばれたるコト㊁互ひに約束をかためるコトを云ふ、
てい(啼)図鳥などの大聲を發して、なき立るコト㊁總てさけぶコト、泣(ナ)コトを云ふ、
てい(提)図女子の頭(カシラ)に挿す飾(カザリ)り物の一種、かうがひコト、
てい(諦)図王者のいとなむ、大まつりのコトを云ふ、
　「を云ふ
てい(停)図とゞまる。とゞむ。動かぬコト
てい(渟)図水のとゞまつて動ぬコト、即ちたゞよふコトを云ふ池や川などのきし、みぎわ、
てい(隄)図堤(ツツミ)に同じ、つゝみ、
てい(堤)図土を盛(モリ)て圍(カコ)さなしたるもの、つゝみ。どて、
てい(醍)図薄赤(アカス)き色を呈してる酒のコト㊁轉じて赤き色、
てい(提)図さげる。ひつさげる㊁さゝぐる㊂なげうつ。打ちすつ、切る。絶(ツ)つさゝぐると云ふ意より轉じて、扶(タス)けるコト、
てい(諦)図あざやかなるコト。あきらかなるコト㊁くわしきコト。つまびらかなるコト㊂誠實(セイジツ)、即ちまことなるコト、
てい(鞮)図革(カハ)製のはきもの、
てい(剃)図髪(カミ)をそるコト、
てい(綈)図赤き色合のコトを云ふ㊁赤き色に染めたる布(ヌノ)、
てい(薙)図又た、すさも讀む、髪を刈(カ)る、髪をそる㊁草をかるコト㊂草を刈る如くに、切りまくる、即ちなぐ㊃草の名、しでこぶしのコトを云ふ、
てい(曉)図叫(サケ)ぶコト。騒(サワ)ぐコト㊁猛獸などの吠(ホエ)へ狂(クルフ)ふコトを云ふ
てい(鍍)図針(ハリ)のコト㊁杖(エ)又は鞭(ムチ)などの尖(サキ)に附けてある針㊂かづさり。そろばん㊃我が國にて云ふ、しころのコト、
てい(蟶)図虫の名、くものコト、
てい(艇)図小さき舟。早く行く舟。はしけのコトを云ふ、
てい(體)図たいの音便にて、からだ㊁ありさま。容子(スガタ)㊂かたち㊃草木の根又は幹(ミキ)又は莖(クキ)のコトを云ふ㊄理風(フウ)又は、ことはりのコトを云ふ、
てい(丁)図一人前の男子㊁血氣盛りの人即ち壯年㊂召使(メシツカ)の男、又は賦役(ヤクヅ)に召されたる男子㊃あたる。あてはまる㊄十干の第四位、即ちひのと、
でい(泥)図水に土の混(マジ)れる物、即ちどろ㊁ぬかるみ㊂なづむ㊃よごれる。けがる㊄金泥及び銀泥(ヂンデイ)の略、
ていあつ(低壓)図壓(オサ)えつける力の弱(カル)きコトを云ふ、
ていあん(定安)図おちつくコト、おちつき安(ヤス)んずるコト、
ていあん(提案)図案を差し出すコト、意見を文書に認めて差し出すコトを云ふ
ていあん(定案)図一定せる案文、
ていい(涕洟)図なみだと、はな汁、
ている(帝威)図天子の御威光、

ている(帝位)図天子の御位、
ていいう(悌友)図兄弟内のよろしきコトを云ふ、
　「コトを云ふ
ていいう(丁憂)図父又は母の喪中に在る
ていいん(帝胤)図皇室のおちすじ。天子の御たれのコトを申す、
ていいん(低音)図ひくき音聲、
ているん(定員)図一定せる人數(カズ)のコトを云ふ、
ていらん(庭蘭)図おくそこ。奥ゆかしきコトを云ふ、
　「ゞげ示すコト
ていえう(提要)図肝要なる點のみを、か
ていえき(定役)図一定の勞役、
ていゑん(庭園)図にわ、その、
ていか(定價)図定めたる直段(ネダン)、
ていか(低價)図直段(ネダン)の安きコト、やすき價、
　「がめ立るコト
ていか(詆訶)図小言(コゴト)を云ふコト、と
ていか(低下)図さがるコト、物の價などの㊁ひくきコト、ひくくなれるコトを云ふ、
　「くコトを云ふ
ていか(遞加)図次第次第に、增し加え行
ていか(艇舸)図早く行くふね、
ていが(貞雅)図みさほ正しくして、やさしき氣質(キダテ)のコト、婦人に就て云ふ語、
ていかい(泥海)図にごつてる海㊁轉じて遊女社會のコトを云ふ、
ていかう(丁香)図丁子(チヤウジ)のコト、
ていかう(抵抗)図はりあふてむかふ、てむかひするコト、
ていかう(訂校)図文章中の、あやまりを正し直す、即ち校正(カウセイ)、
ていがう(啼號)図聲を立てゝ泣く。大聲にてなくコト、
　「る金高
ていがく(定額)図一定せるたか、定めた
ていがく(停學)図生徒の通學を其學校より、差し止(トヽ)むるコト、
　「げ起す
ていき(提起)図もちあげて起(オコ)す、ささ
ていき(定規)図一定せる規則(キソク)、
ていき(定期)図期限を定めるコト、又は定りし期限、
　「コトを云ふ
ていき(詆毀)図惡口(ワルクチ)を云ふ、そしる
ていき(定義)図物事の譯柄(ワケガラ)を理屈(リクツ)に合ふやふに、說き明(カ)したるコト
　「た相談(ソウダン)
ていき(定議)図定りたる議論、まとまつ
ていき(提議)図自己の意見を問題として持ち出すコトを云ふ、
　「トを云ふ
ていき(程儀)図せんべつ、はなむけのコ
ていき(廷議)図朝廷の評議(ヒヤウギ)、
　「トを云ふ
ていきふ(涕泣)図泪(ナミダ)を流して泣くコ
ていきふ(庭球)図一種の運動遊戯、即ちテニスのコト、
ていきふ(低級)図下の方の組(クミ)、低き階級(カイキウ)のコト、
ていきよ(提擧)図さゝげ上る、ひつさげ
　「るコト
ていきん(庭訓)図家内のしつけ、即ち家庭教育のコト、
ていきん(提琴)図支那の音樂に用ゆる胡弓(コキウ)のコト を云ふ、
ていきん(低吟)図ひくき音聲にて吟(ウタ)ふコト、
ていきあつ(低氣壓)図空氣中に、水蒸氣(スイジヨウキ)を多く含むとか、溫度が增すとかして、大氣の壓力(アツリヨク)の低(ヒク)く爲りした云ふ、此の場合は風又は雨を來す
ていきかぜ(定期風)図四季に依りて、吹き來る、方向(ホウカウ)を變(カヘ)る風のコト、即ち季候風のるゐ。
　「船のコト
ていきせん(定期船)図定期航海を爲す汽
ていきない(定期米)図期限を定めて、賣買の取引(トリヒキ)を爲す米、
ていきの(定期物)図一定の期間内に於て、取引を爲すもの、
ていきやう(帝京)図天皇の住ませらるゝ都、即ち帝都(テイト)、
ていきやう(帝京)図天皇のゐます所、即

ち帝都(ドイ)に同じ、

ていきやり(提供)圖さし出すコト、持ち出すコトを云ふ、

ていきあづけ(定期預)圖銀行預金(ヨキンコウ)の一種にて、期限を定めて金錢を預けるコト、

ていきよりき(聽胸器)圖醫士の用ゆる一種の器具、病人の胸に當て、心肺の音をきくもの、

ていきかいせん(定期改選)圖定めたる年限(ネンゲン)を終りたる後に行ふ、選擧(センヨ)のコト、

ていきかうかい(定期航海)圖一定の期限内に、定まりたる航路(コウロ)を航海(カイ)するコト、

ていきかんかち(定期刊行)圖日を定めて文書又は圖畫を發行するコト、

ていきとりひき(定期取引)圖取引所に於て、法律の定めたる期限内に、實買の約束を爲すコト、

ていきばいばい(定期賣買)圖一定の期限内に於て、賣買の約束を爲すコト、

ていきばらひ(定期拂)圖日限を定め置きて、爲す支拂、

ていきかんかうぶつ(定期刊行物)圖定期刊行に依れる文書圖畫のコトを云ふ、

ていくわい(停會)圖會議(ハイギ)をやめるコト、會議の中止のコト、

ていくわい(低徊)圖歩きさまよふコト、歩きまはるコト、

ていくわん(帝冠)圖帝王のかぶらせらる冠(カムリ)のコトを云ふ、

ていくわん(定款)圖會社又は團體組織に依りて、行ふ業務に就ての規定(キテイ)のコトを云ふ、

ていくわく(鼎鑊)圖支那の故事にて極度(キワミ)の刑罰卽ち極刑のコトを云ふ鼎は足のあるかなへ、鑊は足のなきかなへのコト、「まのコト

ていけ(天氣)圖天氣。大空(オオゾラ)のありさま、

ていけ(手活)圖自身にて花を花瓶(ハナガメ)へ活(イケ)るコト㊁轉じて藝娼妓(ゲイシヤギ)を身受(ミウケ)して妾(メカ)となすコトを云ふ語、

ていけい(帝系)圖天子のおちすじの御事を申す、

ていけい(定形)圖一定せる形狀、

ていけい(定型)圖一定したる型(カタ)、一定したるしかた、

ていけい(定繫)圖船を一定の場處へ繫(ツナ)ぐコトを云ふ、

ていけい(提携)圖手を引き合ふコト、一所になつて事を爲すコト、

ていけい(提擊)圖提(サゲ)るコト㊁双方共に助(スケ)け合ふコト、「形を云ふ

ていけい(梯形)圖□の如き形をせる四角

でいけう(泥橋)圖泥の中を進み行くに用ゆる、そりのコト、「ふ

ていけつ(定決)圖さだめきめるコトを云

ていけつ(締盟)圖獻類のかみつくコトを云ふ、「束を堅く定(ダ)むるコト

ていけつ(締結)圖結(ムス)び合すコト㊁約

ていげつ(提月)圖月末の日、卽ちつごもりのコトを云ふ、「めらるるコト

ていげふ(帝業)圖天子の其の國を治(ヲサ)

ていけん(定見)圖定(サダ)りたる意見、常に抱(ダ)ひてる意見、

ていげん(定限)圖一定の期限、一定せるくぎりのコト、「ト

ていげん(減減)圖段々と減(ヘ)し行くコ

ていげん(低原)圖低(ヒク)き土地の平原(ヒラ)のコトを云ふ、

ていけばな(手活花)圖目分で挿(サ)たる生花(イケバナ)㊁轉じて藝娼妓を受出して妾(メカ)となせしを云ふ、「云ふ

ていど(根情)圖互ひに中の惡しきコトを

ていど(低語)圖小聲(コゴエ)にて、物語をするコトを云ふ、

ていど(亭午)圖正午まひる、

でいこう(泥工)圖土細工(ツチザイク)をするコト。又は其の人のコトを云ふ、

ていこう(偵候)圖こつそりと事情をさぐるコト卽ちていさつ、「トを云ふ

ていこく(涕哭)圖涙(ナミダ)を流してなくコ

ていこく(定刻)圖定めたる時間、定まりし時間のコト、

ていこく(帝國)圖天皇陛下の治め給ふ大日本國㊁凡て皇帝の稱ある御方の治めらる國のコト、

ていこく(啼哭)圖かなしみ泣くコト。大聲を上げてなくコト、

ていこん(弟昆)圖弟とおに、

ていこくせいふ(帝國政府)圖我が日本政府のコト㊁帝者の治め給ふ政府のコトを云ふ、

ていこくぎくわい(帝國議會)圖國會のコトにて、貴族院(キゾクヰン)衆議院のコト、

ていこくづしよくわん(帝國圖書館)圖府縣立等に對しての稱にて、文部大臣が直轄(チクカツ)せる圖書館のコト、

ていぎ(鼎坐)圖鼎(カナ)の如く、三方に相對して坐(ヲ)るコト、

ていぎ(帝座)圖天子の居ましますの御座席(ムシロ)、卽ち玉座(ギヨクザ)、

ていさい(體裁)圖外部に表はれる、狀態(ヤウダイ)のコトを云ふ、

ていさつ(貞操)圖女のみさほの正しきコト。又は其の人のコトを云ふ、

ていさう(廷爭)圖裁判所にて、原被兩告が爭ふコト、日頭辯論(ヒガシラベンロン)のコトを云ふ、

ていさう(丁壯)圖血氣盛りの人、

ていさつ(偵察)圖注意して容子を察し探るコト、

ていさつせん(偵察船)圖敵(テキ)の容子を探(サグ)る、任務(ニンム)を帶てる船のコトを云ふ、

ていさつたい(偵察隊)圖敵情を探る任務を帶びてる一隊、卽ち斥候隊のコトを云ふ、

ていし(帝師)圖天子のひきゐさせ給ふ御

ていし(弟子)圖弟子(デシ)、門人、

ていし(呈示)圖さし出して見せるコト。あらはし示(シメ)すコト、

ていし(諦視)圖みつめるコト、氣を附て物を見るコト、

ていし(偵視)圖氣をつけて見る、容子をふ意にて、すすり泣をするコトを云ふ、

ていし(梯子)圖はしごのコト、

ていし(涕泗)圖なみだと、はなじると云ト、臨時に止(ヤ)るコト㊁官府より差し止めるコトを云ふ、

ていし(提子)圖手下げ箱(ハコ)、

ていし(底止)圖とゞまるコト、

ていし(抵死)圖死したるコト、

ていじ(遞次)圖順々、順番(ジユンバン)㊁道中のしゆくばのコト、

ていしき(程式)圖をきて、てほん、

ていしき(定式)圖定りたる儀式(ギシキ)、

ていしつ(帝室)圖天子の御一門のコトを申す、

ていしつ(低濕)圖しつける土地、

ていじつ(貞實)圖まめやかにして、みさほ正しきコトを云ふ、

ていしや(亭樹)圖庭園などに設(モウケ)られある、風雅(フウガ)な家、卽ちチンあづまや

ていしや(停車)圖瀛車や電車などの止(ヤ)まるコト、

ていしや(邸舍)圖家、やしき、住宅、

ていしゆ(低首)圖首を垂れるコト。首を下げてるコト、「云ふ俗語なり

ていしゆ(亭主)圖主人、おつとのコトを

ていじゆ(庭樹)圖庭園に植(ウエ)られてある樹木のコト、

ていしよ(汀渚)圖みぎわとなぎさ、卽ち池などのふちと、海(ウミ)や川などの岸の